

令和5年度

ティーチングポートフォリオ

神戸常盤大学

神戸常盤大学短期大学部

目 次

頁 数

1. 保健科学部 医療検査学科 1～59
2. 保健科学部 診療放射線学科 60～ 97
3. 保健科学部 口腔保健学科 98～115
4. 保健科学部 看護学科 116～175
5. 教育学部 こども教育学科 176～219
6. 短期大学部 口腔保健学科 220～244
7. 短期大学部 看護学科通信制課程 245～257

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	坂本秀生	所属学科	医療検査学科	職名	教授
クラス担任	学科長	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	運営委員会、学長会議、PCR検査センター責任者				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○臨床検査入門	M	1	前期	必修	講義	対面	87
○医学概論	M	1	前期	必修	講義	対面	87
○検査機器総論	M	1	前期	必修	講義	対面	87
○分子細胞生物学	M	2	前期	選択	講義	対面	79
医療英語	M	2	前期	必修	講義	対面	96
○遺伝子工学	M	3	前期	選択	講義	対面	29
○国際保健医療活動 I	M	4	前期	必修	講義	遠隔	78
○国際保健医療活動 I	N	4	前期	必修	講義	遠隔	84
○国際保健医療活動 I	R	4	前期	必修	講義	遠隔	73
○国際保健医療活動 II	M	4	前期	選択	演習	対面	3
○国際保健医療活動 II	R	4	前期	選択	演習	対面	4
○遺伝学	M	1	後期	必修	講義	対面	86
○文献講読	M	3	後期	選択	演習	対面	23
○先進医学検査学	M	3	後期	選択	講義	対面	47
○遺伝子と再生医療	O	3	後期	選択	講義	対面	10
○総合医学検査特論	M	4	後期	選択	講義	対面	57
○総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	77
○卒業研究	M	4	後期	必修	演習	対面	71

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策として成績下位学生への指導
- ・ 国際学会発表者に採択された学生への指導
- ・ 大学院進学を目指す学生への指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

学生自ら考える力を養え、学生個々が自身の良い点に気づき成長できる教育を目指す。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 学生が復習を行いやすくなるよう、授業で用いたスライド資料を PDF として manaba に掲載し、自己学習を行いやすくした。
- ・ 学生が面談に訪れた際には、良い点を聞き出して褒め、その後にもっとよくなるためにお、改善して欲しい点を指導する。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 上記を継続できるよう、学生からの意見を取り入れるよう教育方法の改善を行った。

5. 今年度の学生による授業評価より

遺伝子工学は 3.9 であったが、それ以外の科目責任者を務める科目では全て 4.1 以上であり、総合的に授業評価は悪く無いと言える。

学生からのコメントも、例え話があって難しい内容がわかりやすかった。質問したことは次の授業で説明があったので良かった等、好意的な意見があった。

6. 今年度の成果

どの授業も学生の関心が高まる工夫した成果がでたと言える。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

考える力を養って欲しいので、授業で用いたスライドをあえて授業後に manaba へ掲載したが、遺伝子工学では授業前に欲しかったとの意見があり、理解が難しい科目は授業前配布を次年度は考えたい。

8. 社会的活動等

日本臨床検査学教育協議会の理事長として、臨床検査学教育において全国の取り纏めを行った。

日本臨床化学会の理事として、国際交流委員会を取りまとめ総会にて国際セミナーを行った。

日本臨床衛生検査技師会国際 WG の一員として、臨床検査技師の国際化事業に協力した。

日本医療検査科学会 POC 技術委員会副委員長として、POC コーディネータ更新セミナーを実施。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	林 伸英	所属学科	医療検査学科	職名	教授
クラス担任	2 学年 A クラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	臨地実習委員長、遺伝子組換え実験安全委員長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
臨床検査入門	M	1	前期	必修	講義	対面	87
医学概論	M	1	前期	必修	講義	対面	87
○臨床化学検査学 I	M	2	前期	必修	講義	対面	96
○検査管理総論	M	2	後期	必修	講義	対面	94
○検査管理総論	M	3	前期	必修	講義	対面	81
○臨床化学検査学実習 I	M	2	後期	必修	実習	対面と一部遠隔	95
○臨床化学検査学実習	M	3	後期	必修	実習	対面と一部遠隔	81
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	3
臨床検査学演習	M	3	後期	必修	実習	対面	81
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	講義	対面	77
総合医学検査特論	M	4	後期	必修	演習	対面	73
臨床技術入門	R	1	後期	必修	講義	対面	85

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策等
- ・ 臨地実習における運用と学生指導（感染防止・病院でのマナー・挨拶）
- ・ 就職支援活動として履歴書および小論文対策指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

現在の臨床検査技師は、患者さんへの対応のみならず、組織でのチームワーク力と総合力、チーム医療での他職種スタッフとのコミュニケーション力が求められる。このような能力は即備わるものではなく学生時代から徐々に積み上げていかなければならない。従って、実習や演習を通して臨床現場に適応できる技術者としての適性を育み、実践力を育成したい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

臨床化学検査学実習では様々な実習をした最後にグループワークを実施した。manaba のプロジェクトを利用し、学生同士の意見交換が遠隔で実際の対面と同等のやり取り、まとめたプレゼン等を提出がさせた。提出後には課題の模範解答を示し、自分たちの考え方が正しかったがわかるようにした。効率的、充実した内容であったと考える。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- 臨床化学検査学は 30 回の授業ではおさまりにきれいな量のボリュームのため授業の進行速度を早くする必要があるが、授業中にラインマーカーやコメントの書き組みを行うと、学生はそれに集中し内容が頭に入っていない。この対策として、教科書を PDF 化しラインマーカーや注釈を書き入れた資料を事前に manaba で提示し、学生自身が教科書にそれらを書き入れ、その周辺部を読むことで予習できるようにした。
- 授業（臨床化学検査学・検査管理総論）では PowerPoint でのプレゼンを入れ込み学生がわかりやすく、興味を引く内容を加えた。
- 国試の過去問の重要な箇所を manaba 上で、毎回簡単な小テストを実施することによって復習できるようにした（臨床化学検査学・検査管理総論）。
- 臨床化学検査学実習は①実習に関連する講義、②実習の具体的な操作、③実際の実習の過程で行っている。①と②は manaba 上で遠隔（YouTube）で実施し、「自分のペースで」「じっくり」「何度も」「わかりやすい」ように工夫した。
- レポートについては、どのポイントについて書けばよいかわかるような雛形を配付した。報告後に教員が評価、コメントを書きフィードバックした。
- 認定臨床化学者を取得し（平成 17 年）、臨床化学の専門的知識を習得し臨床化学検査学の授業に活かしている。
- 認定臨床化学・免疫化学精度保証管理検査技師を取得し（平成 29 年）、精度管理の専門的知識を習得し検査管理総論の授業に活かしている。

5. 今年度の学生による授業評価より

- 検査管理総論授業について、学生からこの授業でよいと思った点に「国試に出たところを反映してくれるので助かります」の意見があり、「国試で覚えておく必要なこと」を明確にしたことがよかったと思う。
- 臨床化学検査学授業について、学生からこの授業でよいと思った点に「書き込んだ教科書 PDF を公開して下さったところ」「小テストの計算問題の解き方を解説して下さった点」「例題をあげてくれることがありがたいです」などの好評価が得られた。
- 臨床化学検査学実習の manaba 上で遠隔（YouTube）での実施については、「講義、操作手順を視

聴することでスムーズに実験に入れた」「予め動画を見て実習に望むことができよかったです」「予習動画があることによって、いつも班の足を引っ張ってしまいがちな私が班で活躍することができて嬉しかったです」レポートについては、「レポートの量が多くなく、書くべきことが明確なのでやる気に繋がりました」「実習中にレポートが書けるし早く帰れるしよかったです」また、「授業中、先生が見回ってくれていたの、質問しやすかったです」「先生が優しかったです」とのコメントが寄せられた。また、この授業で改善すべきだと思った点に「だんだん慣れてはきましたが、原理を理解するのが毎回難しかったです」があった。

6. 今年度の成果

- ・ 検査管理総論は旧カリでは3年次前期15回から、新カリでは2年次後期8回授業に組み直されている。本教科に添ったすべての臨床検査で求められる正確・迅速な検査結果報告のための必要最小限の考え方を網羅して、RIとISO15189の内容はコンパクトにして盛り込んだ。
- ・ 臨床化学検査学実習は終了時間が遅くなるのが何度かあったが、このmanaba上の遠隔実施で定時に終了させることができ、時間内のレポート作成や課題の回答を実施することもできた。さらに教員が疑問点を解説する学生に寄り添える時間ができたことは学生にとって有意義であったと思われる。
- ・ 臨床検査技師学校養成所指定規則の一部が改正され、本学では2024年度実施の臨地実習に適用される。今年度はその準備として、実習施設に必ず実施させる行為、必ず見学させる行為等が可能な運用の検討および衛生検査所と健診センターの見学の許諾を得るために施設の訪問等を行った。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 「だんだん慣れてはきましたが、原理を理解するのが毎回難しかったです」については、遠隔講義で説明をしていたが、理解度の不足している学生に対してさらに解説するように努力する。
- ・ 新しい臨地実習の運用について臨地実習施設と協議し、プログラム作成、「臨地実習の記録」の更新および簡便な評価入力方法の作成を行う。

8. 社会的活動等

- ・ 認定臨床化学者
- ・ 認定臨床化学・免疫化学精度保証管理検査技師
- ・ 生物試料分析科学会 評議員
- ・ 医学と薬学（自然科学社）編集顧問

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ manaba上の授業における資料等、小テスト

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	栃倉匡文	所属学科	医療検査学科	職名	特任教授
クラス担任	4年Aクラス担任、4年学年責任者		クラブ顧問	なし	
委嘱委員・職務	学生委員、卒研委員長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○公衆衛生学Ⅰ	M科	1	前	必修	講義	対面	97
○医動物学実習	M科	1	前	必修	実習	対面	95
一般検査学	M科	1	前	必修	講義	対面	96
免疫検査学実習	M科	3	前	必修	実習	対面	81
○公衆衛生学Ⅱ	M科	1	後	必修	講義	対面	86
○公衆衛生学実習	M科	1	後	必修	実習	対面	87
○大学道場 miniゼミB	M科	1	後	自由	講義	対面	3
○公衆衛生学	N科	1	後	必修	講義	対面	99
免疫検査学	M科	2	後	必修	講義	対面	94
分子感染制御学演習	M科	3	後	選択	演習	対面	4
総合医学検査特論	M科	4	後	必修	講義	対面	77
総合医学検査演習	M科	4	後	必修	演習	対面	77
卒業研究	M科	4	通年	必修	演習	対面	71

(2)準正課、正課外の教育活動

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

臨床検査技師として医療現場で対応できる実践力をもった学生を養成する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ これまでは授業開始前に点呼により出欠確認を行っていたが、今年度は授業終了後に出欠確認を兼

ねて manaba 上で小テストを実施し、知識の定着度の把握に努めた。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 実習系の授業においては、概ね高評価を得ることができた。特に公衆衛生学実習では内容に関して学生からの評判が昨年より良かった。

6. 今年度の成果

令和3年度の特論（公衆衛生学）から医師国家試験の過去問を取り入れた授業を行っている。令和4年度の公衆衛生学の国試の得点率は56.8であり（前年度比プラス10点）、受験科目の中では本学では最低であったが、集計校内での順位は1位（偏差値71.1）であった。今年度は7割近く得点できており、新方式により一定の教育効果が得られたと判断できる。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

不得意科目に対する苦手意識の払拭

8. 社会的活動等

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布資料
- ・ manaba を利用した小テスト

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	米田孝司	所属学科	医療検査学科	職名	教授
クラス担任	M4	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	M科国試対策委員会・委員長 研究倫理委員会・委員 入試作問委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○生化学Ⅰ	M	1	後期	必修	講義	対面	92
○生化学Ⅱ	M	2	前期	必修	講義	対面	101
○生化学	R	1	後期	必修	講義	対面	87
○栄養学	M	2, 3	後期	必修, 選択	講義	対面	172
○栄養学	N	1	後期	必修	講義	対面	99
○臨床化学検査学Ⅱ	M	3	前期	必修	講義	対面	82
○臨床化学検査学Ⅱ	M	2	後期	必修	講義	対面	96
大学道場 miniゼミA	基盤	1	前期	選択	演習	対面	4
医学検査サプリメント演習Ⅰ	M	3	後期	選択	演習	対面	82
医学検査サプリメント演習Ⅱ	M	4	前期	選択	演習	対面	71
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	77
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	演習	対面	77
臨床検査学演習	M	3	後期	必修	演習	対面	85
卒業研究	M	4	通年	必修	実技	対面	71
輸血移植検査学実習	M	3	後期	必修	実技	対面	87
臨地実習	M	3	後期	必修	実技	対面	82

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策
- ・ 入試問題の作成と添削
- ・ 研究倫理のオプアウト作成

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目では、医療従事者及び臨床検査技師を養成するために、医療や分析の知識・技能の習得とともに、医療現場で対応できる実践力と倫理感をもった学生を養成する。特に、医療職になるには優しさ、厳しさ、適応力、そして知識が必要である。知識だけを詰め込むだけでは良くない。病院では、チーム医療が重要になり、その一員として考え実践できるコミュニケーション力と実行力を育成したい。基盤科目では、大学の学修、研究の楽しさや考察力を培うことを理念とする。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 座学は教科書と国試関連を中心にして iPad を用いて、分かりやすく、興味をもち、将来に繋がるような内容に工夫した。
- ・ 輸血検査実習では、グループ毎に異なる試料(ABO 血液型や交差試験など)を作製して、座学で学んだ内容を実践して、毎回最終的に発表して討論を行う時間を設定した。
- ・ 実習前には前回のレポート復習と今回の予習をさせ、実習後にはレポート提出により能力判定をする。また、最後に技能試験及び筆記試験による確認を行った。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 今年度より赴任したので前年度との比較はないが、今年度は毎回の授業最後に国家試験に関係する小テスト問題を実施した。
- ・ 演習では、質問の多い内容を中心に解説して充実させるようにした。
- ・ 特論などの授業内容では、manaba を活用して、試験問題のみと正答・解説を記載したものを提出して事後学修に役立てた。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 「生化学Ⅱ」の前期科目においては、生化学Ⅰがどこまで行ったのか赴任後なので把握できてなかった。そのため毎回の授業内容が多すぎたため、学生から「早すぎる」などの意見が多くみられた。後期より全体的にスピードを遅くして、多くならないように絞って講義した。
- ・ 後期においては概ね高評価をとることができたので、このスタンスで次年度で行う予定である。
- ・ 実習においては、内容が多く(試験管法・カラム法・スライド法を同時並行)、難しい内容であったと感じたが、大学の間に輸血検査の失敗を経験して実感して反省する事も大事なので前向きに進めた。
- ・ 全般的に学生自身の学習時間が短めであったので課題の在り方について考えていきたい。

6. 今年度の成果

- ・ 「大学道場 mini ゼミ」では総合評価 5.0 であったので、研究の楽しさや将来自分がする仕事との関わりを感じて興味を感じたのではないだろうか。1年生の時点で臨床検査に興味を抱くことは重要であり他の授業への波及効果も含め非常良かったと思う。

- ・ 国家試験対策として実施していた事が後半に効果(夏時点は 85%が当日 92%)が得られた。もっと早めの学生自身の取り組みが必要と考えるので、その仕組みづくりを考案したい。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 次年度からは科目が変わる(臨床化学検査学Ⅱがなくなり、看護と検査の薬理学が入る)が、基本的に配布資料や講義形式等に変更しないつもりである。従来と同様に国試問題と重要課題を色分けして教科書に下線を引く。
- ・ 実習においては、出来るだけ楽しくもあり、丁寧かつ厳しさを学べる授業にしたい。

8. 社会的活動等

- ・ 前年度までは各学会の司会や発表、講演、企画などをしてきたが、今年度は大学教育に専念したかったので学会活動などはあまりしていなかった。次年度は研究も踏まえて学会活動を少し再開したいと思う。

9. 根拠資料(資料名のみ)

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ テスト問題

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	松元英理子	所属学科	医療検査学科	職名	教授
クラス担任	2年Bクラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	自己点検・評価委員長、 ときわ教育推進機構、FAST 等企画運営ユニット				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○基礎生物	M	1	前期	自由	講義	対面	24
臨床検査入門	M	1	前期	必修	講義	対面	87
○生命科学	M	1	後期	必修	講義	対面	90
医療英語	M	2	前期	必修	演習	対面	96
○遺伝子・染色体検査学	M	2	後期	必修	講義	対面	94
○遺伝子・染色体検査学実習	M	3	前期	必修	実習	対面	83
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	71(4)
総合医学検査学特論	M	4	後期	選択	講義	対面	77
総合医学検査学演習	M	4	後期	必修	演習	対面	77
○基礎生物学	R	1	前期	自由	講義	対面	53
○現代社会と生命科学	基盤	1	前期	選択	講義	遠隔	123
大学道場 mini ゼミ	基盤	1	後期	選択	演習	対面	4

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 医療検査学科入学前教育（生物）課題作成および指導
- ・ 国家試験対策
- ・ チューター担当学生の学修相談対応
- ・ 臨地実習担当学生に対する指導
- ・ 卒業研究ゼミ学生に対する就職活動の支援（小論文対策、エントリーシートの添削）
- ・ 新入生対象市民救命士講習インストラクター

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門分野の教育においては、専門職として求められる理解を伴う知識とともに、今後の科学技術の発展にも対応できる力をつけることを目的としている。そのため講義科目においては、担当分野の臨床検

査に必要な知識を表面のみで理解するのではなく、根底の自然科学から繋げて理解できる学生の養成を心掛けている。また実習科目においては、必要な技術の修得だけでなく、実習で得られたデータを講義科目で身につけた知識と結びつけて論理的に考察し表現する力を育成することに重点を置いている。更に、特に低学年開講の科目においては、学習習慣をつけることも目標の一つとしている。

基盤分野の担当科目は、その目的を科学リテラシーの醸成に置き、特に人の健康や遺伝子にかかわる現代の課題について、医療系以外の学生にも、自身のこととして考えるきっかけと基礎的な知識をわかりやすく提供することを心掛けている。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

<専門分野>

- ・ 授業の予習（＝高校までの学習内容や基礎となる関連科目の復習）と復習を通して、授業時間外学修を促すとともに、臨床検査に関連する複数の科目・分野を結びつけて理解を深めることを目指している。
- ・ 授業中の質問：一方的な知識の伝達に陥らないよう、学生への質問をクイズ形式などで積極的に取り入れている。
- ・ manaba の活用：上記の予習・復習課題の他に、授業で使用したスライド等の掲載や、定期試験・国家試験対策としてのドリル問題などで活用している。
- ・ 講義科目・実習科目ともに、科学技術の発展に対応する力をつけることを目的に、「資料を読み、考え、解を導く課題」を出している。

<基盤分野>

- ・ 現代の生命科学に関連する課題について、学んだ知識をもとに自らのこととして考えることを目的として、グループワークを実施している。
- ・ 「遠隔」開講の科目では、予習・復習、資料等の掲載、オンデマンド動画配信、グループワークなどを、すべて manaba を活用して実施している。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 学生間の理解度の差が拡大しているように感じられるので、授業時間だけでは充分理解できない学生のために以下の対策を充実させた。

授業で扱った解析原理や課題の解説を、復習用の動画（スライドショー）にして manaba で公開。課題のなかで正答率の低いものについて、類似問題を作成して配布。

5. 今年度の学生による授業評価より

昨年度と比較して、評価がやや低下した科目が多かった。ただし、学科平均も昨年度から同程度に低下しているので、学生の入替わりによる評価基準の変動の影響もあるかもしれない。いずれにせよ、難易度の高い科目については、理解できていない学生が増えている実感があるので、個々の学生に対す

る何らかの対応が必要であろう。

学生からのコメントでは、授業中の質問、配布資料、スライド、manaba 活用、自己検体を用いた実習やレポート指導などについて肯定的なコメントが寄せられた。一方、授業スピードの速さ、授業スライドと配布資料の表現の違い、manaba 課題の難易度などについて改善を求めるコメントも見られた。多様な学生の要望に応える難しさを感じる。

6. 今年度の成果

「遺伝子・染色体検査学」では、正答率の低い課題について追加の課題を作成し、manaba を利用して解説を行った。その結果、定期試験での類似問題の正答率が上がったと考えられる。

医療検査学科教員全体で取り組んだ国家試験対策では、今年度の合格率が 91.9%と、全国の新卒平均を 3 ポイント上回る結果を維持することができた。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

多様な考え方をもち、授業の理解度も異なる学生たちの満足度と成果を上げる教育の難しさを実感している。個々の学生のニーズに応じた教育コンテンツの開発が今後の課題である。

8. 社会的活動等

- ・神戸市立駒ヶ林中学校での市民救命士講習会インストラクター (FAST)

9. 根拠資料 (資料名のみ)

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布・配信資料

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	堀江 修	所属学科	医療検査学科	職名	教授
クラス担任	1年Aクラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	入試委員会・M科代表、紀要委員会・副委員長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○生理学 I	M	1	前期	必修	講義	対面	95
○血液検査学 I	M	2	前期	必修	講義	対面	98
○血液検査学実習 I	M	3	前期	必修	実習	対面	80
○労働衛生学 II	M	4	前期	選択必修	講義	対面	50
○卒業研究	M	4	通年	選択必修	演習	対面	4
○生理学 II	M	1	後期	必修	講義	対面	89
○血液検査学 II	M	2	後期	必修	講義	対面	93
○環境生理学	M	2	後期	選択必修	講義	対面	90
○血液検査学実習 II	M	3	後期	必修	実習	対面	83
○予防医学概論	M	3	後期	選択	講義	対面	84
総合医学検査特論	M	3	後期	必修	演習	対面	77
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	講義	対面	77

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目では、科学的思考と協調性を身に着けた臨床検査技師を育てるために、新しい概念の臨床検査技術を開発したり、柔軟に取り入れたりすることができる学生を養成する。基本に即した臨床検査の知識・技能の習得とともに、臨床現場で対応できる実践力と職業倫理をもった学生を育てる。特に、演習科目では、チーム医療の一員として考え実践できるコミュニケーション力と実行力を育成したい。また地域保健や国際保健分野で活躍できる人物に育てたい。基盤科目では、大学の学修、研究の基盤である言語力・英語力、表現力の基礎を培うことを理念とする。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 授業毎にプリントを準備し、課題をその中に盛り込んだり、課題だけのプリントを單元ごとに配布し自己学習、自宅学習を促している。
- ・ 実習前には1時間程度の項目に関連した授業を行い、理解を深めさせた。レポート評価、筆記試験評価、実習項目に関する研究発表評価、顕微鏡実践テストによる評価などを取り入れて、一方向実習にならないように工夫している。
- ・ 血液検査学実習では臨床現場で臨床検査技師が取り組む採血の実習を強化して行い、厳重注意のもと学生間で採血を実施している。
- ・ 実習前には臨床現場で起こりえる針刺し事故、そしてその事故や普段の操作で起こりえる感染に対して十分な講義を行っている。また、事故が起こってしまった場合の対策も講義している。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 前年度の学生による授業評価では、声が聞こえにくいという意見が見られた。そのため、今年度は、授業時に必ずマイクを使用し、聞こえやすいように工夫した。
- ・ 多色を使ったカラースライド、カラープリントは一部学生に色を3色ぐらいに抑えるようにとの指摘があったが、自分の講義スライドの大きな特徴ととらえているので改善するつもりはない。もちろん、わかりやすいという意見もある。
- ・ 授業時間外の学修を充実させるため、講義毎に配布しているプリントを使用した問題集を作成し、学内外で解かせている。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 今年度も「生理学Ⅰ・Ⅱ」において、声が聞こえにくいという意見が見られた。特に文末がわかりにくいとのことだったので、来年度はマイクを使用し、文末まではっきり発声することを心がけた。
- ・ 実習系の授業においては、概ね高評価をとることができた。レポートをもっとよく見てほしいという意見があるが、レポート判読に時間をかけすぎると全体の授業が破綻する可能性があるため、効率よくレポート判読することを心がけたい。
- ・ 「総合医学検査演習（国家試験対策）」において、理解が低いのではないかと指摘があったため、たっぷり準備時間をかけてのぞみたい。
- ・ 前期「労働衛生学Ⅱ」・後期「予防医学概論」「環境生理学」の学生自身の学習時間が短めであった。授業内容と課題の在り方について考えていきたい。

6. 今年度の成果

- ・ 「生理学Ⅰ」の授業でそのおもしろさを伝えた結果、再履修者は前年度の9名から本年度は6名になった。「生理学Ⅱ」では再履修者の数に変化はなかった。

- ・ 後期実習科目でレポート判読を少々強化したことにより、学生評価が上昇した。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 実習系科目では良い評価であるといって手をゆるめず、効率の良いレポート判読を行いたい。
- ・ 「血液検査学Ⅱ」において7.5回のうち最終回が2ヶ月遅れるといったことがあったので、計画的な授業を心がけたい。
- ・ 授業のまとめプリントをさらにわかりやすく改訂したい。

8. 社会的活動等

なし

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布資料
- ・ 定期試験・追再試験

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	新谷 路子	所属学科	医療検査学科	職名	教授
クラス担任	1年	クラブ顧問			
委嘱委員・職務	ときわ教育推進機構、SD委員会・副委員長、教務委員会・副委員長、全学保護者会				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○解剖組織学	M	1	後期	必修	講義	対面	92
○一般検査学	M	2	前期	必修	講義	対面	96
○病理学	M	2	前期	必修	講義	対面	96
○一般検査学実習	M	2	後期	必修	実習	対面	93
文献講読	M	3	後期	選択	講義	対面	23
検体採取安全管理演習	M	3	後期	必修	演習	対面	82
○人体のふしぎ	基盤	1	前期	選択	講義	対面	189
臨床技術入門	R	1	後期	必修	講義	対面	85
医療コミュニケーション	M	4	前期	必修	講義	対面	75
チーム医療論	M	3	前期	選択	講義	遠隔	77

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策（解剖組織学、病理学、一般検査学）

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

「人体のふしぎ」や「解剖組織学」などの科目を通し、人として、また医療人としての倫理観を育成する。専門科目では、臨床検査技師として十分な技術や知識の修得を目指す。さらに、「IPW論」や「医療コミュニケーション」などの科目を通して、他者、他職種との協働を理解し、実践できる医療人を育成する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 授業内容の定着のため、ワークシートを作成し配布している。
- ・ 検査を理解するため、学生が自ら検査用パンフレットを作成し、その発表を行っている。

- ・ 「医療コミュニケーション」の授業では、学生が患者および臨床検査技師役となったロールプレイ学習を行っている。
4. 今年度における教育方法改善の取り組み
- ・ 前年度の学生による授業評価では、「言葉だけの説明のみでは想像しにくいので動画やその画像を見せて欲しい。」という意見が見られた。そのため、今年度は、配布プリントに写真やイラストを多く載せて、視覚的に理解を促した。
5. 今年度の学生による授業評価より
- ・ 学生にワークシートを渡しているが「ワークシートの解答が欲しい」という意見があった。
 - ・ 「スライドや配布プリントに写真が多く理解しやすかった」という意見があった。
6. 今年度の成果
- ・ 「解剖組織学」の授業において、説明用スライドに手書きイラストや写真を増やし、また出来る限りゆっくり説明をするように心がけたところ、総合評価が4.1から4.3に昨年度より上昇した。
7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策
- ・ 「ワークシートの解答が欲しい」という意見があるが、解答がない問題を解く努力をして貰うために解答は渡していないため、授業時間内に問題の一部の解説を行うなど学修効果を考えながら学生の要望に沿っていく。
8. 社会的活動等
- ・ 高大連携授業：福崎高校
9. 根拠資料（資料名のみ）
- ・ シラバス
 - ・ 学生による授業評価
 - ・ 授業における配布プリント（ワークシート、提出用課題プリント）

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	布引 治	所属学科	医療検査学科	職名	教授
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	広報委員会委員長、教育研究開発推進センター副センター長、個人情報保護委員会委員、細胞検査士委員会				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
大学道場 mini ゼミ	EMRON	1	前期	選択	講義	対面	17
臨床検査入門	M	1	前期	必修	講義	対面	87
○組織学実習	M	2	前期	必修	実習	対面	96
○病理検査学	M	2	後期	必修	講義	対面	104
○病理検査学実習 I	M	2	後期	必修	実習	対面	93
○細胞検査学	M	3	前期	必修	講義	対面	82
○細胞検査学演習	M	3	後期	選択	演習	対面	19
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	77
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	演習	対面	77
○細胞検査学特論 I	M	4	前期	選択	演習	対面	14
○細胞検査学特論 II	M	4	前期	選択	演習	対面	14
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	71

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ なし

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

大学で学んだことに自信を持ち、社会で活躍できる学生を育てる。人のための人になれる人材教育を目指す。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

臨床現場で仕事に直結する材料（症例や具体的な患者様の臨床情報）を学びながら、技術指導を行う。国家試験としてどのように問題作成されるか説明を行う。適時 QR コードを用いたアンケートフォームを使い、学生の理解具合を確認しながら授業を進行する。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

細胞診教育成果向上を目的に、わかりやすい内容のサブテキストを作成した。過去問題集の解説本を作成し理解を深めた。

5. 今年度の学生による授業評価より

「スケッチすることで内容理解を深めることができた」「国試問題をたくさん解く形式が効率的でかつ着目すべき点や特徴を覚えやすくて良かった」など概ね評価が得られたとみる。

6. 今年度の成果

総合評価高い科目が多く、目標とする学修成果を見極めることが概ねできた。細胞検査士試験は今回も全員合格、全国成績トップの高い合格率を維持できた。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

学生コメントをみると「小テスト結果の事後確認ができない」や「スケッチ評価の確認」などが寄せられていた。次年度はこれらを改善していきたい。具体的には採点のスピードアップや採点基準の公表など検討している。3、4年次科目では適時 QR コードを用いたアンケートフォームを使い、学生の理解具合を確認しながら授業を行っているが、実習科目でも振り返り時に使用を試みたい。特に実習科目はレポート点を重視しているので改善策を徹底していきたい。

8. 社会的活動等

日本臨床細胞学会評議員、同学会施設認定制度委員会委員、同学会細胞検査士委員会委員、日本臨床細胞学会近畿連合会理事、兵庫県臨床細胞学会理事、兵庫県細胞検査士会理事、医療関連サービスマーク制度調査指導員（（財）医療関連サービス振興会）

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	鈴木高史	所属学科	医療検査学科	職名	教授
クラス担任	3年生		クラブ顧問		
委嘱委員・職務	国際交流センター・センター長 ライフサイエンス研究センター・センター長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○国際理解	基盤	1	前期	選択	講義	対面	60
○免疫学	M	2	前期	必修	講義	対面	96
○免疫検査学実習	M	3	前期	必修	実習	対面	81
○科学技術論	基盤	1	後期	選択	講義	対面	84
○免疫検査学	M	2	後期	必修	講義	対面	94
○分子感染制御学演習	M	3	後期	選択	演習	対面	4
○バイオインフォマティクス	M	3	後期	選択	講義	対面	8
医動物学実習	M	2	前期	必修	実習	対面	95
公衆衛生学実習	M	1	後期	必修	実習	対面	87
医療英語	M	2	前期	必修	講義	対面	96
国際保健医療活動Ⅰ	M	4	前期	必修	講義	対面	78
卒業研究	M	4	通年	必修	実習	対面	71
総合医学検査演習	M	4	後期	選択	講義	対面	77
臨床検査学演習	M	3	後期	必修	演習	対面	85

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策
- ・ ネパール交換研修での異文化の紹介
- ・ ネパール交換研修での学生の発表資料作成指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 基盤科目では、自ら考える力の育成に重点を置く。
- ・ 専門科目では、基礎的知識とともに、臨床現場で対応できる技能の習得に重点を置く。
- ・ 全体を通じて、コミュニケーション力・プレゼンテーション力の向上を図る。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）
 - ・ 担当科目では動画を適宜用いたパワーポイントによる授業を実施し、学生が理解しやすいように心がけた。また授業用資料を印刷物として渡すことにより、学生が復習を行う際に行いやすいようにした。さらに専門科目では小テストを毎回行うことにより、知識の定着を図った。
 - ・ 実習、演習科目では、学生による発表の時間を設定し、コミュニケーション力、プレゼンテーション力の向上に努めた。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み
 - ・ 前年度の学生による授業評価では、小テストの実施が知識定着に役立ったとの意見が見られた。そのため、今年度も専門科目の授業時には毎回の授業で小テストを実施して知識の定着度の把握に努めた。

5. 今年度の学生による授業評価より
 - ・ オムニバス形式で実施の「科学技術論」の科目においては、学科ごとに評価が分かれた。これは学生の興味対象が異なると考えられるため、ある程度はやむを得ないと考えられた。一方で複数の学生から、開講日時の変更を求める意見が寄せられた（本科目の時間が必修の「まなぶる」の後であったため）。そこで次年度は開講日時を変更することとした。
 - ・ 実習系の授業においては、概ね高評価をとることができた。
 - ・ 全般的に学生自身の学習時間が短めであった。予習復習を促す課題の在り方について検討していきたい。

6. 今年度の成果
 - ・ 専門科目の講義科目では「講義を行う⇒小テスト、次回の講義の最初に前回小テストの解説」という授業形式を確立してきた。これにより定期試験で不合格となる学生数は数名に留まり、基礎学力の定着に効果があったと考えられた。
 - ・ ネパール交換研修では、GCC メンバー全員で入念な準備を行い、その成果として参加学生から非常に高い評価を得ることができた。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策
 - ・ 複数名が担当する授業では、（小テスト、ミニレポートなどの形式等を含めた）科目としての統一性の確保が必要であると思われた。次年度は授業実施前のミーティング等を通して、これの確保に努めたい。

8. 社会的活動等

- ・ 特に無し。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料
- ・ テスト問題

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	大澤 佳代	所属学科	医療検査学科	職名	教授
クラス担任	3年Bクラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	学内実習安全委員長、遺伝子組換え実験安全委員、卒業研究委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○微生物検査学 I	M	2	前期	必修	対面	講義	102
○病原微生物検査学 II	M	3	前期	必修	対面	講義	98
医療安全	M	3	前期	必修	対面	講義	83
医療安全	N	3	前期	必修	対面	講義	84
○微生物検査学実習 I	M	2	後期	必修	対面	実習	95
○微生物検査学 II	M	2	後期	必修	対面	講義	94
○感染制御学	M	3	後期	必修	対面	講義	87
IPW(多職種連携)論	R	3	後期	必修	対面	講義	76
臨床検査学演習	M	3	後期	必修	対面	講義	85
検体採取安全管理演習	M	3	後期	必修	対面	講義	82
総合医学検査特論	M	4	後期	必修	対面	講義	77
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	対面	講義	77
卒業研究	M	4	後期	必修	対面		71

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 神戸大学医学部保健学科学学生に対し講義・実習を行っている。
2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）
- 担当科目の講義・実習内容を各学年の進度に合わせて見やすく、わかりやすくを心がけて構築する。
3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）
- ・ 各科目における微生物学に対する興味を導くとともに、対面と遠隔を組み合わせた講義内容にして国家試験対策へつなげるように意識した内容とする。
4. 今年度における教育方法改善の取り組み
- ・ 今年度は新カリキュラムへの移行に伴い、微生物学関連のコマ数が 8 コマ減となった。そのため、「講義スピードが速い」というコメントが何件かみられた。講義の配分については今後も調整が必

要であるが、内容の質は落とさずに進めていくこととのバランスは模索している。

5. 今年度の学生による授業評価より

「講義スピードが速い」が何件かあった。小テストがあることやスライドが見やすいことは評価されていた。実習にて「注意の仕方が不快である」との意見があったため、注意について気を付けていく。

「感染制御学」では「講義内容が感染制御から外れて微生物学である」との意見があった。

6. 今年度の成果

・昨年度までと講義内容を変えずに講義時間数が減少したため、一概には比較できないが、どうすれば減少した分の内容をうまく伝えていくことができるかを考えていく必要がある。

・「感染制御学」という名称ではあるが、臨地実習前に行う講義であり、さらには総論で講義できていない部分を補わなければならないため、感染制御学単体の講義内容にできない事情がある。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

・今年度の課題は講義スピードが速かったことが挙げられるため、内容を精査し必要な講義内容を維持しながらゆっくりと講義ができるようにバランスをとっていく。

・実習では注意の仕方の点で不快に思った学生がいたため、その旨を気を付けていく。

8. 社会的活動等

・神戸大学大学院保健学研究科客員教授（兼担）

9. 根拠資料（資料名のみ）

・学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	伊藤 洋志	所属学科	医療検査学科	職名	教授
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	就職委員長、臨地実習副委員長、ライフサイエンス研究センター委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○検査入門実習	M	1	前期	必修	実習	対面	87
○医療安全	M	3	前期	必修	講義	遠隔と一部 対面	83
○医療安全	N	3	前期	必修	講義	遠隔と一部 対面	84
まなぶるーときわびと I	基盤	1	前期	必修	演習	対面	407
人体のふしぎ	基盤	1	前期	選択必修	講義	対面	189
B L S キャリアパス II	M	3	前期	選択	講義	対面	82
公衆衛生学実習	M	1	後期	必修	実習	対面	87
基礎分析実習	M	1	後期	必修	実習	対面	87
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	77
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	講義	対面	73
臨床化学検査学実習	M	3	後期	必修	実習	対面	81
臨床化学検査学実習 I	M	2	後期	必修	実習	対面	95
臨床検査学演習	M	3	後期	必修	演習	対面	81
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	3

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策学習の支援（模擬試験問題の解説授業等の動画提供を含む）
- ・ 臨地実習における運用と学生指導（医療安全・感染防止対策、情報管理・守秘義務、病院での接遇等）
- ・ 学生の就職活動支援として、履歴書・志望理由書等の応募書類や小論文等の添削指導、採用試験を想定した模擬面接指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門基礎科目では、多様な専門科目を学修する上で必要となる医学・医療における知識・技術を習得し、多様な現場で実施される臨床検査を遂行できる学生を養成する。DPにある「医療検査に必要な基礎知識および基本的な専門知識、医療検査の実践に必要な基本的技術」を修得するために、実習や演習を通して確かな実践力を有した臨床検査技師を育成したい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

「検査入門実習」ではシラバスに記載のアクティブ・ラーニングの要素として「ICT活用の自主学習支援」を挙げているとおり、各回の実習内容の要点を解説した予習動画を活用した。特に器具や装置の取り扱い方法など技術的な解説を効果的に行えるよう、教員が実演するシーンを多く取り入れた。基礎知識や基本的な専門知識の到達度を測る定期試験とは別に、授業の最終回で実技試験を行い、基本的な技術の到達度を測った。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 臨床検査技師学校養成所指定規則の一部が改正され、2022年度入学生より新たなカリキュラムの適用によって臨床検査技師に追加された「タスク・シフト／シェア」業務に関する授業が加わった。これに伴い、同授業を受講していない2021年度以前に入学した学生は国家試験の受験資格を得るために在学中に「タスク・シフト／シェアに関する厚生労働大臣指定講習」を受講する必要性が生じた。これに対応するため、自らも指定講習を受講し修了証を取得した。この経験を生かし、次年度（2024年度）に該当する学生を対象とした指定講習会の学内開催に向けて準備に取り掛かる。
- ・ 上記の新たなカリキュラムの施行に伴い、臨地実習は所定の講習を受講した「臨地実習指導者」が配置された施設で行われることとなった。これに対応するため、自らも臨地実習指導者講習のWEB研修動画を視聴するとともに、同講習のワークショップにおける世話人を担当した。臨地実習施設の指導者が受講された研修内容を共有し、また世話人の経験を生かし、臨地実習副委員長として臨地実習施設と緊密に連携して次年度（2024年度）から始まる新たなカリキュラム下の臨地実習の遂行に取り組む。

5. 今年度の学生による授業評価より

「検査入門実習」では、「予習動画などがとても丁寧で分かりやすかった。」というコメントをいただいた。今年度から導入した試みであったが、学生が事前に動画で予習することにより、実習では簡潔な説明に留めて早々に実験作業を進めることができた。生じた時間的余裕を教員による個別指導に充てることができた

6. 今年度の成果

前職の長浜バイオ大学において、バイオサイエンス研究科博士前期課程の指導教員を務め、自身が主宰する研究室に所属する学生の主指導、および他研究室に所属する学生の副指導を担当した。2023年4月に本学に着任後も外部教員として引き続き学生1名の副指導を担当するとともに、同学生が所属する研究室と共同研究を展開した。その研究の進捗について、共同演者として防菌防黴学会第50回年次大会（23.8.29）および第96回生化学会（23.10.31）で発表した。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

「医療安全」の授業評価では「（一部が対面授業だったが全て）遠隔授業でもよい、遠隔授業がよい」という趣旨や、「遠隔授業なら試験はレポートが妥当」という趣旨のコメントをいただいた。定期試験に関しては、講義形態の授業では対面・非対面に関わらず筆記試験が基本であり、非対面授業の成績評価はレポート試験で行うべきという考え方に合理的な理由はないと考える。しかしながら、対面または遠隔授業のそれぞれの利点や特性を学生が強く実感できる授業に至っていないことが、コメントの背景にあると考えられる。今年度は分担担当を依頼する外部講師の事情により一部授業を遠隔で行ったが、次年度はご出講いただくことが可能であるため、全て対面授業で行う。遠隔授業にはない対面の利点を生かした授業を心がけ、定期試験ではその修得度を適切に測れるよう、試験方式や試験問題、評価方法等について検討したい。

8. 社会的活動等

- ・ 長浜バイオ大学大学院バイオサイエンス研究科修士論文公開審査 審査委員（外部副査）
- ・ 長浜バイオ大学フロンティアバイオサイエンス学科臨床検査学コース 非常勤講師
- ・ 京都大学医学部人間健康科学科 非常勤講師
- ・ 日本臨床検査学教育協議会 臨床免疫学分科会 副会長
- ・ 日本臨床検査学教育協議会 編集委員会 委員
- ・ 日本臨床衛生検査技師会「臨地実習指導者講習会」世話人
- ・ 特定非営利活動法人臨床検査支援協会 学術講演会開催委員会 委員

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ manaba 上に示す授業資料等
- ・ 「タスク・シフト／シェアに関する厚生労働大臣指定講習」修了証
- ・ 「臨地実習指導者講習会世話人」委嘱状
- ・ 長浜バイオ大学大学院バイオサイエンス研究科修士論文公開審査審査委員 委嘱状
- ・ 長浜バイオ大学 非常勤講師 委嘱状
- ・ 京都大学 非常勤講師 委嘱状

- ・ 日本臨床検査学教育協議会 編集委員会委員名簿（令和 5-6 年度）
- ・ 日本臨床検査学教育協議会 科目別分科会会員名簿（令和 5 年度）
- ・ 臨床検査支援協会学術講演会開催委員会報告書（兼議事録）
- ・ 学会発表演題抄録

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	浦 みどり	所属学科	医療検査学科	職名	准教授
クラス担任	無し	クラブ顧問	無し		
委嘱委員・職務	SD 委員, 国際交流センター委員, 就職委員, 学内実習安全委員会				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○生理機能検査学Ⅰ（循環器系）	M	2	前期	必修	講義	対面	99
生理機能検査学実習Ⅱ	M	3	前期	必修	実習	対面	87
画像診断機器学実習Ⅱ	R	3	前期	必修	実習	対面	73
生理機能検査学Ⅱ（神経系）	M	2	前期	必修	講義	対面	96
臨床検査入門	M	1	前期	必修	講義	対面	87
国際理解	A(all)	1	前期	選択	講義	対面	60
BLS キャリアパス	M	3	前期	必修	講義	対面	82
○生理機能検査学実習Ⅰ	M	2	後期	必修	実習	対面	97
○診療画像検査学Ⅱ（超音波・眼底）	R	2	後期	必修	講義	対面	90
歯科臨床検査学総論	O	2	後期	必修	講義	対面	66
臨床検査学演習	M	3	後期	必修	演習	対面	85
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	講義	対面	77
総合医学検査演習	M	4	後期	選択	演習	対面	77
文献購読	M	3	後期	選択	講義	対面	26
まなぶる？ときわびとⅡ	A	1	後期	必修	演習	対面	408
卒業研究	M	1	通年	必修	演習	対面	71

(2)準正課、正課外の教育活動

【4 回生】

- ・ 国試対策：過去問および模試の分析に基づくオリジナル問題の作成と解説
- ・ 就職支援：履歴書、小論文の添削と面接対策を学生のニーズに応じて無制限に実施
- ・ 進学相談：大学院の英語試験対策
- ・ 実技指導：卒研の超音波技術指導

- ・ 医療人・研究者としての倫理観、責任感、接遇など人間性の醸成
- ・ Student assistant として実習における役割と心構えについて、実習途中から伝達
- ・ オープンキャンパス等での支援方法と保護者対応など、社会人としての接遇指導

【2・3 回生】

- ・ 定期試験の後に再試に向けた補習（全体が低得点だったため本試合合格学生へも授業を公開）
- ・ 臨地実習前の技能到達度実技試験にて心電図検査の心構えと実技指導

【1 回生】

- ・ 本学で開講されている国際交流について個別説明等
- ・ 臨床検査技師（またはそれ以外）の将来について個別相談
- ・ 「この大学でやりたいことに挑戦する」意義と尊さについて
- ・ 心電図検定試験に向けての学習支援と助言

【ゼミ生・チューター学生】

- ・ 必要に応じて面談（成績、メンタル、実習、アルバイト、その他）

【その他】

- ・ ネパール交換研修生派遣プログラム派遣団員（引率）
- ・ Early exposure 病院訪問の引率

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

【教育への信念】

私は「人の豊かな営みは教育の下に成り立つ」という信念を持っている。「豊かな営み」とは人それぞれに異なるだろうが、「自分で考え、道を選び、信じて進んでいく」ことがその一つだと思う。つまり教育とは、自分で考える力を身につけ、それを実践する力を養うことだと思っている。教育はすべての土台であり、またすべての上に立つべき最も重要な機会である。教育をはじめ、何でも当たり前を与えられてきた人生だったが、公衆衛生の学び多き経験から教育を受けられることの有り難さや幸福を知った。子供たちに関わっていた時代もあったが、教育の普遍的な価値に気づいた時には医療従事者として、「教育も医療も、人を育てる尊い学問であり実践の科学だ」と強く信じてきた。偶然か必然か、この両者を生業としている私は最高。一度の人生、絶対に得している。と学生に豪語してもピンとこないだろうか。

【大学教員として】

大学教員としての理念は、「大学生は失敗を恐れず挑戦すること。そして様々な良い人達と出会い、今しかできない貴重な経験をする事」。その経験こそが人間性を豊かにし、やがて温かい医療人となって社会に還元されていくと信じている。医療技術者としての使命は、技術・知識・経験を育てることである。このうち経験は、現場での経験、すなわち実際に患者や被験者に接しながら体得していくものであり、経験に勝るものは何も無い。先輩や上司が何も教えてくれなくても、患者様が全てを教えてくれる。それを常に意識して学び取れるかどうか、生理検査の技師として成長できるかどうかの鍵だ。それでは大学での学びは何か。知識は教科書や参考書を用いて独学でも学べる。大学に居る必要もない。

それに対して技術の獲得に個人の努力は不可欠だが、独学では誤ったテクニックを覚えてしまう可能性がある。医療に誤りはあってはならない。習い初めから基本に忠実にとレーニングすることで、一度獲得した技術は応用が利く。大学の実習では臨床まで到達できないが、正常像を見極める基礎的な技術を習得する力を高めたい。

その学ぶ姿勢や素養を身につける上で育てたい学生像は、上述の信念の通り、自ら考えて主体的に行動できる人である。この点はときわコンピテンシーの「学生が主体的にそれを修得しようとする態度を育成」に合致する。さらに高い倫理観と責任感、また温かく豊かな人間性を持って欲しく、人間性の涵養を図る教育を常に意識したい。問題はそのような人材を「どのように」育成するのかである。

一つは、同じくときわコンピテンシーの「学生一人ひとりが自ら定める目標の達成に向けて、日々の学びを円滑かつ効果的に進められるよう、必要な支援をする」ことだと思う。まずは学生自身が目標を定めること、その目標の達成に理念を持って一緒に向かっていくことで、自然と人間性の形成に繋がるのではないか。しかし日々の思いは、こんなことよりも、せめて挨拶ぐらいは出来るようになったほうが宜しかろう、、、ということに尽きてしまう。

【学問について】

考える力を鍛錬しなくてはならない。学内実習は即実践に結び付くほど、現場で実際に使用されている医療機器を使い、現場のルーチンに即した内容を心掛けており、前任の諸先生方も臨床経験も豊富で教育熱心であられ、数台の機器は実習中に故障したため古い機器への対応は必要だが、今後も環境を整え、「現場で役立つ実習」の体制を変わらず組んでおく。しかし、学生が真剣に取り組んでいるように見えない。予習はおろか実習書も持たず、主体的に動こうとする意志が感じられない。全く響かない。なぜかも分からなかった。日々の学修や実習、レポート課題、ひいては臨床検査という専門職に対するモチベーションを上げるための仕掛けか何かが必要なレベルなのかもしれない。あるいはさらにレベルを下げ、基礎学力（算数、問題文を熟読する根気、自分の意見を論述する力など）の強化が必要かもしれない。「教員」とは言え、専門知識や技術を教えるための人員であり、教員免許も持たない教育素人に効果的な教育手法を実践する術はない。信念だけでは成り立たず、ましてや言葉では伝わらないことがこの1年でよく分かった。実に楽しくない。それでも実習の実技指導では、私が描出する美しい画像に背中側から驚きの声上がる。伝わらない言葉よりも「どうだ。これが私の技術だ」と言わんばかりの「(ドヤ) 背中を見せる」。この方が圧倒的に効果がありそうだ。座学で背中を見せるにはどうすれば良いか…未だ分からない。

※ 「ときわコンピテンシー」やAP、DP、CP、SSP、ASPについては、自身が持ち続けている理念と概ね重なる部分があるものの、このTP作成にあたり、上記の内容が全く頭に入っていないことが分かり、便覧を調べて読み返すこととなった。また準正課や正課外の違いや意義についても、全く理解していない状態で1年間「教員」をやっていたらしい。日頃から大学や学科の理念をベースに持って教育にあたらなければ、逸脱した己の信念だけを押し付けることになりかねない。そもそも自分がこれらのポリシーの全てを兼ね備えた人間でもないのに「教員面」するのは烏滸がましい。が、改善策と言っても

思い浮かぶのは人生のやり直しぐらいか。何を以てしても惨憺たる1年目だったが、教育面でのやりづらさは自分のポリシーと大学・学科のポリシーの乖離や不一致の部分に気付かず、学生に自分の信念を押し付け過度に期待したためかもしれない。が、真相は分からない。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 専門科目が多いため、座学は一方通行になりがちだった。一部の授業でアクティブラーニングを取り入れたが、思うような反応は得られなかった（後述）。
- ・ 育てたい学生像に関する理念は、現在担当している授業内で実践することは難しいが、実習、臨地実習前の実技試験、卒研など実践的な学びの機会には必ず倫理や接遇などの重要性を伝えている。しかし、それに関する試験や物差しがないため、人間性に関する成長を測ることは難しく感覚や自己評価に頼らざるを得ない。
- ・ 学生同士で互いにどのような考えを持っているかなどは、反転学習やグループディスカッションで知る機会を作るようにしていきたい（どの科目で出来るかは不明）。
- ・ 発言力強化のため、前任校では座学でも指名して答えさせる授業をしており、反応も良かったが、今の状況だと配付資料や教科書に沿って単語を述べるだけの質問に対しても「分からない」と繰り返す。ここで強制するとパワーハラスメントになるのだろうか？

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

※ 今年度新規入職のため昨年度の授業評価に替え、今年度前期の評価より後期に改善した点について記述する。

- ・ 前期の座学ではmanabaを活用した小テストを実施したが、種々の授業や実習、学生指導等に追われ、小テストの回数が少なかった。そのため後期の座学（前期とは別のクラス）では複数回の小テストのほか、毎回の講義中および講義終了時に、その回の学修ポイントや重要な点を復習する目的で、クイズ形式で知識と記憶の定着を図るようにしたところ、非常に好評だった。講義時間を取られるため実施したくなかったが、学生側からすると冗長な講義よりも自分たちで考えてその場で答えるクイズの方が「楽しい」と感じられ、結果的に効率よく頭に入るようであった。定期試験の結果も国試レベルの問題を記述・選択など多く取り入れているが、全体的に良好な成績を修めた。授業評価のコメントでは「小テストが勉強のきっかけになった」、「授業が丁寧で分かりやすい」、「資料が分かりやすい」、「授業・クイズが楽しい」など前向きなコメントが多かった。
- ・ 画像検査にもかかわらず印刷物の画質が悪かったため、授業中は教科書・参考書や学会の動画を提示し、また試験対策を兼ねた高画質の画像とともに読影のポイントなどをまとめた資料をmanabaにアップロードして対応した。授業期間内に概ね改善してきたが、授業評価では1件「超音波画像の画質がもうちょっと良かったら嬉しかった」とのコメントがあり、次年度は画質の悪い画像は無理に配付資料に載せず、出典を明記した上で判読しやすい教科書や参考書などを供覧してみたい。欠席者への対応など、必要に応じてmanaba等を活用するが、与え過ぎは混乱を招くため配付資料の画像は厳選し、教科書をメインにしていきたい。

- ・ 学生からの要望で「配付資料で大事なところを穴埋めにしてほしい」との意見があり、取り入れてみたが、書き込む時間を待たなければならない、記入欄が小さい、単語のみ暗記しがちななど、予習の資料としては学習のきっかけにはなりそうだが、授業で使用する資料としては効率も悪く、学修効果は薄い印象だった。ベテランの先生に穴埋めの効果についてお伺い立てたところ、意味も考えず漢字を覚えるだけ、とのことで同感であり堂々とやめることにする。その代わりに本来の学習法である「教科書を熟読する」、「自分の頭で考えて理解する」という習慣が欠落しているために穴埋めも奏功しないと思われ、王道の学習法を身につけられるような指導法や教授法が必要であろうが、答えが見つからないため今後も試行錯誤や諸先生方のご意見を参考にしながら工夫をしていく。
- ・ 前期は学生の反応が無く授業を聞いているようにも見えなかった。実際に試験の成績やレポートの内容は**相当なもの**であり、最低限の内容も伝わっていないようだった。日々必死ではあったが改善策を見つけられないままズルズルと時間に追われるのみで、授業や実習のたびに疲弊していた。成績も授業評価もすべての授業が終わってから判明するため、**予想以上の結末**に大打撃を受けた。
- ・ 改善に向けて色々聞いたが、殆ど何の肥やしにもならなかった。どうしたら学生が授業を聞いてくれるか、お目にかかった方々に片っ端から問いかけていたが、最近「1/4 でいい」という助言を頂いた。つまり、1/4 の学生は必ず聞いている、だからその人たちだけに向けて喋れば良い、そして1/4 が聞いていれば御の字だ、というような考え方である。1/4 という数値の根拠は不明だが、思い返せば実に理にかなっている。私の欠点は All or Nothing で、これでは疲弊ループから抜け出すことは不可能だと分かっているが、どうしたら良いのか全く分からなかった。聞いている1/4 に向けて全力で教えれば良いと割り切れれば、必然的にその場にいる1/4 以外にも伝わる可能性はある。受け取るかどうかは本人次第だが、次年度は1/4 を目指し、全力で自分の理念や DP に基づいたやりたい授業、質の高い授業を展開したい（1/4 が失敗したら次の策を考える）。
- ・ 教育目的でセミナーや学会の勉強会に参加し、15 回程度担当する科目では難易度を下げて解説したり、最新情報や Hot topic について興味を持つような小話をしたが、授業時間が短いため、途中からは授業（シラバスの内容）以外の情報提供が難しくなった。しかし、詰め込みは学生がついて来られず学習効果が低い上に、学問への興味も薄れる様子だったため、的を絞った授業を考えたい。国試問題は今後も網羅し、試験では記述式も多く出題するが、授業そのものの具体策は浮かばない。
- ・ 学科 SD 研修で国試対策がテーマとなり、他の先生方やグループの意見を参考に、学生のニーズに合った授業になるよう、研修内容を今後に生かしていく（後述：7.3）。
- ・ その他の単発の科目等：学生が興味を持てるような経験談を出来る限り取り入れた。授業中に質問は出なかったが、授業終了時に「先生のお話を聞いていて、あたしにも出来るって気がしました」、「（専門の超音波に関する）認定はどうやったら取れますか？」など、学生はそれぞれの目標に向けて挑戦する気持ちを持ってくれたようであり、教科書からは学べない体験談は、一部の学生かもしれないが伝わる部分はあったように感じる。
- ・ オムニバスの授業でアクティブ・ラーニングを取り入れたが、このクラスでは日ごろは発言をしない学生が意欲的に見えたものの、最終的にはよく発言する学生が面倒くさがり（？）やる気がない（？）らしく、意欲的な学生側の次の発言を待たずに「やらない方向」で終わってしまった。反応

の薄いクラスで意見を引き出すのは至難の業であるが、一人の発言がクラスを代表しているとは限らないため、時間短縮のために、さっさと次に進めるのも良くないかと思った。

5. 今年度の学生による授業評価より

【前期科目】

- ・ (座学) マイクの音量が小さい (実習) 声が小さい
- ・ (座学) 配付資料が見つらい：スライドの配置、ホチキス止めの位置など
- ・ (座学) 「1. 学生自身 (授業以外に学修した時間)」が短い
- ・ (実習) 相互理解に至らなかった など

※ 詳細は「7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策」で記述

6. 今年度の成果

- ・ 何事においても結果が出せない1年だった。特に前期の授業・実習への努力は徒労に終わった。
- ・ M科の国試対策、OSCE以外の準正課・正課外は、大いに改善の余地があるものの、就職支援などは信念に基づいた教育に繋がる面もあり、失意の前期から少しだけまともな時があった気がする。

※ 詳細は「7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策」で記述

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

【今年度の課題と改善策】

1. 正課：座学

- ・ 前期の座学で「マイクの音量が小さい」という意見が多くみられた。充電が切れた際はこちらでも気づくため、別のマイクに交換して対応してきた。しかし、授業が始まる前に聞こえるか尋ねていたが返答は一度もなく、自分や自分に近い学生には聞こえているため音量が適切でないことに気づかず改善のしようが無いまま最終回まで終わり、授業評価で初めて知った。
- ・ 前期の意見を踏まえ、後期の座学では改善策として、マイクの状態や教室のスピーカーからの音量、スピーカーの場所などに注意しながら、「聞こえない時は手を挙げてください、後ろまで聞こえますか？」など、開始前に毎回確認しながら授業を実施した（この点は前期も同様であったが）。その結果、この授業アンケートでは音声に関する苦情・要望コメントは一切なく、「8.聞きやすい話し方だった」については 4.36 (学科平均 4.22) と、改善努力に対して一定の成果が表れたと思う。但し、前期と後期の授業とでは、対象学科・教室環境が異なるため一概に比較は出来ない。
- ・ そのため今後の目標として：
 - ①前者と同様の条件で実施すると思われる次年度の授業で改善が見られるよう努力を続ける。
 - ②長期的な展望として、同様の意見が出ないよう学生の性質や学習環境にも注意を払い続ける。
- ・ 前期の全体的な課題として、上述のように授業終了後の評価で意見や苦情が出ても、当該学生に直接フィードバックが出来なかった。
- ・ その改善策として、後期の座学では授業の問題点や要望をすぐにフィードバック出来るよう、小テ

ストごとにアンケートを実施し、次の授業で改善策の提案や誤りの多かった問題の解説、授業の補足説明、今後の授業方針、定期試験などについて出来る限り丁寧に答えた（「11. 学生の質問や意見への対応が十分になされていた。」は4.54（学科平均4.28））。

- ・ 目標：他の意見やコメントについても、15 コマの中で問題点を改善していけるよう、小テストなどの機会を活用し、積極的に意見を吸い上げる努力を続け、互いに無用なストレスを無い授業を実施したい。

2. 正課：実習

- ・ 狭い実習室で数か所に分かれて異なる項目の実習を行ったため「隣の声の方が大きい」、「後ろの方まで聞こえない」など、聞こえないとのコメントが多かった。
- ・ 改善策として、後期は少人数となる実習でも、常に簡易のマイクを使って説明した。また前期は机を縦長に配置していたが、後ろまで聞こえるよう机の配置を横長に変えた。毎回開始時にその音量で後ろ、両端まで聞こえるか確認してから開始した（実習は少人数の為か学生の反応はあった）。途中で充電が切れても充電しながら説明を行うようにした。（内容を理解しているかは別の問題だが）音量的に聞こえないと言われることはなかった。
- ・ 目標：今後の実習でもマイクを使用し続け、出来る限り声帯を壊さず長持ちさせる。

※ 最も多かった改善すべき点がマイクの音量など、教育の本質とは別次元の問題だったが、それも延いては授業中の集中力や理解度に影響するため、学生も教員も煩わされないよう学習環境も含めて改善に努めていく。

3. 準正課

- ・ 国試対策：医療検査学科の特論では対象者を成績の中間層から下位層に設定して過去問演習→解説を繰り返し、基本問題を確実に得点するための授業を心がけたが、出席者が著しく少ない上に、比較的成績上位の学生が多い印象で、テーマを決めて実施したが、いずれも意義の薄い（対象者にそぐわない）授業だったのでないかとの懸念が払拭できなかった。
- ・ 明確な国試対策の改善策が浮かばない中、3月に学科SD研修で特論について話し合う機会があり、他の先生方のご意見や対策案をお聞きし有効だと思う案が多々あった。中でも、対象者の見直しや国試対策科目の開講時期など、一個人では出来ない改善案もあったため、まずは学科の国試対策の方針にしっかりと乗ることを改善の一策として心がけたい。
- ・ その上で、目標としてスケジュール管理や日々の学修方法など、試験内容以外のサポートもゼミ生などを対象に実施し、学生が意欲的に授業へ迎えるようなモチベーションアップに繋げていきたい。
- ・ 診療放射線学科の国試対策ではオリジナル問題を多く作成するが、毎回ある程度の難易度が決められる状況であるため、過去問や模試に準じた内容で学修効果を測れるため合理的であった。また自身が作成した問題を含め、毎回模試の解説を行うため時間的な負担は大きかったが、対象学生にとっては苦手分野の振り返りの機会となり、自己流の暗記術などに頼らず、正しく正答を導き出す学修法も教授できるため、模試をやりっぱなしにせず、最大限に活用できると感じた。それでも元より苦手意識の強い分野のように見受けられた。
- ・ 目標として、次年度からは確実に得点源になる分野であることを伝えながら、他学科ではあるが出

来る限り各個人の成績の推移にも目を向けて一緒に苦手を克服していきたい。何が奏功するかは試行錯誤が必要であるが、M科とR科の良い点を取り入れながら対策を講じていく。

- ・ 国際交流：ネパール海外交換研修では引率教員として学生・同窓生に帯同した。派遣学生自身もモチベーションが高く協調性もあり、他の教職員の方々のお陰で全員がそれぞれに良好な関係性を築くことが出来たと感じる。
- ・ 目標：ネパールとの長年の関係性は学園の財産であり今後も大事に育てるために、一步踏み込んだ活動を実行していく。短期目標は2024年度内に一定の成果を上げること。その成果と展望次第で、長期目標としては学園を巻き込んで中・長期的な活動へと成長させていきたい。
- ・ 就職支援：初めて関西圏で仕事をする事となり、見知らぬ土地での就職担当は難しいと思われたが、前職での経験が大いに役立ち、経験豊富な教職員の方々のお力を借りながら、担当学生は全員が年度内に進路が決定した。ゼミ生は元より優秀だったが、就活でも第一、または第二志望で県職や市職など早々に内定を取っている。
- ・ 入職1年目のため4年次生については、それまでの学業や態度、成績などを知らないため、就活に必要な踏み込んだ話がしづらかった。時間が必要であるため改善策とは言えないが、目標としては次年度以降は、学生の日ごろの授業や実習態度、課外活動等の状況を踏まえ、学生の長所を最大限に表現する履歴書作成や小論文の添削、面接練習を早期から開始し、意思決定を早くすることで選択肢やチャンスを増やし、本人の希望に見合った就職先を探していきたい。
- ・ SD委員：学科SD研修会にて国試対策について話し合い、次年度から改善可能な発展的な意見交換の場となった。研修に関する改善策としては、今回は初めて意見を出しあう場だったため、学科の教育方針や方向性を国試対策委員の先生方に委ねるが、実際に次のセメスターが始まり国試対策を実施している最中に中間評価などの機会を設けると良いと思う。長期的な目標としては、学生の性質や傾向は変化していくため、学科内で何度も話し合ったり改善したりする中で共通認識を持ち、学科全体で学生の教育をサポートしていく姿勢が大事だと思う（自分一人では何もできなかった）。
- ・ オープンキャンパス：学生が主体となって学科説明や体験談、技術を参加した生徒や保護者に教える役割ができた。目標は、今後も在学生が楽しく学んでいる様子が伝わるようなオープンキャンパスになるようにしたい。また、競合校と差別化を図る目的で、本学の特徴を全面に出す場があっても良いと思う。何故ここのかを体感できると志望者増加につながると思う（が、具体案は無い）。
- ・ 検定試験支援：心電図検定試験を受験する学生への学修支援⇒不整脈心電学会心電図検定3級合格。
- ・ 学生の興味を引き出せるよう学問そのものの面白さを伝えたく、また専門領域も一番面白いと思っているが、伝わらない。教育力のほか、人間力が低い気がする。
- ・ 長期的な目標は、検定の受験希望者を募り心電図道場を週1回程度のペースで定期的の開講し、1年次生（または上の学年も）4級から挑戦し、4年次には3、または2級の合格を目指す道場や、エコー道場で卒業時まで心エコーで健診程度のスクリーニングが出来るレベルを目指すような、技術に強い卒業生を輩出したいという展望は持ち続けているが、エコーは臨床でもムリと全否定されている。が、確かな技術を若いうちに修得することが今後に繋がり、仮に専門分野が異なっても、学生時代に主体的に取り組んだ経験は、履歴書への記載だけでなく、他の分野や業務にも応用でき

るため、展望として持ち続ける。自身の余裕が無い場合は、学生自身が主体的に取り組めるよう、試験や参考図書など、情報提供は怠らないようにしたい。

- ・ 座学では「1.学生自身（授業以外に学修した時間）」が低い傾向にあり、実習科目と比べるとレポートや予習に割く時間が圧倒的に短いと考えられる。学生の負担にならないよう敢えて課題を出さず、「今、この授業時間内に集中して理解してほしい」とのスタンスを崩さなかったが、前期の座学科目では、実習レポートの内容、小テスト、定期試験・再試の結果などから、「試験に出す」と伝えた内容すら殆ど勉強をしておらず、授業内容も身につけていないことが判明した。
- ・ とはいえ、学力や学修への取り組みは個人により差が大きく、上述の道場企画でも積極的についてくる学生が一定数はいると予想されるが、最優先課題は全員の基礎力をつけることであり、特に担当科目の性質上、基礎から積み上げないと応用や臨床で行き詰まるため、面白みのある臨床に走らず、地道に教科書的な基礎を教え込む必要がある。効果的な教授法は見えてこないが、次年度は恐れず試行錯誤を繰り返して掴みたい。

8. 社会的活動等

- ・ 能登半島地震の被災地における医療支援活動
- ・ 進路講座：高校2年生を対象に臨床検査技師の業務内容、将来性、やり甲斐などについて紹介
- ・ 専門学会のシンポジウムにて論文内容と今後の展望に関する発表と意見交換

9. 根拠資料(資料名のみ)

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価学生による授業評価
- ・ 授業における配付資料（授業ごとに毎回作成、補足資料も作成）
- ・ 配信資料等（技能到達度試験などの直前にポータルで詳細な説明を配信、事前の口頭と資料の説明のみでは聞いていない（集中力の欠如？）学生が多いことが判明したため）
- ・ テスト問題・小テスト問題
- ・ 下級生の実習で Student Assistant を務めた学生のアンケート結果
- ・ 卒業研究：発表スライド・卒業論文
- ・ 学科 SD 研修会アンケート（事前・事後）・報告書 など

以上。

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	今西麻樹子	所属学科	医療検査学科	職名	講師
クラス担任	なし	クラブ顧問	バドミントン部（副顧問） 弓道同好会（顧問・休部中）		
委嘱委員・職務	教務委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○生理機能検査学Ⅱ	2	2	前期	必修	講義	対面	96
○生理機能検査学Ⅲ	2	2	後期	必修	講義	対面	113
生理機能検査学実習Ⅰ	2	2	後期	必修	実習	対面	97
○生理機能検査学実習Ⅱ	3	3	前期	必修	実習	対面	88
一般検査学実習	2	2	後期	必修	実習	対面	93
臨床検査学演習	3	3	後期	必修	演習	対面	85
○検体採取安全管理演習	3	3	後期	必修	演習	対面	82
○医療コミュニケーション	4	4	前期	必修	講義	対面	77
対人援助技術演習	2	2	前期	選択	演習	対面	96
対人援助技術演習	3	3	後期	選択	演習	対面	68

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策等
- ・ 就職支援活動としてゼミ生の履歴書および小論文対策指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

臨床検査技師としての知識や技術だけでなく、患者への対応はもちろん、チーム医療として他職種スタッフとのコミュニケーション能力などの総合的なスキルを養い、自分の役割を遂行できる柔軟性と協調性を持つ学生を育成したい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ M4「医療コミュニケーション」では、臨床現場での様々な患者とのやりとりを前提として、ほとんど又はまったく話したことがない同級生と出来るだけコミュニケーションをとってもらおうようにしている。

- ・ M3「生理機能検査学実習Ⅱ」では、実習内容がそのまま現場に活かされるため、実際の検査の流れに沿って実習ができるようにしている。
 - ・ M2「生理機能検査学Ⅱ」では、成績に反映することを周知し、manabaの小テスト機能を利用して小テストを行っている。授業終わりの小テストは、ただ授業を聞き流すのではなく重要・必要ポイントを授業内で一つでも掴んでもらえるよう、また授業開始時の小テストは前回の授業内容を復習してもらう位置付けとしている。
4. 今年度における教育方法改善の取り組み
- ・ 「医療コミュニケーション」ではロールプレイ時、同じクラスでペアにならないようにした上で、毎回くじ引きをしてペアを決めた。
 - ・ 「生理機能検査学実習Ⅱ」では、検査説明⇒検査中の声かけ⇒検査終了後の対応の流れを軸に実習を組み立てた。
 - ・ 「生理機能検査学Ⅱ」では、授業回数が8回から15回に増えたのを機に、教科書の記載内容を中心とするものの、関連本の図やイラストも多用してスライドおよびレジюмеを作成した。また、授業前後にmanaba上で小テストを行い、知識の定着が図れるよう工夫した。
5. 今年度の学生による授業評価より
- ・ 「医療コミュニケーション」において、学生から「ABクラスの交流の機会が増えて、友達が増えたと同時に、授業前よりコミュニケーション能力も身についた点」「初対面の人と話す機会が多くあり、自分のコミュニケーション力が試されたため非常に良かった」との意見がみられた。
 - ・ 「生理機能検査学実習Ⅱ」において、卒研ゼミ学生にSAとして実習指導をしてもらったため、学生から「先輩がついてくれたため内容が理解しやすかった」「先輩がついてくれたので、より理解が深まった」との意見がみられた。しかし、「先輩の教え方に差があった」との意見もあった。
 - ・ 「生理機能検査学Ⅱ」において、「小テストがあったのが良かった」「毎回小テストで復習できて良かった」との意見がみられた。また、「話し方やスピードがとても理解しやすかった」との意見がある一方、「プリントに移すのに必死で授業があまり聞けなかった」との意見もあった。
6. 今年度の成果
- ・ 「生理機能検査学実習Ⅱ」の呼吸機能検査実習では、ゼミ学生がグループ毎にお手本を見せた上で説明をした結果、実習学生の「検査における声かけ（呼吸機能では検査側声かけで測定データが変わってくる）」が向上した。
7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策
- ・ 「医療コミュニケーション」では、外国人患者に対するコミュニケーションの取り方を学ぶ教材（DVD）視聴後のグループワークで、一つ一つの事例についてももう少し深く話し合いが出来るよう時間設定を見直す。
 - ・ 「生理機能検査学実習Ⅱ」では、SAとして実習指導をしてもらうゼミ学生が同じレベルで指導お

よび説明を行えるようトレーニングする。

- ・ 「生理機能検査学Ⅱ」では、授業スライドおよびレジメを整理する。

8. 社会的活動等

- ・ 厚生労働大臣指定講習会（タスク・シフト/シェア）実務委員

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ manaba 上の授業における小テスト
- ・ 授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	澁谷 雪子	所属学科	医療検査学科	職名	講師
クラス担任			クラブ顧問	バドミントン部顧問、フットサル部副顧問、器楽ボランティア部顧問	
委嘱委員・職務	就職委員、国試対策委員、地域交流センター委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○BLS キャリアパスⅡ	M	3	前期	選択	講義	対面	82
医学検査サプリメント演習Ⅱ	M	4	前期	選択	演習	対面	71
○生化学実習	M	(2)	前期	(必修)	実習	対面	2
医学検査サプリメント演習Ⅰ	M	3	後期	選択	演習	対面	84
臨床検査学演習	M	3	後期	必修	演習	対面	81
臨床化学検査学実習	M	3	後期	必修	実習	対面	81
臨床化学検査学実習Ⅰ	M	2	後期	必修	実習	対面	95
総合医学検査学演習	M	4	後期	必修	演習	対面	77
総合医学検査学特論	M	4	後期	選択	講義	対面	73
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	71
○地域との協働 B	基盤	2	通年	選択	演習	対面	15

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策：補習、学生指導
- ・ 就職支援：小論文、履歴書添削、面接練習

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

自ら考え行動する学生、対人能力を身につけた学生を養成する。

専門科目では、基礎を身につけ、その基礎を応用できる学生を養成する。

基盤教育では、学生自身が将来を考える、あらゆる場面で対応ができる学生を養成する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ グループでの取り組み（課題の相互チェック、意見の共有など）を実施した。
- ・ 授業前に事前確認動画を配信した。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 臨床化学検査学実習・臨床化学検査学実習 I
 - ① 実習前に予習動画を配信し、実習では、学生が自ら考えて行動できる環境を設けた。
 - ② 小テストを毎回実施し、基礎を身につける機会を設けた。
 - ③ 測定結果から検査時に何が起きているかを考えるグループ課題を実施し、実習で学んだ基礎を応用する機会を設けた。
- ・ BLS キャリアパス II
 - ① 課題（文章作成）の確認を学生が相互に行い、相手・自身の文章力、表現力を向上させる時間を設けた。
 - ② 各自、予習してきた内容をグループ内で共有し、自分の考えを伝える機会を設けた。
- ・ 地域との協働 B
 - ① 少子化・高齢化について、討論を行い、学生自身が将来について考え、地域社会とどう協働していく必要があるかを考える機会を設けた。
 - ② 合宿、集団生活で起こりえることを事前に考えさせ、あらゆる場面で対応できる準備をする機会を設けた。
- ・ 特に実習、演習
実習、演習では、レポート・課題作成の時間をとり、質問しやすい環境を設けた。

5. 今年度の学生による授業評価より

授業評価において、「たまに言葉の意味が分からないがあったので、もう少し易しく説明して欲しかった」との記述があった。旧カリキュラムでは3年生後期に実施していた実習を、新カリキュラムでは2年生後期から開始した。小テストにおいて、語句、意味を含めた基礎を予習（講義の復習）させているが、理解が難しいと感じた学生がみられた。

6. 今年度の成果

BLS キャリアパス II では、学生自身が調べる、考える、まとめる、確認することに重点をおき授業を実施した。その結果、授業評価において、設問「自分で調べ考える姿勢が身についた」は4.41（学科平均4.04）と高評価であった。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

2年生で臨床分野の実習が開始し、同じ予習・説明であっても、学生により、「理解ができた」「理解が難しい」と学習能力もそれぞれであると感じた。

低学年（1～2年生）のうちに、理解がゆっくりな学生を把握し、個別指導を行う。

8. 社会的活動等

「兵庫県臨床検査技師会」理事

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	砂見愛子	所属学科	医療検査学科	職名	講師
クラス担任		クラブ顧問			
委嘱委員・職務	臨地実習委員 就職委員 ハラスメント防止対策委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
生理機能検査学実習 I	M	2	後期	必修	実習	対面	97
生理機能検査学実習 II	M	3	前期	必修	実習	対面	87
○生理機能検査学演習	M	3	後期	必修	演習	対面	86
臨床検査学演習	M	3	後期	必修	演習	対面	81
検体採取安全管理演習	M	3	後期	必修	演習	対面	80
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	71
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	77
総合医学検査特論	M	4	後期	必修	講義	対面	73
臨床技術入門	R	1	後期	必修	講義	対面	85
画像診断機器学実習 I	R	2	後期	必修	実習	対面	86
臨床検査総論	N	2	前期	選択	講義	対面	82
人体のふしぎ	基盤	1	前期	選択	講義	対面	188
まなぶる・ときわびと	基盤	1	前期	必修	演習	対面	405

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 診療放射線技術学演習 I・II (R4 通年)の模試問題作成および解説授業を担当
- ・ 就職委員としての履歴書等の指導および模擬面接指導など
- ・ 臨地実習委員としての実習先提出書類の指導など
- ・

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目では、医療人として真摯に実務および患者様に向き合える人の育成を行いたい。検査技術を原理から理解し、検査結果の妥当性の判断や結果から導き出される患者の病態の判断が的確で、次に必要とされる検査や治療を考えて行動できる臨床検査技師を目指してもらいたい。そのために、私が臨床経験で培った技術や考え方を講義や実習を通して学生に伝えていくことが使命

であると考え。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

各実習では、夏期休暇や春期休暇の間に実習前課題に取り組みさせることで、実習開始時点で実習内容の概要をつかむように設定した。その結果、実習では夏期課題や実習書を見ながら、自分達で実習に取り組もうとする姿が大半の学生でみられた。学生が能動的に実習に取り組めるため、疾患例を提示するなどの実臨床で必要な内容についても触れる時間を作ることができた。

後期実施の生理機能検査学演習では、夏期課題として授業で扱う予定の症例について提示し、病態などについて事前に調べて考えさせるようにした。その結果、授業内容は広範囲であったにも関わらず、ディスカッション形式での授業を展開することができた。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

今年度より着任のため、学生の授業の理解度等を探りながらの展開となった。

前期の定期試験において知識の定着に工夫が必要であると感じたため、後期では大事な項目については、小テストを行い知識の定着をはかった。

3でも述べたように、実習や授業前に課題を出すことで学生が実習・授業に対して能動的に取り組むことができるよう工夫した。

5. 今年度の学生による授業評価より

生理機能検査学演習では「生理検査の広い範囲のことを深く教えてもらえて生理検査の楽しさを知れました。」や「なぜそうなるかまで教えていただけたのでわかりやすかったです。」などの意見をいただいた。学習を進めるには、まずはその教科の楽しさを知ってもらうことが近道であると考え。結果を丸暗記するのではなく、なぜそうなるかを丁寧に伝えることで理解し、興味を引き出すことができた。

実習では「わかりやすい実習書が事前に作成されていたのがよかった」との意見をいただいた。やはり、事前に実習の概要を理解し予習することで、意欲的に実習に取り組めると考える。一方、「超音波の機械が古くてエラーが出すぎで困った」との意見をいただいた。5台の超音波装置で実習を行っているが、いずれも10～20年使用の装置で実習中に操作不能となることが度々あった。装置の更新が望まれる。

6. 今年度の成果

初年度であったが、授業評価もおおむね高評価であった。

医療検査学科4年生では、総合医学検査特論で画像関連の内容のまとめを担当した。今年度も国家試験合格率9割以上であり、少しでも貢献できていればと考える。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

生理検査学は病態を理解することや考える力を要する教科であり、苦手意識を持つ学生も少なくない。基本的な事項を覚えなければ考えることはできないので、まずは基本事項の小テストを複数回行うことで早くから知識を定着させ、その上で考える講義・実習に取り組めるような構成を考えている。

8. 社会的活動等

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	澤村 暢	所属学科	医療検査学科	職名	講師
クラス担任		クラブ顧問		イムノヘマトロジー部	
委嘱委員・職務	国家試験対策委員会（副委員長）、臨地実習委員会委員 自己点検・評価委員会委員、図書委員会委員 ライフサイエンスセンター委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
血液検査学 I	M	2	前期	必修	実習	対面	99
血液検査学実習 I	M	3	前期	必修	実習	対面	81
血液検査学実習 II	M	3	後期	必修	実習	対面	83
医動物学実習	M	2	前期	必修	実習	対面	95
まなぶるときわびと II	M	1	後期	必修	演習	対面	408
○臨床検査学演習	M	3	後期	必修	演習	対面	85
卒業研究	M	4	後期	必修	演習	対面	71
○医学検査 サプリメント演習 I	M	3	後期	選択	演習	対面	82
○医学検査 サプリメント演習 II	M	4	前期	選択	演習	対面	71
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	対面	対面	77
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	対面	対面	77
検体採取安全管理学演習	M	3	後期	必修	対面	対面	82
歯科臨床検査総論	O	2	後期	必修	対面	対面	66

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策の補習
- ・ 関西大学生命化学部非常勤講師

2. **教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）**
 - ・ 専門知識および技能修得はもちろん、それらを臨地実習で使える実践力と患者ファーストの倫理観をもった学生を養成する。
3. **教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）**
 - ・ 各科目で得た知識を実際の医療現場で活用できるよう R C P C を実施。
 - ・ 実習では患者側の気持ちも体感してもらい、自身の行動を見直してもらう。
4. **今年度における教育方法改善の取り組み**
 - ・ 医動物学実習では内容について、次回の冒頭に小テストを実施した。実習内容を自宅で時間外学習として実施させた。
5. **今年度の学生による授業評価より**
 - ・ 小テストの正答を示してほしい、レポートの解説をもっと丁寧にしてほしいなどの意見があった。
 - ・ 医動物学実習では古い OHC しかなく、学生から見づらいと多くの意見が寄せられた。
6. **今年度の成果**
 - ・ 実習レポートについては、次回返却できるようチェックし、解説を行った。
 - ・ 学生に実習内容を発表させることで、学生自身の理解も深まった。
7. **今年度の課題と次年度に向けた改善策**
 - ・ 5 で挙げた学生からの意見について対策を行う。ハード面については学科予算を獲得し、新しい OHC、プロジェクターを購入予定である。
 - ・ 小テストはマナバで実施しており、正答は各自で確認できる旨を周知させる。
 - ・ レポートの解説については、返却時に多く時間をとって解説を行う。
8. **社会的活動等**
 - ・ 第 17 回臨床検査教育学会プログラム委員
 - ・ 臨床検査教育学会評議員
9. **根拠資料（資料名のみ）**
 - ・ 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	溝越 祐志	所属学科	医療検査学科	職名	講師
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	入試委員、教務委員、学内実習安全委員、ライフサイエンス研究センター				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
免疫検査学実習	M	3	前期	必修	実習	対面	80
検査入門実習	M	1	前期	必修	実習	対面	87
遺伝子・染色体検査学実習	M	3	前期	必修	実習	対面	82
○臨床検査総論	N	2	前期	選択	講義	対面	82
○公衆衛生学	R	1	後期	必修	講義	対面	86
○基礎分析実習	M	1	後期	必修	実習	対面	87
臨床検査学演習	M	3	後期	必修	演習	対面	81
文献講読	M	3	後期	選択	講義	対面	26
分子感染制御学演習	M	3	後期	選択	演習	対面	5
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	講義	対面	73
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	77
いのちと共生	基盤	1	前期	選択	講義	遠隔	417
まなぶる・ときわびとII	基盤	1	後期	必修	演習	対面	408
公衆衛生学実習	M	1	後期	必修	実習	対面	87
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	71

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 入学前課題の出題と添削

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

1年生には考察力や応用力よりも、基礎知識や基本技術、レポートの書き方など基礎項目を修得することに対するウェイトをあげ、基礎土台の構築を助けることを重視する。

一方で、高学年に対しては、レポートでの考察力はもちろんのこと、発展形の授業では授業内容を固定化せず、最新の研究を模して授業を展開することで、医療の発展に寄与できる問題解決力、自己研鑽

力を身につけることも意識して学生を養成している。卒業研究や分子感染制御学演習では特に、自己研鑽に繋がる「知」に対する好奇心、欲求の大切さについて、学生に教授したいと考えている。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・実習科目では、予習として実技操作の動画や説明動画を作成し、行うことをあらかじめイメージさせるようにした。
- ・講義科目では、学生が継続的に勉学を行うことおよび、定期テスト時の勉強負担を減らす目的で毎回講義の最初に小テストを設定した。
- ・演習科目では実験結果をまとめ発表させる場を設けた。その際に、学生だけでなく教員からも質問を行うことで、学生に学術発表に似た雰囲気を経験する場を設けた。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・小テストを実施する科目では、解答を manaba に入力させる際に、問題を見ながら自分の解答を入力のできるようにしていたため、今年度は manaba 入力時には解答以外は問題を回収する方法をとった。
- ・昨年の授業評価に対する対策をいくつか改善した。以下列挙する。
 - レポートループリックが分かりにくかった。 → ループリックの形式を、要素と評価に分けるようにし、またループリックのみではなく、実験の考察内容も、なるべく一つの結果に対して一つの因子のみの評価となるように設計し、考察しやすいように努めた。
 - 実習科目において時間が超過もしくは短いときがあった。 → 実習内容の簡素化・追加を行い、実習内容の設計をやり直した
 - 実験器具、試薬が足りず、実習の終了が遅くなった。 → 実験器具をいくつか買い足した。ただ、本年度も同じ意見が1つ出ていたため、器具の補充と並行して、実習内容の更なる見直しを図っていく。
 - 実習室が狭く、実習がやりづらかった。 → 授業の関係で本年度も同じ実習室で行ったが、実習前の説明を隣の講義室で行うことで、説明スライドが見にくいという問題は改善した。また、実習室が狭くデモがしにくいいため、あらかじめ実習内容を動画で manaba で実施し、予習させる方法に転換した。予習させることで、学生に予習の習慣化および内容を把握したうえでの実習参加の癖をつけさせる一助になっていると感じている。

5. 今年度の学生による授業評価より

「基礎分析実習」の科目においては、この授業でよいと思った点は「予習事項が明記されていたこと、ループリックに評価基準があったこと、レポートの評価が丁寧だったこと、質問に丁寧に対応してもらえたことなど」、「手技を見てくださるときに細かい部分でも改善した方が良いことを教えてくださったのがよかった。」の意見がでた。特にループリックにおいては昨年度で見にくいという意見があったため、良かった点にループリックの記載があった点は評価できると感じている。一方で、教室、教育設備

などで改善すべき点として「実験器具が足りず、順番に使うための待ち時間があったこと。」指摘があったため、実験器具の拡充を検討したい。

「公衆衛生学」の科目においては、良かった点として「スライドが見やすかった」「国試に特化した内容だったので無駄がなかった点」「毎回小テストを行うことで、復習する習慣がついた、授業を受ける気になる」などの意見があった。特に小テストに関しては、予想と反して否定的なコメントはなく、好意的に認識している学生が多いことが考えられるため、今後も継続して行っていきたい。否定的な意見としては、「教科書の線引きが少しはやいです。」「授業の進行速度が少し速くて、ついていけないときがありました。」という意見があり、授業の進行速度について意識が必要と感じた。

「臨床検査総論」では全体的に「わかりやすかった」というコメントがよせられ、否定的なコメントはなかった。このことをうけ、次年度も今年度と概ね同じ内容で実施する予定である。

6. 今年度の成果

- ・今年度の大きな成果としては、実習科目に予習を導入することで、学生の理解の促進と時間の有効活用を図ったことである。学生のコメントからも予習については肯定的な意見が多くよせられている。
- ・昨年の改善点を参考に、実習内容を抜本的に見直したことにより、昨年寄せられたような実習内容に対する改善コメントがなくなった。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

各授業評価のコメントに対する改善策は「**今年度の学生による授業評価より**」の項目に記載している。以下、本年度私自身が強く感じた改善点について記す。

学生からのコメントはなかったが、レポート課題の出し方については課題が認められた。レポートは記入内容もある程度、学生自身で考えるものであるという考えを私自身持っているが、学生のレベルの乖離が進んでいる現状では、レポートテーマ（課題）をより具体的に絞らないと、学習レベルが低い層ではかえって内容が身につかないという問題を抱えている。上位層の考える力を奪うことにもつながるが、次年度はレポートの設問を、より誘導させるものに変える必要があると感じている。

8. 社会的活動等

- ・地域公開講座において「現在の病気をヒトと細菌の共生から考える」をテーマに講演を行った。
- ・高校生への臨床検査技師職種の紹介による、臨床検査啓蒙活動を3回実施した。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	佐野 太亮	所属学科	医療検査学科	職名	助教
クラス担任		クラブ顧問	病理部（顧問）		
委嘱委員・職務	国試対策委員、就職委員、卒業研究委員、細胞検査士養成課程委員、地域交流センター、LS 細胞病理研究ユニット				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
まなぶる▶ときわびとⅠ	基盤	1	前期	必修	講義	対面	405
まなぶる▶ときわびとⅡ	基盤	1	後期	必修	講義	対面	408
検査入門実習	M	1	前期	必修	実習	対面	87
○情報基礎	M	1	前期	必修	演習	対面	87
組織学実習	M	2	前期	必修	実習	対面	96
病理検査学	M	2	後期	必修	講義	対面	104
病理検査学実習Ⅰ	M	2	後期	必修	実習	対面	93
○臨床病理検査学実習ⅡA	M	3	前期	必修	実習	対面	45
○臨床病理検査学実習ⅡB	M	3	前期	必修	実習	対面	38
細胞検査学演習	M	3	後期	選択	演習	対面	19
臨床検査学演習	M	3	後期	必修	演習	対面	85
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	77
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	71
医学検査サプリメント演習Ⅰ	M	3	後期	選択	演習	対面	82
医学検査サプリメント演習Ⅱ	M	4	前期	選択	演習	対面	71
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	講義	対面	77
細胞検査学演習Ⅰ	M	4	前期	選択必修	講義	対面	14
細胞検査学演習Ⅱ	M	4	前期	選択必修	講義	対面	14

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策
- ・ 就活履歴書添削と小論文の添削指導
- ・ 細胞検査士養成課程の学生へのスクリーニング及び同定のレクチャー

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目では、主体的に学ぶ姿勢を持ち積極的に授業へ参加する学生を養成したい。そのために、専門基礎科目では、疑問を持ったときに自ら考え、調べる能力の基礎を構築する必要がある。

教員の役割としては、ただ単に分かりやすい授業を目指すというだけではなく、学生が疑問を持ち、興味がそそられる要素も取り入れる必要があると考える。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 講義では配布プリントを穴埋め形式にし、学生に考えながら授業を受けてもらえるようにした。
- ・ 実習では、学生が事前に講義動画を視聴させることで、実習に対する予習を行うように工夫した。また授業開始時には小テストを行い、実習に対する知識を確認し、ただ単に手を動かすだけの実習を行うのではなく、自ら考えながら実習が行えるように工夫した。
- ・ 演習科目では、授業で学んだことを発表する時間を設け、自分が学んだことまたは疑問に思ったことを調べるように工夫した。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 前年度の学生による授業評価では、実習で時間内に終わらないとの意見が見られた。そのため、今年度は、実習の間に説明を加えるなど、実習時間内に終わるように努めた。
- ・ 授業前に行っている小テストでは、その授業科目だけではなく、基礎科目の問題を取り入れ、復習できるように改善した。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 「臨床病理検査学実習Ⅱ」の科目では、実習前の講義の時間や講義のタイミングを実習内容ごとに工夫した結果、学生からは「講義が簡潔で、すぐに実習に取り掛かることができたのがよかった。講義は簡潔だったが、とても分かりやすく、満足できる内容であったと思う。」という意見が見られた。
- ・ 「情報基礎」の科目では、「パソコンの機種が違う場合も想定して、説明をしてくれた」「先生が課題のやり方を教えてくれたので、分かりやすく、授業外でも丁寧に教えてくれた」等の意見が見られた一方で、「課題の説明が少し難しいところがあった」という意見もあった。この点については、改善が必要であると考える。

6. 今年度の成果

- ・ 病理検査学実習Ⅱについては主担当が変更となったが、授業評価では昨年度から評価が落ちることがなかった。また、その他の科目についても学科平均よりも高い評価を得た。
- ・ 細胞検査士認定資格試験対策として、9 カ月にわたり指導した結果、一次試験、二次試験ともに100%の合格率となった。

- ・ 国試対策では補習等、成績下位層への対策を行った結果、合格率が 91.9%と 9 割を超える合格率となった。
7. **今年度の課題と次年度に向けた改善策**
- ・ 臨床病理検査学実習Ⅱの設計上、A クラスが試薬の準備、B クラスが試薬の片付けを行う事になっていたため、B クラスの学生からは役割を入れ替えられないかと要望があった。次年度は A クラスと B クラスが交互に実習を行うようになるため、解決できる見込みである。
8. **社会的活動等**
- ・ 「子宮の日（子宮頸がん検診啓発活動）」での配布活動や学生発表の引率
 - ・ 「健康ふれあい健康フェスタ」での学生サポート
9. **根拠資料（資料名のみ）**
- ・ シラバス
 - ・ 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	梶山 和樹	所属学科	医療検査学科	職名	助教
クラス担任		クラブ顧問	病理部副顧問		
委嘱委員・職務	国試対策委員会、入試委員会、学生委員会 学内実習安全委員会				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
まなぶる▶ときわびとⅠ	基盤	1	前期	必修	講義	対面	405
まなぶる▶ときわびとⅡ	基盤	1	後期	必修	講義	対面	408
検査入門実習	M	1	前期	必修	実習	対面	87
組織学実習	M	2	前期	必修	実習	対面	96
病理検査学	M	2	後期	必修	講義	対面	104
病理検査学実習Ⅰ	M	2	後期	必修	実習	対面	93
臨床病理検査学実習ⅡA	M	3	前期	必修	実習	対面	45
臨床病理検査学実習ⅡB	M	3	前期	必修	実習	対面	38
細胞検査学演習	M	3	後期	選択	演習	対面	19
臨床検査学演習	M	3	後期	必修	演習	対面	85
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	77
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	71
医学検査サプリメント演習Ⅰ	M	3	後期	選択	演習	対面	82
医学検査サプリメント演習Ⅱ	M	4	前期	選択	演習	対面	71
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	講義	対面	77
細胞検査学演習Ⅰ	M	4	前期	選択必修	講義	対面	14
細胞検査学演習Ⅱ	M	4	前期	選択必修	講義	対面	14

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 入学前教育におけるファシリテーター
- ・ 細胞検査士養成課程の学生へのスクリーニング及び同定のレクチャー

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

大学教育では学生が能動的に授業に参加する姿勢が重要であり、高等学校までに行ってきた授業と違

う点であると考え。また、このような能動的な教育を通して、社会に出た後も自ら進んで学び、向上できるような学生の育成に尽力する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 講義においては一つのまとまりごとに問題もしくは穴埋めをやらせ、受け身だけの講義にならないように心がけます。また、問題・穴埋めでわからないところがあった場合は、周りと相談するなど、学生自身で解決できるように促す。
- ・ また、実習においては各回で行う検査法に合う検体及び試薬を学生に選択させ実習を行ってもらう。実習内で出た疑問は講義と同様にグループ内もしくはグループ間で相談しそれでもわからない場合は教員に質問するように促す。
- ・ さらに、細胞検査士養成課程においてはタブレットの貸し出しを行っており、ICT活用が容易である。次年度はNotionの共有機能を利用し、数多くの専門書に散らばった知識を集約したページを学生と共有し、試験勉強に役立てる予定である。この共有ページは学生からのコメントを教員が反映することで、学生も編集可能となっており、先述した能動的学習の一面も兼ね備えている。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 初年度により、大きな教育方法改善の取り組みはなかった。しかし、今年度の教育方法で意識したことは以下である。
 - 質問内容が参考書に記載されている場合はまずそちらを調べるように促した。
 - 原理の理解もしくは顕微鏡での観察に苦慮している場合は、考え方を教え、学生自ら答えにたどり着けるように促した。

5. 今年度の学生による授業評価より

「臨床病理検査学実習Ⅱ」では毎回の授業初めに前回の内容の小テストを実施していた。学生からは「授業の復習ができた」「知識がつけられた」などの声があった。今後もこの取り組みは続けていきたい。しかし一方で、「実習中にしたスケッチが合っているかわからない」との声もあり、より丁寧なコメントを記載する必要があると考える。

6. 今年度の成果

細胞検査士養成課程で細胞所見の見方、使用するべき参考書を指導した結果、細胞検査士認定試験にて一次試験・二次試験共に全員合格することが出来た。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

実習では「スケッチが合っているかわからない」との声があった。次年度はより明確なコメントをするとともに、学生全員が供覧できる模範解答となる資料を用意するなどの工夫を行う。

8. 社会的活動等

「2023年度公開講座」にて、病理検査業務をテーマに講演を行った。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	松田 正文	所属学科	診療放射線学科	職名	教授
クラス担任		クラブ顧問			
委嘱委員・職務	診療放射線学科 学科長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講者 数
○診療放射線技術学総合演習 I	R	4	前期	必修	演習	対面	67
腫瘍学	R	2	前期	必修	講義	対面	93
生理学	R	2-4	前期	必修	講義	対面	57
医学概論	R	1	前期	必修	講義	対面	86
呼吸・循環機能検査学	M	3	前期	必修	講義	対面	89
臨床病態学特論	M	3	後期	選択	講義	対面	6
大学道場 mini ゼミ B	基盤	1	後期	選択	演習	対面	5
○卒業研究	R	4	通年	必修	演習	対面	72
○診療放射線技術学総合演習	R	4	後期	必修	演習	対面	66
○臨床基礎実習	R	3	後期	必修	実習	対面	68
生理学	R	1	後期	必修	講義	対面	85
臨床技術入門	R	1	後期	必修	講義	対面	85
IPW 論	R	3	後期	必修	講義	対面	78

(2)準正課、正課外の教育活動

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

優れた診療放射線技師を育成する、これを基本としている。それに加えて、教養を重視している。さらに、教養の根底にあるのは日本語であると考え、日本語に関する授業を担当していないが、日本語に関する能力の重要性を述べている。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- 講義等において、過度にイラストレーションに頼ることなく、できるだけ文字情報を中心にして授業を行うようにし、試験問題も所謂記述式で日本語としての評価も加えている。その中で注意しているのは、具体的に例を述べれば、自動詞・他動詞の使い分け、助詞の適切使用などである。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

残念ながら、上に述べたことは学生には不評であった。

5. 今年度の学生による授業評価より

診療放射線技術学総合演習など、学科長という立場から科目責任者になった科目については言及しない。

呼吸・循環機能検査学をはじめ、非常に学生による評価が低いものについては授業方法に一層の工夫が必要である。

6. 今年度の成果

授業に関して：少人数の授業では当方の意図がかなり伝わっているので、今後の生活の中ではこれを参考に情報伝達に一層工夫をこらしてゆこうと思う。

研究に関して：ほとんど実績は上がらなかった。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

8. 社会的活動等

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業において配布した資料・使用教科書
- ・ 試験問題ならびに学生による解答

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	對間 博之	所属学科	診療放射線学科	職名	教授
クラス担任	2年生 学年主任	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	診療放射線学科 学科長補佐、研究倫理委員会 委員長、 教務委員会 委員、ときわ教育推進機構 委員、放射線安全委員会 委員、 就職委員会 委員、臨地実習委員会 委員、保護者のためのオープンキャンパス 委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
放射線科学概論	R	1	前期	必須	講義	対面	86
診療放射線技術学概論	R	1	前期	必修	講義	対面	85
人体のふしぎ	基盤	1	前期	選択	講義	対面	189
○放射化学 I	R	1	後期	必修	講義	対面	85
○核医学検査技術学 I	R	2	前期	必修	講義	対面	93
○核医学検査技術学 II	R	2	後期	必修	講義	対面	93
診療画像技術学実習	R	3	前期	必修	実習	対面	72
○核医学検査機器学	R	3	前期	必修	講義	対面	88
○核医学機能解析学	R	3	前期	必修	講義	対面	88
○放射線安全管理学	R	3	前期	必修	講義	対面	82
○放射線安全管理学実習	R	3	後期	必修	実習	対面	76
関係法規	R	3	前期	必修	講義	対面	74
医療安全管理学	R	3	後期	必修	講義	対面	72
臨床実習	R	3	後期	必修	実習	対面	72
臨床基礎実習	R	3	後期	必修	実習	対面	68
○ I P W（多職種連携）論	R	3	後期	必修	講義	対面	76
先進医学・技術学	R	4	前期	選択	講義	対面	49
医療文献読解	R	4	前期	必修	講義	対面	72
診療放射線技術学総合演習 I	R	4	前期	選択	演習	対面	67
診療放射線技術学総合演習 II	R	4	後期	必修	演習	対面	66
卒業研究	R	4	通年	必修	演習	対面	72

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策に関する個別指導
- ・ 臨床実習病院への訪問
- ・ 大学院進学希望者への指導
- ・ 卒業研究指導学生（9名）に対する研究発表指導
- ・ 就職活動の支援（志願理由書等の添削、面接指導）
- ・ 入学前課題の立案、調整

- ・ 新カリキュラムの策定
- ・ 休学学生のフォローならびに健康管理センター等とのカンファレンス
- ・ 診療放射線技師教育施設協議会との協議
- ・ 職能団体との協議

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

医療専門職においては大学の4年間だけではなく、そのキャリアにおいて常に教育が必要となる。大学における教育では、医療人の基礎となる知識、技術、態度を修得させる。それとともに将来、自らの力で成長できる素地と発想力を持った学生を育てる。そのため学部教育では、教員から教授すべきものと自ら思考するものの区分とバランスを保つことが重要である。さらに、学生個々の特性とその年次によっては、両者のバランスを変化させる必要がある。これらを考慮した教育を実施するために、学生の状況を把握するための洞察力と個々に理解度に合わせた教育手法のバリエーションを持って臨みたい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 基礎知識の修得のために事前資料における予習を重視し、反転授業を積極的に組み入れる。
- ・ 講義中に近隣学生と意見交換や自ら考える時間を設け、能動的な学修を促す。
- ・ 一部講義では成績等を考慮したチームを構築し、チームメンバーと協働する力を養う。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

国家試験の出題基準の変更に備え、講義内容を変更した。また、反転授業を行う上で効果的な学修ができるように講義資料の再構築を行った。さらに、核医学検査においては実機がないため、実機の操作を経験できるように、シミュレーションソフトの活用を試み、新カリキュラムにも対応できるように演習内容を検討してきた。

5. 今年度の学生による授業評価より

主要担当科目においては、授業ごとに学生からのフィードバックを実施し、授業内での不明箇所や、誤って理解している内容について授業ごとに把握し、次の授業の冒頭にて訂正や追加の説明をした。また、フィードバックには自由記載欄もあり、その中に記載されている要望についてもリアルタイムに対応することで、科目終了後の授業評価として顕在化する大きな問題はなかった。ただし、マイクの使用忘れなどの指摘はあったので注意したい。また、講義資料をデジタルデータで提供しているが、印刷物を配布してほしいとの要望もあった。しかしながら、iPad等で閲覧する学生も多くなっており、印刷資料が無駄になるので、ペーパーレスの対応を学生に理解してもらうよう説明したい。

6. 今年度の成果

カリキュラム全体については、完成年度を迎え第1期のカリキュラムについての見直しを行った。特に各領域にコースコーディネータを配置して基礎科目から専門基礎科目、専門基礎科目から専門科目への接続性の強化を図った。自身の担当科目のうち、核医学検査技術など国家試験の出題比率の高い教科については要点をまとめた学修資料を作成し配布することで、国家試験問題の得点率向上に寄与することができた。また、卒業研究では成果として兵庫県放射線技師会に2演題の学術発表を行った。さらに、大学院進学希望に対し指導を実施し、希望者2名すべてを大学院に進学させることができた。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

近年、学生の授業に対する集中力の低下が問題となっており、いくつかの大学にて講義時間の短縮が進められている。具体的には1限を60分や75分にする事で集中力の持続を考慮した講義としている。本学では1限が90分であるがその間、集中力を維持することが困難である学生が見受けられるため、40分×2クールという発想にて、授業の進め方の変更を試みる。また、2クールの間には、実験的な作業など一方的な講義と違う内容をあえて組み込み、知識の定着と同時に、集中力のリフレッシュすることで、教育効果の向上を図る。

8. 社会的活動等

学術団体等で以下の役員、委員等を務めた。

- ・ 日本核医学専門技師認定機構 理事長
- ・ アジア核医学技術学会 監事
- ・ The Asian Society of Nuclear Medicine Technology steering committee member
- ・ 日本放射線技術学会
 - 代議員
 - 教育委員会 副委員長
 - 教育委員会 アジア放射線教育支援班 班員
 - 放射線防護委員会 委員
 - 第79回日本放射線技術学会総会学術大会 実行委員
- ・ 日本核医学技術学会
 - 評議員
 - 理事
 - 表彰選考小委員会 委員長
 - 表彰データベース作成小委員会 委員長
 - ホームページ管理小委員会 委員長
- ・ 日本核医学会
 - 日中核医学交流委員会 委員
 - 経営戦略・将来計画委員会 委員

第 23 回日本核医学会春季大会 講師

・ その他

医療技術等国際展開推進事業

ラオスにおける放射線医療機器の品質・安全管理技術の向上を目的とした技術研修 講師

厚生労働科学研究費補助金 地域医療基盤開発推進研究事業

「放射線診療の発展に対応する放射線防護の基準策定のための研究」 研究協力者

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における講義資料等
- ・ 試験問題
- ・ 診療放射線学科 新カリキュラム申請書類

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	今井 方丈	所属学科	診療放射線学科	職名	教授
クラス担任	4年 主任 (A・B)	クラブ顧問			
委嘱委員・職務	入試委員会 委員、入試委員会 合否判定部会 委員、R 科就職委員会 委員 長、 R 科国試対策委員会 委員、R 科臨地実習委員会 委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
大学道場 mini-ゼミ A	基盤	1	前期	選択	実習	対面	13
臨床検査学演習	M	3	後期	必修	演習	対面	81
○臨床技術入門	R	1	後期	必修	演習	対面	85
○画像診断学 I (頭部、頸部、脊髄)	R	3	前期	必修	講義	対面	74
○画像診断学 II (胸部、心大血管、消化器等)	R	3	前期	必修	講義	対面	73
○医用画像工学	R	2	後期	必修	講義	対面	91
○医用画像工学実習	R	3	前期	必修	実習 座学	対面	73
医療安全管理学	R	3	前期	必修	講義	対面	73
医療安全管理学実習	R	3	後期	必修	実習	対面	72
臨床実習	R	3	後期	必修	実習	対面	76
臨床基礎実習	R	3	後期	必修	演習	対面	76
○災害医療学	R	4	前期	選択	講義	対面	22
診療放射線技術学総合演習 I	R	4	前期	選択	演習	対面	66

診療放射線技術学総合演習Ⅱ	R	4	後期	必修	演習	対面	66
卒業研究	R	4	前 後 期	必修	演習	対面	8

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 死亡時画像診断（講師依頼・授業資料作成・出欠管理・試験問題作成・試験監督・採点）
- ・ 放射線写真学（出欠管理・授業補助・試験監督）
- ・ Early Exposure 企画・交渉・引率（兵庫県立災害医療センター，診療放射線学科3年生全員）
- ・ Early Exposure 企画・交渉・引率（兵庫県立災害医療センター，診療放射線学科1年生全員）
- ・ 国家試験対策（担当学生への学習方針指導）
- ・ 国家試験対策（補習授業の実施）
- ・ 国家試験模擬試験問題作成（医用画像情報学および画像工学，10回分）
- ・ 臨床実習先に提出する履歴書等の添削
- ・ 臨床実習施設への事前訪問（神大病院，県立尼崎 GMC，県立はりま姫路 GMC 等々8施設）
- ・ 臨床実習施設への訪問、巡回指導 [24名担当]（上述の8施設）
- ・ 臨床実習ノート（報告書）のチェックと報告の聞き取り [24名担当]（3クール末）
- ・ 就職に関する履歴書や小論文の添削
- ・ 高校への出張講義
- ・ 令和7年国家試験受験者対象 厚生労働省告示研修受験準備

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 国家試験を目標にした目先の教育ではなく，基礎知識・基礎技術をしっかり備え，変革著しい放射線診療に対応出来る診療放射線技師を目指せる人材を育てたい。
- ・ また，自身で問題点を認識，抽出し，その解決に向けて考え，行動できる人材に育てたい。
- ・ 一方，医療人として社会に貢献する人間に相応しい人間力豊かな人材に育てたい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 教員がまとめた資料は提供せず，自分で学習し，自分でまとめるよう指導している。但し，限られた授業時間を有効に利用するため，スライド資料を提供し，書き写すだけの時間を減らし，その時間を見聞きに充てている。
- ・ 基礎に関する補習を実施。
- ・ 質問に来る学生には，即，答を示すのではなく，出来るだけ自分で解決でき，同様の問題には今後自ら対応できるように，少々の時間を掛けようとも，順に解きほどこせるようにしている。
- ・ 自身で振り返りが出来るように，期末試験の問題と採点後の回答用紙を返却することになっている。小テストも同様である。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

今年度は、毎時間の小テストに manaba 利用(自動採点)を試みた（自由席になったため）。
学生には、結果が即伝わるのでよかった。
その他の講義や実習は例年通りであった。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 科目によっては理解しづらいものもあります。まだまだ多くの反省点や学生からの改善要望も頂いており、出来るだけ今後活かせたいと思っています。

6. 今年度の成果

- ・ 例年と変わらないように思います。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 将来に備えての基礎固めとして、担当科目関連の基礎部分の補習を増やす。

8. 社会的活動等

- ・ 兵庫県教育委員会 兵庫県公立学校職員(会計年度任用職員) 兵庫県立福崎高等学校（特別非常勤講師）
- ・ 全国診療放射線技師教育施設協議会 連絡代表者
- ・ 日本放射線技術学会 学術推進員
- ・ FAR 会 [Fellowship for Advancement of Radiology (放射線医学の進展のための専門家集団の会)]
世話人
- ・ 関西 CT 技術シンポジウム 顧問

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	谷口英明	所属学科	診療放射線学科	職名	特任教授
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	広報委員会・委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講者 数
○コミュニケーション論	M/N	M1 N2	前期	選択	講義	対面	58
○コミュニケーション論	R	1	前期	必修	講義	対面	86
○コミュニケーション論	O	1	前期	必修	講義	対面	67
○芸術文化論	N/E O/R	1.2.3.4	前期	選択	講義	対面	49
○医療コミュニケーション	R	1	後期	選択	演習	対面	62

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 入学前課題の出題とレポートへのフィードバック

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

どの分野の世界でも社会に出たらコミュニケーション能力が重要になる。基盤教育では対人コミュニケーションがしっかりと実践できる人材を育てること。演習科目では具体的にチームでのコミュニケーション能力を養う訓練を実行する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ コミュニケーション論では少人数グループ単位で着席し、毎回グループメンバーを変えることにより、多くの人間と交流すること。グループディスカッションや発表することにより、人前でのスピーチ能力も養成する。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 講義科目のコミュニケーション論については定期試験を実施せず、授業内での発表やレポートや授業態度などを総合的に評価することとした。
- ・ 90分の講義では、どうしても学生の集中力がなくなる時間が出てくるため、そのタイミングで気分転換をする。具体的には「頭の体操」というクイズをグループで考える、授業内容とは全く別の作業をすることで集中力が戻ってきた。
- ・ 演習科目の医療コミュニケーションでは毎回、グループでのディスカッションやグループで考え

る作業を多く取り入れ、チームでの行動を重視する意識を高めた。

5. 今年度の学生による授業評価より

コミュニケーション論では「毎回、席やグループメンバーが変わり、話したことのない人たちと多くの交流ができて楽しかった」というコメントを多数いただいた。席の位置やグループ構成も大切であることが実感させられた。

「とても聞きやすい講義である」という意見も多かった。教員の話し方は大変重要な要素だと思う。

できるだけ、滑舌良く、間を生かし、張りのある声を意識することで学生の理解力に影響を与えたいと考える。

6. 今年度の成果

これまでより、プレゼンテーションについて詳しく講義と実践を行った結果、学生の発表するスキルが向上した。経験を重ねることにより、学生自身からスキルが向上したという報告が増えた。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

R科とO科のコミュニケーション論は必修科目で、A・Bクラス別に講義を行っているが、学生からクラス合同のほうが、より多くの人と交流ができるため合同での授業が良いとの意見がこれまでもあった。時間割と人数の関係で実現しなかったが、2024年度から人数の少ないO科については合同クラスでの授業をすることになった。

8. 社会的活動等

スポーツ分野の著名人（真弓明信氏、福本豊氏）と各地で講演活動。

サンテレビ アナウンススクールにおいて定期的に学生を指導。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	山崎麻由美	所属学科	診療放射線学科	職名	教授
クラス担任	2年生Bクラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	入試委員会（副委員長）、ときわ教育推進委員会、図書委員会				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
○英語コミュニケーションⅠ	基盤	1	前期	必修	演習	対面	253
○医療英語	M	2	前期	必修	演習	対面	96
放射線技術学総合演習Ⅰ	R	4	前期	選択	演習	対面	67
○英語コミュニケーションⅡ	基盤	1	後期	必修	演習	対面	154
○医療英語	R	2	後期	必修	演習	対面	90
○大学道場 miniゼミB	基盤	1	後期	選択	演習	対面	9
臨床基礎実習	R	3	後期	必修	実習	対面	68
放射線技術学総合演習Ⅱ	R	4	後期	必修	演習	対面	66
卒業研究	R	4	通年	必修	演習	対面	2

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・入学前課題の出題と添削
- ・大学院進学希望者への個別指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

卒業の単位を取るために授業を受けるのではなく、将来を見据えて自分なりの目的をもって取り組める学生を育てたい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・英語が苦手な学生が多いので、まずは苦手意識を取り除くことを心掛けた。その上で、全員が授業に参加できるように、授業前の課題や授業後の課題に取り組むように工夫をした。
- ・苦手意識を取り除く方法として、授業時間内ではグループワークで英語のプレゼンテーションに取り組ませた。
- ・英語が苦手な学生が自主的に取り組むことができるように慈善に課題をこなし、提出すること徹底した。そのためにmanabaを多く利用した。①「小テスト」を用いて毎回課題をだした ②「レポート」から授業時間外に図書館でgraded readersを2冊読んでレポートを書くという課題を出した ③「コースコンテンツ」に予習用の教材をアップして、授業前に目を通さなければ、授業の理解が進まないようにし、授業外での学習時間をもつようにした

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・どの授業においても、自己学習時間が少ないのが課題であり、改善したい点である。取り組みとしては、事前学習をチェックすることを実施しているが、学生個人の差が大きい
- ・英語教育系の学会や研究会に出席して情報収集に努めた。特に生成 AI を用いた英語の授業に関する研究会は有用であり、今後授業に取り入れることを検討している。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・「レポート」から授業時間外に図書館で graded readers を 2 冊読んでレポートを書くという課題を出した。学生の感想として「英語の本を読んだことがなかったので、不安だったが、達成感があった」「今度はいっと難しい本に挑戦したい」という前向きなコメントが多数あった。
- ・manaba の課題が簡単すぎるという指摘があった。機能上の限界もあるが、できるだけ事前事後の学習に役立つような課題を出題していく。

6. 今年度の成果

- ・進学希望者で英語の指導をした学生の 3 名が全員国立大学への合格を果たした。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・正課：授業外での学習時間を増やすことが課題である。個別に指導することには限界があるので、グループワークを利用して、学生同士で課題の評価までする仕組みを考えたい。
- ・準正課：大学院進学希望の学生の指導だけでなく、海外研修へ参加する学生や検定試験を受ける学生の指導も積極的に行いたい。
- ・正課外：入学前課題の効果検証が行われていなかったため、アンケートの実施や入学後の成績などを見ながら、次年度の課題につなげていく。学科の教員の意見も聞いて改善につなげていく。

8. 社会的活動等

- ・公開講座での講演：「ナイチンゲールの物語—明治から今日まで」令和 5 年 8 月 19 日 於 神戸常盤大学)
- ・学会での司会：日本英文学会関西支部大会 令和 5 年 12 月 9 日 於 神戸大学

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布資料
- ・ テスト問題

- ・ 学術集会プログラム
- ・ 公開講座資料

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	高久圭二	所属学科	診療放射線学科	職名	教授
クラス担任	1年学年担任	クラブ顧問	天文同好会(主)、ベクレル同好会(主)、手話点字同好会(主)		
委嘱委員・職務	放射線安全委員会委員長、紀要委員会、教育研究センター、国試対策委員会、学研委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○放射線科学概論	R	1	前期	必須	講義	対面	86
○物理学	M	1	前期	選択 必須	講義	対面	87
○暮らしの中の物理学	基盤	1	前期	選択	講義	対面	40
○大学道場 miniゼミ A	基盤	1	前期	選択	演習	対面	15
○放射線物理学 II	R	2	前期	必須	講義	対面	88
○放射線計測学	R	2	前期	必須	講義	対面	88
関係法規	R	3	前期	必須	講義	対面	74
○大学道場 miniゼミ B	基盤	1	後期	選択	演習	対面	10
○放射線物理学 I	R	1	後期	必須	講義	対面	85
○放射線計測学実習	R	2	後期	必須	実習	対面	86
放射線安全管理学	R	3	前期	必須	講義	対面	82
放射線安全管理学実習	R	3	後期	必須	実習	対面	76
メディカルデータサイエンス	R	4	前期	選択	講義	対面	6
科学技術論	基盤	1	後期	選択	講義	対面	84
臨床基礎実習	R	3	後期	必須	実習	対面	68
卒業研究	R	4	通年	必須	演習	対面	72
診療放射線技術学総合演習 I	R	4	前期	選択	講義	対面	67
診療放射線技術学総合演習 II	R	4	後期	必須	講義	対面	66

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策
- ・ 入学前課題の出題と回答
- ・ 放射線取扱主任者試験対策講座
- ・ 福島県浜通り研修

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目では、診療放射線技師を養成するために、放射線物理学や放射線計測学の知識の習得とと

もに、概念をイメージでき、将来患者さんに説明できる実践力と職業倫理をもった学生を養成する。特に、実習科目では、科学的実験事実に基づいたデータから、真実を導き出すプロセスの経験をしてもらい、さらに疑問を持つ能力を育成したい。

基盤科目では、実験を経験してもらうことにより、科学の楽しさと疑問を持つ能力を理念とする。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 百聞は一見に如かずをモットーとし、実験を取り入れる授業や、スライドにアニメーションをふんだんに取り入れた。また、疑問を持つ能力を養うために、授業後のレポート課題と感想質問のコーナーを設け、授業開始の最初に質問に答えるようにしている。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 前年度の学生による授業評価では、実験や、スライドにアニメーションを取り入れることの評価が高かった。そのため、今年度は、さらに実験やアニメーションを取り入れた授業に努めた。
- ・ 演習では、学生自ら問題を説明するようにし、概念を理解するようにした。
- ・ 授業時間外の学修では、manabaを活用しミニレポート提出を行い、学生からの質問や疑問に回答し、双方向のやり取りに努めた。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 今年度は、さらに実験やアニメーションを取り入れた授業に努めたので、物理に対する苦手意識がなくなった等の感想を得た。
- ・ 授業の最初に前回の復習と、質問に対する回答を行うことによって、理解が深まったとの感想を得た。

6. 今年度の成果

- ・ 実験やアニメーションを取り入れた授業に努めたので、物理に対する苦手意識がなくなった等の感想を得た。
- ・ 国試対策では、今年度が初めてであったが、学生に問題を解説させるなどを行うことによって、下位学生の模擬試験の平均点を上げることができた。
- ・ 放射線取扱主任者試験対策では、今年度も2年生2名が合格する快挙を達成した。3年生2名、4年生1名と昨年度より多くの合格者を輩出した。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 国試対策では、今年度が初めてであったが、4月から6月にかけての基礎作りが、しっかりしていな

かった学生が多くいたので、改善する方向で指導したい。

8. 社会的活動等

- ・神戸まつり長田フェスティバルにおいて天文同好会及びベクレル同好会の顧問として、出店
- ・福島県浜通り研修では大阪大学主催の活動に実行委員として活動した。
- ・天文同好会の合宿では、顧問として望遠鏡の扱い方の指導や Spring-8 の見学の同行を行った。
- ・大学祭では天文同好会の出し物のサポートを行った。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・シラバス（必須）
- ・学生による授業評価（必須）
- ・授業における学生の質問、感想資料等
- ・ホームページ、トピックボックス

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	南 利明	所属学科	診療放射線学科	職名	教授
クラス担任	3年		クラブ顧問		
委嘱委員・職務	学生委員会・委員長、臨地実習委員会・委員長、就職委員会・副委員長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
診療放射線技術学概論	R	1	前期	必須	講義	対面	
○放射線治療機器学	R	2	後期	必須	講義	対面	95
○放射線治療物理学	R	2	後期	必須	講義	対面	92
臨地実習	R	3	後期	必須	実習	対面	
○医療安全管理学	R	3	前期	必須	講義	対面	75
○放射線治療技術学 I	R	3	前期	必須	講義	対面	74
○放射線治療技術学 II	R	3	前期	必須	講義	対面	80
○放射線治療計測学	R	3	前期	必須	講義	対面	76
○医療文献読解	R	4	前期	必須	講義	対面	70
○医療安全管理学実習	R	3	後期	必修	実習	対面	72

IPW							
放射線計測学	R						
放射線安全管理学	R	3	前期	必須	講義	対面	
臨床基礎実習	R	3	後期	必須	実習	対面	

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策など
- ・ 採用試験対策でエントリーシート添削や面接指導
- ・ 入学前課題出題と添削
- ・ 高校進路説明会参加
- ・ 学生就職希望聞き取りと求人施設調査など
- ・ 臨床実習施設開拓、受け入れ調査など

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 患者中心の医療、チーム医療を考えることのできる医療技術者（社会人）の育成
- ・ 広い視野を持ち、向上心と興味に溢れ、設定した目標に向け行動できる大人（研究者）に！

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 学内における学習の集大成として国家試験合格は当然のことであるが、意見、考えの出力、と修正を学生自ら活発に行えることを目指した卒業研究にも重きをおいている。これに到達するための基礎的、専門的知識の習得には、可能な限りの実習や体験、アクティブラーニングを実行できる環境や資材機材の整備をこれからも継続していく必要がある。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

国家試験対策にて過去問題の解説のみならずこれまでの授業での学習内容を反復し知識の定着を目指した。授業に出席した学生には効果的であったが、授業内容の反復は新規性に欠ける点は否めないため魅力的に感じる学生は減少し出席率も当然低下。今後の課題も浮かび上がった。

5. 今年度の学生による授業評価より

特筆される評価項目はないが、評価が上がる工夫、対策は積極的に取り入れていきたい。

専門科目は難易度も高く学生評価は低い傾向にあるが、評価を上げるために難易度を下げると国試レベルに到達しない恐れもある。

6. 今年度の成果

今年度 1 期生が卒業し、今年度の成果がこれからの基準になる。評価数値はベースとして今後の

傾向把握、改善対策に活用していきたい。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

学生の学力低下傾向を感じる。臨床実習施設からの評価にも散見される。具体的な方策は今現在見出せていない。永遠の課題となるのかも。

8. 社会的活動等

特に無し。臨床実習委員長として臨床実習施設への訪問活動

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	関 雅幸	所属学科	診療放射線学科	職名	准教授
クラス担任	1年Aクラス	クラブ顧問	無		
委嘱委員・職務	教務委員会委員、個人情報保護委員会委員、危機管理（災害）委員会委員、自己点検・評価委員会委員、診療放射線学科国家試験対策委員会委員、情報インフラ整備ユニット委員長、診療放射線学科学生研究委員会委員長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
○情報科学概論	M	1	前期	必修	講義	対面	87
○医療工学	M	1	前期	必修	講義	対面	87
○医用工学Ⅰ（電気工学）	R	1	前期	必修	講義	対面	85
○医用工学実習	R	2	前期	必修	実習	対面	88
診療放射線技術学総合演習	R	4	前期	選択	演習	対面	67
○プログラミング入門	基盤	1	後期	選択	演習	対面	38
○医療工学実習	M	1	後期	必修	実習	対面	87
○ロボティクス演習	M	3	後期	選択	演習	対面	5
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	77
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	講義	対面	77
○医用工学Ⅱ（電子工学）	R	1	後期	必修	講義	対面	85
臨床基礎実習	R	3	後期	必修	実習	対面	68
診療放射線技術学総合演習Ⅱ	R	4	後期	必修	演習	対面	66

卒業研究	R	4	通年	必修	演習	対面	72
------	---	---	----	----	----	----	----

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 再試対策の補習
 - ・
2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）
論理的思考力を持ち、問題解決のための行動を自ら起こすことができる学生を育成したい。
3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）
- ・ 講義資料においては、
 1. 授業で使用するスライド内の重要な用語等を伏せ字にした状態のものをプリントし、授業中はただ聞くだけでなく、大事な用語を書き込む形にしている。
 2. プリントには余白が多くなるようにスライドの図を配置し、メモを取れるようにしている。
 3. プリントは可能な限り翌週以降の分を配布し、予習が行いやすいようにしている。
 4. CPU、RAM、抵抗、トランジスタ等授業の中で出てくるものの実物をできるだけ見せている。
 - ・ 実習では学生ができるだけ自分で問題点を解決できるように、考えている際はこちらから声をかけないようにして、グループ内で相談したり、他のグループの学生に聞きに行くことを見守るようにしている。
4. 今年度における教育方法改善の取り組み
- ・ 授業資料以外に診療放射線技術学総合演習Ⅱにおいて、計算力、思考力の強化・確認のため、基本的な文章題のプリントを配布した。
5. 今年度の学生による授業評価より
講義では“書き込むところがある”、“プリントの余白が大きい”など資料について評価されているコメントがあったが、“進み方が早い”、“内容が難しい”、“演習問題を解きたい”などのコメントもあった。実習系では“機器の使い方がよくわからず実習に進んだ”、“説明が長い”などのコメントがあった。
6. 今年度の成果
2月の診療放射線技師国家試験において、担当分野であった医用工学は平均正答率が、46.5%であった。60%には到達していないが、学生たちにとっては苦手分野であり、検討してくれたと考えている。
7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策
1. 医用工学では講義内容の説明に図が必要な場合があるが、すべてのものをスライドの中に入れてはならず、教科書の図を書画カメラに移しながら説明している。画面の切り替えに多少時間がかかり効率が悪くなっている。これは数年来の課題であるが、少しずつでも作成していきたい。

2. 講義科目では復習用のプリントを期末に配布しているが、項目が若干少ないものがある。来年度はこまめな見直しを早い段階で行っていき、項目を増やしたい。
3. 実習においてオシロスコープの使い方を早い段階で説明しているが、十分な環境を揃えるのが難しくきちんと理解できていないまま測定が行われている場合がある。来年度はできれば使い方を動画で作成し、何度も見返しができるようにしたい。

8. 社会的活動等

神戸常盤大学附属ときわ幼稚園において講演（プログラミング教育について）

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布資料等
- ・ 国試結果

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	伊藤彰	所属学科	診療放射線学科	職名	准教授
クラス担任	R 3A	クラブ顧問	天文同好会 副顧問		
委嘱委員・職務	広報委員会 副委員長、入試委員会、R 科国試対策委員長、R 課臨地実習委員会 情報インフラ整備ユニット				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
地域との協働 B	基盤	2	通年	選択	演習	対面	15
卒業研究	R	4	通年	必修	演習	対面	72
まなぶる>ときわびと I	基盤	1	前期	必修	演習	対面	407
○診療放射線技術学概論	R	1	前期	必修	講義	対面	86
○基礎数学	R	1	前期	自由	講義	遠隔	85
画像解剖学	R	3		必修	講義	対面	76
医用画像工学実習	R	3	前期	必修	実習	対面	75
○医療情報学	R	2	前期	必修	講義	対面	88
医療安全管理学	R	3	前期	必修	講義	対面	75
○メディカルデータサイエンス	R	4	前期	選択	講義	対面	6
医療文献読解	R	4	前期	必修	講義	対面	70

診療放射線技術学総合演習 I	R	4	前期	選択	演習	対面	67
まなぶる>ときわびと II	基盤	1	後期	必修	演習	対面	408
科学技術論	基盤	1	後期	選択	講義	対面	84
臨床検査学演習	M	3	後期	必修	演習	対面	81
臨床技術入門	R	1	後期	必修	講義	対面	85
○応用数学	R	1	後期	必修	講義	遠隔	85
○診療画像検査学 I (MR)	R	2	後期	必修	講義	対面	87
医療安全管理学実習 A	R	3	後期	必修	実習	対面	38
医療安全管理学実習 B	R	3	後期	必修	実習	対面	34
臨床実習	R	3	後期	必修	実習	対面	68
臨床基礎実習	R	3	後期	必修	実習	対面	68
診療放射線技術学総合演習 II	R	4	後期	必修	演習	対面	66

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 就職試験対策としての小論文の添削指導
- ・ 入学前課題(数学)の出題とレポートへのコメント

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

画像検査機器に高度な数理科学が応用される中で、医用画像の専門家である診療放射線技師は新しい技術を正しく用いて臨床で有用な画像を提供する責務がある。そのために数理的な原理を理解し、原理から筋道を立てて論理的に考えることができる学生を養成する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 抽象的な数理原理を理解するためには可視化が必要である。ICT を活用し、難解な数式で表現される関数解析を可視化する Web アプリケーション等を学生の手で試してもらい、概念の理解を目指した。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 「診療画像検査学 I(MR)」について、前年の学生による授業評価では、勉強の方法がわからないとの意見が見られた。そのため、本年度は記述量の多い教科書を採用した。また、授業の流れもできるだけ教科書に沿うようにした。
- ・ 定期試験の前に中間試験を実施し理解度の把握を行なった
- ・ 定期試験は自作資料の持ち込みを可とし、自分の力でまとめる機会を作った。その代わりに、問題の難易度はかなり高くした。
- ・ 「医療情報学」は今日的なランサムウェアによる病院の機能停止を取り上げた。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 「診療画像検査学 I(MR)」において、高度な内容をどうにか伝えようとする熱意を評価するコメ

ントがあった。

- ・ 「医療情報学」では授業の延長があったことへの批判的なコメントが見られた。

6. 今年度の成果

- ・ 「診療画像検査学 I(MR)」の定期試験は思考力を要する問題を出題したが、例年に遜色のない成績であった。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 「医療情報学」と「診療画像検査学 I(MR)」において、昨年度までは毎回課題レポートを課し、添削して返却していた。二教科で受講者全員のレポート添削を行うのは非常に困難で、今年度は「診療画像検査学 I(MR)」での実施は断念した。その代わりに、定期試験に向けて資料をまとめさせた。論理的に考えられているかを評価するには論理的に文章を書けているかどうかで判断できる。また、資料のまとめ方でも評価可能と考える。今年は定期試験の持ち込み資料を回収しなかったが、次年度はこれを回収し、評価の一部とする方法も考えられる。

8. 社会的活動等

- ・ 「第50回 神戸まつり永田フェスティバル」天文同好会副顧問として参加
- ・ 「第27回 肺がん CT 検診認定技師 認定試験」実行委員として参加

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	木村 英理	所属学科	診療放射線学科	職名	准教授
クラス担任	4年Aクラス	クラブ顧問	ベクレル部		
委嘱委員・職務	R科臨床実習委員会 副委員長、教務委員、R科国家試験対策委員会				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
○画像診断機器学実習Ⅱ	R	3	前期	必修	実習	対面	72

○放射線カウンセリング学	R	4	前期	選択	演習	対面	7
医療安全管理学	R	3	前期	必修	講義	対面	72
診療放射線技術学概論	R	1	前期	必修	講義	対面	85
診療画像技術学実習	R	3	前期	必修	実習	対面	72
診療放射線技術学総合演習 I	R	4	前期	選択	演習	対面	66
○画像診断機器学実習 I	R	2	後期	必修	実習	対面	72
○X線撮影技術学Ⅲ (CT)	R	2	後期	必修	講義	対面	93
○救急医学概論	R	3	後期	必修	講義	対面	76
臨床基礎実習	R	3	後期	必修	演習	対面	76
臨床実習	R	3	後期	必修	実習	対面	76
診療放射線技術学総合演習 II	R	4	後期	必修	演習	対面	66
臨床技術入門	R	1	後期	必修	講義	対面	85
計測学実習	R	2	後期	必修	実習	対面	86
医療安全管理学実習	R	3	後期	必修	実習	対面	79
卒業研究	R	4	前 後 期	必修	演習	対面	8

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策
- ・ R科時間割の作成および調整
- ・ 非常勤講師への連絡や対応
- ・ 「画像診断機器学Ⅰ」「画像診断機器学Ⅱ」上野先生
「画像診断機器学実習Ⅰ」「画像診断機器学実習Ⅱ」上野先生、岩元先生、青木先生、谷端先生
「医用機器概論」遠藤先生
- ・ 臨床実習配属に関する調整
- ・ 臨床実習に関連する書類作成
- ・ 臨床実習先に提出する履歴書等の添削
- ・ 臨床実習への訪問、巡回指導（京都音羽病院、済生会吹田病院、兵庫医科大学附属病院など）
- ・ 就職に関する履歴書や小論文の添削
- ・ 入学前課題の出題と添削
- ・ 高校への出張講義
- ・ 心身の不調を訴える学生の対応
- ・ 大阪大学浜通り研修への参加および引率

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 診療放射線技師として大学病院等で勤務していた経験だけでなく、私自身が大病を患い放射線治療を受けた患者としての経験もふまえ、医療を提供する専門職業人としての立場、そして医療を受ける患者としての立場の双方の視点から、高度な専門知識や技術のみならず、高い倫理観とそれを支える人に寄り添う心についても養うことを理念とする。
- ・ 本学科の教育理念である、いのちに対する温かい眼差しと高い倫理観を備え、放射線技術学におけ

る専門的な知識と技術を持ち、社会に貢献できる専門職業人の育成に向け、①将来医療従事者として社会に貢献する者として必要な素養や人間性、②高度な専門知識や技術の修得について、我々教員が指導するだけでなく、学生自身が自主的に学び自らの努力を持って修得することを目標とする。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ ①について、挨拶や身だしなみ、実習科目における態度、言葉遣いなどについて、細やかに声かけを行い、「自分がどうありたいか」ではなく「自分が（患者さんや他の医療従事者から）どのように見られ評価されるのか」を考えさせるよう指導を行った。
- ・ ②について、学生自身が自主的に学び自らの努力を持って修得してもらえよう、この科目や内容がどのように必要なかを予め説明することで、学修する目的や意義を明確にさせた。また、授業スライドには臨床画像や動画を多く用い、色合いやフォント等にも注意することで視覚的にも理解ができるよう工夫を行った。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 昨年度、主担当科目の評価は学科平均よりも高い評価を超えており、臨床実習や模擬試験、国家試験等で授業資料が好評であることから、現状維持としている。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ できるだけ学生に興味を持ってもらえるよう、また、理解してもらえようように授業の補助教材としてスライド資料、まとめプリント、動画資料、そして過去問を公開している。わかりやすかったというコメントや総合評価についても学科平均よりも高い評価を得られた一方で、補助教材の公開のしすぎは、欠席や居眠り、授業を集中して聞かない、後から配信される動画を見ればなんとかなるなどの受講態度の悪化など、学生自身が疑問や探究心を持ち、自らの努力を持って理解すべき貴重な学修の機会を奪ってしまったのではないかと考えている。
- ・ また、配布資料について、講義資料は貴重な知的財産であり、これを安易に配布しすぎる、また、学生も安易に求めることについてどこまで応えなければならないのか、授業評価やコメントについて疑問を感じる。

6. 今年度の成果

- ・ 昨年度同様、主担当科目の評価は学科平均よりも高い評価を超えており、臨床実習や模擬試験、国家試験等で授業資料が好評であった。
- ・ 卒業研究において、学科内では最大の8名を指導。8名の興味や自主性を尊重しつつ、5つの研究テーマについて研究指導、および成果発表を行った。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 昨年度、そして今年度においても、主担当科目の評価は学科平均よりも高い評価を超えており、臨床実習や模擬試験、国家試験等で授業資料が好評であることから、現状維持としている。
- ・ 国家試験において出題傾向や最新技術が出題されていることから、実習内容については、従来の基本的な項目を押さえつつ、国家試験の出題傾向等も踏まえ柔軟に対応していく。

8. 社会的活動等

- ・ 公益社団法人 日本放射線技術学会 放射線防護部会委員
- ・ 公益社団法人 日本放射線技術学会 第2回“伝わる”医療被ばく相談実践セミナー 講師
- ・ 日本診療放射線学教育学会 理事
- ・ 日本診療放射線学教育学会 ダイバーシティ委員長
- ・ 日本診療放射線学教育学会 広報副委員長
- ・ 第17回日本診療放射線学教育学会学術大会 実行委員

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 補助教材用動画 35本 など
- ・

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	倉本 卓	所属学科	診療放射線学科	職名	准教授
クラス担任	R2 学年	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	研究倫理委員会委員，教務委員会委員，すこラボ（健康生活研究所）委員，国家試験対策委員会委員（副委員長），学科内学生研究委員会委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
診療放射線技術学概論	R	1	前期	必修	講義	対面	85
○X線撮影技術学Ⅰ（一般撮影）	R	2	前期	必修	講義	対面	103
○X線撮影技術学Ⅱ（透視・造影検査）	R	2	後期	必修	講義	対面	93
○画像解剖学	R	3	前期	必修	講義	対面	74
○画像解剖学演習	R	3	前期	必修	演習	対面	74
医療安全管理学	R	3	後期	必修	講義	対面	72
○診療画像技術学実習	R	3	前期	必修	実習	対面	72
医療安全管理学実習	R	3	後期	必修	実習	対面	72

臨床基礎実習	R	3	後期	必修	実習	対面	72
臨床実習	R	3	後期	必修	実習	対面	72
診療放射線技術学総合演習Ⅰ	R	4	前期	選択	講義	対面	67
○先進医学・技術学		4	前期	選択	講義	対面	49
診療放射線技術学総合演習Ⅱ	R	4	後期	必修	講義	対面	66
卒業研究	R	4	通年	必修	実技	対面	72

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策
- ・ 臨床実習病院への訪問と学生指導
- ・ 大学院進学希望者への教育指導
- ・ 卒業研究指導学生への外部学会での研究発表指導
- ・ 就職試験対策として、応募書類、小論文の添削、および面接指導
- ・ 法人主催「福島スタディーツアー」の引率及び事前事後の学習指導
- ・ 環境省ぐるぐるプロジェクトのラジエーションカレッジ団体向けセミナーの学内運営と対応
- ・ 2年次学生担任としての教育指導
- ・ 入学前課題の出題と添削

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

私は担当している科目が全て専門科目である。そのため、講義科目では、なぜこの科目の学習をするのか、臨床に出たときにこの知識がどのように活かされるのか、などを常に意識させることを目標としている。その上で、講義科目で学習する内容についての知識・技能の習得とともに、教育現場で対応できる実践力と職業倫理をもった学生の養成を目指している。また、実習・演習科目では、チームで取り組むことの重要性を意識させつつ、その中で個人として何ができるのか、何をすべきかを考え実践させることを目標としている。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 2年次科目では、毎回の講義時に小テストを実施し、継続した学習と復習の習慣を身につけさせることを意識させた。
- ・ 3年次学生では、自身の得意不得意に合わせて自ら学習に取り組めるように、サブテキストの紹介や講義資料以外の追加資料の提供などを個別に実施した。
- ・ 演習科目では、アクティブ・ラーニング型のサブスクリプションサービスの教材を導入し、自らのペースで学習することを意識させた。また、演習科目時間以外にも、登校などの移動時や、自宅においても、学習に取り組めるよう工夫した。
- ・ 実習科目では、実習前に各項目の狙いと予習内容を的確に伝え、実習参加時に必要な知識を明確に示した。実習終了時には、実習を総括し、各項目の復習と実習と通じて、教員が気が付いた点など

を指摘し、実習を振り返り学習できる仕組みを取り入れた。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 前年度の学生による授業評価では、「資料の文字が小さい」や「資料数が多い」などの意見が見られた。文字を大きくすること、資料数を少なくすることは、学習効果を低下する可能性があると考えため、小さくしか表示できない資料には情報の出展元を追記したり、配布資料には重要度を3段階程度に分けて、その重要度を講義内で示したりなどの対応を実施した。
- ・ 演習では、学習範囲について、各自国家試験模擬問題を作成させ、発表会を実施し自ら解説講義を実施することで、自助と公助による学習の実践を取り入れた。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 科目責任者として勤めた科目の「学生による授業評価調査」は、ほとんどの科目において総合評価が学科平均点と同程度以上の評価を受けることができた。
- ・ 学生による授業評価調査における、「この授業でよいと思った点」に関して、ほぼすべての科目において、本当に多くのコメントいただくことができた。
- ・ 科目責任者として勤めた実習科目において、総合評価 4.7 と高い評価を得た。

6. 今年度の成果

- ・ 国家試験対策を実施する中で、4年次学生の苦手なポイントを把握し、それを下級学年の講義内容に反映させた。その結果、X線撮影技術学Ⅰ（一般撮影）の科目において、再試験者数を約38%低下させ、さらに、落単者を約42%低下させることができた。
- ・ 研究室配属学生の大学院進学希望に対し、学習指導を実施した。その結果、九州大学院へ進学が決まった。
- ・ 研究室配属学生の卒業研において、指導を実施した。その結果、公益社団法人日本放射線技術学会第67回近畿支部学術大会において、指導学生が2演題の研究発表を行った。
- ・ 国家試験対策において、主に担当する国家試験科目『エックス線撮影技術学』の指導を実施した。その結果、国家試験対策として実施した3回の外部模試において、エックス線撮影技術学の科目において、本学の平均正答率が3回全てで全国平均よりも高い値を示した。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 科目担当者を務めた科目において、履修者全員が単位修得につながる事が叶わなかった。安易な単位修得を促すことは不要であると思うが、国家試験に必要な知識が備わっているかどうかを十分に見極め、学生の個性や成績を見極めることが必要であると認識している。次年度は、このバランスを考慮し、学生のやる気と可能性を向上させるような指導を実践したい。

8. 社会的活動等

- ・ 県内3つの高校（県立武庫之荘総合高等学校，姫路市立琴丘高等学校，神戸常盤女子高等学校）において，大学説明会の講師を務めた
- ・ 日本歯科放射線学会第63回学術大会において，研究発表（主研究：1件，共同研究：1件）を行った。
- ・ 神戸常盤大学 すこラボ（健康生活研究所）公開講座（オンライン）において，「飲み込む仕組みと誤嚥性肺炎を理解しよう！！」のタイトルで講演を行った。
- ・ 神戸常盤大学 健康ふれあいフェスタ すこラボ特別講座において，「飲み込む仕組みと誤嚥性肺炎を理解しよう！！」のタイトルで講演を行った。
- ・ 第79回日本放射線技術学会総会学術大会 一般研究発表，撮影（単純X線）動態撮影のセッションにおいて，座長を務めた。
- ・ 第79回日本放射線技術学会総会学術大会において，研究発表（主研究：1件，共同研究：2件）を行った。
- ・ 第9回福岡県診療放射線技師会学術大会において，研究発表（共同研究：2件）を行った。
- ・ 日本放射線技術学会第67回近畿支部学術大会 一般研究発表，一般撮影Iのセッションにおいて，座長を務めた。
- ・ 日本放射線技術学会第67回近畿支部学術大会 において，研究発表（研究室学生研究：2件）を行った。
- ・ 第12回九州モニタ研究会において，一般演題のセッションにおいて，座長を務めた。
- ・ 第12回九州モニタ研究会において，研究発表（主研究：1件，共同研究：1件）を行った。
- ・ 第19回九州医用画像コミュニティ 講演1のセッションにおいて，司会を務めた。
- ・ 学会における役員等は以下の通り
 - ・ 日本放射線技術学会，企画委員会ポイント制度導入検討班
 - ・ 日本放射線技術学会 総務委員会 委員
 - ・ 九州医用画像コミュニティ 世話人
 - ・ 日本放射線技術学会，総務委員会総会運営小委員会 委員
 - ・ 公益社団法人 兵庫県放射線技師会 学術委員

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ テスト問題
- ・ 学会 H.P.及び抄録集

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	長谷川 大輔	所属学科	診療放射線学科	職名	助教
クラス担任	4年生B組	クラブ顧問			
委嘱委員・職務	就職委員会、国際交流センター、神戸常盤地域交流センターA				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
まなぶるときわびとⅠ	全学 科	1	前期	必修	演習	対面	
まなぶるときわびとⅡ	全学 科	1	後期	必修	演習	対面	
国際理解	全学 科	1	前期	選択	講義	対面	60
国際保健医療活動Ⅰ	全学 科	1	前期	必修	講義	遠隔	73
国際保健医療活動Ⅱ	全学 科	3-4	前期	選択	研修	対面	4
放射化学Ⅰ	R	1	後期	必修	講義	対面	85
放射線計測学実習	R	2	後期	必修	演習	対面	86
診療画像技術学実習	R	3	前期	必修	演習	対面	76
放射線安全管理学実習	R	3	後期	必修	演習	対面	76
核医学検査機器学	R	3	前期	必修	講義	対面	88
核医学機能解析学	R	3	前期	必修	講義	対面	88
関係法規	R	3	前期	必修	講義	対面	74
臨床実習	R	3	後期	必修	演習	対面	
臨床基礎実習	R	3	後期	必修	演習	対面	68
先進医学・技術学	R	4	前期	選択	講義	対面	49
診療放射線技術学総合演習Ⅰ	R	4	前期	選択	講義	対面	66
診療放射線技術学総合演習Ⅱ	R	4	後期	必修	講義	対面	66
卒業研究	R	4	後期	必修	演習	対面	72

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策
- ・ 第一種放射線取扱主任者試験対策
- ・ 一般企業向けの対策講座

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 育てたい学生像
- ・ 他者と協力し合える人間性のある学生
- ・ 自己理解と自己肯定感を持ち、自らの興味や能力を追求する学生
- ・ 教育のあり方

対話的な学習環境を提供し、生徒の意見や考えを尊重する

- ・ 基礎学力向上のための繰り返し講義
- ・ 教育への信念
- ・ 教育は単なる知識の伝達ではなく、人間性や社会性の形成においても重要であるとする
- ・ 持続可能な社会の実現に向けて、教育が重要な役割を果たすと信じる

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 対話的な学習環境のため、研究室におけるグループ学習を取り入れた。
- ・ エビングハウスの忘却曲線を基に、基礎学力向上のため、同様の内容の講義を繰り返し行った。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 放射化学 I では中間評価を実施し、授業資料のフォントサイズ、問題数などの改善を行った。
- ・ 次年度は繰り返し学習の効果を高めるため、動画配信による学習を取り入れたい。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 「放射化学 I」の科目では教科書を分かりやすく解説したオリジナルの講義資料を使用しており、学生から「講義資料がとても分かりやすかった」とのコメントが多くみられた。
- ・ 「核医学検査機器学」と「核医学機能解析学」では初めて実際の装置を模したシミュレータを導入して講義したが、学生から「座学だけでなくシミュレータを使うことで理解しやすくなった」とのコメントがあった。

6. 今年度の成果

- ・ 「放射化学」の科目において自身の講義資料を基にした指導をした結果、学生の理解度が大幅に改善し、国家試験では放射化学の正解率は約 90%を示した。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 「放射化学」の科目において「授業資料に誤植があった」とのコメントもあるため、次年度に向けて講義資料をさらにブラッシュアップしたい。

8. 社会的活動等

- ・ 日本核医学専門技師認定機構事務局活動

- ・ アジア核医学技術学会理事
- ・ 日本放射線技術学会アジア放射線技術教育支援特別委員サポート員としてラオス研修
- ・ 日本診療放射線学教育学会実行委員
- ・ 日本核医学技術学会中四国地方会にて講演

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	市川 尚	所属学科	診療放射線学科	職名	助教
クラス担任	3年生Bクラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	入試委員会, 合否判定部会, 地域交流センターボランティア事業部, SD 委員会, 国家試験対策委員会				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
○情報基礎	R	1	前期	必修	演習	対面と一部遠隔	86
まなぶるⅠ	R	1	前期	必修	演習	対面	
まなぶるⅡ	R	1	後期	必修	演習	対面	
放射線計測学	R	2	前期	必修	講義	対面	86
放射線計測学実習	R	2	後期	必修	実習	対面	86
画像診断機器学実習Ⅰ	R	2	後期	必修	実習	対面	86
放射線安全管理学	R	3	前期	必修	講義	対面	82
画像診断機器学実習Ⅱ	R	3	前期	必修	実習	対面	75
画像解剖学演習	R	3	前期	必修	演習	対面	77
医療安全管理学	R	3	前期	必修	講義	対面	74
放射線安全管理学実習	R	3	後期	必修	実習	対面	76
臨床基礎実習	R	3	後期	必修	演習	対面	68
臨床実習	R	3	後期	必修	演習	対面	102
総合演習Ⅰ	R	4	前期	必修	演習	対面	66
総合演習Ⅱ	R	4	後期	必修	演習	対面	66
卒業研究	R	4	後期	必修	演習	対面	72

(2)準正課、正課外の教育活動

・ 国家試験対策

→国家試験に重要な情報をまとめた資料を配布すると共に、重要なポイントを解説することで国家試験の点数増加に努めた。

・ 入学前課題の添削

→文章の読解力や記述力を高める事を目的とした入学前課題の添削を行った。

・ 入学前教育への参加

→本学入学が内定した高校生に対して実施したオンラインでの入学前教育に参加し、入学前の不安解消やモチベーションの向上に努めた。

・ 高校での出前授業

→放射線に対する興味を持ってもらう事を目的に、高校生に対して放射線技師の業務や放射線の知識に対する授業を実施した。

・ 学会発表の実施

→ゼミの学生に対して、学会発表の登録や発表に関する指導を行い、全5演題の学会発表を実施した。

・ 就職試験の小論文指導

→ゼミの学生に対して、小論文の添削指導を行い、臨床施設の採用に貢献した。

・ 就職試験のエントリーシート作成指導

→ゼミの学生に対して、エントリーシートの添削指導を行い、臨床施設の採用に貢献した。

・ 福島スタディツアー

→診療放射線学科の学生と共に、東日本大震災の様子やそれに伴う課題などを学習する活動を実施。阪神淡路大震災を経験した神戸の大学という立場から、放射線に関する職業を目指す立場から、震災や原発事故に関して情報交換を行うと共に地域貢献を目指している。

・ ぐるぐるプロジェクト

→環境省が実施する「ぐるぐるプロジェクト」の参加者募集や会場の設定などを実施し、学生が参加できる環境を整えている。ぐるぐるプロジェクトは、放射線に対する風評をなくすために正しい知識を身に着けるための活動であり、診療放射線技師を目指す立場としても非常に重要な知識を得ることができる。

・ TOKIWA ふれあい健康フェスタ

→地域の方々に対して、本学に診療放射線学科があることや、放射線に興味を持ってもらうことを目的に、健康フェスタにて X 線画像を用いたシルエットクイズや、乳がんのセルフチェックに関するイベントを実施した。

・ 兵庫県技師会 生涯教育委員

→タスクシフトに伴い、大学にて医療安全に関する新たな授業を立ち上げる必要がある。円滑な授業の立ち上げを目的として、兵庫県技師会の生涯教育委員として、現役の診療放射線技師に対してタスクシフトに関する研修を実施している。

・ 第一種放射線取扱主任者試験対策

→国家資格の一つである第一種放射線取扱主任者試験は、合格率 20%程度と高難易度の試験であるが、診療放射線技師の国家試験内容と一部重複しており、保有していると就職時、就職後にメリットとなることから、試験合格のための対策授業を実施している。

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

診療放射線技師にとって、放射線を理解することは非常に重要であるが、そのためには物理学や数学などの知識が必要不可欠である。学生時代の私は、それらの知識を深く備えておらず、講義終了後に教員に稚拙な質問を何度も繰り返したことを覚えている。その甲斐あって、放射線の知識が深まり、国家試験にも合格することができた。学生の知識を深めることは教員の大きな目的の一つであるが、私の経験上、学生が質問しやすい環境を整え、寄り添うように接することが学生の理解度向上に結びつくと考えている。よって、私は学生に対して寄り添える教育を心掛けることを通して、学生の理解度を高めることを目標としている。

診療放射線技師として臨床で働くと、業務をこなすだけでなく臨床現場での業務改善が求められる。しかし、問題解決能力が無ければ業務改善には至らない。よって私は、主体的に学び、考え、行動できるような学生を育成したいと考えている。そのために、授業内で自ら考えたり、自主的に行動したりするような機会を作り、問題解決能力が養えるような授業を展開したい。また、臨床での経験が豊富であるという強みを活かし、臨床と学問を関連させた授業を展開することで、学生の知識を臨床にリンクさせると共に、応用力を備えてもらいたい。

診療放射線技師として社会に貢献するためには、コミュニケーション能力も求められる。コミュニケーションは、患者に対するものだけでなく、医療従事者に対しても必要不可欠である。その際、人の話を聞くことや人に自分の意見を伝えること、人の意見を受け入れる姿勢などが求められる。よって、これらの能力を備え、患者の病気を見つけたり治療したりするだけでなく、心のケアができるようなコミュニケーション能力を有した学生を輩出したい。そのために、授業内で学生同士がコミュニケーションを取る機会や、プレゼンテーションを行う機会を作るなどの工夫を強く意識したい。

診療放射線技師の業務は医療に欠かせない重要な役割を担うが、それに加えて技術は時代と共に急速に進化している。従来撮影に数十秒を要した頭部 CT 検査は今や 1 秒以内で撮影可能となった。また、AI 技術の発展により MRI 画像から CT 画像を作成することも可能となり、応用性がさらに広がっている。これからの診療放射線技師には、技術の急速な進化に対応することが求められており、その土台を築く立場である教員が担う役割は非常に大きい。そのため、学術的な知識の教授や学会活動への参加、研究活動に積極的に参加してもらうことで、質の高い診療放射線技師を社会に輩出すると共に、社会貢献および医療の質向上につながるよう強い志を持って教壇に立ちたい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 演習の授業では教員からの説明を最小限にし、学生が主体的に演習できる時間を増やすことを意識した。また少人数のグループを作り、分からないことがあればグループで相談できるような環境を

整えた。その際、教員も教室を歩き回り、分からないことがあれば気軽に質問できるような環境作りを意識した。

- ・ 実習前に、考察に必要な基礎知識を伝え、実習後の考察をグループ内で行うことにより、自分で考える能力や、自分の意見を伝える能力が養える工夫を行っている。
- ・ 演習授業後には、学生ごとにテーマを与え、そのテーマに対して1分間でプレゼンする機会を設けることで、自分で資料をまとめる能力や、人に伝える能力が養える工夫を行っている。
- ・ 体験型学習によって理解を深めることを目的に、放射線の可視化に関する動画教材や、スマホでレントゲン撮影を模擬できるような教材を作成している。
- ・ 臨床経験が豊富という強みを生かし、臨床の画像や動画を多く取り入れた授業を行っている。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 自分の授業内容について、学生とディスカッションすることで、すでに理解できている部分を削減し、わかりにくい部分を膨らますように授業内容を改善している。昨年度は学生とのディスカッションはできていたが、授業内容の改善に至っていなかったため、今年度は、学生の意見を反映させて資料を改定した。
- ・ 授業後に確認試験を実施することで、学生がどこまで理解できたかを確認すると共に、正解率の低い分野を重点的に教えることで、効率化を図っている。
- ・ 法律改正に伴い、診療放射線技師が新たに実施できる業務が追加された。それに伴い、告示研修に参加すると共に、告示研修にて収集した情報を基に本学の医療安全管理学・医療安全管理学実習の内容の変更案を作成した。

5. 今年度の学生による授業評価より

自身が科目責任者の科目が「情報基礎」のみであり、それ以外の科目は他教員に対する評価が強く反映されることから、今回は情報基礎に対する授業評価について述べる。81名中21名が「授業で良いと思った点」をコメントしてくれており、友人と考えながら課題を進められることが良かった、質問しやすい雰囲気が良かった、学生主体の授業スタイルが良かったなどと評価されている。このことから、自身の目指す「寄り添う授業」や「主体的な授業」を行えていると考える。

また、81名中2名が改善すべき点をコメントしてくれており、共に私語が多いという内容であった。アクティブ・ラーニングを行う上で、緊張感をどの程度持たせるかは非常に難しい問題であるが、まなぶるや参考書などでより深く学ぶと共に解決策を見出したい。

6. 今年度の成果

総合演習Ⅱの授業で4年生に実施した放射線安全管理学の国家試験対策にて、語呂合わせやキーワードなどを用いて知識が頭に入りやすい工夫を行うと共に、学生の意見を反映させた授業に取り組んだ。その結果、9月の模擬試験点数が4/10点であったのに対し、12月の模擬試験では8.4/10点と倍以上得点率を上げることができた。国家試験の自己採点における点数も7.1/10点と目標であった6/10点を超

えることができた。

また、1年生に実施した情報基礎の授業では、25%以上の学生が授業評価コメント（良いと思った点）を記載してくれており、学生に寄り添った授業の展開が行えていると実感した。

ゼミの活動では、金沢大学合同研究会、兵庫県放射線技師会学術大会、近畿放射線技術学会学術大会などでゼミ生による発表を計5演題実施した。学生の研究意欲向上や貴重な経験をする場の提供につながったと考えている。

さらに、第一種放射線取扱主任者を目指す3名の学生に対して個別指導を実施し、そのうち2名が試験に合格できた。本試験の合格率は25%程度であり、学生の成長を促す指導ができたと考えている。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

学生による授業評価より、アクティブ・ラーニングを意識するあまり、2名の学生から私語が多いという意見をもらった。次年度からは、私語を少なくできるよう工夫をしたい。そのために、学生指導に関する参考書を読み、自身の授業スタイルの確立に努めたい。

法律改正に伴い、医療安全管理学・医療安全管理学実習の内容を大幅に修正する必要がある。私は技師会での生涯教育委員の経験から本修正の際に必要な知識や情報を持っているため、積極的に内容の修正に取り組みたい。

S D委員として、学科内FD研修会を実施する立場であるが、昨年度は4回程度実施できたのに対し、今年度は1回しか開催できなかった。そこで来年度は10回以上のFD研修会の実施を目標として活動したいと考えている。

8. 社会的活動等

・高校の出前授業

→六甲アイランド高校（2023年9月15日）、県立星稜高校（2023年10月20日）にて、診療放射線技師の業務や放射線の特徴に関する授業を実施した。

・TOKIWA ふれあい健康フェスタ

→地域の方々に対して、本学に診療放射線学科があることや、放射線に興味を持ってもらうことを目的に、健康フェスタにてX線画像を用いたシルエットクイズや、乳がんのセルフチェックに関するイベントを実施した。

・福島スタディツアー

→診療放射線学科の学生と共に、東日本大震災の様子やそれに伴う課題などを学習する活動を実施した。

阪神淡路大震災を経験した神戸の大学という立場から、放射線に関する職業を目指す立場から、震災や原発事故に関して情報交換を行うと共に地域貢献を目指しており、活動内容をTOKIWA ふれあい健康フェスタにて報告した。

・日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究 C

→基盤研究 C「内視鏡医を対象とした線量計一体型放射線防護眼鏡の開発」の研究協力者として外部資

金を取得。本研究は、水晶体の被ばく線量を低減させると同時に、水晶体被ばく線量を測定可能な放射線防護眼鏡を開発することを目的としている。現在、基礎検討が終了し、開発した眼鏡を実際の臨床現場で使用するための準備中である。

・厚生労働科学研究費補助金 地域医療基盤開発推進研究事業

→厚生労働科学研究費補助金 地域医療基盤開発推進研究事業「放射線診療の発展に対応する放射線防護の基準策定のための研究」の研究分担課題「放射線診療の国際基準とのハーモナイゼーションに関する研究」に関する研究協力者として活動している。主に国際放射線防護委員会の公表している「医療被ばく」への介入環境と日本の介入環境の違いを調査しており、現在日本に適した「医療被ばく」への介入環境の策定を目標に活動している。

・兵庫県放射線技師会 生涯教育委員

→技師会の委員として、診療放射線技師の法律改正に伴う告示研修に関する指導および準備を行っている。来年度より大学での学習が求められる告示研修に関する授業・実習内容の構築を行っている。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ Researchmap
- ・ 模擬試験・国家試験解析資料

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	後藤 聡汰	所属学科	診療放射線学科	職名	助教
クラス担任	1年副担任	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	FAST 委員、R 科国家試験対策委員、R 科就職委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
診療画像技術学実習	R	3	前期	必修	実習	対面	61
医療安全管理学	R	3	前期	必修	講義	対面	78
医療文献読解	R	4	前期	必修	講義	対面	72
放射線治療計測学	R	3	前期	必修	講義	対面	78
診療放射線技術学総合演習 I	R	4	前期	必修	演習	対面	66
医療安全管理学実習	R	3	後期	必修	実習	対面	79

放射線計測学実習	R	2	後期	必修	実習	対面	86
放射線治療物理学	R	2	後期	必修	講義	対面	94
臨床基礎実習	R	3	後期	必修	実習	対面	68
臨床実習	R	3	後期	必修	実習	対面	
診療放射線技術学総合演習Ⅱ	R	4	後期	必修	演習	対面	53

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・資格(放射線取扱主任者)勉強の対応

非常に重要な資格であるため重点的に指導および、サポートを実施した。特に3人の学生に対して、週2程度空きコマに収集し勉強会を開催した。結果的に2年生の学生1名が試験が合格した。

- ・就職指導(面接およびESの添削)

研究室以外の学生の大学病院就職をサポートした。

- ・卒業研究前の学生の研究指導

学生の大学院進学率を増加するために、研究や実験に触れられる機会を設けたいと考えた。研究室配属前の3年生学生の数名に春休み期間5回程度実験に協力してもらい、データを収集した。

2. 教育の理念(育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念)

自分自身で考える能力を持った学生の養成を目指す。そのため講義や実習では、常に答えのあることを投げかけるのではなく、答えが一様ではないことを考えてもらう機会を増やした。例えば、放射線を計測する実習の中で、「なぜ放射線を計測することは実習になるが、一円玉の重さははかることは実習にならないのか」という視点を問うてみた。今はスマホが身近にあり、疑問の答えがすぐに見つかる世の中だからこそ、自身で考えを持ち熟考する、疑問を解決するという能力が必要になっていると考える。さらにその考えに対して説得力を持たせるための、論理展開や根拠を出すということも重要である。定期試験の形式もあえて記述問題とすることで、勉強した知識をロジックとして身につけられているかをジャッジした。この能力が身につくと効率の良い国家試験勉強や、就職活動の面接対策にも波及していく。本学では学生に対して手厚い教員が多いからこそ、自活能力を育む機会を設けていきたい。

3. 教育の方法(2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について)

上記にも記載したが、学生自身で考えて、勉強や工夫をする環境を目指した。座学である放射線治療物理学においては、ただ単語を暗記させるのではなく、なぜこの物理事象が大切なのか、この物理が臨床現場でどのように応用されるのかといった観点から話、分野を理解できるように工夫した。また、特に点数の低い学生の勉強指導に関しては、まずは学生自身のスケジュールを立ててもらい、どの科目にどれくらい時間をかければ理解し、試験をパスできるかを考えさせ

た。そして毎日の勉強量を日記に付け、日々自分自身と見つめなおすように指導した。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

私は今年度より採用なので、前年度との違いはない。来年度以降は、今回の授業評価や実績を振り返りつつ、講義内容をブラッシュアップしていく。

5. 今年度の学生による授業評価より

放射線治療に関する基礎科目「放射線治療計測学」及び「放射線治療物理学」では、全体的に低い学生評価であった。原因としては、学生にとってとっつき辛い物理や原理ベースの講義であり、かつ講義の内容も広く、理解することが多い講義内容であることがあげられる。これらの科目は、放射線物理や放射線化学、放射線計測などの科目内容と重複する箇所が多々あるが、講義前にこれらの知識が完全には定着していなかったことも講義の難しかったポイントとなった。今後放射線治療や臨床実習に行く際に絶対に必要な知識や理解となるので、妥協はせず、さらにわかりやすい講義が行えるようにブラッシュアップしていきたい。

実習関連の講義はおおむね評価は高かった。放射線計測学実習は実習内容を一新し、よりわかりやすく、何より学生が楽しみながら原理を学べる講義を心がけた。放射線計測は学生理解度が低かったのだが、どうすれば難しいという先入観を持つ科目を理解できるかを考えた。講義資料やホワイトボードで図を用いて説明し、視覚的にわかるような説明を交えて教えられたのが良かった。

6. 今年度の成果

- ・研究室外の学生に対して就職活動支援を1か月程度行い、岡山大学病院の内定をもらった。
- ・2年生の学生に対して放射線取扱主任者試験の勉強のサポートを3か月実施した。3名に対して実施し、うち1名を合格させることができた。[放射線取扱主任者第一種合格]。他の2名に対してもあと数%で合格のレベルに達しているので、来年は受験してもらい、合格できるように引き続きサポートする。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

実習レポートや対面で学生から授業感想を聞いており、何人かの学生からは「講義が早い」という意見をもらった。担当する科目は1コマに対する講義しなければならない量が非常に多く、内容を削ることは難しい。次年度では、試験前などに見返した際に、直感的にわかるような講義資料を作成していく。さらに、講義内容に関して録画し、web上で自由に見える環境を整備したいと思う。該当の学年だけでなく、臨床実習前や国家試験対策のタイミングで、自由に講義を聴くことができるため、学習効果が高くなると期待できる。

8. 社会的活動等

- ・ 3/4: 高校生の進路ガイダンス(明石城西高等学校)3/4
- ・ 3/16: 市民公開講座

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス&学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	吉田幸恵	所属学科	口腔保健学科	職名	教授
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	口腔保健学科長、運営委員会委員、学園一体化推進協議会委員、学長会議委員、口腔保健研究センター委員、入試委員会合否判定部会委員、入試問題作成部会小論文出題責任者、口腔保健学科臨地実習委員会委員、歯科診療所委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
全身の健康と口腔科学	○	1	後期	必修	講義	対面	67
○歯科衛生士論Ⅰ	○	1	前期	必修	講義	対面	67
早期臨地実習	○	1	前期	必修	実習	対面	67
健康スポーツ科学Ⅰ	MRONE	1	前期	選択	講義	遠隔	380
○栄養指導	○	2	前期	必修	講義	対面	66
子どもの食と栄養	○	2	後期	選択	講義	対面	70
歯科医療と法律・制度	○	3	後期	必修	講義	対面	79
○歯科衛生過程演習	○	3	後期	必修	演習	対面	82
地域口腔保健支援実習Ⅰ	○	3	前期	必修	実習	対面	81
地域口腔保健支援実習Ⅱ	○	3	通年	必修	実習	対面	78
口腔保健衛生学実習Ⅱ	○	3	前期	必修	実習	対面	81
口腔保健特論Ⅱ	○	3	後期	選択	講義	対面	81
○子どもの歯と健康	E	3	後期	選択	講義	対面	55

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 特になし

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

歯科衛生士の資格取得を目指すことはもとより、学士として最低限のコミュニケーションスキルや問題解決能力、自己管理能力などを身につける教育を目指します。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 毎時間、学習の目標を示し、到達の程度を可視化できるよう模索している。
- ・ 学び始めの科目を担当しているので、細かい小さな質問にも回答し、学習上の自己管理能力の向上を支援している。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 視聴覚教材に加えて、体験学習を実施したところ、学びが深まったと評価された。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・「歯科衛生士論1」では、毎時間、質問の機会を設け、全てに回答したので、理解が深まったとの意見が多く見られた。質問をしていない学生にも確認や反復の学習となり学習効果があったと考える。
- ・「子どもの歯と健康」では、体験学習を加えたことにより、参加型の授業で楽しかったとか、自分の口の中を実際に見ながら学べてよかったとの意見が多数見られた。
- ・「歯科衛生過程演習」では、受講者数に比べて教室が狭く学習環境が悪かったとの意見があったため、次年度は教務課と調整を図りたい。
- ・全体的に授業時間外の学習時間が少ないので、次年度以降、何らかの方法を考えたい。

6. 今年度の成果

短期大学の最後の学年となり、すべての教員が教育に尽力した結果、過年度の学生が多数いたが、全員を卒業、修了させる事が出来た。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・事前学習教材を作成するなどして、授業時間外の学習時間を増やす工夫を講じたい。
- ・問題解決能力向上のために、授業中に課題解決学習を取り入れるなど新しい試みを加えたい。

8. 社会的活動等

- ・「日本歯科衛生学会」において学会長を務める。
第18回日本歯科衛生学会学術大会において特別講演の座長を務めた。
- ・「日本健康体力栄養学会」において副会長を務める。
- ・「日本口腔ケア学会」において評議員を務める。
- ・「日本栄養・食糧学会近畿支部」において参与を務める。
- ・「神戸市歯科口腔保健推進懇話会」において委員を務める。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布資料

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	八木孝和	所属学科	口腔保健学科	職名	教授
クラス担任	2年生	クラブ顧問			
委嘱委員・職務	図書館館長、図書委員会委員長、口腔保健研究センター委員長 就職委員会委員長、 歯科診療委員会委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○人体の構造と機能	○	1	前期	必修	講義	対面	67
○口腔の構造と機能	○	2	前期	必修	講義	対面	66
○ワークキャリア プランニング	○	2	後期	必須	講義	対面	66
○こどもの歯科学	○	2	後期	必須	講義	対面	65
○矯正歯科学	○	2	後期	必須	講義	対面	65
○口腔保健特論 I	○	3	後期	必須	講義	対面	82
○全身の健康と口腔科学	○	1	後期	必須	講義	対面	67
○矯正歯科学（短大）	○	3	前期	必須	講義	対面	2
○小児歯科学（短大）	○	3	前期	必須	講義	対面	3
健康スポーツ科学 I	E,M,O,R,N	1	前期	必須	講義	遠隔	378
放射線治療技術学 I	R	2	前期	必須	講義	対面	72
IPW（多職種連携）論	R	3	後期	必須	講義	対面	76
災害時の歯科衛生士の働き	○	3	後期	必須	演習	対面	79
地域口腔保健支援実習 I	○	3	前期	必修	実習	対面	67
早期臨地実習	○	1	前期	必修	実習	対面	67
基礎臨地実習	○	2	後期	必修	実習	対面	67

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 就職面接指導
- ・ 就職対策としての小論文・履歴書の添削指導
- ・ 入学前課題の出題と評価
- ・ 本学歯科診療所での学生指導
- ・ FAST メンバー：本学での市民救急救命講習のインストラクター
- ・

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 育てたい学生像：歯科衛生士として歯科医療に携わることに関心のある学生
- ・ まじめに医療に取り組む姿勢を培いたい

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）
 - ・ ICTを利用して事前もしくは当日に問題提起し、学生自身に考える授業を組み入れた。
4. 今年度における教育方法改善の取り組み
 - ・ 授業や試験問題に積極的に国家試験形式を取り入れ、試験傾向になれるとともに、間違った問題に対する気づきを増やすようにした。
 - ・ アクティブ・ラーニングを取り入れているため、グループディスカッションを多めに実践した。
5. 今年度の学生による授業評価より
 - ・ 全般的に学生の自身の学修時間が短めであった。授業内容と課題の在り方について考えていきたい。
6. 今年度の成果
 - ・ 歯科衛生学のテキスト作成に参加し、次年度から発刊される
 - ・ 今年度からワークキャリアプランニングという授業科目を実施し、口腔保健学科の2年時の正課授業内にキャリア教育を組み込むことができた。学生の評価においても3以上は確保できた。
7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策
 - ・ 学生からのフィードバックにおいて学習時間があまり高くは無かった。一方で、課題に対しては「その意味が見いだせない」といった意見や、課題そのものを出さない学生が散見された。学生の大学授業に対するリテラシーが十分でない点を踏まえ、なぜこの学習が必要なのかなどについて丁寧な説明を加えていく
8. 社会的活動等
 - ・ 長田区保健医療介護フォーラムにおいて講演「オーラルフレイル～定期的なお口のケアで健康寿命を延ばそう！～」
 - ・ 九州矯正歯科学会学術大会において教育講演「歯科衛生士教育の変遷」
 - ・ 「顎口腔機能学会」幹事
 - ・ 「全国大学歯科衛生士教育協議会」理事
 - ・ JDAT(Japan Dental Alliance Team)：長田区チームメンバー
 - ・ FASTメンバー（市民救急救命講習会：駒ヶ林中学校）
 - ・ 歯科衛生学シリーズ歯科矯正学第2版：著者メンバー
9. 根拠資料（資料名のみ）
 - ・ シラバス
 - ・ 学生による授業評価

- ・ Manaba システムを利用した配布物
- ・ テスト問題
- ・ 学会 HP
- ・ 歯科医師会 HP
- ・ 歯科衛生学矯正歯科テキスト

・ ティーチング・ポートフォリオ

教員名	高橋 由希子	所属学科	口腔保健学科	職名	教授
クラス担任	2年Bクラス	クラブ顧問	特記事項なし		
委嘱委員・職務	すこラボ（健康生活研究所）副センター長、入試委員会委員 口腔保健研究センターセンター委員 神戸常盤大学歯科診療所副責任者、臨地実習委員会委員長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○歯科予防処置論	○	1	後期	必修	講義	対面	80
○災害援助と救急救命	○	3	前期	必修	講義	対面	80
○災害時の 歯科衛生士の働き	○	3	後期	必修	演習	対面	80
歯科予防処置演習Ⅱ	○	2	前期	必修	演習	対面	70
○地域歯科保健実習Ⅰ	○	3	前期	必修	実習	対面	80
基礎臨地実習	○	2	後期	必修	実習	対面	70
早期臨地実習	○	1	前期	必修	実習	対面	70
○歯周疾患処置演習Ⅰ	○	2	後期	必修	演習	対面	70
口腔保健特論	○	3	後期	必修	講義	対面	80

(2)準正課、正課外の教育活動

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 専門科目では、歯科衛生士を養成するために、歯科医学および口腔保健学の知識・技能の習得とともに、医療現場で対応できる実践力と医療倫理をもった学生を養成する。特に、演習科目では、口腔疾患予防についてチーム医療の一員として考え実践できるコミュニケーション力と実行力を育成したい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 実習前には、事前指導をオンデマンド形式で動画配信を行い、自主学習を行うようにした。
4. 今年度における教育方法改善の取り組み
- ・ 歯科予防処置論で「授業中のスライドをプリントしてほしい」の意見があったため、予習時間を含め1週間前からマナバにあげ、個々で印刷できるよう準備した。
5. 今年度の学生による授業評価より
- ・ 事前にマナバにスライドをあげたため「理解しやすかった」との意見があった。
 - ・ 「課題が毎回、授業に合わせた内容で提示された」「う蝕の処置や歯周病の処置、それ以外にも詳しい歯科に関することが学べた」との意見があった。しかし、「国試問題を課題にだすのは良かったが、問題を記載するのは非常に効率が悪いと思った。人それぞれ勉強法があるのだからある程度自由度を設けるべきである」との意見があり、今後は個々の学生に応じた課題提出を検討することも考慮する。
6. 今年度の成果
- ・ 事前にマナバにスライドをあげたため、学生自身の授業への意欲度が4.0→4.1に向上した。
7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策
- ・ 歯科予防処置論で講義の最終日にアンケートを自由記載してもらった。28%が回答し「歯科衛生士は歯科医師の補助だけでなく、主体的に動く場面もたくさんあり責任感が必要な職業だとわかった。そのためにたくさんの知識を身につけて臨床の場に出られるように勉強をしていきたい。」との前向きな回答が得られた。
8. 社会的活動等
- 1) 講演
- ・ 9月9日 台日介護産業サミットでの講演「人生100年時代を健口に生きる」(台北市)
 - ・ 10月5日 令和5年度健康ひょうご21 県民運動淡路会議フォローアップ研修会「人生100年時代を健口に生きる！～お口のお手入れ方法を知って年齢に負けない健康なからだづくりをしませんか？～」(淡路市)
 - ・ 10月27日 IOCiL web セミナー『高齢患者に対するSPT時のリスクマネジメント』260名申込
 - ・ 12月2日 KOBE で世界とつながるアクション公開検討会パネリスト (甲南大学)
 - ・ 1月12日 歯っぴー相談会での口腔保健支援 (モトロク)
- 2) 地域支援
- ・ 多文化共生に関連する地域住民への口腔健康支援 (10/29 長田区大黒公園, 2/14 食材提供と相談会と国際保健室, 2/18 国際ファミリーのためのCAFÉ KICC)
 - ・ 3月14日 長田大正筋商店街で「口腔機能検査を使用した口腔保健活動」を行った。

- ・ 日本歯周病学会 理事（日本歯周病学会と日本歯科衛生士会をつなぐ役割）
- ・ 日本歯科衛生士会 生涯研修委員（歯科衛生士のリカレント教育担当）

3) 臨床

- ・ ウクライナ人の歯科健診と口腔保健指導（7月末～継続）
- ・ 週に1-2回、学内歯科診療所で歯周病の患者管理を行い、受け持ち患者が増えた。

4) 研究

- ・ 日本歯科衛生士会ポスター発表

「高齢者のオーラルフレイル対策における低栄養質問票の有効性についての検討」共著

「歯科衛生士が歯科診療場面で必要と感じる歯科衛生技術－学生の気づきの質的記述的分析－」

共著

- ・ 紀要第17号「長田区在住の留学生に対する健康支援活動の報告」第一著者

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配信資料、配布資料
- ・ 授業のアンケート（感想自由記載）

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	破魔幸枝	所属学科	口腔保健学科	職名	講師
クラス担任	2年生Aクラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	図書委員会委員、危機管理（災害）委員会委員、国家試験対策委員会副委員長、臨地実習委員会委員、歯科診療所委員、歯科診療所医療機器情報管理責任者、歯科診療所医療機器安全管理責任者、				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○歯科予防処置演習Ⅰ	○	1	後期	必修	演習	対面	68
○歯科予防処置演習Ⅱ	○	2	前期	必修	演習	対面	66
○歯科予防処置演習Ⅲ	○	2	前期	必修	演習	対面	66
○子どもの心理学	○	2	後期	選択	講義	対面	59
歯科予防処置論	○	1	後期	必修	講義	対面	68
医療面接	○	2	後期	必修	講義	対面	65
ワークキャリアプランニング	○	2	後期	必修	講義	対面	66
歯周疾患処置演習Ⅰ	○	2	後期	必修	演習	対面	65

地域口腔保健支援実習 I	O	3 (短大)	前期	必修	実習	対面	77
早期臨地実習	O	1	前期	必修	実習	対面	67
基礎臨地実習	O	2	後期	必修	実習	対面	66

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策のための補講、面談（学習指導）
 - ・ 歯科予防処置のスキルアップのための補講
 - ・ 歯科診療所施設における診療時の学生指導
 - ・
2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）
- 豊かな感性を磨き、自己決定の力を備え、多様化する社会のなかで幸福を感じられる人生を歩めるよう育成する。また、医療人の倫理観を育て、真実を探究する力が十分に形成される学修に努める。
3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）
- ・ 演習では、グループ・ペアでの準備・実習の実施・整理は能動的な行動を重要視し、多くの気づきや体験を促す。失敗についても問題解決に真摯に向き合えるような環境を整える。また、達成感を味わえる場面を設けるように工夫する。
 - ・ 演習ではもとより、講義の時も、医療人としての倫理観に則った根拠を必ず説明するようにする。
 - ・ 医療職としてのアセスメントスキルを磨くため、探究する心を育つよう「楽しさ」「面白さ」を伝える。
4. 今年度における教育方法改善の取り組み
- ・ 「キャリアコンサルタント」国家資格取得（2023年9月）
「ワーキングキャリアプランニング」キャリア教育授業および就職活動など、教育や指導に活かすため、専門的な知識・スキルを修得し、今後の学生支援に活用する。
 - ・ 演習では、3年生SAによる学習を取り入れることで、相互の学習効果を期待した。
 - ・ 「医療面接」では、毎回学生に授業感想を記入させて、学修への希望・要望などを確認した。
5. 今年度の学生による授業評価より
- ・ 「歯科予防処置論」「医療面接」「子どもの心理学」において、良い点は「国試の問題を解く課題がよかった」「課題が毎回授業内容に合わせていた」「小テスト（国家試験問題）」との記載があり、歯科予防処置論は2年前から導入した課題であるが、次年度も事後学習の課題は継続する予定と考えている。しかし、「問題を書かなくてはいけないことに自由度がない」という意見もあり、課題提示の方法に工夫と学生への理解を深める必要があると感じた。

- ・ 演習科目では、「すぐにわからないところを教えてもらえて即時に解決できた」「教員が多く見てくれた」「実践してもらえた」など、教員の関わりを求められていることが反映されていた。技術的なスキルを習得する演習では限られた時間の中で個々への対応が求められ、アクティブラーニング活用も含めて検討が必要である。

6. 今年度の成果

- ・ 国家試験対策において、今年度も全国平均を 5.1 ポイント高い 97.5%（新卒）であった。全国平均が年々下がっている（令和 5 年度 93.0%）なか、本学科は高い合格率を継続している。このことから、国家試験対策は常盤モデルとして効果を上げていると考えている。
- ・ キャリア教育科目において、「知的関心や好奇心を起す内容」3.61、「自分で調べ、考える姿勢が身についた」3.70 と学生評価が低く、授業展開の工夫が求められる。学生の自己意識改革を目標とする授業だが、学生のモチベーションが個々に異なるため展開が難しい。
- ・ 「歯科予防処置論」「歯科予防処置演習Ⅱ」では、スライドの改善を図った結果、学生からの評価に「見やすかった」「わかりやすかった」が複数あったので改善の効果はあったと捉えている。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 「歯科予防処置演習Ⅱ」において、クラス交代の授業順に偏りがあることの見解があった。特に、定期試験前、実技試験前のタイミングによる影響を訴えているが、個々によって捉え方の違いなど意見が分かれる。どちらにも配慮した対応が必要であり、事前の説明などの工夫が重要であると感じた。今後、実習室の環境設定などが複雑になるため、慎重な授業計画が必須である。
- ・ ICT 活用を演習や実習などで授業展開していく。レポート課題では評価を意識する学生の記載から授業に求める真実を認識するのは難しい。そこで、レポート課題とは別に ICT を活用することで学生からの視点を得られるようにする。
- ・ 実習においては、事前指導を対面方式で早期におこない、各実習の目的・目標を理解した施設実習が行えるよう準備期間を設け、さらに実習直前の事前指導をおこない、入念な支援をおこなう。

8. 社会的活動等

- ・ 公益社団法人 兵庫県歯科衛生士会 基礎研修委員会理事
- ・ 令和 6 年度卒後研修必修プログラム（兵庫県歯科衛生士会） 講師

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 兵庫県歯科衛生士会名簿、年間行事予定表
- ・ 定期試験、小テスト問題
- ・ 国家試験対策委員会総括

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	中村 美紀	所属学科	口腔保健学科	職名	講師
クラス担任	3年Aクラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	SD委員会委員、地域交流センターボランティア事業部委員、 臨地実習委員会委員、国家試験対策委員会委員、就職委員会委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○早期臨地実習	○	1	前期	必修	実習	対面	67
歯科診療の補助演習	○	1	後期	必修	演習	対面	67
○子ども学	○	2	後期	選択	講義	対面	64
子どもの歯科学	○	2	後期	必須	講義	対面	65
歯科矯正学	○	2	後期	必須	講義	対面	65
機能再建系歯科診療補助演習	○	2	後期	必須	演習	対面	66
基礎臨地実習	○	2	後期	必須	実習	対面	65
地域と協働 B	全	2	通年	選択	演習	対面	15

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策としての指導、および特別集中補講実施
- ・ 就職活動対策としての小論文等の添削指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

いのちに対する温かく豊かな感性と高い倫理観を持ち、口腔の健康を通して、人々の健康で豊かな生活実現を支援できる確かな医療技術と学識を兼ね備え、地域社会に加え国際的にも活躍できる専門職業人を育成することを教育の理念とする。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ グループワークを通じて臨地実習を振り返ることにより、実習の目的について深く熟考する時間を提供した。
- ・ 講義、および演習の事前・事後学習では、課題を授業に沿った具体的なものを提示し、自己学習を促した。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 実習では、期間を集中して実施することにより実習全体の効率化を図ることができた。

- ・ 「保育士資格」を取得（令和 5 年 9 月）し、保育のより専門的な知識を取得し、授業等に反映している。
5. 今年度の学生による授業評価より
- ・ すべての科目において概ね学科平均と同様、または高い評価を得ることができた。
 - ・ 「I 学生自身：授業以外の学習時間を 1 時間以上費やす」科目が多い中、「子ども学」では「学習時間が 30 分未満」の学生が最も多かった。次年度は課題の内容等を再考したい。
6. 今年度の成果
- ・ 短期大学部 3 年生に対し国試対策を 5 か月にわたり指導（うち 3 週間は特別集中補講を実施）した。その結果、2023 年度は合格率 97.5%（全国平均 92.4%）の成果をあげることができた。
7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策
- ・ 本年度よりすべての授業で対面授業を実施した。遠隔に慣れた学生の反応に不安があったが、「講義のスライドが見やすく、理解しやすかった」などの学生意見があり、ある一定の学修成果を得ることができた。但し、科目によっては「教室が狭い」、「教科書やノートを広げるのに少し狭いかなと思った。」など環境面での課題が学生意見として幾つか挙げられていた。教室不足は今後も続くと考えられるため、次年度は環境および空間配置などに考慮した授業を再考していきたい。
8. 社会的活動等
- ・ 一般社団法人食とコミュニケーション研究所にて「こどもの口腔機能と専門的支援」を講演。
 - ・ 関西障害者歯科臨床研究会にて「障害児（者）の口腔機能管理～お口ぼかんの与える影響について～」を講演。
 - ・ 一般社団法人食とコミュニケーション研究所において理事を務める。
9. 根拠資料（資料名のみ）
- ・ シラバス
 - ・ 学生による授業評価
 - ・ 口腔保健学科臨地実習要綱

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	水村容子	所属学科	口腔保健学科	職名	助教
クラス担任	2年生Aクラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	学生委員会委員、国家試験対策委員会委員、臨地実習委員会委員 国際交流センター委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
歯科予防処置演習Ⅰ	○	1	後期	必修	演習	対面	68
歯科予防処置演習Ⅱ	○	2	前期	必修	演習	対面	66
歯科予防処置演習Ⅲ	○	2	前期	必修	演習	対面	66
歯周疾患処置演習Ⅰ	○	2	後期	必修	演習	対面	65
まなぶるⅠ	基盤	1	前期	必修	演習	対面	405
まなぶるⅡ	基盤	1	後期	必修	演習	対面	408
子ども学	○	2	後期	選択必修	講義	対面	64
国際理解	基盤	1	前期	選択	講義	対面	60
早期臨地実習	○	1	前期	必修	実習	対面	67
基礎臨地実習	○	2	後期	必修	実習	対面	66

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国際理解学生企画の運営、指導
- ・ 国家試験対策
- ・ リカレント教育
- ・ FAST（学科内の救命救急講習および駒ヶ林中学校での講習指導）
- ・ ネパール交換研修参加学生の発表スライド指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目では、歯科衛生士を養成するために、歯科予防処置の実習をしながら、知識と技術を身につけ、医療現場で対応できる実践力を養成する。特に、歯科予防処置は、歯科衛生士の仕事の中でも重要な役割を占めており、手技と知識の両方を兼ね備える必要がある。そのため、知識に基づいた技術・手技を習得できるよう学生を育成したい。

また、在留外国人の多い長田区において、国際理解や国際交流は非常に重要であると考えている。英語の得意不得意に関わらず、少しでも外国人と共生するという意識を持てるよう、自身の経験を伝えながら学生自身が自分事として国際交流を捉え、外に目を向けることができるようにしていきたい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 演習では相互実習を通して、より実践に近い形での実習をすることで、学生の理解を深めるよう努めた。
- ・ 国際理解の講義では、ワークショップを通して、国際交流や多文化理解を自分事として捉え、実生活においても共生する力を身につけられるように努めた。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 「歯科予防処置演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」では、基本に忠実にということを常に学生へ伝え、自身の健康および患者の安全を守るための施術時のポジショニングの重要性および器具の把持方法について、昨年度以上に注力して指導に努めた。
- ・ 「国際理解」の科目では、講義だけでなくワークショップを実施することで、より身近に国際交流、多文化理解を感じられるようにした。さらに、学生に国際交流企画を実施させることで、企画運営のノウハウや、留意点、実際の運営を通して国際交流に対する学びを深められるよう努めた。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 演習科目では、おおむね高評価を得ることができていた。その中でも、不明点を教員が実践し、実際に見本を見せることで即時に解決できる点や、相互実習での技術の向上の実感が挙げられていることから、今後も相互実習を通して、実践に即した技術と知識の向上に努めていきたい。
- ・ 演習科目では、改善すべき点として、実習室の開放等が挙げられている。こちらに関しては、今後検討し、必要に応じて実習室を開放し実技練習できるよう努めたい。

6. 今年度の成果

- ・ 国家試験対策として、9月末から約5か月にわたり模試や指導を実施した。さらに、最後の1か月はほぼ毎日国家試験対策委員が交代で少人数の勉強会を開き、受験生の合格に向けて指導した。その結果、77名が合格することができた。
- ・ 学生企画の国際交流イベントでは、15名定員の募集人数に達したため募集フォームを閉鎖したが、その後GCCに直接メールでの応募連絡が3名あり、今回はお断りをする事となった。また、イベント当日は8名の参加があり、学生7名がそれぞれの役割をしっかりと果すことができ盛況に終了することができた。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 演習科目で、実技に関して実際に見本を見せることで理解を深めることができる学生がいた一方で、教員が指導している点が、自分の理解と違った場合に納得できないまま終わってしまうことが考えられた。1人に対して多くの時間を費やすことも難しい状態ではあるが、次年度からは説明に納得できていないのであれば授業終了後等に質問できる環境設定をしていくことが必要であると考えている。

8. 社会的活動等

- ・大学内歯科診療所の診療担当
- ・大学内歯科診療所でのウクライナ難民歯科健診
- ・地域（長田区）や KICC と協力しての国際保健室
- ・本学子育て支援施設での歯っぴー相談会
- ・留学生を対象とした、本学学生との交流イベントの企画運営

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ テスト問題

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	浅枝 麻夢可	所属学科	口腔保健学科	職名	助教
クラス担任	1年生 B クラス担任	クラブ顧問			
委嘱委員・職務	入試委員会委員 合否判定部会委員 臨地実習委員会委員 すこラボ（健康生活研究所）委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
早期臨地実習	○	1	前期	必修	実習	対面	67
歯科衛生士論Ⅱ	○	2	前期	必修	講義	対面	66
口腔衛生管理演習	○	2	前期	必修	演習	対面	66
基礎臨地実習	○	2	後期	必修	実習	対面	66
ライフステージ別 口腔健康支援演習	○	2	後期	必修	演習	対面	65
歯科保健指導演習Ⅳ	○	3	前期	必修	演習	対面	78
海外研修	○	3	前期	選択	演習	対面	12
口腔保健特論Ⅱ	○	3	後期	選択	講義	対面	81
地域口腔保健支援実習Ⅱ	○	3	通年	必修	実習	対面	78
子どもの歯と健康	E	3	後期	選択	講義	対面	55
まなぶる▶ときわびとⅠ	基盤	1	前期	必須	演習	対面	405
まなぶる▶ときわびとⅡ	基盤	1	後期	必須	演習	対面	408

(2)準正課、正課外の教育活動

特になし

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

自分自身で考えて行動し、積極的に学び、課題を解決する能力を持った学生を養成したい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ ライフステージ別口腔健康支援演習では、歯科衛生アセスメントや計画案の作成に時間を費やすため、事例の提示と簡単な説明のみを行い、作成していく中で出てきた質問に答える形式の授業を行った。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 歯科衛生士論Ⅱでは、授業後にアンケートを行い、次回の授業で良い感想の紹介や質問への回答を行い、双方向のやり取りに努めた。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 歯科衛生士論Ⅱでは、穴埋めの授業資料について、概ね高評価だった。

6. 今年度の成果

- ・ 歯科保健指導演習Ⅳでは、媒体作成に必要な物品の準備を行ったが、「不十分だった」という意見があった。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 歯科衛生過程の演習において、「解答がほしかった」という意見があった。一例の提示を検討する。

8. 社会的活動等

- ・ 子育て支援施設「KIT」「ときわんモトロク」「ときわんノエスタ」にて歯ッピー相談会（乳幼児対象）
- ・ 神戸常盤大学附属ときわ幼稚園にて口腔機能評価
- ・ 日本健康体力栄養学会「健康体力栄養アドバイザー」資格審査委員会委員

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業資料（PowerPoint 穴埋め資料、歯科衛生過程フォーム）

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	西保 亜希	所属学科	保健科学部口腔保健学科	職名	助教
クラス担任	1年Aクラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	教務委員会 委員 臨地実習委員会 委員 ライフサイエンスセンター 委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
口腔衛生学	○	1	前期	必修	講義	対面	67
早期臨地実習	○	1	前期	必修	実習	対面	67
生化学・栄養学	○	1	後期	必修	講義	対面	67
微生物学・免疫学	○	1	後期	必修	講義	対面	67
歯科理工学演習	○	1	後期	必修	演習	対面	68
歯科予防処置演習Ⅰ	○	1	後期	必修	演習	対面	68
歯科予防処置演習Ⅱ	○	2	前期	必修	演習	対面	66
栄養指導	○	2	前期	必修	演習	対面	66
基礎臨地実習	○	2	後期	必修	実習	対面	66
子どもの食と栄養	○	2	後期	選択	講義	対面	62
口腔保健特論Ⅰ	○	3	後期	選択	講義	対面	83

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 学科教務委員として学生の履修指導を行った。
- ・ 国家試験対策として、学生の個別指導を行った。

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門基礎科目では、医療現場において根拠に基づいた説明が出来る知識を有した学生を育成する。
 専門科目では、専門基礎科目で修得した知識を使って適切な対応を考察し、チーム医療の一員として責任感を持って行動できる学生を育成する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 講義科目において、対面授業で行った授業資料や参考資料をオンライン上で共有し、学生が繰り返し学修できる環境を整えた。また、授業開始前から授業時の資料を共有しておくことにより、反転授業が可能となった。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 前年度の学生による評価では、「授業時の重要事項をまとめた資料が試験勉強時に役に立った。」という意見が見られたため、今年度は学生自らが記載する様式に変更して、知識の定着度を高めるよう取り組んだ。
 - ・ 専門基礎科目は範囲が広く、理解すべき事項の把握が難しい場合ある。改善策として、毎回の授業後すぐに小テストを実施し、各授業で身に付けておくべき知識を能動的に理解できるよう取り組んだ。
5. **今年度の学生による授業評価より**
- ・ 講義科目では「国家試験に出たところや大事なところを教えてくれてよかった。」「教科書に載っていない写真や実際の写真があって関連付けて覚えることができた。」という声がみられ、概ね高評価を得ることができた。
 - ・ 授業以外の学修時間が少ないため、学生が反復学修できるように環境を整えることが必要である。
6. **今年度の成果**
- ・ 講義科目において、各授業で小テストを定期的実施することで学生の理解度の把握ができた。理解度の低い箇所に関しては、再度解説を取り入れるなどして学生が自ら足りない知識を把握して身に付けることを促進した。その結果、学生評価の「授業内容」および「授業評価」において平均 4.7/5 を得ることができた。
7. **今年度の課題と次年度に向けた改善策**
- ・ 講義科目においては、授業時間外の学修が少ない傾向がある。学修範囲も広いと、学生自身が効率よく時間を使用できるように、授業で用いた資料や参考資料は随時オンラインにて共有する。また、低学年の担当科目が多いため、国家試験前まで知識の定着を見据えて視覚的にも分かりやすい授業の実施に努める。
8. **社会的活動等**
- ・ 日本歯科衛生学会倫理審査委員会委員および利益相反委員会委員として、研究倫理委員会に参加し、日本歯科衛生士会員から申請された研究倫理審査を行っている。随時申請される日本歯科衛生士会員による研究倫理審査申請書類作成に係る添削や指導を行い、歯科衛生士による研究活動の普及に従事している。
 - ・ 日本歯科衛生学会企画第二委員会委員として、日本歯科衛生学会における専門領域別・研究集会の開催と運営に携わっている。また、専門分野に関する卓越した知識や技術、研究活動を推進できる者として専門歯科衛生士制度を確立するために学会委員会活動に従事している。
 - ・ 神戸常盤大学歯科診療所において、歯科衛生士として臨床業務に従事している。日本歯周病学会において、担当患者の症例発表を行った。また、臨地実習の場としても歯科診療所を活用し、実際の患者対応を通じた教育を行った。

- ・ 神戸常盤大学が運営する地域子育て支援施設 KIT「ときわんクニヅカ」、「ときわんモトロク」において、乳幼児の親子を対象とした歯科相談会を毎月2回開催し、歯科衛生士として従事した。
- ・ 企業歯科健康診査の計画および運営を行った。健診と同時に歯周病原細菌数を計測しており、継続的な実施を予定している。今後は研究発表へ繋げていくことを考えている。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業時の配布資料および動画

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	鈴木 志津枝	所属学科	看護学科	職名	教授 兼 副学長
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	SD 委員会委員 運営委員会メンバー、学長会議メンバー 看護学科リカレント教育を担当				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数（担当学生数）
○看護研究方法論	N	3	前期	必修	講義	対面	84
○家族看護学	N	3	前期	選択	講義	対面	28
○法と看護	N	3	前期	必修	講義	対面	83
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	81(6)

(2) 準正課、正課外の教育活動

特に記載する準正課、正課外の教育活動はない

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目（看護研究方法論、家族看護学、看護学研究）では、的確な看護判断と実践のための基礎的能力を養い、現代のヘルスケアニーズに応じ得る資質の高い看護専門職業人を育成する。特に研究科目では看護現象に誠実に向き合い、課題を見出し、研究的に問題解決していく態度を育成したい。専門基礎科目（法と看護）では、医療の現場で求められる看護に関連する法的知識を学修することで、看護の対象の基本的な人権を擁護する役割を担える態度を育成したい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- 看護研究方法論では、看護実践の問題を研究的な態度で解決する能力を養うために、臨床実習時の臨床上の疑問から研究計画を立案できるように、知識の提供と共にグループワークを取り入れ、グループでの研究計画書の作成を行えるようにした。
- 家族看護の授業では、臨床実習で患者家族に出会うことがほとんどなかったため、患者家族のイメージがつきにくかったため、講義と事例のグループワークを組み合わせ、患者家族の理解と援助方法の理解に努めた。
- 法と看護の授業では、看護職の基盤となる法規や関係法規の講義を行うと共に、人権問題や終末期医療、移植医療、生殖補助医療、自殺対策基本法などに関してグループでのディスカッションを組み込み、看護師としての職務遂行に伴う法的責任と法を守る意義を学習できるように努めた。
- 看護学演習では、学生の臨床課題に基づき、研究計画立案、実施、研究論文の作成を学生の状況に合わせて個別に指導した。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 学生に理解を深めてもらいたい内容に関して、事例を用いたり、グループディスカッションを取り入れたりして、考え方や知識の理解が深まるように工夫した。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 「看護研究方法論」の科目においては、グループで看護研究計画書の作成を行ったが、学生から「難しい」「文献検討や文章の作成がこれほど大変なのだということが分かった」などの意見がみられた。授業時間内にグループワークを行えるように計画し実施したが、グループワークの時間不足や深まり不足が否めず、学生にとって研究計画書の作成に関して理解できたというよりも、難しさや大変さにつながったと考える。次年度には研究計画書を実際に作成することに重点を置かず、研究計画書作成過程の考え方の理解を深めていくように工夫しようとする。
- ・ 「家族看護学」の科目においては、できる限り事例を取り入れて理解できるように授業を展開したが、事例があつてわかりやすかったことや事例をグループワークで考える時間があつたことなど、肯定的な評価が得られた。家族看護学は学生にとってイメージしにくいと考えるので、次年度も出来るだけ、事例展開やグループディスカッションを工夫したいと考える
- ・ 「法と看護」の科目においては、毎回、テーマを決めてグループディスカッションを取り入れたが、他学生の意見が聞けたことや自分お考えを深められたことに関して肯定的な評価が得られた。次年度もディスカッションを取り入れていこうと考える。
- ・ 「看護研究方法論」「家族看護学」「法と看護」の科目において、パワーポイント作成に関して、字数の多さや何が重要なかわからないという意見があり、次年度にはパワーポイントの作成に関して、わかりやすいパワーポイントの作成を工夫したいと考える。また上記 3 科目の評価分野の「学生自身」の点数が学科平均より低く、授業以外の学習時間が低いことが分かる。次年度には自己学習が時間をとれるように、授業後のレポートや小テストを取り入れるなど、工夫したい。

6. 今年度の成果

- ・ 今年度、初めて担当した科目であつたため、昨年度と比較することはできないが、今年度の授業を通して本学学生の理解は深まったので、次年度に向けての課題が見えてきたと考える。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 今年度の課題として、看護研究方法論の授業で学生から難しいとの評価があつたので、次年度はわかりやすい授業の工夫が必要である。特に重要な点は繰り返し説明することが必要と考える。

8. 社会的活動等

- ①「一般社団法人日本看護教育評価機構」監事
- ②「大学改革支援・学位授与機構」大学機関別認証評価委員会委員
- ③令和 5 年度第 2 回次世代の九州がんプロ養成プラン講演会「終末期がん患者と家族のケア：グリーンケア」
WEB 開催の講師、参加者は看護師、看護教員、看護学生等 179 名
- ④「神戸常盤大学リカレント教育」がん看護研修会（講師及び企画・運営担当 参加者 8 名
看護研究研修会講師及び企画・運営担当 参加者 12 名

- ⑤兵庫医科大学大学院看護学研究科非常勤講師「看護理論」、看護学部非常勤講師「看護学概論Ⅱ」
 高知県立大学大学院看護学研究科非常勤講師「看護学の動向と展望」
 島根大学大学院医学系研究科看護学専攻 非常勤講師「家族看護援助論」

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布資料
- ・ テスト問題
- ・ グループワーク資料

教員名	塩谷英之	所属学科	看護学科	職名	教授
クラス担任			クラブ顧問		
委嘱委員・職務	保健科学部学部長 すこラボ研究所長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○看護解剖生理学Ⅰ	N	1	前期	必修	講義	対面	93
○看護解剖生理学Ⅱ	N	1	前期	必修	講義	対面	93
○症候論Ⅰ	N	2	前期	必修	講義	対面	93
○看護病理・病態学	N	1	後期	必修	講義	対面	99
臨床病態学Ⅱ（病態解析）	M	3	後期	必修	講義	対面	83
いのちと共生	基盤	1	後期	必修	講義	遠隔	392

(2)準正課、正課外の教育活動

なし

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目では医学の基礎となる解剖・生理学を単に暗記するのではなく、しっかりと理解し、臨床現場でその知識を活用できる学生の育成を目指す。

基礎科目では医療従事者として必要な「いのち」の尊さを学ぶことを目指す。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 教育指導法では解剖・生理学ならびに疾病の病態の仕組み及び働きの理解を促進するために効果的な図を作成し、理解を含めた。
- ・ 授業前半の20分程度、独自に作成したその日の授業の summary 動画を見せ、その後授業を行う形式を用いた。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 前年度の学生評価では動画 summary を見せ、その後解説する形式は「良くわかる」という評価を受けたので今年度は1年生の専門教科はほぼその形式に改善した。
- ・ 授業の終わりのまとめをその日学んだ器官の絵を描いてまとめるという形式に変更した。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 総合評価で各教科概ね4.5前後の評価を得た。また授業形式は「わかりやすく、スライドもわかりやすい」と好評であったため今後もこの形式を継続する。

6. 今年度の成果

- ・ 解剖生理、病態学などは単に覚えるのではなく、体の仕組み、働きをしっかりと理解することが大切だと強調してきたが、テストの問題の結果などから理解度が深まっている印象を受けた。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 学生評価において授業内容、方法、総合評価などは比較的良い結果であったが、学生自身が授業以外に学修した時間が少なかった。この点を改善するために次年度はレジュメを1週間前に配布し、前もって予習ポイントを示し、さらなる学修時間の増加を図る。

8. 社会的活動等

- ・ 兵庫県国民健康保険団体連合会データヘルス評価・支援委員会副委員長
- ・ 全国健康保険協会兵庫支部健康づくり推進協議会委員
- ・ 三田市健康審議会会長

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

教員名	尾崎雅子	所属学科	看護学科	職名	学科長
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	運営委員会委員、学長会議委員、学園一体化推進協議会委員 入試委員会 合否判定部会委員 看護学部開設準備				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○看護学概論	N	1	前期	必修	講義	対面	98
○基本看護技術IV	N	2	前期	必修	演習	対面	94
基本看護技術 I	N	1	後期	必修	演習	対面	98
○医療・看護特論 II	N	4	後期	必修	講義	対面	80
○看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	81
IPW（多職種連携）論	R	3	後期	必修	講義	対面	76
臨床技術入門	R	1	後期	必修	演習	対面	85
いのちと共生	基盤	1	後期	選択	講義	遠隔	392
養護概説	N	3	前期	選択	講義	対面	43
○看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	98
○基礎看護学実習 I	N	1	後期	必修	実習	対面	98
○基礎看護学実習 II	N	2	前期	必修	実習	対面	92
○課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	80

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 新生オリエンテーションでの「市民救命士講習」にインストラクターとして活動

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

看護に関心をもち、対人援助職であることから、“いのち”の大切さや人への関心をもってほしい。入学当初は知らないことを知る愉しさを感じながら学んでいるように思われ、漠然とでも自己の将来像を描き、意欲的であるように感じる。しかし、学年が進むにつれて単位をとることが目的になりがちで、視野が狭くなっていくことが心配である。1年次に感じた看護への関心や自己の将来像に向けて、今何をすればいいのか課題に対して自律的・主体的に取り組むことができる学生を育てたい。また、学生が4年間を通して少しずつ自分の成果を実感して、自信をもてるように支えていきたい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 「看護学概論」（1年次）では、授業の初めと最後に看護についての自己の考えをレポートにしてもらっている。初めのレポートを最後に見ることで、自分の考えの変化を確認できるようにした。
- ・ 個別に取り組む課題について、数名だけでも、全体で考えを共有するようにした。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 「看護学概論」（1年次）ではノートを作成し、授業を振り返り、まとめておくように示した。
- ・ 「基本看護技術Ⅳ（看護過程）」では紙上患者を用いた演習を少人数で行い、グループ間での意見交換の時間を例年より多く持つようにした。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ どの科目も学科平均と比較すると同等か、それ以上の評価結果であった。
- ・ 「Ⅱ、授業内容」、「Ⅲ授業方法」、「Ⅳ学修成果」についてはよい成果であったが、「Ⅰ学生自身」のところは低い。特に授業外に学修した時間が30～1時間程度になっており、授業前後の学修が少ない。これは授業に対して受け身の姿勢の表れだと考える。

6. 今年度の成果

- ・ 他の学生との学習成果の発表・共有については学生は関心を示し、意欲的に参加していた。
- ・ 授業後のノート作成については、資料をまとめているものもあったが、疑問などに対して調べたり、自己の意見や感想を記入している学生が昨年より多く見られた。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

事後の学修時間は重要であるが、まず授業への参加がスムーズになるためには、事前の学修が必修である。事前課題の準備をさせて、授業への導入に役立てていきたい。グループワークをする際には、学生の準備状況を整えるためにもグループビルディングにも時間をとり、効果的に進められるようにしていく。さらに「基本看護技術Ⅳ（看護過程）」ではまた学生の思考プロセスにも注目し、学生の思考に沿った記録用紙などの補助教材の検討をする。

8. 社会的活動等

「市民救命士講習」FASTのインストラクターとして活動（駒ヶ林中学）

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

教員名	岩越 美恵	所属学科	看護学科	職名	教授
クラス担任	なし		クラブ顧問	なし	
委嘱委員・職務	教職支援センター委員、看護学科養護教諭課程委員長、ストレスチェック実施者				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○健康科学総論	N	1	前期	必修	講義	対面	98
○養護概説	N	3	前期	選択	講義	対面	43

○人体のふしぎ	全	1	前期	自由	講義	対面	189
○特別支援教育	E	3	前期	必修	講義	対面	85
健康スポーツ科学Ⅰ	全	1	前期	必修「	講義	遠隔	380
○特別支援教育	N	2	後期	選択	講義	対面	28
○症候論Ⅱ	N	2	後期	必修	講義	対面	92
○養護実習指導	N	4	後期	自由	講義	対面	7
○養護実習Ⅱ	N	4	後期	自由	実習	対面	7
○教職実践演習	N	4	後期	自由	演習	対面	7
○養護実習Ⅰ	N	2	後期	自由	実習	対面	7
臨床病態学Ⅱ	M	3	後期	必修	講義	対面	83

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 無し
2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）
 - ・ 学ぶ楽しさ、
 - ・ 社会への関心
 - ・ 様々な人と交わる関心の広がり
 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）
 - ・ 自分で興味を持ったテーマについて調べるレポート
 - ・ 新聞やニュースからの話題を発表
 - ・ 特にあまり交わることのなかった障害のある人たちとのリアルな交流
 4. 今年度における教育方法改善の取り組み
 - ・ 前期は5月初めから8月終わりまで療養のため教育に携われなかった。
 - ・ 上記2，3については前年度と同じ
 5. 今年度の学生による授業評価より
 - ・ より学生の能動性をあげるところを改善したい
 6. 今年度の成果
 - ・ 教育系の講義は苦手であったので、今回私の療養期間に代行してくださった評価の高い教育系の先生方の講義を次年度もオムニバスで入っていただき、私自身それに学びたいと思っている。
 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策
 - ・ 教育学部の講義（6.を参照）
 - ・ よりアクティブにするためのグループワークの授業内活用や、自分で選んだテーマについてのレポートの増加

8. 社会的活動等

- ・ 西宮市社会福祉協議会「青葉園・ふれぼの」の運営委員
- ・ 三木市教育センターにおける教育相談と健康増進課での発達相談
- ・ 長田区の NPO 法人 WITHUS の理事
- ・ ときわ幼稚園での保護者カウンセリング

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 障害のある人たちの授業参加（ゲストスピーカー依頼文）

教員名	庄司靖枝	所属学科	看護学科	職名	教授
クラス担任	なし		クラブ顧問	なし	
委嘱委員・職務	看護学科就職委員会（委員長） 看護学科研究倫理委員会（委員長） 看護協会 まちの保健室：子育て支援				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○在宅看護学概論	N	2	前期	必修	講義	対面	95
○小児看護学概論	N	1	後期	必修	講義	対面	98
在宅援助論	N	3	後期	必修	演習	対面	101
在宅看護特性論	N	2	後期	必修	演習	対面	93
看護学研究	N	4	前期	必修	演習	対面	81
医療・看護特論Ⅱ	N	4	後期	必修	講義	対面	80
IPW 論	NM	3	前期	必修	講義	リモート	
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習		
地域活動基礎実習	N	2	前期	必修	実習		
健康支援実習Ⅰ（在宅）	N	3	後期	必修	実習		
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習		

* 実習に関しては既存の様式では評価が困難なので、この評価は使用していない。

(2)準正課、正課外の教育活動

2023 年度は小児看護学領域についても兼任していたため、看護対象論Ⅴ（小児）の演習や母子支援実習Ⅰの補佐、課題別総合実習においては小児看護領域の子ども病院への実習指導も行った。

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

育てたい学生像：自ら考えることのできる学生を育てる

医療の進歩に伴い、看護学が求められる知識や技術は毎年更新していかなければならない。そのため、学生は目の前の現象をとらえ、どのように解決に向けて考えデザインできるかを問われていると考える。

また、学生は自信が持てず承認欲求が強い為、学生の弱みと強みを理解し支援することが重要である。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 概論⇒特性論（対象論）⇒援助論⇒臨地実習と学んでいくが、概論（1~2年生）の時から、ニュースに触れさせて社会状況と看護がどのように関わっているのかをレポートの課題にしたり、テストに出題したりするなど、考えまとめていく力を養っていくよう支援した。その結果、臨地実習でその考える力を活用して患者に立ち向かえることを目標にした。
- ・ 学生は情報技術（IT / Information Technology）を利用し、携帯端末やパソコンなどから検索することに長けている。教育DXや医療DXの向上が言われる昨今において、この学生の特徴を強みと考える。そこで健康支援実習Ⅰ（在宅）では2023年度からパソコンを用いて学生と教員、施設の指導者がクラウドでつながり、学生の実習記録を教員・指導者間で閲覧でき、協同して指導できる体制を作った。看護においては患者に対する問の答えが1つではなく、いろいろな回答があることを協同して実戦の場面で指導できるように整えた。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 授業においては昨今のニュースを例に挙げ、学生に質問したり、（学生自身）の点数を上げるため、ニュースと看護を交錯させたりしながら自らの力で考えることを目標にレポート課題を出した。テストにおいても設問に自分の考えを述べる問題を出題した。
一方、在宅看護学概論は本年度から受け持ち在宅看護に対する社会の変化を中心に授業を行った。在宅看護を今後どのように特性論や援助論に繋げて行くのかについても説明した。

5. 今年度の学生による授業評価より

1) 小児看護学概論について

分野	I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習効果	V 総合評価
学科平均	3.8	4.5	4.5	4.4	4.5
当科目平均	3.8	4.8	4.7	4.6	4.7

2) 在宅看護学概論について

分野	I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習効果	V 総合評価
学科平均	3.8	4.4	4.3	4.3	4.4
当科目平均	3.5	4.4	4.5	4.3	4.4

6. 今年度の成果

1) 小児看護学概論

「毎回学生が抱いた疑問を丁寧に答えてから授業に入るシステムがとてもよかった」と学生の授業評価に記載があった。毎回の授業後取る学びと質問は回が進む毎に増えていき、学生の考えを知ることや授業の理解も推察する資料になった。また、学生の自由記述から、丁寧に答えることが学生の小児看護への関心につながったと考える。

2) 在宅看護学概論

学生の評価の自由記述から、この授業でいろいろな視点からの在宅を考えることはできていた。また、皆が授業に参加できるように全員に意見を聞くことも取り入れたことは「みんなの意見が聞けて、自分の考えの足しになる」という評価があった。しかし、(学生自身)について意欲的に参加はしてくれていたが、授業以外に学修した時間が少なかった。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

本年度(2023年度)は、小児看護学領域に関する授業と実習への支援も行い、加えて在宅看護学領域

の授業と実習に野支援を行った。しかし2024年度は在宅看護領域に軸足を向けて堅実に教育を行っていきたいと考える。特に、在宅看護領域においては在宅看護概論から在宅特性論、在宅援助論、そしてその集大成の健康支援実習Iがあるが、まずこの流れが円滑になるように授業計画を領域の中で協同していく。特に在宅看護概論は今年度からのカリキュラム変更を受け、地域・在宅看護学と視野を広げ

看護学を考える单元であるので、時代背景や看護学の変化、ケアを受ける人びとの多様化を教授する。

学生が自らの考えを明らかにする場(グループワークやディスカッション)を確保し、また振り返ることができるよう課題を付しながら授業を進める。

教育DXや医療DXを考えたICTを使った健康支援実習Iを振り返り、学生にとって使いやすく、かつ指導者と協同して学生支援をするために工夫を加える。また、学生と指導者からアンケートを取り、

ICTを使った実習をさらに発展させる。

8. 社会的活動等

- ・本年度は、まちの保健室の子育て支援(看護協会)を大学の健康フェアで行った。
- ・兵庫県立こども病院を退院した子どものクリスマス会の準備や支援(こども病院で課題別総合実習を行った学生の参加とボランティア指導)

9. 根拠資料(資料名のみ)

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 学生配布レジュメ、授業資料
- ・ 定期試験問題

教員名	魚崎須美	所属学科	看護学科	職名	教授
クラス担任	—	クラブ顧問	—		
委嘱委員・職務	保健師養成課程委員会・委員長 教務委員会・委員 就職委員会・委員 研究倫理委員会・委員 国家試験対策委員会・委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○公衆衛生看護管理論	N	4	前期	選択必修	講義	対面	16
○保健医療福祉行政論	N	4	後期	選択必修	講義	対面	17
○公衆衛生看護学実習Ⅱ	N	4	前期	選択必修	実習	対面	16
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	4
公衆衛生看護学実習Ⅰ	N	3	後期	選択必須	実習	対面	12
○公衆衛生看護学概論	N	2	後期	選択必修	講義	対面	30
○健康教育の理論と方法	N	2	後期	選択必修	講義		30
○地域活動基礎実習	N	2	後期	必修	実習	対面	93
○地域包括ケア論	N	2	前期	必修	演習	対面	93
○地域看護学概論	N	1	後期	必修	講義	対面	100
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	—

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 保健師国家試験対策
- ・ 保健師採用試験対策として小論文やエントリーシートの添削指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

看護を基盤とした公衆衛生の専門職としての高い倫理観と、専門知識・技能、そして慈愛の心をもった保健師を養成したい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 講義では事例を用いて授業を展開し、机上学習と実践を関連させながら具体的に理解できるよう指導する。
- ・ 演習ではディスカッションを多く取り入れて、自己の考えを言葉にして伝える力、相手の立場になって考える力、言葉にできない心情にも寄り添う力を育てる。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 保健師国家試験対策の見直しを行い、保健師国家試験合格率を100%に回復させる。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 学生による授業評価からは、概ね目標を達成できたと考える。
- ・ 全般的に学生自身の学習時間が短めであった。学修課題のあり方について考えていきたい。

6. 今年度の成果

- ・ 今年度の保健師国家試験合格は100%となった。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 学生自身の学習時間を達成感のあるものにできるように、学習課題を工夫していきたい。

8. 社会的活動等

次年度、兵庫県看護系大学協議会公衆衛生看護実習委員会における役割を担う。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配付資料
- ・ 学生レポート
- ・ 学生の実習記録
- ・ テスト問題

教員名	十九百 君子	所属学科	看護学科	職名	教授
クラス担任	4年生		クラブ顧問	茶道部	
委嘱委員・職務	健康保健センターセンター長、国家試験対策委員長、学生委員、ハラスメント委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○基本看護技術Ⅰ	N	1	後期	必修	演習	対面	98
○基本看護技術Ⅱ	N	2	前期	必修	演習	対面	93
基本看護技術Ⅲ	N	2	前期	必修	演習	対面	94
○看護教育論	N	4	前期	選択	講義	対面	51
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	81
臨床技術入門	R	1	後期	必修	実習	対面	85
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	98
基礎看護学実習Ⅰ	N	1	後期	必修	実習	対面	96
基礎看護学実習Ⅱ	N	2	前期	必修	実習	対面	98
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	81

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策に対する学生支援
- ・ 科目に関連する学生の自主技術練習の学生支援
- ・ 進路に対する不安等に対しての学生支援
- ・ 学生が企画・運営する行事（大学祭・新入生オリエンテーション等）の学生支援

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

育てたい学生像は、いのちに対する豊かな感性と知性、そして臨床力を備えた看護専門職に育つ学生である。看護の対象である人間は、その人の生きてきた歴史の中で培われた生活習慣生

活信条・価値観を積み上げながら生活している。その人の生活には、事実としての生活そのものとその人にとっての意味がある。その意味は、一人ひとり異なり、相手に関わることでその人の生活の意味を初めて理解することができる。常に相手をわかろうとする姿勢が求められる。その人の生きてきた歴史の中で培われた生活は、その人自身にとっても無意識な営みであるため、生活の営み自体に支障や制限が生じることは、その人にとっての苦痛や苦悩に繋がる。従って、看護の対象である人々が、最大限自己の可能性を發揮しその人らしい生活ができるように、人々の抱える苦痛や苦悩を受け止め理解する姿勢を培い、相手の状況を的確に把握し、最適な看護が提供できる臨床力を高める教育が必要となる。

本学科のカリキュラムは「看護学の基本→展開→臨床→発展と探究」の系統的なカリキュラム編成の中で臨床力を高めることに力を注ぐ。私が担当する「基本看護技術Ⅰ」「基本看護技術Ⅱ」は、1～2年次に開講する科目である。科目名の基本看護技術の「基本」は、一般的にそのものを成り立たせる、根幹として常に存在しているものを意味し、看護行為の基本となる知識・技術・態度を意味している。方法（ハウツー）としての技術ではなく、単なる理論のあてはめでもない。相手をわかろうとするかかわりを基盤に、知識・技術・態度、哲学や倫理観に基づいて行為を育て、臨床力を高める基本となる科目に位置づいていると考える。また、演習や臨地実習は、講義や学内で学んだ看護の知識を学生自身が、相手とのかかわり、つまり経験を通して省察し探究しながら、学びを深化・更新・湧出す知であり、方法である。常に学生が経験している行為や感情の動きに着目し、対話や発問から学生の経験の意味づけを重視したいと考える。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- 基本看護技術の授業方法は、各単元の基本となる教育内容を精選して授業方法（講義・演習）を決定し、さらに、担当教員間で教育内容・教育方法・科目の到達目標を検討・共有する。また、演習では事前に事例患者を学生に提示し、学生が事前学修に取り組んで演習に臨めるようにした。また、演習終了後、自らの経験を振り返り経験やスキル、マインドの成長に繋がるように、リフレクティブジャーナルを作成した。ジャーナルは、教員のコメントやそのコメントに対する学生のコメント返しの記載、学生自身が読んで次につながるように返却を意図的にした。さらに、ジャーナルの記載内容について、必要時、教員の面接指導を取り入れた。
- 学生自身が主体的に事前学修できるように、manabaを用いて動画を配信した。演習時の事前学修（事例患者の援助の必要性、援助の目標、援助方法とその根拠）・援助中の学修のまとめ、事後学修（評価・修正）は、自己学習ノートを活用するようにした。演習開始後、事前学修内容を基に演習学生グループ間での意見交換。さらに、援助中に援助の目標に対する評価、根拠の整理、各学生の気づき等の情報交換をして学修内容を整理する時間を演習時間内に確保した。
- 授業終了後、学生の授業感想・疑問点や質問に対応できるようにmanabaのアンケート機能を活用し対応した。
- 学生自身が五感を使いトータルに学修が深められるように、教員のデモンストレーションも教育方法に活用した。
- 学生の知識・技術等、自主的な学び方と看護専門職者としての態度を確認するために技術確認を実施した。
- ループリック評価を用いて、学生の自己評価を確認し授業に活用した（中間・最終）。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 前年度の基本看護術Ⅰ 学生による授業評価では「とても丁寧」「先生に聞きやすい環境」などや「もっと先生を増やし援助を見てほしい」の自由記載があった。学生自身が自己の経験を省察することで、新たな気づきを得て援助方法の改善へ繋げられるようにリフレクティブジャーナルにし、教員のコメントとそのコメントに対する学生のコメント返しや必要時、学生への面接指導を繰り返し、演習毎に、学生が自分自身の行為や感情をみつめられるように取り組んだ。
- ・ 前年度の基本看護技術Ⅱ 学生による授業評価では「先生達が考えた援助の必要性をもっと見せてほしい」という感想があった。基本看護技術の演習では、援助開始前・援助中・援助後の学生間の意見交換の時間を授業計画に入れ、自分達で学修したことや考えたことを整理し、主体的な学修ができるように取り組んだ。
- ・

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 「基本看護技術Ⅰ」の科目においては、学科平均点と当該科目平均を比較すると全ての設問について高評価を得る。学生の事前学修を基に演習学生グループで援助前・援助中・援助後に学生間の学びを伝え合う時間を確保することで、「看護師の役割を実際に学ぶことができた」「グループで協力して技術を身につけることができた」などの自由記載も得た。しかし、自己学習ノートの学修内容や整理、活用の仕方を確認すると学生間で差が生じていた。
- ・ 「基本看護技術Ⅱ」の科目においては、「教員間の連携」「抽象的な内容についての具体的な説明」が低評価であった。また、「教員により言っていることが異なる」や「演習中、患者役になりきると言われ、援助の実際を見ることができなかった」などの自由記載があることから、教員の説明が何を意図しているかが学生に伝わっていない状況、学生と教員間で認識のずれが生じていたのではないかと考える。
- ・

6. 今年度の成果

- ・ 学生の授業評価で「自分達で話し合いながら技術を学べた」等、学生の主体的な学修に対する自由記載が認められた。
- ・ リフレクティブジャーナルにしたことで、学生自身が自己の傾向を理解することからさらに相手の理解に広がる状況や援助技術の捉え方、倫理的な側面を通して具体的に援助技術の改善点を記載するようになるなど、教育による学生の変化が明らかになった。
- ・ 学生間で意見交換や情報交換、お互いに注意し合う姿が認められた。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 今年度は自己学習ノートを活用したが、ノートの使い方は過去の学生自身の学習方法に影響を受けていると考えられる。自己学習ノートを活用する場合、学生自身の学習方法を踏まえ支援する必要があると考える。
- ・ 今年度は、演習中に学生と教員間で認識のずれが生じる場面があった。次年度は学生の反応を見ながら、なぜそのような演習方法を計画するのか、教員の表現の違いは何に対する違いなのかや何を意味しているかを意識的に説明する必要がある。学生の反応を捉え学生の状況に応じて、対話と効果的な発問に力を注ぎたい。

・

8. 社会的活動等

- 鳥取県鳥取市認知症対応型 通所介護 ともの家 健康相談等ボランティア

9. 根拠資料（資料名のみ）

- シラバス
- 学生による授業評価（中間評価含）
- 基本看護技術 授業終了後の学生の自己評価（ループリックを用いた中間評価・最終評価）
- 基本看護技術 I リフレクティブジャーナル

教員名	島内 敦子	所属学科	看護学科	職名	教授
クラス担任	なし		クラブ顧問	なし	
委嘱委員・職務	自己点検・評価委員会（副委員長）、ときわ教育機構、 臨地実習員会（副委員長）、教務委員（教務主任）、高大連携				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○母性看護学概論	N	2	前期	必修	講義	対面	93
○看護対象論Ⅳ（母性・父性）	N	2	後期	必修	演習	対面	93
母性援助論	N	3	前期	必修	演習	対面	
医療・看護特論Ⅱ	N	4	後期	必修	講義	対面	80
臨床技術入門	R	1	前期	必修	演習	対面	
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	
○母子支援実習Ⅱ（母性）	N	3	後期	必修	実習	対面	81
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	81
看護学研究	N	4	通年	必修	実習	対面	81

(2)準正課、正課外の教育活動

- KIT における「卒乳・断乳教室」「祖父母教室」の開催
- 神戸大学周産母子センター開催「ハッピーかるがもの会」の協働企画
- 就職活動支援（エントリーシート作成・小論文添削・模擬面接など）

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

看護学科2年生への授業では、概念を学生自ら現象と関連付けて考える一步になるように、と考えて教授している。解答のみを相手（教員）から聞き出すのではなく、経過の中で見いだされる学び方を学生自ら考えるきっかけになるような授業構成にしたい。これは、看護専門職として対象を理解するうえで重要な感性を育てる過程と考えている。引いては、学生1人1人の感性を大事にし、学生各人の個性にあった教育つながることとも考えている。同時に学生自身が自分の感性や自分の持ち味を認め、一緒に学習する学生のそれも認めながら、それぞれの強みを生かして統合して協働する力を養えるようになってほしいと考えている。そのため、グループワークを多用し学生間での困りごととも学生たちが

自ら解決することを目指せるような支援をしたいと考え工夫している。

看護学科3年生への援助論の授業では、実習を前に、具体的な看護技術はもちろん対象に対する看護の意義を考えることができるように工夫している。母子支援実習Ⅱでは、臨床における看護の楽しさと知識・技術の統合の重要性、看護専門職者としての倫理感が育てられるように教授する。特に、専門の特性より「母子関係」「父子関係」「家族」に対する看護とともに、学生自身の「母子関係」「父子関係」「家族」を振り返り、人が生まれ育つ過程を大事にできる「人」となれるよう関わりたいと考えている。本学のテーマである「人のための人になる」ためには、学生自身が自分を大事に、周囲の人を大事に、して関係性を構築できるような「人になる」ことが看護には重要であると考え、それが伝えられるように教育していきたい。

看護学科4年生では、目の前にある就職を見据えて、社会人としての準備ができるような社会の中での実践力を見据えて社会性やコミュニケーション力を含め、「ときわコンピテンシー」を学生自ら成長できるよう関わりたいと考える。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ ディベートや屋根瓦教育・シミュレーションなどを利用して、学生が主体的に授業に関わることができるように工夫している。これについては、学生からも好評であり今後も続けていきたいと考えている。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 学生より評価があった授業の継続しつつ、授業までの事前学習と授業中の学習がつながるような最善を行った。具体的には、グループワークのテーマに関する事前学習をmanabaを利用して提出を求め、授業中はmanabaプロジェクトを使用して事前学習をグループ内で共有しグループワークを展開する。このことにより、グループ内での作業の偏りをできるだけ避け、また、事前学習内容を教員が確認したり、グループ内での役割などを観察することができる。同時に学生間にある不公平さをできるだけ避ける工夫を行っている。

5. 今年度の学生による授業評価より

学生からは、主体的に学習する習慣になったとも評価があり、効果があったと考える。

6. 今年度の成果

成果が明確ではないと考える。成績や授業評価も前年度と特に変化がみられていない。今後授業内容についての成果を見えるように検討したい。教員自身が授業成果を見えることで学生自身にも授業の効果を実感できるような成果が見える工夫をしてみたい。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

6. で示した通り、授業成果の「見える化」ができていない。「見える化」する工夫をし、学生自身も授業による成果を実感できるような工夫を考えていきたい。

8. 社会的活動等

- ・KITにおける「卒乳・断乳教室」「祖父母教室」を開催
- ・甲子園短期大学 性教育講義
- ・高大連携 福崎高校

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

教員名	柴田しおり	所属学科	看護学科	職名	特任教授
クラス担任	なし		クラブ顧問	なし	
委嘱委員・職務	看護学部開設準備室メンバー				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
基本看護技術Ⅰ	N	1	後期	必修	演習	対面	98
基本看護技術Ⅱ	N	2	前期	必修	演習	対面	93
基本看護技術Ⅲ	N	2	前期	必修	演習	対面	91
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	(4)
基礎看護学実習Ⅰ	N	1	後期	必修	実習	対面	(10)
基礎看護学実習Ⅱ	N	2	前期	必修	実習	対面	(12)

()は、担当学生数

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ なし

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

担当科目の特徴から、看護実践の基礎的な能力を培うことを理念とする。看護技術は、知識・技術・態度がバランスよく三位一体となって習得されることが重要であり、そのために必要な省察力を高め、倫理観を養うことを目指す。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- 1) リフレクティブジャーナルの活用：リフレクティブサイクルの理解度および、体験の分析状況に応じて個別に対応を続けた。
- 2) グループワーク・ロールプレイによる演習：チームとしての活動を学生が意識できるように関わ理、協同学習の成果が出るよう努めた。
- 3) plan-do-see のサイクルを意識したグループ学習の運営：計画の意図（根拠）を共有し、十分な思考のもとに実践・評価が必要であることを理解できるよう関わった。
- 4) オフィスアワーでの技術指導：個々の学生が自己の課題に気づくことができるように、行為の

意図を確認し、その意味を理解できるように関わった。

5) manaba を活用したミニレポートの内容を、次回の指導に活かすよう努めた。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

5. 今年度の学生による授業評価より

どの科目も概ね高評価であったと考える。#16（演習科目）教員間の連携・対応については、他の項目に比してやや低い傾向にあり、共同担当科目に生じやすい評価であった。

6. 今年度の成果

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善

着任年度であり、学生のレディネスや授業のねらいの把握が十分でなく、指導計画が適切でないことがあった。コロナ禍で高校生活を過ごした学生たちのコミュニケーションに関する常識の違いを痛切に感じ、看護者に求められる資質・価値の育成につながっているのか悩ましく感じることもあった。

次年度は、着任2年目であり、1年生科目を一度経験したこと、新2年生については1年生から関わることができたことにより、レディネスの把握は昨年より可能であると考えられる。しかし、新規担当科目（大学道場 miniゼミ、看護研究演習）もあるため、その時々学生の反応を注視して関わっていく。技術演習科目は、主担当者・授業者が変わる科目もあるため、科目の理解・学習のねらいをより詳細に理解するよう努める（授業ミーティング）。コミュニケーション能力の育成を含め、学生が目標を持って主体的に学べるようプロジェクト学習の活用を検討する。

8. 社会的活動等

- ・ 神戸看護学会評議員（編集委員会副委員長）
- ・ 神戸市看護大学リカレント教育プログラムにおいて「キネステティック」の講師として活動
- ・ 2023年度神戸研究学園都市公開講座「自分を守る 周りの人を守る～セルフケアから防災まで～」
（企画：神戸市看護大学）第3回「睡眠を整える 眠る門には福来たる！？」講師
- ・ 高齢者福祉施設において、「キネステティック」体験プログラムの実施および、介護・看護職員研修プログラムの企画に参加

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

教員名	岩切由紀	所属学科	看護学科	職名	教授
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	入試委員(副委員長)・合否判定部会 看護学科臨地実習委員会(委員長) FAST等企画運営ユニット				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
看護対象論Ⅱ（成人）	N	2	前期	必修	講義	対面	94
クリティカルケアⅡ	N	3	前期	選択	講義	対面	31
成人看護学概論	N	1	後期	必修	講義	対面	98
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	98
クリティカルケアⅠ	N	2	後期	必修	講義	対面	93
療養支援実習Ⅱ	N	3	後期	必修	実習	対面	78
療養支援実習Ⅲ	N	3	後期	必修	実習	対面	78
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	8/80
看護学研究	N	4	後期	必修	演習	対面	3/81
医療看護特論Ⅱ	N	4	後期	必修	講義	対面	80
臨床技術入門	R	1	後期	必修	講義	対面	85

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 心肺蘇生法実技演習：クリティカルケアⅠは授業科目のため、正課外で実施。
- ・ 就職先選定時の指導
- ・ FAST 新入生の市民救命士取得の指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目では、看護職者として基本となる看護の知識を体系的に教授し、筋道だった自らの理解に基づいて実践できる学生を養成する。実践では、現象を捉え適切に判断できる能力を身に付けること、

人として看護者として倫理的に判断し行動できる人材を育成する。看護を学ぶ上では、看護者の役割を知り、学ぶ楽しさや将来活躍する専門領域へつながるよう教育する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 学生の意欲を喚起し将来像を描くため、課題の中でも自由にテーマを選択しグループワークが出来るよう取り組んだ。
- ・ 療養支援実習Ⅲでは、学内演習の看護技術デモンストレーションを動画配信することで、事前学習時に繰り返し展開や手技が確認できるよう変更した。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 成人看護学概論では、概念の説明で多くの具体例を示した。
- ・ 可能な限り授業内容の想起と振り返り、理解状況を把握するため授業時間に課題の記述と提出を求めた。
- ・ 教科科目の指導では、関連する科目：クリティカルケア I の例では、臨床看護総論や慢性病看護論)の授業構成を連動して繰り返し学習できるよう展開を協働して組み換えた。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 担当した科目は概ね高評価をえている。
- ・ 成人看護学概論で概念の説明で多くの具体例を示したことにより、重要な要点が分かりにくいという意見が出ている。要点を明確に理解できるよう展開を修正する。
- ・ いずれの科目も、学生自身の平均点は 3.8 点である。その内訳では、「この授業に意欲的に参加した」は 4.27-4.76 点と非常に高いが、「授業以外に学修した時間」は 2.61-3.13 点と低い。グループワークを課した科目は授業以外の学習時間が確保されるが、多くは授業のみで学修が深まっていないと推測される。加えて、看護学科 1 年生、2 年生の必修科目においても欠席者が多い状況がある。

6. 今年度の成果

- ・ 成人看護学議論は昨年度平均 69.6 点から本年度 74.6 点へ上昇、看護対象論Ⅱは昨年度平均 81 点から本年度 73 点へ低下しているが、筆記試験とグループワーク評価等の見直しを行った結果、適正な評価となった。
- ・ 臨地実習科目は指導教員を補充しながら指導し、実習目標を達成でき単位修得が可能となった。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 授業の参加率を高めるよう興味・関心のわく授業内容や構成とする。
- ・ クリティカルケア I では、他の教科と連動した授業の構成に組み換えたが、看護を考える過程を理解していない学生が多く認められる。基本的な看護を考える過程が習得できるよう授業構成を再検討する。
- ・ 療養支援実習Ⅱ・Ⅲが 3 単位から 2 単位の实習に変更となる。実習要領ならびに臨地実習施設と連携をとり、変更カリキュラムをスムーズに進める。

8. 社会的活動等

日本救急看護学会評議員で調査研究委員を担当し、研究助成審査・代表を務め研究実施。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業資料、演習計画表
- ・ 成績評価

教員名	中田康夫	所属学科	看護学科	職名	教授
クラス担任			クラブ顧問		
委嘱委員・職務	教育研究推進センター ときわ教育推進機構 利益相反マネジメント委員会 情報インフラユニット 遠隔授業実施特命チーム 数理データサイエンス・AI教育（リテラシーレベル）実施責任者				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
まなぶる▶ときわびとⅠ	基盤	1	前期	必修	演習	対面	405
まなぶる▶ときわびとⅡ	基盤	1	後期	必修	演習	対面	408
○基礎統計学	基盤	全	前期	選択	講義	遠隔	264
○いのちと共生	基盤	全	後期	選択	講義	遠隔	412
○生命と倫理	基盤	全	後期	選択	講義	遠隔	378
○保健統計学	N	2	前期	必修	講義	対面	94
○臨床看護総論	N	2	後期	必修	講義	対面	92
○疫学調査法	N	3	後期	選択	講義	対面	23
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	3
医療・看護特論Ⅱ（医療専門職の動向）	N	4	後期	必修	講義	対面	81

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策（対面と遠隔）

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目では、質の高い看護職を養成するために、看護学や看護実践方法の知識・技能の修得とともに、臨床現場で対応できる実践力と職業倫理をもった学生を養成する。また、主体的・能動的に学ぶことができるようにしている。

基盤科目では、大学の学修、研究の基盤である論理的／批判的思考力や、いのちに対する倫理的、誠実かつ真摯な姿勢・態度の涵養を目指した授業を実践している。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 対面授業では、パワーポイントの資料配布を行わず、ノートテイキングを必須とする授業を実践している。実習前には、事前指導をオンデマンド形式で動画配信を行い、自主学習を行うようにしている。
- ・ 遠隔授業では、単調な一方通行の授業とならないよう、2人の教員による問答形式の動画の配信を実践している。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 統計系においては、演習問題に数多く取り組めるように工夫した。
 - ・ 遠隔授業では、単調な一方通行の授業とならないよう、2人の教員による問答形式の動画の配信を
実践している
5. 今年度の学生による授業評価より
- ・ 統計系の授業においては演習問題に数多く取り組めるように工夫したが、それでも難しいなどの
意見が見られたため、次年度は今年度に比べ、取り組む問題数を増やしていく要諦である。
 - ・ 学生自身の学修時間が短い傾向が続いているため、課題を増やすことも考えていきたい。
6. 今年度の成果
- ・ 昨年度の授業評価や国家試験結果を踏まえ授業を工夫したが、顕著な成果を出すには至らなかつ
た。
7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策
- ・ 前年度のN科の国家試験結果を踏まえて、主体的・能動的な学修に努めるよう、授業において再三
再四伝えたが、保健統計学、臨床看護総論において10名以上の不合格者が出た。しかし、今年度
の1、2年生においては、GPAの低い学生に加え、欠席者の数も従来以上に目立ってきていること
から、これらについては、学科全体として取り組んでいくべき課題であると考えます。
8. 社会的活動等
- ・ International Congress on Advanced Applied Informatics, IIAI-AAI, Program Committee
 - ・ International Journal of Institutional Research and Management (IJIRM), Associate Editor
 - ・ 日本赤十字看護学会評議員
 - ・ 日本赤十字看護学会誌査読委員
 - ・ すこやか友が丘運営推進委員会座長
9. 根拠資料（資料名のみ）
- ・ シラバス
 - ・ 学生による授業評価
 - ・ 授業における配布、配信資料等
 - ・ テスト問題

教員名	谷口 由佳	所属学科	看護学科	職名	教授
クラス担任	1年生Aクラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	紀要委員会（委員）、保護者のためのOC委員会（委員長）、就職委員会（副委員 長）、看護学部設置開設準備室（委員）				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○生活健康論	N	1	前期	必修	講義	対面	98
大学道場 miniゼミ	基盤	1	前期	選択	演習	対面	4
○看護対象論Ⅲ	N	2	前期	必修	講義	対面	93
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	81
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	80
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	98
地域活動基礎実習	N	2	後期	必修	実習	対面	92
○療養支援実習Ⅰ	N	3	前期	必修	実習	対面	83
療養支援実習Ⅱ	N	3	後期	必修	実習	対面	79
○老年援助論	N	2	後期	必修	演習	対面	95
○老年看護学概論	N	1	後期	必修	講義	対面	98
医療・看護特論Ⅱ	N	4	前期	必修	実習	対面	80

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 就職支援におけるエントリーシートや小論文の添削指導、および面接指導
- ・ 国家試験対策における学生支援
- ・ 入学前課題の出題、および質問等への対応
- ・ 担任、科目担当者として欠席が多い学生への面談・指導・支援

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

本学の教育理念、および学部・学科の教育理念のもと、“いのち”に対する知性と感性および、豊かな人間性と高い倫理観を身につけた医療専門職の育成を目指す。そのための教育のあり方として、学生自らが考える知的訓練を積む中で、何事にも真摯に自発的に学ぼうとする姿勢を育てていきたい。その上でこそ、責任ある医療専門職として必要な“いのち”への尊厳と倫理観が、真に身につくものと考えている。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 知識詰め込み型教育からの脱却（教えすぎない、資料は少なく、など）
- ・ アクティブ・ラーニングを活用した授業設計
- ・

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 地域と連携した PBL 型授業の導入
- ・ 学生同士の教え合い学習授業

5. 今年度の学生による授業評価より

授業評価では、平均して 4.4～4.7 と高い評価が得られている。しかし、2 年生科目は回答率が低かったため、この評価が受講者すべての意見とはいえない。約 8 割の回答が得られた 1 年生科目の「生活健康論」をみると、【授業方法】の問 9（聞きやすい話し方）が 4.76、問 10（授業の進行速度）が 4.73 と高い評価であった。98 名という大規模な受講生に対し、声が後ろまで行き届くよう意識したり、授業の冒頭で学生の理解度を確認した上で、授業の進度を調整しながら進めたことが、評価につながった

と考えられる。また、【学修成果】の問 14（自分で調べ考える姿勢）も 4.63 と高い評価であり、約 8 割が「自分で調べ考える姿勢が身についた」と回答した。自由意見で「クラスメイトの意見を多く聞くことができ、非常に良い影響を与えてもらった」、「一人では思いつかない意見を聞き、新しい発見を得た」、「生徒が主体的になって学びを深められる時間が多かった」など記述があり、PBL 型授業の成果と考えられる。一方で、最も低い評価は【学生自身】の問 3（授業以外の学習時間）2.79 であり、約 4 割の学生が授業外の学習時間を 30 分未満と回答し、0 時間の者もいた。課題を与えれば学習時間は増えるが、自発的に学ぶ姿勢とはいえない。授業を通し身についた自分で調べ考える姿勢が、授業以外での学習意欲につながるよう、授業内容や課題をさらに工夫し、自学自習の習慣の定着化を図っていきたい。

6. 今年度の成果

- ・ 最も評価できることは、地域と連携した PBL 型授業を実践したことである。地域住民や自治体の職員を招聘しての授業は、学生の興味・関心を喚起し、学ぶ意欲を高めた。神戸市や長田区を巻き込んで実施した認知症サポーター養成講座では、2 年生 83 名の「認知症サポーター」が誕生し、学生たちの今後の地域貢献活動の活発化が期待される。
- ・ 就職支援の成果では、担当学生全員が、4～6 月の間に第一希望の病院に就職が決まった。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 今年度の課題として、地域と連携した PBL 型学習において、先方の日程が優先されるため、シラバスの予定を変更することがあった。それに伴い、数名の欠席があり、また保健師課程の学生については授業時間割が重複する事態が生じた。保健師課程の学生にはオンデマンド配信で学習機会を保障したが、対面だからこそその臨場感から得られる情動的な学びの体験が足りず、学習効果に差が生じた可能性がある。次年度は早期から日程調整を行ってシラバスにも明示し、全員が予定通りの授業時間割の中で受講できるよう改善を図る。
- ・ 認知症サポーターとなった学生が、今後活躍できる場を作っていくことが課題である。次年度は、学内もしくは関連施設において認知症カフェを新規開設し、学生たちが準正課で学べる環境を確保する予定である。

8. 社会的活動等

- ・ 長田区の依頼で「長田区の芸術文化事業（神戸長田文化賞）に関する意見交換会」および「長田区の芸術文化事業（神戸長田文化賞）に関する懇話会」に参加し、それぞれ議長を務めた。
- ・ 長田区の依頼で「長田区地域と進める認知症早期発見システム構築検討会」に参加し、本学の認知症に関連した取り組みと今後の展望について発表した。
- ・ 社会福祉法人りんどうの里評議員
- ・ 社会福祉法人寿光会福祉・サービス向上・苦情対応委員会第三者委員

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 認知症サポーター養成講座実施報告書

教員名	藤原 桜	所属学科	看護学科	職名	准教授
クラス担任	1年Bクラス	クラブ顧問	ヨガ・アロマ部		
委嘱委員・職務	自己点検・評価委員会、広報委員会、臨地実習委員会				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
基本看護技術Ⅱ	N	2	前期	必修	演習	対面	93
○基本看護技術Ⅲ	N	2	前期	必修	演習	対面	94
国際保健医療活動Ⅰ	N,M,R	4	前期	必修	講義	遠隔	235
大学道場 miniゼミ	基盤	1	後期	選択	演習	対面	9
○看護対象論Ⅰ	N	1	後期	必修	演習	対面	98
基本看護技術Ⅰ	N	1	後期	必修	演習	対面	98
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	81
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	80
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	98
基礎看護学実習Ⅱ	N	2	前期	必修	実習	対面	98
基礎看護学実習Ⅰ	N	1	後期	必修	実習	対面	97

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ ヨガ・アロマ部の部員に対してアロマセラピーの基礎を教授するとともにセラピーの実際を指導した。また、日本アロマ環境協会アロマセラピー検定 1 級を受験する学生への受験対策として春休みに 4 日間の集中講座を行った。
- ・ 新生の市民救命士取得の指導
- ・ 1 年生の担任として退学を希望する学生の面接を複数回行い、新たな進路決定を支援した。

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

基本的には、本学科の教育理念である「いのちに対する豊かな感性と知性、幅広い人間性を備え、的確な看護判断と実践のための基礎的能力を養い、現代のヘルスケアに応じる得る資質の高い看護専門職業人を育成する」に則り教育を行う。そのための教育の在り方として、主に担当する科目である「基本看護技術ⅠⅡⅢ」では、アリストテレスの思想である「学問的知識：エピステーメ」「技術：テクネ」「実践知：フロネーシス」をもとに看護技術を教授する。また、患者と看護者の関係は「相互主観的な関係」であることを理解し、これらの理念に基づいて看護技術の本質を理解した省察的实践者の育成を目指す。同時に、ケアする人として「いのち」に対する畏敬の念を抱き、人間の尊厳や権利を尊重できるよう、倫理的態度を養うことを大切にしたい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

1) リフレクティブジャーナルの活用（主に省察的態度を養う）：自己の行動（看護実践）やその時の感情を客観的に見つめなおす機会は、自己の課題や強みに気づくことができる機会となる。さ

らに、うまくいったことや改善点を見つけ出すことができれば、より良い看護実践を生み出す思考過程が身につく。これを繰り返すことで省察的実践者として成長することが可能となる。教員は、学生のリフレクティブサイクルが効果的に進むように適切なフィードバックを提供する。

2) 体験型学習を積極的に取り入れる（主に知性と感性を養う）：体験型学習は、複数の感覚を刺激することで学習内容をより深く定着させる効果がある。学生が実際に経験し、感じ、考えることで情報の理解と記憶が促進される。教員は、学生が知覚したことを表現できる機会を提供し、（主にはレポートやリフレクション、グループワークでの対話）知覚したことの意味付けを、発問やフィードバックを提供することで支援する。

3) シミュレーターを用いたチームベースドラーニング（Team-Based Learning：以下 TBL）を取り入れる（主に倫理的な態度を養う）：主体的な学習者は自らの学びに責任を持ち、他者や社会に対する責任を理解し、行動する能力を持つ。TBL を通じて、主体的な学習やチームワーク、コミュニケーション能力の向上が期待できる。また、リアルな臨床状況を再現することで、臨床推論や臨床判断能力を向上させるためのトレーニングになる。さらに、実際の臨床現場で必要とされる技術を獲得するための準備が整う。教員は、効果的な発問やフィードバックを提供することで学習内容の深化を支援する。

4) その他、基本看護技術Ⅲにおいて学修の到達度目標を学生自身に評価してもらう学修成果の間接かつ質的評価方法であるルーブリック評価（中間・最終）を取り入れる。さらに、学生が主体的に事前学習できるように動画を作成し、マナバで配信する。また、基本看護技術Ⅲと看護対象論Ⅰにおいて、上級生が授業に参加する屋根瓦教育（Multi Layered Education）を取り入れる。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み（科目責任科目のみ記載）

・「看護対象論Ⅰ」：今年度は、「講義」の単元でも短い演習を取り入れるなど、体験学習を強化した。さらに、昨年同様、自己理解やセルフコンパッションとしてのマインドフルネスなどの演習も行った。また、皮膚感覚を通じたコミュニケーション（ハンドマッサージ）を取り入れることで、看護（技術）が相互主観的な関係性の上に成り立つことを理解する機会を提供した。さらに、コミュニケーションの分析には「交流分析」を取り入れた。これらの内容は昨年同様だが、微調整を加えるなどの改善を行った。また、今年度は、COVID19 の感染拡大後、教員が模擬患者を演じていた演習に、4 年生 2 名が模擬患者として参加する屋根瓦教育（Multi Layered Education）を取り入れた。

・「基本看護技術Ⅲ」：シミュレーターを用いた（フルスケールシミュレーション）TBL は、昨年に引き続き 4 年生 2 名がティーチングアシスタント（teaching assistant：以下 TA）として参加する屋根瓦教育（Multi Layered Education）を取り入れた。

・「大学道場ミニゼミ」：今年度のゼミ「ココロとカラダの調和を促すケア」は、補完代替療法の体験に加えて、研究的取り組みも行った。学生たちはゼミで得た知識を基に研究計画書を作成し、様々なテーマに基づいて研究を行った。研究テーマは「手作りハーブティーで口腔ケア」「朝ヨガによる目覚めの変化と効果」「ヨガの不眠症に対する効果」「ハーブティーを飲むだけで美肌は目指せるのか」「ローズマリーとレモンのアロマによる目覚めの変化」「アロマハンドクリームの保湿力」などであった。研究に際しては、安全性の確認や有害事象に関する説明を行った。また、有害事象が発生した場合の対応についても十分に説明し、実施してもらった。

5. 今年度の学生による授業評価より（科目責任科目のみ記載）

・「看護対象論Ⅰ」（単独担当）：授業評価は（回収率；65%）、学生自身：3.9、授業内容：4.8、授業方法：4.8、学習成果4.7、総合評価4.7と高評価であった。また、自由記述には、「授業を受けていると、患者さんだけではなく、自分自身のマインドにも目を向け、自己を振り返る機会が多く、とても前向きに、そして気持ちよく受けられました」「体験型の授業が多く、かなり印象的に残ったものがありました。特に患者さん役の先輩との対話は印象に残りました」「患者さんとの関わり方についてはずっと不安があったので学べて良かったです。また、関わりだけでなく、マッサージやマインドフルネスなど実際に行うことも勉強できて・・・本当に良かったです」などの肯定的な記述が多かった。しかしながら、学生自身の分野の評価が3.9と学科平均は超えていたものの低かった。特に、このうちの「授業時間以外に学修した時間」が2.91（学科平均：3.08）と低かった。次年度は、より主体的に学習できる方法を検討したい。

・「基本看護技術Ⅲ」（複数担当）：授業評価（回収率；44%）は、学生自身：4.5、授業内容：4.5、授業方法：4.4、学習成果4.5、総合評価4.6と高評価であった。また、授業感想に「先輩はすごい」「先輩のようにになりたい」という記述があったことから、4年生は、2年生の良きロールモデルになったと考える。さらに、4年生は、「2年生に教えることで復習の機会になった」という感想を述べた。これらのことから、今回の取り組みは、2年生と4年生双方にとって良い学習の機会となったと考える。4年生がTAとして演習に参加する屋根瓦教育（Multi Layered Education）は、次年度も取り入れたい。

・「大学道場ミニゼミ」（単独担当）：授業評価（回収率；100%）は、学生自身：3.9、授業内容：4.8、授業方法：4.8、学習成果4.9、総合評価5.0と高評価であった。自由記述には「興味をそそられる授業ばかりだった」「暮らしの中に取り入れていきたい」「リラクセスできる方法を見つけるきっかけになった」といった肯定的な感想が多く寄せられた。

6. 今年度の成果（科目責任科目のみ記載）

・「看護対象論Ⅰ」：定期試験（筆記）の平均点は75点で昨年よりも5ポイント減少した。また、筆記再試験を受験した学生は8名で、昨年よりも7名増加した。成績評価（LG）は、昨年度と比較するとA評価が減少し、C評価が増えている。一方で、授業評価のうち「学習成果」を問う項目の評価点は4.7と、昨年よりも0.1ポイント上昇した。また、「総合評価」も4.7と、昨年よりも0.1ポイント上昇した。筆記試験の平均点は昨年度よりも下がったが、教育内容・方法は学修目標を達成できるものであったと考える。また、本科目の学修成果は、本科目が前提要件となる「基礎看護学実習Ⅰ」の成績評価（LG）S:8名、A:74名、B:13名、C:1名、Z:1からも確認できた。次年度は、体験を通して学びながらも基本的な知識が定着するよう、ポイントを絞った授業を展開し、学修成果のさらなる向上を図りたいと考えている。

評価方法	筆記試験（平均点）	提出物・成果発表（平均点）
2022年度	80点	74点
2023年度	75点	75点

成績評価（LG）	S	A	B	C	D	E,Z
2022年度	4名	41名	36名	11名	0	E:2名
2023年度	4名	33名	36名	24名	0	Z:1名

・「基本看護技術Ⅲ」：定期試験（筆記）の平均点は67点で、昨年よりも1ポイント減少した。また、筆記再試験を受験した学生は17名で、昨年よりも11名減少した。さらに成績評価（LG）は昨年度と比較するとSおよびA評価が減少し、BおよびC評価が増加した。さらに、授業評価のうち「学習成果」を問う項目の評価点も4.5と、昨年よりも0.4ポイント減少した。また、「総合評価」も4.6と、昨年よりも0.3ポイント減少したが（昨年は回収率が13%であったため比較にならない）、「学習成果」「総合評価」の両方が学科平均点を超える高い水準であった。また、本科目の学修成果は、「学修成果のルーブリック評価」や本科目が前提要件になる「基礎看護学実習Ⅱ」の成績評価（LG）S:9名、A:52名、B:31名、C:4名、D:0からも確認できた。これらのことから、教育内容・方法は学修目標を達成できるものであったと考える。今後は、事前学習を増やすなどして学修成果のさらなる向上を図りたいと考えている。

評価方法	筆記試験	実技試験	アセスメント	リフレクション	倫理的態度
2022年度	68点	78点	62点	87点	83点
2023年度	67点	75点	58点	69点	74点

成績評価 (LG)	S	A	B	C	D	E,Z
2022年度	4名	29名	20名	30名	0	E:1名,Z:2名
2023年度	0名	14名	30名	48名	0	E:2

・「大学道場ミニゼミ」：総合評価（授業評価の）は5.0で、昨年に比較して0.2ポイント上昇した。また、授業評価のうち「学習成果」を問う項目の評価点も4.9と、昨年よりも0.3ポイント上昇した。さらに成績評価（LG）は昨年度と比較するとS評価が増加した。これらのことから、教育内容・方法は学習目標を達成できるものであったと考える。これらの成果は、今年度から取り入れた研究的取り組みによるものと考えられる。学生たちは、教員の期待を超える研究テーマを掲げ、真摯にかつ主体的に研究に取り組んだ。難度の高い授業計画であったにもかかわらず、学生の力を垣間見る機会になった。今後も、学生の潜在能力を信じて授業を設計していきたいと考えている。（次年度このゼミは開催しないため、他の授業設計に今回の自身の学びを活かしていきたい。）

成績評価 (LG)	S	A	B	C	D	E,Z
2022年度	0名	6名	1名	0	0	Z:1名
2023年度	5名	2名	1名	0	0	Z:1名

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善

1) COVID19の感染拡大により地域住民が模擬患者として参加する授業を中断している。

改善策：地域住民に対して公開講座を行うなどしてボランティアを募集し、地域住民が模擬患者として参加する授業を再開する（看護対象論Ⅰ）。

2) 今年度の国家試験で複数名が不合格となった原因は必須問題が合格点に満たなかったこと。

改善策：必須問題で問われる基礎知識が定着するような教育を強化する。具体的には、基本看護技術ⅠⅡⅢの授業内容に関連する人体部位の解剖生理の知識を問う事前課題を授業毎に出す（基

本看護技術ⅠⅡⅢ)。

3) COVID19の感染拡大によりヨガ・アロマ部の活動が十分行われていない。

改善策：ヨガ・アロマ部のボランティア活動（本学健康フェスタでのアロマハンドマッサージ、有料老人ホームでのアロマハンドマッサージ）を再開する（正課外）。

4) 1年Bクラスの学生のうち2名が年度末に退学（進路変更）した。

改善策：チューターと連携を密にして、学生の変化をいち早く発見し、学生の悩みや心配事に迅速に対応する（正課外）。

8. 社会的活動等

- ・兵庫県消防学校令和5年度救急救命士養成課程にて、救急医学概論/救急救命処置概論「傷病者搬送」シミュレーション：「ボディメカニクス」の講義を行った。
- ・本学子育て支援施設ノエスタ、モトロク、クニズカの三施設で施設を利用する人々に対して「アロマハンドクリーム作り」講座を行った。
- ・明南高校「医療入門」講座で3回の授業を行った（高大連携）。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 授業資料
- ・ マナバ上に提出された授業感想・レポート
- ・ リフレクティブジャーナル
- ・ アセスメント記録
- ・ 基本看護技術Ⅲ 「学修成果のルーブリック評価」
- ・ 学生による授業評価
- ・ 復命書（社会的活動）

教員名	横山 利枝	所属学科	看護学科	職名	准教授
クラス担任			クラブ顧問		
委嘱委員・職務	入試委員 就職委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○看護対象論ⅴ	N	2	前期	必修	演習	対面	47
○看護対象論ⅴ	N	2	前期	必修	演習	対面	46
○小児援助論	N	3	前期	必修	演習	対面	85
○母子支援実習Ⅰ	N	3	後期	必修	実習	対面	79
看護研究	N	4	通年	必修	演習	対面	81

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験に向けての学習指導
- ・ 就職試験に向けてのエントリーシート、小論文の指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

看護は、対象の生活を整えることで健康を守る役割がある。そのため看護者の生活の有り様が反映される。看護者としての知識、技術の習得はもちろんのこと生活者として、社会人として自立・自律できる学生を育成したい。また、主体的に学ぶ、自分で考えることのできる学生を育成したい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 事前課題を授業で活用し、知識の定着が図れるようにした
- ・ 授業は、受け身ではなく知識を用いて考え、GW を多く取り入れ、自分の考えを伝える、他の学生の意見を取り入れ考えを深められるように設定した
- ・ 授業のレジメを授業を聞いて自分で記入して完成できるよう工夫した
- ・ 実習では、対象理解を深めるため遊びの工夫、おもちゃの作成、退院指導などが実施できる場面を設定し対象理解を深められるようにした

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 本学での教育活動が初年度であったため、これまでの学習の習得状況や学生の特性を把握し授業に反映できるようにした。（事前課題、事後課題、授業での学びをまとめるなど）
- ・ 受け身ではなく考えながら授業に参加できるよう資料を工夫した。
- ・ 授業後の学びについては、提出された内容から質問、疑問に対応したり、再度説明をするなどやり取りに努めた。
- ・ 実習では、早期に対象理解が進められるよう指導者と調整し場面設定をしたり、実際のかかわりの中での気づきから次に発展できるよう指導した。
- ・ 授業内に、幼稚園での演習を取り入れ学生の子どもの理解が深まるように努めた。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 事前課題の必要性について理解できていない意見が見られた。そのため今年度はガイダンスでその必要性や活用について学生が理解したうえで進めていく
- ・ 授業内容が盛りだくさんで進度が早いとの意見があった。授業内容を精査し、学生が課題をもっと主体的に学習が進められるようにする

6. 今年度の成果

- ・ 講義、演習、実習のつながりを重要視した授業構成にしたことにより、総合評価では講義 4.3、実習が 4.6 と授業での学びを実習で活用し学生の達成感につながった
- ・ 実習では、早期から関わりの方角性を確認し遊びの工夫や生活の援助、退院指導等子どもとのかかわりを深めることができ、まとめのレポートで学生の達成感があったとしている学生が多くみられた。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・講義では、事前課題を活用し知識の確認をし、その知識を事例を多く取り入れて考える機会を増やし理解を深められるようにする。
- ・子どもへの健康教育の実際を授業内で演習として行い、子どもの理解を深められるようにする。

8. 社会的活動等

- ・公立高校において、看護についての講義

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布資料

教員名	黒野利佐子	所属学科	看護学科	職名	准教授
クラス担任	3年生学年主任	クラブ顧問	陸上部		
委嘱委員・職務	国家試験対策委員会 副委員長 国際交流センター委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○異文化看護論	看護	4	前期	選択必修	講義	対面	38
課題別総合実習	看護	4	前期	必修	実習	対面	
基礎看護技術Ⅱ	看護	2	前期	必修	演習	対面	93
基礎看護技術Ⅳ	看護	2	前期	必修	演習	対面	94
ミニゼミ道場	全	1	前期	必修	講義演習	対面	3
同上	全	1	後期	必修	講義演習	対面	2
基礎看護学実習Ⅰ	看	1	後期	必修		対面	
看護研究	看	4	通年	必修		対面	4

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策 成績低迷者用補講 4年生の成績低迷者及び卒業生（国家試験前年度不合格者3名）に対して10月半ばから一コマ90分×40コマ（一日180分間×20回）実施した。
- ・ M科学生の大学院受験で英語入試のチューターを前期から1月後半まで90分×十数回行った。

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

育てたい学生像

- ・ 多少困難があっても表層的な問題にとらわれず、根幹となる知識を積み上げながら応用となる実践を自分で考えていける。必要時様々な立場から意見を求めてベストを考え実行できる。

教育のあり方

- ・ 根本的に基礎力のない学生には、学ぶことが楽しく、いろいろの基礎がつながって学習が看護や保健医療の場において大変意味のあることであるということを知ってもらう。演繹法・帰納法両方共から理解できるように、できるだけ学生の身近な現象から事例を使って説明し、問いかける。
- ・ 基礎力のある学生には自分の興味や関心について深く見識や考えが広がるよう問いながら思考力を共に育む。

教育への信念

- ・ 教えることは学ぶことである。
- ・ どれだけ成績の悪い学生も 学んだことが生かした体験ができれば、自ずと学習できるようになる。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 学生と様々な会話をし、少し流行を探しておく。その現象の中で何かの概念や考え方に近づけたら、説明が可能であれば、自分で解説したり、学生に問いかけて演繹・帰納法で解説をさせる。または、そうした原理原則に沿わない事象であれば、それはそれとしていろいろな角度から議論をする。
- ・ 可能であれば、科目内の内容から学生の興味や関心のあることを調べさせ、学生が他の学生に調べた事をプレゼンテーションをしてもらう。準備に 2, 3 週間かけて行う。発表準備は放置しておく、適当に表層的にしか調べない学生が多いので、そういう学生には一緒にどんな資料やサイトからもっと深層の情報を引き出せるか考えて、一緒に調べて発表まで 2~4 回面接してサポートしている〔異文化看護の授業において〕

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 国家試験対策で現役生の 100%合格を上げていた

5. 今年度の学生による授業評価より

特にコメントはありません。

6. 今年度の成果

最終的に 5 名の学生が不合格になった。一人は常に成績の上位グループにいたのに、113 回の看護師国家試験の必修問題の初めがなじみのない問題でパニックになったそれまで常に成績上位につけていた学生。

10 月半ばから現役生の成績低迷者 14 名（コアメンバー 11 名）に補講を行ったうちの一人は一回だけ出席し自分で学習を進めた学生と もう一人全部出席はしなかったが学習の癖はつき 1 月後半に受けた模試の成績が飛躍的に伸びていた二人が不合格になった。あとは成績が低迷していたので補講に呼びかけても来なかった二人であった。コアメンバーの中で 1 月半ばから自主的に集まり、問題を出しながら学習していたメンバーは全員合格となった。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

国家試験対策に向けて、どれだけ準備が整ったように見えても、過去問題から乖離したように見える問題で気が動転してしまう学生をどのように準備させるかが来年度の課題となる。学生同士で学びあうとただ単なる暗記ではなく、遠慮なく質問しあえ、思考するということが可能となる。なかなか人工的にこうしたグループを作るのは困難であるし、個別で学習したいと主張する学生の人権を無視することになる。補講も人権を言い出すと強制はできないので大変悩ましい。

授業評価にはなかったが、演習ノートにこれまでの学生と同じように、できていない処を指摘するだけだと、反感を持たれたり、両親に相談したりする精神的に揺らぎやすい学生が増えてきた。同じ内容でもコメントの書き方をできるだけポジティブに受け取ってもらえるよう工夫を始めた。例え教科書通りの抽象論を抜書きしただけであっても、まずその文章を選んで書いたところを大いに評価し、三重〇で印をつけた後、「ここにあなたの体験を具体的に書いておくと、なお素晴らしいレポートになりますね。」などと書いておくと、学生の態度が柔らかくなって、質問に来る学生が若干増えてきた。ただこの指導もパターン化しやすく、助言にそって訂正して持ってくる学生はまだ少ない。

8. 社会的活動等

KICC や大黒公園、それに新長田駅の鉄人28号の近くの公園で開催した国際保健室活動

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ キャンパスレターなど

教員名	立垣 祐子	所属学科	看護学科	職名	准教授
クラス担任	－	クラブ顧問	－		
委嘱委員・職務	(学内) SD委員会 委員 危機管理(災害)委員会 委員 (学外) 2023年度 JANPU 災害対策支援委員会小ブロック(兵庫)代表校 担当				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課 科目責任者の科目には〇印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
大学道場ミニゼミ A	基盤	1	前期	必須	演習	対面	5
看護活動基礎実習	N	1	前期	必須	実習	対面	
〇精神看護学概論	N	1	後期	必須	講義	対面	99
精神看護特性論	N	2	後期	必須	演習	対面	38
精神援助論	N	3	前期	必須	演習	対面	13
〇健康支援実習Ⅱ(精神)	N	3	後期	必須	実習	対面	80
〇災害看護学	N	4	前期	必須	講義	対面	83
課題別総合実習	N	4	前期	必須	実習	対面	
看護学研究	N	4	通年	必須	演習	対面	20
医療・看護特性論Ⅱ	N	4	後期	必須	講義	対面	20

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 「災害看護学」, 「精神看護特性論」において, 本学卒業生を招聘し, 学生の興味・関心を引き出す授業を行った。しかし, 卒業生には教育経験がないため, 基本的な授業設計や配布資料等の助言・指導を行い, 授業の質を担保した。

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 倫理感を身に着けた看護師, 自分自身の行動に責任をもつ看護師

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 看護師のよって立つ倫理的基盤や対象理解および看護実践の根拠となる理論をわかりやすく教授する。
- ・ 実習科目では, 巡回ではなく指導を行う。学生が会える現象をともに知覚し, 学生自身の感性で捉えた現象の意味づけを, 教員の発問によって気づき, 整理を手伝う役割を担う。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

以下, 学生評価を直接受け取った科目について述べる。

- ・ 「精神看護学概論」 知識定着を確認する中間テストを採用した。また, 予習・復習が各学生のペースでできるように, 第1回授業で全ての授業回の資料を配布した。
- ・ 「災害看護学」 身近な看護分野として考え行動できるように, 卒業生を講師として招聘した。
- ・ 「大学道場ミニゼミ A」 精神医学の専門書の抄読が楽しめるように, インターネットで公開されている有名人やユーチューバーの精神疾患を罹患した体験談をプレゼンテーションにとり入れるよう促した。教育分野, 医療分野の共通課題として, 学生自身の「メンタルヘルスリテラシー」, そして将来, 支援の対象となる人々への関わりを学べる機会とした。

5. 今年度の学生による授業評価より

以下, 学生評価を直接受け取った科目について述べる。

- ・ 「大学道場ミニゼミ A」 ①この授業でよいと思った点として, 「少人数でとても楽しくわかりやすかった」, 「メンタルヘルスについては色々学べて新しい発見があってよかったです」という2件の感想が寄せられた。なお, ②この授業で改善すべき点, ③教室, 教育設備等で改善すべき点についての意見や感想はなかった。

分野	I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習効果	V 総合評価
学科平均	3.6	4.4	4.4	4.4	4.5
当科目平均	4.2(+0.6)	5.0(+0.6)	5.0(+0.6)	5.0(+0.6)	5.0(+0.5)

- ・ 「災害看護学」 ①この授業でよいと思った点として, 12件の感想が寄せられた。「第1回の授業で資料や課題を全部配布していただけたのがよかった」, 「国試のポイントを押さえながらの授業であったため, 今の授業であると感じた」, 「災害時の看護の大切なところがまとまっていてわかりやすかったです」, 「DMAT で活躍されている先輩の授業があったところ」等, 概ねわかりやすか

ったとの記述が認められた。なお、②この授業で改善すべき点、③教室、教育設備等で改善すべき点についての意見や感想はなかった。

分野	I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習効果	V 総合評価
学科平均	3.8	4.4	4.3	4.3	4.4
当科目平均	3.9(+0.6)	4.7(+0.6)	4.7(+0.6)	4.6(+0.6)	4.7(+0.6)

- ・ **「精神看護学概論」** ①この授業でよいと思った点として 23 件、②この授業で改善すべき点として 4 件の意見が寄せられた。③教室、教育設備等で改善すべき点についての意見や感想はなかった。

分野	I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習効果	V 総合評価
学科平均	3.8	4.5	4.5	4.4	4.5
当科目平均	4.1(+0.3)	4.8(+0.3)	4.7(+0.2)	4.6(+0.2)	4.8(+0.3)

- ・ **「健康支援実習Ⅱ(精神)」** ①この授業でよいと思った点として、3 件、②この授業で改善すべき点として 4 件の意見が寄せられた。③教室、教育設備等で改善すべき点についての意見や感想はなかった。②の意見には「教員間の連携が取れていない」という意見があったので次年度の課題として改善を目指したい。

分野	I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習効果	V 総合評価
学科平均	3.8	4.5	4.5	4.4	4.5
当科目平均	4.8(+1.0)	4.2(-0.3)	4.0(-0.5)	4.1(-0.3)	4.1(-0.4)

6. 今年度の成果

- ・ **「大学道場ミニゼミ A」**: 昨年度に続き、安定した授業評価を得ており、授業設計については、一定の完成が確認できた。
- ・ **「災害看護学」**: 昨年度に続き、安定した授業評価を得ており、授業設計については、一定の完成が確認できた。
- ・ **「精神看護学概論」**: 昨年度からの変更として、授業資料を第 1 回に全て配布することにより、各授業回の資料配布時間の短縮、欠席学生への資料配布の徹底、より多くの時間を授業内容に費やすことができる等が可能となった。
- ・ **「健康支援実習Ⅱ(精神)」**: 履修生全員に臨地での実習を提供できた。学生数増に伴う「健康支援実習Ⅱ(精神)」の実習施設は、2024 年 9 月に新規施設を含め 95 名分の実習施設を確保した。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ **「健康支援実習Ⅱ(精神)」**: 新たな実習施設との関係性を作り、実習受け入れの準備を完了することが課題となる。
- ・ **「大学道場ミニゼミ A」, 「災害看護学」, 「精神看護学概論」**: 本年度の授業評価を反映して、より楽しく分かりやすい授業を行う。「災害看護学」においては、令和 4 年能登半島地震の内容を含むなど、今日的なテーマを取り入れることで学生の興味・関心を引き出す工夫を行う。

8. 社会的活動等

- ・ **放送大学学園** 「2026 年度開設科目/災害看護学・国際看護学」教材作成(分担)教員
- ・ **神戸大学医学部附属病院看護部 全体研修 「災害看護～メンタルヘルス～」** 招聘講師

- ・ 令和5年度第2回猪名川町介護支援専門員研修「精神疾患をもつ人について学ぶ」 招聘講師
- ・ 日本災害看護学会第25回年次大会 市民公開講座「正木明さんと学ぶ天気予報の活用術ーかしこく備えよう！今日から天気予報の見方が変わるかも!？」 企画・運営責任者
- ・ 日本災害看護学会 第10期指名理事 社会貢献・広報委員会委員長
- ・ 日本災害看護学会 査読委員
- ・ 日本災害看護学会 先遣隊員
- ・ 日本災害看護学会 ネットワーク活動調査・調整部 メンバー
- ・ 日本災害看護学会 ホームページリニューアルワーキング リーダー
- ・ 日本災害看護学会 第25回年次大会座長
- ・ 日本リウマチ看護学会 査読委員
- ・ 日本看護倫理学会 第17回年次大会(神戸) 企画委員

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

教員名	伊東愛	所属学科	看護学科	職名	准教授
クラス担任	なし		クラブ顧問	なし	
委嘱委員・職務	臨地実習委員会、個人情報保護委員会、保健師課程委員会				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の種 類	科目の形 態	授業 形態	受講者 数
○公衆衛生看護展開論Ⅰ	N	3	前期	選択	講義	対面	13
○公衆衛生看護展開論Ⅱ	N	3	前期	選択	講義	対面	13
○公衆衛生看護展開論演習Ⅰ	N	3	前期	選択	演習	対面	13
○公衆衛生看護展開論演習Ⅱ	N	3	前期	選択	演習	対面	13
○公衆衛生看護学実習Ⅰ	N	3	後期	選択	実習	対面	13
公衆衛生看護学実習Ⅱ	N	4	前期	選択	実習	対面	16
○健康相談の理論と方法	N	2	後期	選択必修	講義	対面	65
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	81
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	98

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 看護学研究担当の学生について、看護師や保健師の国家試験模試の結果の見方、模試結果を受けての勉強の仕方・看護学研究とのバランスのとり方などを指導した。
- ・ 1年生チューター学生に対して、入学前課題（2種）のコメントを記入し、個々に対応した。

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

育てたい学生像は、対象となる患者・利用者・住民などのために、真摯に誠実に考え、取り組むこ

とのできる学生である。看護専門職者としての自覚を持ち、根拠に基づき、論理的に思考し、クリティカルに考えることができる学生である。

そのための教育へのあり方は、学生に関わる際には教員自身がモデルとなるべく、思考の根拠・理由や背景を具体的に示し、行動することを心がけていることと、多様な立場の、多様な価値観を伝えるようにしている。また、ある種の答えではなく、学生への問いかけ・対話に重きを置き、学生自身の考えや思いを大切にすることを教育への信念としている。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ どの科目も、基本的には一方的な授業にならないよう、穴埋め式・書き込み式の講義資料としている。また、言葉だけではイメージがつかないと考えたため、分かりやすいイラスト資料を使用したり、動画の視聴を授業中もしくは事前・事後課題に盛り込んだりしている。さらに、自己に引きつけて考えられるよう、生活や体験を振り返るような課題を課している。授業中はマイクを順番に回して、穴埋めの部分などを回答してもらっている。
- ・ 講義科目であっても、演習的要素を組み入れ、ペアワークやグループワークを組み入れている。逆に演習科目においても、講義プラス演習とし、理念や大事な視点、根拠に基づいて考えられるような組み立てにしている。
- ・ 実習科目においては、実習時間の2/3以上を臨地で確実に執り行えるよう、事前調整を行い、実現させている。臨地実習では毎日の教員の張り付きが要求されており、全日張り付き指導を行うべく、講義・演習科目は実習期間を避けて休講・補講の対応を取っている。なお、講義・演習科目の学生に迷惑をかけないように、休講・補講の対応は授業開始よりも前に、manabaを通じて告知し、授業の初回に説明とお願いをしている。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 『健康相談の理論と方法』において、学生からは昨年度、補講は土曜日ではなく、金曜日に行ってもらいたい、なるべく早く知らせたいとの声があったことから、今年度、実習指導に伴う休講・補講を金曜日に設定し、予定をmanaba上に履修変更期間よりも前に掲示した（理由は、当該科目は選択科目であることから、変更日程が都合悪い場合は履修しなくて済むように、そして意欲のある学生にモチベーションを持ったまま授業を受けてもらいたいとの思いからである）。
- ・ 昨年度まではずっと明石市での臨地実習において、保健所その他実習施設内での学生の控室が確保できない問題があった。学生の効果的な学習を保証するため、明石市内で学生の控室を確保してもらえるよう学科長に相談し、起案を提出して、事務局長の支援を受け、学生の控室を確保できた。そのおかげで、学生は保健師からタイムリーな助言をもらえたり、急遽予定された保健師活動に学生が見学・参加できたりした。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 公衆衛生看護学の授業全般において、例えば、「空欄を学生に答えてもらう形式で、間違っただとしても正解を覚え直すことができ、記憶に定着しやすい授業だった」「グループワークが多く、自分の知識だけでなく他の学生の意見も聞きながら支援を考えられた」など、教員が意図したことが学生の意見に挙がっていた。関心の高い学生が履修しているからではあるが、授業内容が盛り沢

山であることから、引き続き、意欲を引き出せるような授業にしていく必要がある。

- ・ 選択科目においては、受講学生のモチベーションに差があることが考えられる。また、地域には多様な価値観を持つ人がいることを伝えているが、学生によっては受け取りに差異が生じている。教員は学生の背景・多様性を理解する必要がある一方で、学生にもアサーティブコミュニケーションを伝える必要があると考える。

6. 今年度の成果

- ・ 公衆衛生看護学の4つの科目において、連動性や順序性、ねらい、ボリュームのある演習課題などを4月最初の授業時間に説明を行い、必ず実習で活かせることを伝えたことが功を奏したのか、授業評価のIV. 学習成果が、4科目それぞれ、0.2、0.2、0.3、0.4上昇した。
- ・ 看護学研究担当の学生全員に国試の学習の進捗確認や学習方法の軌道修正を行ったが、看護師、看護師プラス保健師の国家試験に合格した。
- ・ 公衆衛生看護学実習Ⅱで担当した明石市の実習グループが住民に対する健康教育を行った際、反響が大きく、実習終了後に担当保健師から連絡があり、健康教育で使用したチラシを住民が希望していたことから資料を提供した。1年間明石市で配布・活用されることになった。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ どの授業も回答率が悪い。配付資料にQRコードやURLを載せてはいるが、効果はない。そのため、授業中に入力できる時間を設けたい。
- ・ 保健師課程の授業以外において、興味関心を引き出せるよう、さらに具体例を示したい。ボリューム過多とならぬよう、提示資料は優先順位をつけ、内容を取捨選択する。多様な価値観があるという事を授業中に何度も伝える。
- ・ 意見や質問があれば、授業中の発言もしくは感想メモを書くよう、今まで以上に口頭および紙面にて伝える。

8. 社会的活動等

- ・ 日本災害看護学会 社会貢献・広報委員として、第25回年次大会 市民公開講座「気象予報士 正木明さんに学ぶ、天気予報の活用術-かしこく備えよう! 今日から天気予報の見方が変わるかも!?-」を実施。およびニューズレター担当。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業資料、manaba 配信資料（コンテンツ）
- ・ 学生が記載した感想メモ
- ・ 実習記録、作成資料（健康教育チラシ）、保健師からのメール
- ・ 日本災害看護学会第25回年次大会ホームページ、市民公開講座

教員名	西村充弘	所属学科	看護学科	職名	講師
クラス担任			クラブ顧問		
委嘱委員・職務	図書委員会 委員 看護学科就職委員会 委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○精神看護特性論	N	2	後期	必須	演習	対面	93
精神援助論	N	3	前期	必須	演習	対面	
災害看護学	N	4	前期	必須	講義	対面	83
看護活動基礎実習	N	1	前期	必須	実習	対面	
健康支援実習Ⅱ(精神)	N	3	後期	必須	実習	対面	
課題別総合実習(精神)	N	4	前期	必須	実習	対面	
看護学研究	N	4	通年	必須	演習	対面	

(2) 準正課、正課外の教育活動

- 「精神看護特性論」では、本学卒業生を招聘して、学生の興味・関心を引き出す授業を行った。また、この卒業生の勤務地である実習病院で臨地実習を終えたばかりの3年生も希望で授業にも参加、それぞれに感じたことなどを語ってもらい、2年生は精神科看護に対して現実感を修得することが出来た。卒業生の授業の後、基本的なことについて配布資料等で助言・指導を行い、授業の質を担保した。

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- 自身の行動に責任を持って行動する看護師の育成。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- 看護師の倫理的基盤の確立のための対象理解や看護実践について、ともに考えていく。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- 「精神看護特性論」では、本学卒業生を講師として招聘した。また、知識の定着を確認するための中間テストを採用した。
毎回の授業内容で感じたことや疑問に思ったことなどを、授業カードとして書いてもらった。これを書くことで、出席の確認も確実に行うことが出来た。

5. 今年度の学生による授業評価より

- 先で述べた授業カードでは、毎回の授業で何が分かりやすかったのか、分かりにくかったのか、素直に書いてもらえ、次の授業へ工夫することが出来た。そう感じていたが、学生による授業評価調査では、授業内容や方法、学習評価と言ったところが学科平均より 0.1~0.2 低いのは、より

一層の工夫を必要としていると認識をした。

6. 今年度の成果

- 「精神看護特性論」では、授業資料を最初に配布したことで、欠席をした学生にも資料配布が出来た。また、毎回の授業開始時の資料配布にかかる時間を短縮することが出来た。
- 「健康支援実習（精神）」・「課題別総合実習（精神）」では、感染症による欠席学生にも、臨地での実習を行うことが出来た。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- 「精神看護特性論」では、DVDなども活用した、分かりやすい授業の工夫を主な友。
- 「健康支援実習（精神）」では、履修学生の増員に伴い、実習施設への負担をかけ過ぎないように臨地実習の内容の工夫を行う。

8. 社会的活動等

- 日本病院・地域精神医学会総会 第67回兵庫大会 企画委員
- 兵庫県青少年本部主催 「人とつながるオフラインキャンプ2024」 アドバイザー

9. 根拠資料（資料名のみ）

- シラバス
- 学生による授業評価

教員名	阿児馨	所属学科	看護学科	職名	講師
クラス担任	2年生担任		クラブ顧問		
委嘱委員・職務	・教務委員・就職委員・スコラボ委員・兵庫県看護協会西部支部まちの保健室委員会：				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
看護教育論	N	4	前期	選択	講義	対面	51
老年援助論A	N	2	後期	必修	演習	対面	50
老年援助論B	N	2	後期	必修	演習	対面	45
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	3
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	16
療養支援実習Ⅰ	N	3	前期	必修	実習	対面	97
地域活動基礎実習	N	2	後期	必修	実習	対面	97
療養支援実習Ⅱ	N	3	後期	必修	実習	対面	79
療養支援実習Ⅲ	N	3	後期	必修	実習	対面	79
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	3

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 教務委員会：各学年履修ガイダンス、履修登録指導、manaba コース作成の学科管理、定期試験時間割・補助監督者・試験会場の調整、必修科目受験者座席表作成、非常勤講師のmanaba 学習システム（授業資料、小テスト、アンケート、学生への連絡）の対応、特別時間割作成、学外授業（人体解剖見学）のガイダンス等
- ・ 就職委員会：就職ガイダンス、就職対策学生面談（エントリーシート・小論文・模擬面接等指導）

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

看護学は実践の科学であり、理論と実践との有機的な関連を必要とし、多様な身体・心理・社会的状況にある個々の人間における健康を核としてかかわる学問と考えています。学生には、“いのち”に対する豊かな感性と知性、幅広い人間性を備え、的確な看護判断と実践のための基礎的能力を養成していく。また大学（高等教育機関）に於いて学ぶことは、自律的な学びの確立と考えている。学修者が能動的に学修できるように課題を提供する。そして看護を俯瞰的・創造的に探究する姿勢を持ち、地域に貢献できる人材を育成することを理念とする。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 教科指導法では、学生の「自分の理解や考え」を授業中にスマホから伝えられるように manaba の学習システムを使っている。学生の記録、発言、発表の機会をつくることで教員からも個人や全体にコメントを返すことができた。学生が多くの知識に触れながら、課題に対し自分で考えて、その知識を活かしていけるような学習展開にしていきたいと考えている。
- ・ 演習・実習指導法では、イメージがしやすいようにガイダンスを行った。一方的な知識伝達ではなく、学生の考えを引き出し、相談を受ける過程で学習環境を整え、目的目標の達成を目指すように支援した。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 老年援助論の看護過程の展開は、思考過程がわかりやすい枠組みとし、谷口教授の助言を受けて manaba のプロジェクト機能を使い、グループワークの発表を授業時間内で行った。学生はスマホからの書き込みが早く、各クラスの5～6人のグループ編成であれば発表後の質問や教員のコメントを返す時間の余裕があった。個人ワークの記録に対しては、都度回収しコメントすると学習が追加修正されていったと評価しているが、提出が滞る学生への働きかけが難しいと感じた。
- ・ 今年度で最後となる O 科との合同演習は、演習後の学生のアンケートからも満足度が高かった。高齢者の嚥下・口腔の機能についてのアセスメントの視点や技術は、看護の実践に役立つ体験となったと評価している。
- ・ 認知症サポートの講義は、学生が神戸市の取り組みを聞く機会となり、高齢者の認知症サポーター養成講座は、実際の高齢者の寸劇などリアルな体験となった。行政や地域活動を行っている高齢者との交流は、講義後のレポートからも充実したものとなったと評価している。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 認知症サポートの講義は、「老年援助論」の科目に於いて、授業評価の回答数が少なかった。授業でよいと思った点に「口腔とのコラボや認知症サポーターなどの体験ができた」と記載があった。「学生自身の学習時間が不足」という点で3.8というのは、学生自身が取り組む時間を作れていないという理由もあると思うが、事前事後の学習に力を注げるような指導を行っていききたいと振り返った。

6. 今年度の成果

- ・ 5月19日：2023年度女性研究者奨励金の贈呈を受けた。
- ・ 老年援助論の授業で「看護過程の展開」についてグループ、個人ワークのなかで谷口教授と共に指を行った。発表や記録のなかで学生が「衰退」という面にのみ目を奪われるのではなく、高齢者をもつ肯定的な能力に目を向け、高齢者の力を支え、それを活かすための看護目標を立てていくことの理解につながったと確信が持てた。最終の看護実践の発表は、視点を伝え各自に評価をさせたが、発表内容、記述も充実していた。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 授業の出席状況、提出物の期限が守れない、授業中に眠るなど気になる学生があった。学生自身が自己管理をし、授業に臨んでもらいたいと伝えていききたいと考えている。
- ・ 今年度地域活動基礎実習の担当となり、科目担当者が一同に集まり、企画調整など、健康ふれあいフェスタの関係者との検討を重ねて行き、学生が大学祭で成果発表ができた。しかし学生の学習時間や教員の指導体制にも余裕がなかったと感じている。次年度は実習期間やガイダンスの時期なども早くし、実習準備ができるようにしていく必要があると考えている。
- ・ 私自身の健康上の理由で療養支援実習Ⅲの臨地での指導が厳しくなり、大学内での業務も思うように動けず、助けていただいた。次年度は健康面に気を付けて復帰していききたい。

8. 社会的活動等

- ・ 5月11日：須磨区（須磨パティオ広場）に於いて「看護の日イベント」健康相談（県看護協会依頼）
- ・ 7月11日：加古川西高等学校に於いて「進学説明会、模擬授業」（入試広報からの依頼）
- ・ 10月15日：長田区に於いて「区の結核健診併設、外国人・地域高齢者の健康相談」（長田区健康センターからの依頼）
- ・ 10月26日：コミスタ神戸に於いて「2023年度こうべ生涯学習カレッジ」講師「地域で自分らしい健康生活～フレイル予防～」（卒業生4名、4年生2名のサポート）

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 学生への配布資料
- ・ プレテスト、ポストテスト
- ・ 講義中後、演習後の学生のアンケート、レポート

教員名	武士 由美	所属学科	看護学科	職名	特任講師
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	なし				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
基本看護技術Ⅰ	N	1	後期	必修	講義演習	対面	98
基本看護技術Ⅱ	N	2	前期	必修	講義演習	対面	93
基本看護技術Ⅲ	N	2	前期	必修	講義演習	対面	94
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	98
基礎看護学実習Ⅰ	N	1	後期	必修	実習	対面	96
基礎看護学実習Ⅱ	N	2	後期	必修	実習	対面	98
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	81

(2) 準正課、正課外の教育活動

・担当なし。

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

私の担当する科目は、看護学に専門領域の基礎看護学領域である。基礎看護とは、看護の土台となる科目である。私は、基礎看護技術は本校では、「基本看護技術」という科目名において、看護という大木を育てていく根幹を満たす学問として考えられているととらえている。根幹として看護技術を深めていくには、基礎領域、専門領域で栄養分となる必要な知識や学習の方法や態度などの基本的なことを学習してきている学生の力を引き出しながら学修を支援していくことが大切であると考えている。また、「看護は実践の科学」とも言われており、知っているだけでは看護の実践にならない。そのため、実習においても学生の力を引き出しながら「なりたい看護師像」に向かって学生自身が主体的に学んでいけるように関わっていきたい。看護職は人にかかわる仕事なので、人に関心を持ち、自分も他者も大切にしながら成長できるように支援をしていきたいと考えている。そのようにかかわることで、「人のための人」の成長につながるのではないかと考えている。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

私は、学内の授業では、「基本看護技術ⅠⅡⅢ」を科目責任者とはじめ数名で担当している一員である。そのため、学生が混乱しないようにそれぞれの科目の学修目標や大切にしたいことを十分に理解し、学生が混乱しないようにかかわっている。

基本看護技術の授業においては、学生が主体的に学ぶ力を身につけられるように自己学習ノートの活用を支援している。演習においては、自己学習ノートを活用し演習計画を立案してもらい演習に臨んでもらうようにしている。演習では、まず学生の学習してきた内容を確認しながら、学生自身が不足の部分に自ら気づけるようにかかわったり、グループ間で意見交換をしたりしながら学びが深まる

ように支援している。また、看護技術のイメージがわかりにくい場合は、既成の動画や自作動画を使って事前、事後の学習に活用できるように環境を整えている。

演習授業では、人を大切にして看護を実践するためにも、ただ手順を演習するということがないようにできるだけリアルな事例患者を設定したり、臨床に近い演習環境や物品・シミュレーターなどを準備したりしている。事例患者には、学生がなりきる形式でロープレを進めていき、その場面のリフレクションを行い記録提出、指導という方法を取り、学生自身が自分の傾向に気づき、成長につなげるための対策を自身で気づけるようにかかわっている。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 自己学習ノートは、1年次の基盤教育で学修経験があることを踏まえて、学生が自ら学ぶ力をつけていく方法として、今年度取り入れた。
- ・ 自己学習ノートを活用して、演習においては開始時にグループで援助の目標を話し合い、実践する中で気づいたことや改善点をホワイトボードに書き出しながら、意見交換を行えるようにした。

5. 今年度の学生による授業評価より

授業評価から、基本看護技術ⅠⅡⅢともに「自身」の評価がすべて4.5である。事前課題、授業、事後課題と主体的に学習に取り組んだことによる評価であると考ええる。

「授業内容」「授業方法」の評価は4.3～4.6である。これは、基本看護技術を学ぶことの位置づけを明確にし、できるだけ臨床に近い演習環境を整えたからではないかと考える。

6. 今年度の成果

今年度後半、基本看護技術Ⅰからは、毎演習時にホワイトボードを使用してグループの意見が可視化できるよう工夫をして演習をおこなった。その影響もあり、総合評価4.8であったのではないかと考える。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 担当する授業については、学生が主体的に学べるように、学習ノートの活用の工夫ができるように、授業資料の提示の内容についても改善する
- ・ 学習ノートの活用を学生に任せすぎではなく、見守っていく
- ・ 演習・実習においては、学生の経験したことや感じたことを大切に、十分に学生の状況を把握して、学生自身が目標や対策を考え進んでいけるようにかかわっていく
- ・ 授業や実習において、自身の経験や思いも伝えながら、看護の楽しさを伝えていく

8. 社会的活動等

特記することなし

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

教員名	伊東 美智子	所属学科	看護	職名	講師
クラス担任	3年生 A クラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	就職委員会、国家試験対策委員会、子育て総合支援施設 KIT 連携部				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
まなぶる▶ときわびと I	基盤	1	前期	必須	演習	対面	407
○母性援助論	N	3	前期	必修	演習	対面	84
母子支援実習Ⅱ(母性)	N	3	後期	必修	実習	対面	81
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	98
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	81
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	80
基礎看護学実習Ⅱ	N	2	前期	必修	実習	対面	98

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 看護師国家試験対策
- ・ 就職試験対策に向けた小論文やエントリーシートの添削、個人面接による志望の明確化
- ・ 学内／学外での心肺蘇生訓練の指導、高校へ出張講座、KIT での子育て支援活動

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 個々の学生に合わせ、看護師になるための知識と技術の修得に向け、講義や演習、臨地実習において関わる。専門職キャリアを歩む人であるという捉えの下、人として真摯に接することを大事にする。
- ・ 講義や演習では領域内で緊密に、臨地実習先では先方の管理職や学生担当者の意向も踏まえ、常に報告・連絡・相談しながら取り組む。
- ・ 日進月歩する周産期医療の最新情報を踏まえ、講義や指導が出来るよう、情報収集に心掛ける。学内／学内の研修会や学習機会を積極的に活用し、学生の教育に反映できるよう心掛ける。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、工夫点について）

- ・ 基本的には対面指導を大事にし、学生個々の想いや訴えを感じつつ、講義や実習、個別指導に当たる。状況によっては、メールや遠隔面接等も活かし、関係性の構築と維持を心掛ける。
- ・ 講義におけるアクティブ・ラーニングや ICT の効果的活用を目指して積極的に取り入れる。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 科目責任初担当の「母性援助論」においては、領域内で定期的打ち合わせを重ねて取り組んだ。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 母性援助論の授業評価は、準備性不足、評価の曖昧さが課題として学生から指摘された。

6. 今年度の成果

- ・ 母子支援実習Ⅱ(母性看護)では学生個々の差はあるが、専門知識や技術だけでなく専門職者としての姿勢について、一定の学習成果を修めた(履修途中からの欠席や提出物未完者は居なかった)。
- ・ 臨地実習になって漸く、学生達が援助論で準備した事前学習の意味を理解し、活用に至っていた。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 5について、計画的かつ具体的に対策をしてゆきたい。

8. 社会的活動等

- ・ 2022年度より実践してきた、本学の提携施設子育て総合支援施設 KIT における卒乳・断乳講座を今年度は更に会場を拡大し、開催回数も増加して開催した。受講者からは概ね好評であった。
- ・ 企業との産学連携に繋がる、子育て支援活動の効果検証研究の準備(令和6年度 科研費採択済み)

9. 根拠資料(資料名のみ)

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ リサーチマップ

教員名	野田部 恵	所属学科	看護学科	職名	講師
クラス担任	3年生 A クラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	・ 学生委員会 ・ 臨地実習委員会 ・ すこラボ委員会				

1. 教育の責任(教育活動の範囲、担当科目)

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○緩和ケア	N	3	前期	必修	講義	対面	86
○慢性病看護論	N	2	後期	必修	講義	対面	94
まなぶる	基盤	1	前期	必修	演習	対面	
看護学研究	N	4	通年	必修		対面	
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	
療養支援実習Ⅰ	N	3	後期	必修	実習	対面	
療養支援実習Ⅱ	N	3	後期	必修	実習	対面	
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 入学前課題の出題

2. 教育の理念(育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念)

専門基礎科目においては、専門職である看護職者としての使命感や倫理観のもと、ヒューマンケアの精神に基づいて人々の健康福祉の向上に貢献できる学生を育成する。特に、看護実習では関連する

諸科学における科学的根拠に基づいた知識と技術を修得した看護が実践できる力を育成したい。基盤教育では、学修や研究などの基盤となる言語力や表現力、また様々な人と協働できるコミュニケーション力の基礎を培うことを理念としたい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 教科指導法では、科目の指導案を作成し、グループワークを取り入れ学生が自ら調べ、様々な意見交換から思考が広がるように工夫を行った。
- ・ 実習前は、事例課題から実習記録の記載の仕方や考え方がわかるように、授業での課題やグループワーク、manabaにて実習記録の記載方法などを配信した。実習後は、実習レポートの作成に向けて対面などで指導を行った。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 今年度より科目を担当し、学修の定着をはかるため複数回の小テストを実施した。
- ・ 複数回のグループワークを設定し、学生の思考力やコミュニケーション力が高まるように努めた。
- ・ 数回の授業にて事例検討による課題の提出や、manabaでのレポート提出にて学生からの質疑応答にも努めた。

5. 今年度の学生による授業評価より

今年度の学生評価を行えていず、学生評価を得ることができなかった。学生からの評価はないが、授業で学生自身に考える機会を設けるためグループワークを多くした。しかし、十分に知識が付いていなかで難易度の高い事例を使用したこともあったため、意見交換が十分に行えなかった場面も多くみられた。学生のレジネスに合わせて難易度を調整し、学習効果を高めるために小テストなどで認識度の確認が必要であった。

また、机が可動式でない教室であったため、グループワークの体制が取りづらい状態であった。グループワークを行うときは教室のレイアウトも考慮した授業展開を考える必要があった。

6. 今年度の成果

前期・後期に授業を受け持たせていただき、学生のレジネスがある程度把握することができた。昨年度の臨地実習では、学生が実習において患者の状態把握のための実習記録の指導に困難を要することが多くあった。しかし、授業をするなかで患者理解につながる知識の不足の程度がわかり、後期の実習での指導に繋がったと感じた。

研究に関しては、テーマ別研究に採択していただいたが、研究計画通りに勧めることができなかった。文献検討から研究の土台の作成に留まっている。しかし、今年度は健康フェスタやすこラボによる地域住民への講演、神戸常盤地域交流センター「公開講座」をさせていただき、地域住民との交流の機会が多く得ることができた。そのため、地域住民との交流で得られる情報が今後の研究に役立つものとなった。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

次年度は、授業での学生のレジネスに応じた授業教材の工夫が必要である。授業にて知識だけでは

なく技能や態度なども育成できるようなアクティブラーニングを取り入れた授業デザインを考える必要がある。

研究に関しては、テーマ別研究において神戸常盤フォーラムでの成果発表および論文投稿に向けてを計画に沿って進めていく。そのために、研究計画を見直し修正を行う必要がある。

8. 社会的活動等

- ・ 神戸常盤地域交流センター「公開講座」にて CVD 予防について講義を行った。
- ・ すこラボ委員会にて健康フェスタにて、地域住民に向けた誤嚥性肺炎予防の講義を行った。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業での配布資料
- ・ テスト問題

教員名	尾崎優子	所属学科	看護学科	職名	講師
クラス担任	4年生 B クラス	クラブ顧問	無し		
委嘱委員・職務	入試委員会・委員 臨地実習委員会・委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
小児援助論	N	3	前期	必修	演習	対面	85
看護対象論Ⅴ(小児)	N	2	前期	必修	演習	対面	93
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	80
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	80
母子支援実習Ⅰ(小児)	N	3	後期	必修	実習	対面	80

(2) 準正課、正課外の教育活動

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

看護学科アドミッションポリシーに準ずる。さらに、自ら主体的に学び続ける力、他者と協働しながら自己変容できる力、臨床に適応できる柔軟性を育成したい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 小児援助論では manaba を活用した反転学習によって学習内容の定着を図った。

- ・ 実際に臨地でよく受け持つ臨床事例を用いて看護展開能力の育成を図った。
 - ・ 臨地実習施設の臨床指導者を演習講師とし、臨床のリアリティを追求したグループ学習（シミュレーション演習）を行い、授業と実習のギャップを埋めることでの「臨床力」、他者との「協働力」を高める工夫をした。
4. 今年度における教育方法改善の取り組み
上記に同じ
5. 今年度の学生による授業評価より
- ・ 反転学習は学生の好評を得た。「しっかりと学べた」、「看護過程展開能力が向上した」、「一度課題をやって1週間後にそれを授業でやって、そのあとにやり方が違うところをフィードバックされるやり方が非常に頭に残りやすい授業構成だった」という意見があった。
 - ・ 「アセスメントを何度もやることで記録の書き方や実習に役立てられそうなのがよかった」、「アセスメントがだいぶできるようになった」という意見があった。
 - ・ シミュレーション演習は、「実際に看護師の方に私たちが考えた援助を見てもらい、評価を受ける機会があったことがよかった」という意見があった。「くじびきで演技者になるのが嫌だった」など、中には緊張やプレッシャーを受ける学生もいた。
 - ・ 「課題が多かったが量の調整やデジタルでの執筆可などの譲歩があってよかった」という意見があった。
 - ・ 「出席管理がしっかりされていて、いつまでもしゃべっている学生に対してちゃんと注意していただける授業という点でも好きでした」という意見があった。
 - ・ 「テスト範囲をしっかりと言ってくれないと勉強に困る」という意見があった。
6. 今年度の成果
- ・ 定期試験結果については例年と大きな変化はみられていない。
 - ・ 母子支援実習Ⅰ、課題別総合実習で躓く学生はなかったため、前期授業での準備が功を奏したと思われる。
7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策
- ・ 課題が重なってくると追いついていけない学生も少なからずいた。授業内外で質問対応の時間をとって対応したが、課題の内容やタイミングなどを見直し、学生の負担の軽減を図る。
 - ・ メンタル面でのフォローもしていく。
8. 社会的活動等
- ・ 子育て支援施設 KIT において「子どもの応急処置」講演
 - ・ 多文化共生研究事業の中で、神戸国際コミュニティセンターと連携した子育てカフェの支援、国際保健室活動への参加
9. 根拠資料（資料名のみ）
- ・ シラバス

- ・ 学生による授業評価

教員名	原 希代	所属学科	看護学科	職名	講師
クラス担任	4年生 A クラス	クラブ顧問			
委嘱委員・職務	看護学科臨地実習委員会 看護学科国家試験対策委員会 地域交流センター委員会				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
看護活動基礎実習	看護学科	1年	前期	必修	実習	対面	98
地域活動基礎実習	看護学科	2年	前期	必修	実習	対面	92
在宅看護学概論	看護学科	2年	前期	必修	講義	対面	95
在宅看護特性論	看護学科	2年	後期	必修	講義	対面	93
在宅援助論	看護学科	3年	前期	必修	演習	対面	83
健康支援実習 I	看護学科	3年	後期	必修	実習	対面	79
看護研究	看護学科	4年	通年	必修	演習	対面	81
課題別総合実習	看護学科	4年	前期	必修	演習	対面	80
医療・看護特性論	看護学科	4年	後期	必修	講義	対面	80

(2)準正課、正課外の教育活動

「Café Aoba」

医療的ケアが必要お子様と家族が集う Café を毎月第 2 土曜日に開催し、医療的ケアの必要なお子様と家族の気持ちがほっとするような場、情報交換、情報共有の場を提供している。安心して過ごすことを可能にするため、医療スタッフ（医師・看護師・保健師・理学療法士・作業療法士）や保育士、先輩ママ、大学生が参画している。

国際交流支援

長田区に在住する外国人に対する食糧支援及び健康相談

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目においては、より臨床現場が理解できるような教材の提供および、授業の展開を行う。具体的には、臨床における現象の語り、映像提供等を行い、その現象から考えられる看護を学生が自ら解釈・考察し、利用者・疾患・生活・個別性の看護の理解ができるよう教育へ取り組む。

基礎科目においては、学生が看護へのファーストステップとして、看護への興味がより一層深まるような、かかわりを行う。具体的は、資料の提供、臨地実習において環境の重要性などを指導するように取り組む。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

ICT を利用した授業の展開を行った。昨今の学生は、授業において質問を行ったからとて、レスポンスが乏しい。しかしながら、それは学生に考えがないのではなく、自らの解答に自信がないだけであるため、それらを公に晒されることを好まない。その特徴をうまく改善できるものとして、発問に、無記名で、リアルタイムに、自らのスマートフォンを使用して、解答することができ、その解答内容は、授業スクリーンに映し出せるものを利用した。

こうすることで、インターネットを介したリアルタイムのディスカッションを展開することができ、学生の解釈、思考に広がりを見せることができた。

また、実習においては、実習記録をペーパレスとし、全てクラウド上で記録するようにした。これらは、学生、指導者、教員が時間場所にかかわらず、クラウド上で指導を行うことを可能とした。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

今年度は、昨年の授業に引き続き、発問に、無記名で、リアルタイムに、自らのスマートフォンを使用して、解答することができ、その解答内容は、授業スクリーンに映し出せるものを利用するとともに、クラウドにおける学習を展開するようにする。

また、事例学習においては、あらかじめ教員が必要と判断したペーパーペイシメントではなく、実習施設から協力を得た臨地におけるリアルな映像を使用し、学生自らの情報収集能力を育てることを実施する。

5. 今年度の学生による授業評価より

学生アンケートから、実習においてペーパレスに取り組んだことに対して、高い評価を得ることができた。その反面、PC の操作に慣れるまでに少し時間を要したとの意見もあった。そのため、本年度は、クラウド上での記録を授業から取り組むことができるよう準備を整える予定である。

また、授業の人数の兼ね合いから、教室の変更が当日になることがあった。そのような、事前に回避できる内容については、早期に対応することができるようにする。

6. 今年度の成果

今年度の成果として示すことができるものはないが、ICT を活用した DX への足掛かりになったと考える。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

ICT を利用した授業・実習で得た課題を更に、学生の理解・考察が進めることができるように、教材・授業方法のマイナーチェンジを行う。

8. 社会的活動等

昨年同様の内容を実施する。

9. 根拠資料（資料名のみ）

教員名	中村由果理	所属学科	看護学科	職名	講師
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	入試委員会、神戸常盤地域交流センター、 広報委員会、国家試験対策委員会、学部開設準備、入学前課題、入学前教育				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
基本看護技術Ⅰ	N	1	後期	必修	演習	対面	98
基本看護技術Ⅱ	N	2	前期	必修	演習	対面	93
基本看護技術Ⅲ	N	2	前期	必修	演習	対面	94
基本看護技術Ⅳ	N	2	前期	必修	演習	対面	94
看護教育論	N	4	前期	選択	講義	対面	51
看護研究	N	4	通年	必修	演習	対面	81
看護活動基実習	N	1	前期	必修	実習	対面	98
基礎看護学実習Ⅰ	N	1	後期	必修	実習	対面	97
基礎看護学実習Ⅱ	N	2	前期	必修	実習	対面	98
課題別実習	N	4	前期	必修	実習	対面	81
まなぶる▶ときわびとⅡ	全学	1	後期	必修	演習	対面	408

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験における面接指導 入学前課題における指導
- ・ 入学前教育への参加 FAST の活動

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

本学科では、看護学に関する高度な専門知識・技術を持ち、“いのち”に対する豊かな感性と知性をもった専門職業人の養成を行う。看護基礎領域として看護の学び始めの学生に関わるため、看護学を学び今後看護師として自己研鑽し続けるためにも学び方も含め、学生が自ら考え判断できる人の育成をしていく。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 講義においては、グループ学習などを取り入れ、考えながら講義を受講できるよう工夫し、双方向の授業展開を行なった。
- ・ 演習においては、グループでディスカッションを取り入れ、学生同士の経験から討議することでの主体的な教育を取り入れた。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 学生の主体的な学習参加を活かせるように演習においてもグループでの意見交換などを行い看護について考える機会を設けた。そのため、ホワイトボードなどを活用しディスカッションが活発になるよう環境面からも支援した。

- ・ 講義や演習が主体的になるよう、自己学修ノートの作成を取り入れた。
- ・ 講義が教員からの一方向にならないよう、発問を取り入れ学生が考えながら受講できる工夫を行った。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 教科によっては、グループ学習での達成感についての意見があった。グループでの学習が円滑にできるよう、支援していく必要がある。
- ・ 講義では、教授内容にボリュームがあるため早口になることもあった。講義での伝え方や、内容の厳選をしていく。

6. 今年度の成果

- ・ どの教科も概ね昨年度同様に 4.5 以上の評価があった。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 変化する学生の特徴を掴み、授業展開していく必要がある。
- ・ 自己学習ノートについては、学生間での充実の差が見られた。そのため、自己学習ノートの活用方法など具体化し説明することなど改善していく。

8. 社会的活動等

神戸総合医療専門学校 言語聴覚士科、理学療法士科、作業療法士科「吸引」に関する講義を行った。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布物
- ・ テスト問題

教員名	江口 実希	所属学科	看護学科	職名	講師
クラス担任	なし		クラブ顧問	なし	
委嘱委員・職務	SD 委員会 委員 国家試験対策委員会 委員 実習委員会 委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
看護活動基礎実習	N	1	前期	必須	実習	対面	-
○精神援助論	N	3	前期	必須	演習	対面	84

健康支援実習Ⅱ(精神)	N	3	後期	必須	実習	対面	80
課題別総合実習(精神)	N	4	前期	必須	実習	対面	-
看護学研究	N	4	通年	必須	演習	対面	81
まなぶるときわびと1	全	1	前期	必須	演習	対面	402

注1) -印は、今年度の評価なしを示す

(3) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策や学習状況の面談を適宜行い、学習計画や生活スケジュールの計画、振り返りを学生と行った。
2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）
 - ・ 「患者さんと関わるのが好き」「看護が楽しい」と思え、器用ではなくても誠実に看護に向き合える熱意を持った学生を育てたい。
 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）
 - ・ 「看護が楽しい」と思えるためには、知識を実践で生かすことが重要であるとする。そのため、知識を授業でわかりやすく伝え、伝えた内容を実習で再度確認し活用できるように実習指導を行なった。具体的には、臨地実習で学生と共に病棟で過ごし、タイムリーに学生の困りごとや疑問に寄り添えるよう行動を行ったりした。
 4. 今年度における教育方法改善の取り組み
 - ・ 「精神援助論」では、單元ごとにまとめノートを学生が作成し、内容を確認し不足部分を講義でコメントする形で補った。講義環境（教室が狭いので改善してほしい）、書き込みする時間が間に合わないなどの要望を受け、講義後に口頭及び板書の重要項目については学生に資料配付を行う工夫をし、復習しやすい教材を試みた。また、講義に精神障害を持った当事者をゲストスピーカーとして招聘し体験を語っていただくことで、対象理解が深まるような機会を設けた。
 5. 今年度の学生による授業評価より
 - ・ 「精神援助論」では学科平均よりも高い評価が得られた。特に、学生自身が授業時間以外に学修に取り組む時間や、学生からの意見や質問への対応に高評価が得られている。授業開始時に全体の課題を提示し、少量ずつ課題提出期限を示すことでフィードバックの行いやすさや、学生のペースでの学修が促せたのではないかと考える。
 - ・ 技術試験の方法の改善への要望があり、次年度の技術試験そのものの見直しを行なった。
 6. 今年度の成果
 - ・ 「精神援助論」では安定した授業評価が得られている。さらに、今年度よりグループワークも増やしながら講義を進めることや、課題を早期に提示することで、学生は自己のペースで計画的に学習することにつながられたのではないかと考える。
 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 技術試験の方法の改善への要望があり、次年度の技術試験そのものの見直しを行なった。今年度は、授業内で取り扱った知識を学生が実習で十分活用できたとは言い切れない。例えば、学生は学内演習を行った時には「自分ではできる」と感じていたようだが、実際に実習で技術を活用しようとすると精神看護技術を使う前に、基本的な看護技術の実施で戸惑っているようだった（手洗い、血圧測定や患者への自己紹介など）。基礎的な看護技術が涵養されていない学生に対しては、精神看護の技術習得のみに着目するのではなく、ゆっくり基礎的技術の習得に付き合い、学生が「患者さんに関わることは楽しい」「看護が楽しい」とまずは感じられ、誠実に患者さんに関わる態度を愛張るように支援していきたい。

8. 社会的活動等

- ・ なし

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

教員名	問本 弘美	所属学科	看護学科	職名	特任講師
クラス担任			クラブ顧問		
委嘱委員・職務					

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
看護対象論Ⅳ（母性・父性）	N	2	後期	必修	講義	対面	93
母性援助論	N	3	前期	必修	演習	対面	84
課題別総合実習	N	4	通年	必修	実習	対面	
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	
基礎看護学実習Ⅱ	N	2	後期	必修	実習	対面	
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 助産師養成課程進学希望学生の進路相談

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

社会が少子化していく中で、子育ては自然の営みから学習を経て習得するものへと変容した。加えて、核家族化が進み、親族からのサポートが受けにくい環境となり、母親の孤立、産後うつ、DV と子ども虐待等の社会問題が顕在化した。看護学科 DP の「いのちに対する温かいまなざし」とは、病を患う患

者に対してだけではなく、子を産み育てる女性と子ども、そしてその家族にも向けられるべきものである。よって、母性看護学の授業・演習・実習を通し、看護学生にはマタニティサイクルにおける女性と家族に対する看護はもちろんのこと、子育て中の家族を支援する視点を身に付けてほしい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 看護対象論ではDVと子ども虐待の講義を担当した。グーグルフォームを用いてデートDVに関する意識調査を行い、自らの持つジェンダーバイアスや支配関係への気づきを促した。マナバを用いて事前に事例資料を読み授業に参加することで、暴力被害者の心理状態を理解できるよう工夫した。
- ・ 母性援助論では、妊娠・出産・子育てや新生児という学生にとって出会う経験の少ない対象を取り扱う。そのため、図書館やビジュランで提供されている動画を補助教材として活用し、イメージ化を促した。身近な女性へのインタビューを事前課題とし、産後の母親と新生児の生活や体験を知った上で講義に参加してもらった。講義とそれに対応する演習を組み合わせ、知識を使えるレベルまで向上させるようにした。シミュレーション演習や上級生参加型の屋根瓦演習を演習に取り入れ、目指すべきモデルをイメージするとともに、実習に必要な知識・技術・心構えが具体的にイメージできるようにした。健康教育に関しては、妊娠期の保健指導案作成をテーマにグループワークを課すことで、様々な保健指導を効率的に網羅し、実習につなげられるようにした。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 前年度の受講票から、被害者（DVを受ける女性である子どもの母親）が加害者（子ども虐待の加害者である母親）になりうる、ということが理解できない様子がみられた。そこで、実際におきた目黒区児童虐待死亡事件を一つの事例として取り上げ、DVによる健康被害や解離が母親役割に及ぼす影響について学生に伝わるよう工夫し、改善を図った。
- ・ 母性衛生学会学術集会(@大阪)に参加し、新型コロナによる実習制限下における母性看護学実習の工夫について、他大学の発表より学んだ。

5. 今年度の学生による授業評価より

今年度の受講票から、DVを受ける母親が子どもを適切に守れなくなる、という現象を学生が理解でき、そのような状況にある母親への支援の必要性に気づけていた。

授業評価より、同時期に複数科目で課題を課され、学生の負担が大きくなっていることが明らかになった。後期の実習準備として必須であっても、学生は目の前のタスクで精一杯になっていることが考えられる。一方で、母子支援実習Ⅱの中では、母性援助論で課された課題が今の自分には必須であったと述べる学生が多数であったため、学生負担を軽減しながらも課題に取り組めるようにしていく。

6. 今年度の成果

母子支援実習Ⅱにおいて、前年度はS評価学生が0人であったが、今年度は6名がS評価となった。

看護学研究において指導した学生が、大学院への進学することになった。入学前面談にて卒業研究を読んだ進学先の教授から、「丁寧に卒業研究に取り組めているので、修士課程でもこの方向性で研究を進められる」と評価してもらえたと、学生が報告に来てくれた。

授業と実習を担当する中で、特定妊婦などの「助けてが言えない」対象者をどのように支援するか、

そのような支援をどうやって教育するかを明らかにする必要性を実感した。そこで基盤研究 C「DV を受けている女性のヘルプシーキングを促す周産期ケア自己評価尺度の開発」を申請し、採択された。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

受けている授業と、取り組むべき課題と、実習に向けての準備がリンクしていることを可視化し、学生が余裕をもったスケジュールで課題に取り組めるようにする。具体的には、授業開始後すみやかにまもなく全体の見通しを伝える等の工夫を行う。

8. 社会的活動等

特になし

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業資料
- ・ マナバの受講票（授業毎の学びの記述）
- ・ 担当学生による卒業研究
- ・ 科研費審査結果

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	大森 雅人	所属学科	こども教育学科	職名	教授
クラス担任	無	クラブ顧問	無		
委嘱委員・職務	副学長、学部長、ときわ教育推進機構長、学園一体化推進協議会委員、運営委員会委員、学長会議委員、入試委員会（合否判定部会）委員、子育て総合支援施設 K I T 連携部委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○保育内容（環境）	E	2	前期	選択	演習	対面	80
子どもと絵本 I	E	3	前期	選択	演習	対面	50
○教育と情報	E	4	前期	選択	講義	対面	36
○卒業研究 I	E	3	前期	選択	演習	対面	78
○卒業研究 III	E	4	前期	選択	演習	対面	92
○子どもと環境	E	4	後期	選択	演習	対面	68
教職実践演習（幼稚園・小学校）	E	4	後期	選択	演習	対面	85
○卒業研究 II	E	3	後期	選択	演習	対面	78
○卒業研究 IV	E	4	後期	選択	演習	対面	93
○教育方法・技術論	N	2	後期	自由	講義	対面	8

(2) 準正課、正課外の教育活動

・特記事項無し

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

保育・幼児教育や小学校以降の学校教育で普遍的に求められる資質・能力を修得した上で、乳幼児や児童・生徒が将来直面するであろう多様な環境変化に対して、それを自らの力で乗り越えていくことができる力を育成できる保育・教育実践ができる保育者・教育者を育てたいと考えている。

そのためにテクノロジーの急速な進化、少子高齢化の社会的課題、地球温暖化といったグローバルな問題への理解を深め、これらに積極的かつ柔軟に対応できる能力を学生自身に修得させることを目指している。それに対応する教育方法として、与えられた情報をただ受け入れるのではなく、学生たち自身が自ら考え、問題解決の過程を経験することを重視した方法を取り入れている。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 一方的な課題提示による演習ではなく、「実体験」→「実体験の振り返り」→「振り返りの内容を踏まえての総括的な講義」の順で授業を進行した。
- ・ 講義科目であっても、少人数での開講の場合には、双方向での対話型の授業を展開した。
- ・ 授業内や授業後の振り返り等で manaba を活用した。学生の記述をチャット GPT4 の分析機能を活用して要約した上で、次の授業でフィードバックを行った。
- ・ manaba の相互閲覧機能を活用して、提出されたレポートを共有して意見交換する授業を実施した。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 3. 教育方法でも記述したが、今年度の新たな取り組みとして、manaba 上に提出された学生達の学びに関するテキストデータを、個人情報を含む部分は削除した上、最新のチャット GPT4 の分析機能を活用して分析を行った。その結果、さまざまな知が含まれていながら適切な方法が無かったために取り出すことが困難であった集合知を短時間に取り出すことが可能となった。今年度は、そうして取り出した集合知を、学生にフィードバックする取り組みを行った。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 授業評価のスコアは、概ね高い評価が得られていると考えているが、いずれの授業においても「カテゴリー I（学生自身）」のスコアが伸び悩んでいるのが現状である。この点に関しては、毎年の課題となっており、何らかの方法で効力感を高める必要があると思っている。ただ、現状では打開策は得られていないので、引き続き検討したい。
- ・ 自由記述の中に、授業後の振り返りを manaba に提出させていることに関して、「課題がその日中で、アルバイトや用事があるのに無理がある。しんどい。」との記述があった。締切を長めに設定することも考えられるが、その場合でも結果として提出は締切直前が多いので悩ましい課題である。しんどいとの意見に関しては、単位取得に際しての必要学習時間を理解させる必要があると感じている。
- ・ 準備物を必要とする演習に関して、「準備物がある場合、もっと早めに伝えて欲しかった。」との意見があった。この点については、予告を1週間前に行っていたが、さらに早くすることにした。

6. 今年度の成果

- ・ 学生からの提出物に関して、せっかくデジタルデータとして提出されながら、適切な分析手段が無かったために十分に活用できていなかった。そうした現状に対して、今年度になって人工知能（チャット GPT4）が利用可能となったことにより、簡単に分析可能となった。ひとりひとりの学生の知は、決して十分とは言えないが、受講学生の集合知を得ることが可能になったことで、高度な内容をフィードバックすることができるようになった。この点は、教育における ICT 活用の成果と考えることができる。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 年々、一方的な知識伝達型の授業による授業の効果が低くなっていることを実感している。本来は、聞く力を育成することも大切だが、大学における専門教育において、その段階からの能力育成を図ることは、授業本来の目的から逸脱することになりかねない。このことは課題であると考えている。

・そうした課題に対応して、次年度の授業に関しては、可能な限り一方的な知識伝達型の授業方法を少なくして、学生自身が自ら考えて知識を形成するような授業の割合を増やしたいと考えている。そのための方策として、チャット GPT4 をより積極的に活用して、学生の集合知をフィードバックすること、manaba のレポート機能に新たに実装された集計機能を活用して、授業進行中にリアルタイムなフィードバックを行うことなどを考えている。

8. 社会的活動等

- ・高大連携事業の一環として、神戸鈴蘭台高校で講師を務めた
- ・川西市の公立幼稚園（清和台幼稚園）の園内研究の指導を行った
- ・全国保育士養成協議会理事
- ・社会福祉法人 2 法人（ときわぎ会、坂田福祉会）の評議員を務めた。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業で使用したスライド、配布物、manaba 上にあるコンテンツ等
- ・ 園内研修の委嘱状、研修資料等
- ・ 理事委嘱状
- ・ 高校で使用した配付資料や生徒が作成した研究成果の記録等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	光成 研一郎	所属学科	こども教育学科	職名	教授
クラス担任	なし	クラブ顧問	硬式テニス部		
委嘱委員・職務	教育学部こども教育学科学科長、運営委員会委員、学長会議委員、学園一体化推進協議会委員、子育て総合支援 KIT 連携部委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○「まなぶる▶ときわびとⅠ」	基盤	1	前期	必修	演習	対面・一部遠隔	407
○「教育と人間」	基盤	1	前期	選択	講義	対面・一部遠隔	70
○「まなぶる▶ときわびとⅡ」	基盤	1	後期	必修	演習	対面	
○「教育原理」	E	1	後期	必修	講義	対面・一部遠隔	78
○「教育方法・技術論」	E	3	後期	必修	講義	対面・一部遠隔	90
卒業研究Ⅰ	E	3	前期	必修	演習	対面	
卒業研究Ⅱ	E	3	後期	必修	演習	対面	
卒業研究Ⅲ	E	4	前期	必修	演習	対面	
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修	演習	対面	

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 教員採用試験面接対策指導
- ・ 履歴書の書き方等キャリア指導
- ・ 入学前教育の企画、運営
- ・

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目では、次代を担う子ども育成にかかわる保育者、教員を育成するために、学生が教育学の理論、教育方法（ICT 機器の活用を含む）を修得し、現場で実践力を発揮できる学生を養成する。

基盤科目では、学習習慣の確立、能動的、自律的な学習態度の育成を意識しながら、専門職業人に求められる論理的思考力を育成する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 基盤教育では、事前事後学修の習慣をつけることをねらいとし LMS マナバを活用している。

- ・ 個別学習として、課題についてリサーチを行い、それを協働学習として学生同士で議論し、最終的に発表する授業展開を設計している。
- ・ ICT 機器の活用を実践する授業設計を行っている。(ICT 活用の双方向授業、自主学習支援)
- ・ AL 授業におけるリフレクションの重視 (グループとしてのふりかえり、個人としてのふりかえり)

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 演習では、反転授業を取り入れ、事前事後学修の定着を図った。
- ・ アクティブ・ラーニング科目では、とりわけリフレクション (ふりかえり) を重視し、グループおよび個人としてのふりかえりの両面を徹底した。

5. 今年度の学生による授業評価より

基盤教育科目では、「コミュニケーション力やプレゼンテーション能力を身に付ける学修ができた」という学生の声を多く聞いたが、「グループによっては、プレゼンの内容やディベートの内容に差があると感じた」という意見もあったので、教員の適切な助言や即時フィードバックが必要だと感じた。担当者間で共有する。

6. 今年度の成果

「教育と人間」の授業においては、総合評価が 4.8 であった。昨年度より 0.2 ポイント上昇した。受講学生の学科の特性を考慮し、教育的な視点と医療的な視点の 2 つの観点から授業展開を行ったので、学生の関心が高かったように感じた。学生がその授業をカリキュラムの中で学ぶ必要性を感じるような導入、展開、まとめが実践できたのではないかと感じた。

初年次教育科目を担当していることから「新入生の初年次教育科目の学業成績と非認知能力」の関連性について論文にまとめることができ、学業成績の向上、あるいは学生の非認知能力の育成・向上のための教授－学修方略のありかたを検討するにあたっては、さまざまな非認知能力のなかでも、特に努力や粘り強さ、勤勉性、一生 (所) 懸命さなどを喚起する方略が重要であることを改めて認識することができた。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

授業教室の態様にも授業は影響される。「教育方法・技術論」の授業では、グループごとに授業設計をさせるので、図書館や他の教室も使用できるように調整する。再履修者の数を減らすため、学生の理解が進むような授業実践を行う。

8. 社会的活動等

- ・「防災教育学会」理事

9. 根拠資料 (資料名のみ)

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布資料
- ・ テスト問題

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	中田尚美	所属学科	E 科		職名	教授
クラス担任	3 A、3 B		クラブ顧問	無		
委嘱委員・職務	個人情報保護委員会委員長、図書委員会委員、紀要委員会委員 教育推進センター委員					

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○保育原理	E	1	前期	必修	講義	対面	69
大学道場ミニゼミ A	基盤	1	前期	自由	演習	対面	10
卒業研究 1	E	3	前期	必修		対面	5
卒業研究 III	E	4	前期	必修		対面	6
○保育内容（人間関係）	E	2	後期	選択	演習	対面	76
○こどもと人間関係	E	4	後期	選択	演習	対面	31
卒業研究 II	E	3	後期	必修		対面	5
卒業研究 IV	E	4	後期	必修		対面	6
保育・教育課題研究 1	E	2	後期	選択		対面	
保育・教育課題研究 II	E	3	前期	選択	演習	対面	3 3
こどもと絵本 1	E	3	前期	選択	演習	対面	5 0

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 就職面接の指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目では、保育士・幼稚園教育教諭を養成するために、保育や保育方法の知識・技能の習得とともに、保育現場で対応できる実践力と職業倫理を持った学生を養成する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 演習では、学生同士がペアであるいは少人数でワークできる時間を複数回設定した。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 演習では、毎回ミニレポート提出を行い、翌週に返却、双方向のやり取りに努めた。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 全般的に学生自身の学習時間が短めであった。授業内容と課題の在り方について考えていきたい。
- ・ 原理系の科目においては抽象的なテーマが多く、興味が持てなかったようである。今後はより具体的な話題を取り上げていきたい。

6. 今年度の成果

- ・ 演習でペアワーク、少人数のグループワークを取り入れたため理解が深まったようであり、定期試験では平均 79 点と昨年度より 4 ポイント向上した。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 4 年次後期の科目で、実習における学びを言語化する機会を何度か設けたが、言語化が難しい傾向がみられた。次年度は言語活動の充実にも取り組んでいきたい。

8. 社会的活動等

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	中西 利恵	所属学科	こども教育学科	職名	教授
クラス担任	2 年		クラブ顧問		
委嘱委員・職務	紀要委員会（委員長）、E 科就職委員会、E 科臨地実習委員会、子育て総合支援施設 K I T 連携部				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目 の 種類	科目 の 形態	授業 形態	受講 者数
○保育内容総論	E	1	後期	選択	演習	対面	53
○保育内容（健康）	E	2	前期	選択	演習	対面	80

○基礎研究演習Ⅱ	E	2	通年	必修	演習	対面	76
○子どもと健康	E	4	前期	選択	講義	対面	63
○教職実践演習 (幼稚園・小学校)	E	4	通年	選択	演習	対面	85
○子どもと絵本Ⅰ	E	3	前期	自由	講義	対面	50
○子どもと絵本Ⅱ	E	3	後期	自由	講義	対面	50
保育実践演習	E	4	後期	選択	演習	対面	64
保育・教育課題研究Ⅲ	E	3	後期	選択	演習	対面	31
卒業研究Ⅰ	E	3	前期	必修	演習	対面	5
卒業研究Ⅱ	E	3	後期	必修	演習	対面	5
卒業研究Ⅲ	E	4	前期	必修	演習	対面	7
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修	演習	対面	7
○学校保健	N	2	後期	選択	講義	対面	83
子ども学	O	2	後期	選択	講義	対面	64

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 保育士・幼稚園教諭採用試験対策として私立・公立の面接指導、エントリーシート・自己紹介書の添削指導、実技試験指導。
 - ・ 「ときわの森おはなしとあそびのひろば」の実施と実施にかかる指導。
2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）
- ・ 豊かな人間性と理論に裏付けされた実践的な教育力をもち、新しい時代や社会に対応できる質の高い保育者を養成する。
 - ・ 4年間を通して、主体的に学ぶ態度の育成、進路に対する意識の形成、課題を自ら発見して研究する力を養成する。
 - ・ まずは、子どもが信頼を寄せることのできる「豊かな人間性」をもった人材を育成する。
 - ・ さらに、社会情勢・教育的課題は今後も変動するものであり、新たな課題を掌握・予測し、それに柔軟に対応する力も育成したい。
3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）
- ・ 「保育内容（健康）」では、子どもの心と体の発達を学習する教材として、「保育所保育指針解説」の解説部分で具体的な例として挙げられているような子どもの様相をとらえた場面の動画と、その動画に合わせたノートを作成し、使用している。
 - ・ 「子どもと健康」では、4～5月の最後の実習体験を活かした課題設定を工夫している。設定した

課題に乱数表で編成したグループで取り組むことにより、保育者としての専門性を高めるだけでなく、就職先の保育現場で求められる園内研修の疑似体験的な実践教育を行っている。

- ・ 「保育内容総論」では、1年生科目である点をふまえ、実際に園で撮影した子どもたちの園生活の動画を編集し教材化している。また、第4回～13回目授業では、グループ・ミニワークを導入。グループは毎回乱数表により編成し、毎回異なるメンバーでのワークを実施することで、主体的・対話的で深い学びの実現を図っている。さらに、保育の内容を豊かにするための遊びや児童文化財について実際に触れて、遊んでみて、楽しんでみる体験的な学習方法を30分間導入している。
- ・ 保育内容の演習系授業では、グループでの教材研究や指導計画の作成を行い、模擬保育等実践では学生同士の他者評価（コメントシート）と自己評価（ふり返しシート）を併用した評価方法と、ワークシートを組み合わせた学びの確認方法を実施している。
- ・ 「保育・教育課題研究Ⅲ」は、『令和5年度 ども家庭庁主催 初任主任保育士研修』で講義を担当している「保護者支援・子育て支援」の内容を活用し、公務員採用試験対策として最新の統計による授業資料を作成している。
- ・ 講義系の科目においても、課題の出し方を工夫してグループワークを実施し、本日の学習の定着を図っている。
- ・ 講義系の科目においては、あえてテキストを使用せず、毎回、授業用スライドとその他資料を配布し、各自が「授業ファイル」を作成、完成させていく過程を通して、復習に重点をおいた学修の定着を図っている。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 「基礎研究演習Ⅱ」では、「保育・教育実践演習Ⅰ」（旧：基礎研究演習Ⅰ）で実施するKIT実習に対する課題設定を通して科目間連携を図り、学びのつながりを強化した。課題設定にあたっては、KIT子育てひろば3カ所と連携会議を開き、前年度学生の実習記録内容の分析結果を共有し、検討した。
- ・ 保育内容の演習系科目でのグループ・ワーク実施方法として、グループ・ミニワークを設定し、ミニワークについては、毎回乱数表によりメンバーを編成した。さまざまな学生との関わり、意見交換できるようにした。
- ・ 「教職実践演習」では、テーマ『実習を伝える』の8コマの授業実施方法を改善し、コース別に取り組んだ。2年生とのジョイント授業のみ合同で実施した。第一部は各コースの代表グループによる発表に改善し、第二部の全グループによるブース型発表は踏襲した。さらに、2年生によるf評価方法を改善し、Google フォームアンケートで実施しました。Google フォームアンケートは、4年生の教員養成コースの学生が作成を担当してくれた。従来の集計作業が簡素化され、各グループでの集計結果の分析と考察を充実させることができた。
- ・ 講義系の科目においても、課題の出し方を工夫してグループ・ワークを実施し、本日の学習の定着を図っている。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 演習系の科目では、グループ・ワークや実践を取り入れた授業実施は、ほぼ学科平均と同等であった。
- ・ 「保育内容（健康）」の自由記述に、『模擬保育などの実習を通していろいろな経験ができた。言

葉がけや環境構成など。』『実習で活かせるような指導案の書き方や実践を学ぶことができて良かった。』とあり、実際自己評価の「ふり返しシート」からは、模擬保育の実践から今後の実習で活用しようとする具体的な気づきや意欲がみられた。

- ・ 「保育内容総論」の自由記述に、『授業内容を聞くだけでなく、自分たちの意見を出してみんなで共有できたことが学びになり楽しかったです！』や『保育・教育要領以外にも絵本や手遊びの時にどうすればいいかを理解することができたところです。』とあり、複数の授業展開方法を導入することで学びが充実したと考える。
- ・ 「教職実践演習」の自由記述に、『神戸常盤大学で学んだことの集大成である教育実習とその先について、後輩へのアドバイスとして伝えることができた点』が良かった点とあり、この取り組みの目的達成度の高さがうかがわれた。
- ・ 講義系の科目においても概ね学科平均と同じであったが、「子どもと健康」については、「授業内容」「授業方法」「学修成果」の3項目ともに学科平均から0.2ポイント～0.3ポイント高く、高評価であった。課題設定の工夫が反映されていると考える。
- ・ 他学科の講義系科目においては、あえてテキストを使用せず、毎回すべてスライドの資料を準備し、学生には授業資料として配付し、各自が「授業ファイル」を作成することで、復習を充実させることができ、試験の結果もほとんどの学生が8割以上の得点を獲得していた。

6. 今年度の成果

- ・ 「子どもと健康」では、学生の授業評価がすべてのカテゴリーにおいて昨年度より0.1～0.2上昇した。課題設定とグループ・ワーク実施方法の工夫による成果と考える。
- ・ 「教職実践演習」では、昨年度よりすべてのカテゴリーにおいて0.6～0.8ポイント向上した。テーマ『実習を伝える』活動への取り組み方をコース別にしたことも反映されていると考える。
- ・ その他演習系の科目については、「5.今年度の学生による授業評価」で記述したとおり、今後体験する学外での実習や就職に役立つという評価が得られた。
- ・ 「学校保健」の試験結果は、78名受験中、90点以上が56.4%、80～89点が37.2%、70～79点が6.4%、60～69点は0%であった。あえて教科書を使用せず、授業ファイル作成による復習を重視した学習方法の成果と考える。
- ・ 「子どもと絵本Ⅰ」「子どもと絵本Ⅱ」は『認定絵本土養成講座』指定科目であり、履修条件が他科目よりも厳しく設定されているが、50名の履修者全員が両科目の単位を取得することができた。『認定絵本土』資格の認定を受けるための申請を行うことができた。こども教育学科4年生に50名の認定絵本土誕生を実現できた。
- ・ 公立の採用試験対策として、志望自治体ごとのエントリーシートの指導や実技試験指導を行った。特に、ゼミ生については、最終受験日の1月まで継続して支援した。結果、貝塚市と丹波篠山市の2つの自治体に合格した。
- ・ 「基礎研究演習Ⅱ」と「保育・教育実践演習Ⅰ（前：基礎研究演習Ⅰ）」との科目間連携を図るための課題設定の工夫とその取り組み成果については、日本保育学会第77回大会において発表する。発表題目「保育者養成課程における子育て支援施設を活用した教育方法Ⅰ」、発表者：大城亜水・中西利恵。
- ・ さらに、KIT実習の特性である保護者との関わりについては、日本保育学会で継続して発表してきた「保護者支援を実践できる保育者を養成する教育方法の研究」の成果を参考にした。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 「子どもと健康」の授業評価に、グループ分けにおいてAクラスとBクラスを混合した方が良いという意見が複数あったので、次年度からはA・Bクラス混合でグループ分けする方法に変更したい。
- ・ 「基礎研究演習Ⅱ」と「保育・教育実践演習Ⅰ（前：基礎研究演習Ⅰ）」との科目間連携では、KITの特性を活かした実習内容として保護者との関わりが挙げられるが、保護者に対して学生は具体的な課題設定がないと活動が難しいようであるため、課題について検討する。
- ・ 評価方法の工夫として、現在、「保護者支援を実践できる保育者を養成する教育方法の研究」において開発中の「保育者養成段階において求められる保護者に対する支援を実践できる力に関する評価尺度」の試行を検討する。
- ・ 新課程の1年次が終了した。学年進行に伴い、新科目が開設となるため、学科の改革案（エナジープラン）を着実に実現するための具体的実施計画策定及び実践に取り組む。
- ・ 特に、新たな学習環境として「ときわの森」の活用方法、教材研究、科目間連携方法等の開発に取り組む。活用プランを作成し、年間を通した活用と正統的周辺参加型学習システムの導入と展開方法についても検討する。検討にあたっては、テーマ別研究で採択されている（2023・2024年度の2年間）「こども教育学科学生の自然への感性を育てる教育方法の開発」の研究成果を次年度に向けた改善策に活用する。
- ・ 一昨年度より実施している「ときわの森おはなしとあそびのひろば」については、今年度も実施し、バスの運行がなければ大学での実施はほぼ無理であることが明らかとなった。この結果をふまえ、今後の実施方法について検討する。
- ・ 認定絵本士養成講座の運営方法の確立と新資格活用方法について検討する。資格の活用方法の検討については、参考資料として「大阪市子どもの読書活動推進連絡会」実施報告書を活用する。

8. 社会的活動等

- ・ 高大連携事業の一環として、神戸鈴蘭台高校「総合的な探求の時間」の授業を5コマ担当
- ・ 兵庫県教育委員会特別非常勤制度により、兵庫県立篠山鳳鳴高校の「発達と保育」の授業を6コマ担当
- ・ 八尾市子ども・子育て会議委員 委員長
- ・ 松原市子ども・子育て会議委員 副委員長
- ・ 松原市児童福祉審議会委員
- ・ 高石市子ども・子育て会議委員 副委員長
- ・ 三田市子ども審議会委員 副委員長
- ・ 寝屋川市児童福祉審議会委員
- ・ 湊川短期大学附属ぼるとこども園第三者評価委員
- ・ 「大阪市子どもの読書活動推進連絡会」学識経験者として助言・講評を担当
- ・ 「令和5年度 こども家庭庁主催 初任主任保育士研修」講師を担当

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス

- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料
- ・ 定期試験問題
- ・ 就職実績の資料
- ・ 2023 年度テーマ別研究申請書（ブランディング研究）
- ・ 日本保育学会第 77 回大会発表資料
- ・ 神戸常盤大学紀要 17 号
- ・ 認定絵本土養成講座 修了者認定申請書（令和 6 年 3 月 11 日）
- ・ 令和 5 年度 こども家庭庁主催 初任主任保育士研修資料
- ・ 令和 5 年度 「大阪市子どもの読書活動推進連絡会」実施報告書

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	牛頭 哲宏	所属学科	こども教育学科	職名	教授
クラス担任		クラブ顧問			
委嘱委員・職務	義務教育コース コース長 教職支援センター センター長 研究倫理委員会 副委員長 就職委員 臨地実習委員 子育て総合支援施設 KIT 連携部委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○総合的な学習の時間の指導法	E	3	前期	必修	講義	対面	20
○教科指導法(国語)	E	3	前期	必修	講義	対面	20
○教科指導法特論Ⅱ	E	4	前期	選択	講義	対面	27
○教育実習指導	E	3	前期	必修	演習	対面	20
○総合的な学習の時間の指導法	N	2	後期	必修	講義	対面	9
○教科指導法特論Ⅲ	E	4	後期	選択	講義	対面	27
教科指導法特論Ⅰ	E	3	後期	選択	講義	対面	19
保育教育課題研究Ⅲ	E	3	後期	選択	演習	対面	31

基礎研究演習Ⅱ	E	2	通年	必修	演習	対面	12
教職実践演習	E	4	後期	必修	演習	対面	85
子どもと絵本Ⅱ	E	3	後期	選択	演習	対面	50
アカデミックライティング	基盤	1	後期	必修	演習	遠隔	454
○教育実習(小学校)	E	3	後期	必修	実習	対面	19
卒業研究Ⅰ	E	3	前期	必修	演習	対面	19
卒業研究Ⅱ	E	3	後期	必修	演習	対面	19
卒業研究Ⅲ	E	4	前期	必修	演習	対面	26
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修	演習	対面	26

(3) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 教員採用試験対策として、面接指導・小論文の添削指導・模擬授業対策指導・場面指導
- ・

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 本学を卒業した学生が義務教育の教員として社会に貢献できるように全面的に支援している。この目標を達成するために、専門科目を通じての知識と技能の習得に焦点を当てている。また、学生が教育現場で遭遇する可能性のある様々な状況への対応力を養うこと、さらには高い職業倫理を備えた行動ができるようにすることにも注力している。

私の教育への信念は、単に知識を伝えることにとどまらず、学生たちが社会で必要とされる人材になるための能力を育て、支援することにある。学生がこれらのスキルと倫理観を身につけることで、将来、教育界のみならず社会全体に貢献できる人材となることを願っている。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 遠隔と対面の両方の授業において、学生の学ぶ意欲を喚起するカリキュラムを構築した。
- ・ 子育て総合支援施設 KIT の利用児童が増加したことにより、学生の実習の在り方を再構築した。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 前年度の学生による授業評価では、大変役に立つ講義であったとの意見が見られた。そのため、今年度は、さらに学生のニーズを掘り起こし、現場で役立つ教科指導法の授業改善に努めた。
- ・ 実習指導では、ディスカッションを充実させ、授業実践力と評価眼を鍛える構成に改善した。
- ・ 教員採用試験対策である授業時間外の学修では、Tokiwa's ラーニング(e ラーニング教材)によるICTを活用した基礎学力の定着、学力の維持向上や学習の習慣化を図っている。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 教員免許のための必修科目においては、授業改善の成果によって、学生から「わかりやすい」「も

っと学びたい」などの意見が多くみられた。しかし、授業のわかりやすさと、教育現場で学びの成果が生かせることは別問題である。教育実習だけではなく、正式採用後にも生きる知識や技能を伝え、自らが改善し応用できる原理原則を指導していきたい。

6. 今年度の成果

- ・ 教員採用試験対策として、8 カ月にわたり 4 年生を指導した。その結果、20 名が教員採用試験に挑戦し正規教員 13 名 常勤講師 6 名 合計 19 名が小学校教員として 4 月から教壇に立つ。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 授業 DATA のエビデンスに基づいた授業改善。
- ・ 令和 4 年度に採択された科研について、3 年目(最終年度)の研究計画を遂行する。
- ・ 子育て総合支援施設 KIT での実習の在り方を更に充実させる。

8. 社会的活動等

- ・ 神戸市立五位ノ池小学校学校運営協議会委員として学校運営に関する指導助言を行った。
- ・ 大阪府東大阪市に本部を置く成協信用組合において新入職員研修会の講師を務めた。
- ・ ノエビアスタジアムにおいてヴィッセル神戸サッカースクールコーチ研修会の講師を務めた。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	橋本 好市	所属学科	教育学部	職名	教授
クラス担任	保育者養成コース長	クラブ顧問			
委嘱委員・職務	ハラスメント防止対策委員会委員長、E 科就職委員会委員長、E 科臨地実習委員会委員、E 科将来構想委員会委員、大学院協定校交渉等担当（兵庫教育大学学部・教職大学院接続部会委員）				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○社会福祉	E	1	前期	必修	講義	対面	69
○子ども家庭福祉	E	1	後期	必修	講義	対面	54
○障害者福祉特論	E	2	後期	選択	講義	対面	78

○保育実習指導Ⅰ（社会福祉施設）	E	3	後期	必修	演習	対面	59
○保育実習指導Ⅲ	E	4	後期	必修	演習	対面	18
○保育実習Ⅰ（社会福祉施設）	E	3	後期	必修	実習	対面	59
○保育実習Ⅲ	E	4	前期	必修	実習	対面	18
大学道場 miniゼミ A	基盤	1	前期	選択	演習	対面	49
保育・教育課題研究Ⅰ	E	2	後期	選択	演習	対面	
保育・教育課題研究Ⅱ	E	3	前期	選択	演習	対面	
保育・教育課題研究Ⅲ	E	3	後期	選択	演習	対面	
卒業研究Ⅰ	E	3	前期	必修	演習	対面	
卒業研究Ⅱ	E	3	後期	必修	演習	対面	
卒業研究Ⅲ	E	4	前期	必修	演習	対面	
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修	演習	対面	
保育教育実践演習Ⅰ	E	1	通年	必修	演習	対面	
基礎研究演習Ⅱ	E	2	通年	必修	演習	対面	

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ① 就職委員会 就職ガイダンス（3年・4年）
- ② 就職内定先への挨拶訪問（卒業生）
- ③ 模擬面接指導（保育・幼児教育コース3年・4年）
- ④ 履歴書指導（保育・幼児教育コース3年・4年）
- ⑤ 保育実習指導（保育・幼児教育コース3年・4年）
- ⑥ 保育実習先への訪問指導（保育・幼児教育コース3年・4年）
- ⑦ 見学・体験実習引率（E科1年・保育・幼児教育コース2年）
- ⑧ 保育実習先に関する各種団体・連盟への業務
- ⑨ 就職先に関する各種団体・連盟への業務
- ⑩ 兵庫県施設保育士養成協議会

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目では、保育者養成のために、その基盤となる社会福祉・児童福祉等の法制度を理解の知識・技能の習得とともに、保育・社会福祉の実践現場で対応できる実践力と職業倫理を確立した学生を養成したい。

卒業研究等の演習科目では、社会福祉専門職の一員として主体的に学び続け、キャリアを積み重ねながら取得資格を増やし、資格に応じた業務に貢献できる実践者の育成を目指している。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 講義では、法律を読み解くことのできる保育者の養成を図るため、法治国家として全ての制度と実践が法律に基づいていることを理解させる。
- ・ 上記のために、テキストとして「社会福祉小六法」を駆使して、法律と制度の繋がりを把握させることで、専門職としての社会的意義と社会的立ち位置を理解させる。
- ・ 専門研究では、主体的に学ぶことによる知識の深化に喜びを感じることもできるように、毎週課題を与えてレジュメ作成と発表を課し、議論の場を設定している。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 講義内容の分かりやすさと新情報の提供のために、講義内容の工夫を継続している。
- ・ 講義内容を反復できるよう、定期的に講義レジュメを manaba にて掲載し、各自の復習に活用できる体制をとっている。

5. 今年度の学生による授業評価より

講義系科目については、概ね高評価をいただいているが、この評価に甘んじ慢心せず、毎年度の講義内容には新情報を踏まえた更新を図る。

6. 今年度の成果

- ・ 県内優良社会福祉法人との良好な関係を維持し、本学科学生の実習及び就職への成果を出すことができている。
- ・ 学生のニーズに適した教授方法（遠隔講義・資料の工夫）、manabaの活用（資料提供）、最新情報を盛り込む等、学生の理解度と定着への工夫を図ることができたことは、授業評価に確認できる。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 学生の理解度と定着への工夫を図っているが、今後もmanaba等を活用しつつ、講義内容を精査し、社会的動向に応じた内容を提供していく。
- ・ 科研の成果を踏まえ、講義等への反映への工夫をしていきたい。

8. 社会的活動等

- ・ 神戸大学 大学院 人間発達環境学研究科 非常勤講師（臨床心理実践演習）
- ・ 社会福祉法人 白百合学園 副理事長
- ・ 社会福祉法人 うるま福祉会 評議員
- ・ 社会福祉法人 陽気会 評議員
- ・ 社会福祉法人 みかり会 評議員
- ・ 尼崎市保育所設置法人等選定委員会 委員長
- ・ 尼崎市立保育所移管法人選定委員会 副委員長
- ・ 日本保育者養成教育学会 査読委員
- ・ 日本子ども家庭福祉学会 査読委員

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 就職ガイダンス資料及び就職内定率

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	山田 秀江	所属学科	こども教育学科	職名	教授
クラス担任	2年生	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	臨地実習委員・就職委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○保育指導法	E	3	前期	必修	演習	対面	61
○教育実習指導	E	3	前期	必修	演習	対面	78
○子どもの表現文化	E	4	前期	選択	演習	対面	11
○保育の計画と評価	E	2	後期	必修	講義	対面	76
○保育者論	E	1	後期	必修	講義	対面	54
教育実習（幼稚園）	E	3	後期	必修	実習		59
保育・教育実践演習Ⅰ	E	1	通年	必修	演習	対面	69
基礎研究演習Ⅱ（保育者コース）	E	2	通年	必修	演習	対面	76
保育・教育課題研究Ⅱ	E	3	前期	選択	演習	対面	33
卒業研究Ⅰ	E	3	前期	必修	演習	対面	5
卒業研究Ⅱ	E	3	前期	必修	演習	対面	5
まなぶる▶ ときわびとⅠ	基盤	1	前期	必修	演習	対面	406
まなぶる▶ときわびとⅡ	基盤	1	後期	必修	演習	対面	408

大学道場 mini-ゼミ B	基盤	1	後期	選択	演習	対面	12
教職実践演習（幼稚園・小学校）	E	4	後期	必修	演習	対面	85

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 公立保育所、幼稚園、認定こども園採用試験の2次・3次試験（模擬保育・集団討論・実技試験等）の指導
- ・ 常盤女子高校 体験授業『保育の魅力～大学で学ぶこと～』
- ・ 三木高校、明石南高校、芦屋国際中等教育学校・国際高校 体験授業、分野別説明会

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 子どもや保護者の思いに寄り添い、子どもの主体性を大事にした保育が展開できる保育者を養成した
- い。また、幼児期は遊びを通して学ぶ時期であるため、幼児期にふさわしい遊びを知り、その遊びを子ども自ら発展的に展開していくための指導力や援助能力を身につけてほしい。特に演習科目では、何事も積極的にまた前向きに取り組む姿勢やグループで協働的に行動する態度を育成したい。
- ・ 私自身が個々の学生の特性を理解し、それぞれの願いや考えに寄り添い、学生自ら学びを深めていけるような支援を行いたいと考える。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 動画を用いて子どもの行動を観察したり、実践事例を読み解いたりして、子どもの内面や発達の理解が深まるようにした。さらに、グループで事例の考察を行い、保育について考える機会を作った。それにより、自分とは異なる視点があることに気づき、保育を考える上で多様な見方があり、対話を通して協働的に取り組む重要性を感じられるようにした。
- ・ 保育指導法ではグループでの教材研究や指導案の作成を行い、模擬保育を実践した。模擬保育の後に振り返りと実践内容の研究討議を行った。
- ・ 講義形式の授業においても、グループディスカッションやグループでの指導案作成などを取り入れ、一方的な授業にならないよう、可能な範囲でアクティブ・ラーニングを取り入れた。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 授業中に学生に質問し、スマホで回答を求め、その結果を即座にスクリーンに表示して、学生間で意見の共有ができるように工夫した。学生たちは自分の意見を口頭で発表することは難しいが、スマホでの回答は素早く行うので、それぞれの意見を共有したり、学生の考えを取り入れたりしながら授業を進められるようICTを活用した。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 講義科目でグループディスカッションの時間を設けたが、時間が不足して十分に話し合えず、不満を感じたという意見が一人あったので、次年度は90分の授業計画（タイムマネジメント）をより丁寧に行いたい。

- ・学生自身の学習時間が短い科目が多かったので、授業課題の再検討や manaba を使った反転授業なども検討したい。

6. 今年度の成果

- ・保育指導法では総合評価が「4.9」と高い評価を得られた。学生からは模擬保育後の振り返りでの討議や教員からの講評が勉強になったとの意見があった。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・講義科目での授業評価が演習科目よりも低い結果となったので、教えるべき知識や情報を精選し、学生が能動的に取り組めるようなアクティブ・ラーニングを適切に取り入れ、学習成果が上がるように努めたい。

8. 社会的活動等

- ・大阪府門真市「令和5年度 門真市保育所等職員研修」講演
- ・滋賀県「第72回滋賀県美術教育研究大会 栗東大会」講演
- ・ときわんモトロク「保護者対象講座～幼稚園選びのコツ～」講演
- ・本学地域公開講座 「2023年度後期神戸常盤大学 Web 公開講座」講演
- ・兵私幼協 養成校実習担当者意見交流会参加
- ・大阪府私立幼稚園連盟 養成校との懇談会参加

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布資料

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	山下敦子	所属学科	こども教育	職名	教授
クラス担任	1年	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	SD 委員長、教職支援センター 副センター長 ときわ教育推進機構委員 自己点検委員会、臨地実習委員副委員長、子育て総合支援施設 KIT 連携部委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数

○保育・教育実践演習Ⅰ	E	1	通年	必修	演習	対面	69
○教職論	E	2	前期	免許必修	講義	対面	90
特別支援教育	E	3	前期	免許必修	講義	対面	85
総合的な学習の時間の指導法	E	3	前期	必修	講義	対面	20
教科指導法特論Ⅱ	E	4	前期	選択	講義	対面	27
教育実習指導	E	3	前期	必修	演習	対面	20
保育・教育課題研究Ⅱ	E	3	前期	選択	演習	対面	33
総合的な学習の時間の指導法	N	2	後期	必修	講義	対面	9
教科指導法特論Ⅲ	E	4	後期	選択	講義	対面	27
○国語	E	2	後期	免許必修	講義	対面	12
教科指導法特論Ⅰ	E	3	後期	選択	講義	対面	19
教職実践演習	E	4	後期	必修	演習	対面	85
○アカデミックライティング	基盤	1	後期	必修	演習	遠隔	454
教育実習(小学校)	E	3	後期	必修	実習	対面	19
○インターンシップA	E	2	後期	選択	実習	実習	11
○介護等体験	E	4	後期	必修	実習	実習	25
保育・教育課題研究Ⅰ	E	2	後期	選択	演習	対面	33
○保育・教育課題研究Ⅲ	E	3	後期	選択	演習	対面	31
卒業研究Ⅰ	E	3	前期	必修	演習	対面	19
卒業研究Ⅱ	E	3	後期	必修	演習	対面	19
卒業研究Ⅲ	E	4	前期	必修	演習	対面	26
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修	演習	対面	26

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 教員採用試験にむけての面接指導、論文指導、模擬授業対策、場面指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 将来、教職に就くことを念頭に、教師に必要な資質・能力の育成、実践力の育成を第一に考えている。すなわち、高い倫理観、実践的な指導力、臨機応変に行動できる対応力、人間関係力等を育成することに注力している。これらの力の育成に関しては、授業だけではなく、教員採用試

験対策や日頃の関わりの中でも常に意識し、全人教育として取り組んでいる。

3. **教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）**
 - ・ 基盤科目「アカデミック・ライティング」では、遠隔授業ではあるが、オンデマンド式の講義の内容をスモールステップにしたり、添削指導を密に行ったりしてICTを活用しながら、双方向の授業になるように心がけた。
 - ・ 「インターンシップ A」、「教育実習指導」では、学生が実際に体験した事例を取り上げながらディスカッションを行ったり、模擬授業を実施したりして実践力が身につくようにした。
 - ・ 専門科目においては、アクティブラーニングをファシリテートできる人材を育成することをめざし、学生が探究する活動を多く取り入れた。

4. **今年度における教育方法改善の取り組み**
 - ・ 前年度の学生による授業評価では、言語活動を実際に行うことや、教育現場の実際を見聞する授業が大変役にたったという評価が多かった。今年度も、「国語」の授業では、言語活動を実際に体験したり、言語活動を開発したりすることを多く取り入れた。
 - ・ 学習者用デジタル教科書（小学校国語）を購入し、学生にライセンスを配布した。この取り組みにより、授業前に教材研究をする学生が増え、より高度な授業内容を実施することができた。

5. **今年度の学生による授業評価より**
 - ・ 専門科目では、「わかりやすい」「役にたった」という評価が多かった。実践的な指導力を育成することを今後も意識していきたい。
 - ・ 基盤科目では、「文章の書き方がよくわかった」「文章の構成の仕方がわかった」という意見が多く見られた。ライティングは、習熟の個人差が大きい分野である。途中で挫折して単位を取得できない学生もいることから、文章表現力や読解力に課題を抱える学生への支援、指導をより一層行っていきたい。

6. **今年度の成果**
 - ・ 教員採用試験対策を教職支援センターとの連携を密にして行った。教科や教職教養の知識の定着を図ること、実践的な指導力を向上すること、教師としての心構え等を育成できたと考えている。
 - ・ テーマ別研究で「大学生の読解力分析に基づく『アカデミック・ライティング』における教授法の開発」に取り組んだ。オンデマンド型の授業と添削指導の教材パッケージを開発し、授業に反映することができた。

7. **今年度の課題と次年度に向けた改善策**
 - ・ アカデミックライティングでは、遠隔授業のため途中で挫折し、単位を取得できない学生が存在した。オンデマンド型の授業と添削指導の教材パッケージをさらに発展させ、LMS 型のブレンディッドラーニングの開発を行い、きめ細かい遠隔授業ができるように努める。
 - ・ 自閉スペクトラム症等の特性をもつ学生が増加していることから、合理的配慮、ジョブマッチング等の進路指導などのあり方についても研究、実践していきたい。学科のFDでも取り上げるこ

を計画していきたい。

8. 社会的活動等

- ・ 文部科学省「教員研修の高度化に資するモデル開発事業」大阪府教育庁委託研究における指導助言
- ・ 神戸市立駒ヶ林小学校学校評議委員
- ・ 枚方市支援教育審議会 副委員長
- ・ 明石教育研究所スーパーバイザー
- ・ 小学校国語教科書編集委員
- ・ 大阪市教育委員会がんばる先生支援事業における指導助言
- ・ 大阪市教育研究会国語部教員研究発表会への指導、講演
- ・ 大阪府教育庁研究指定校における指導助言（国語科教育、特別支援教育、学校図書館教育）
- ・ 枚方市教育委員会における指導助言（国語教育、特別支援教育、幼小連携）
- ・ 兵庫県播磨町立小学校、こども園における指導助言（国語教育、特別支援教育、幼小連携）
- ・ 高知市教育委員会における指導助言（国語科教育）
- ・ NPO 法人「ERP 教育研究所 教師力向上研究会」役員

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ テスト
- ・ 授業で使用したスライド資料、配布物、manaba 上のコンテンツ
- ・ 講師派遣依頼書

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	笹井隆邦	所属学科	こども教育学科	職名	准教授
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	入試委員会 図書委員会副委員長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○人類と地球環境	MNORE	1~4	前期	選択	講義	対面	200
○理科	E	2	後期	選択	講義	対面	12
○生き物と自然の力	E	4	後期	選択	講義	対面	7

保育・教育課題研究 II	E	3	前期	選択	講義	対面	33
保育・教育課題研究 III	E	3	後期	選択	講義	対面	31

(3) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 生物問作 第3者
2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）
 - ・ 自然離れが進む中、多くの学生に自然に触れる機会をつくり、自然への興味関心を持てるような授業を展開したい。
 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）
 - ・ 可能な限り、里山の動植物を持ってきて、特徴を説明し、触れてもらう。
 4. 今年度における教育方法改善の取り組み
 - ・ 学生が自然との触れ合いを体験することにより、現場での園外活動等で活かせるよう工夫する。
 5. 今年度の学生による授業評価より
 - ・ 人類と地球環境では、毎回、里山の生き物を持っていき触れてもらった。授業評価ではそのことについて好評であった。
 6. 今年度の成果
 - ・ 理科では、12名中、理科が好きである学生は1名であった。そこで“理科は意外と面白いぞ”をテーマに授業を展開し、最後の授業で“理科が面白かった”という学生が増えたことが成果と考える。
 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策
 - ・ 学生の授業外での学習時間が少ないようである。事前課題を出してみたい。
 8. 社会的活動等
 - 20230702 「むしとり観察入門編」 講師 宝塚市自然保護協会 宝塚自然の家
 - 20230715 「報告会&ライトトラップ」 スタッフ キーナの森 神戸市建設局公園部整備課 深川先生・ゼミ生2名参加
 - 20230805 「明石川のいきもの展」 桜が丘夏祭り のあそびクラブ
 - 20230906 「身近な生き物に触れよう」 六甲藤原台幼稚園 講師
 - 20230907 「身近な生き物に触れよう」 北六甲幼稚園 講師
 - 20230908 「むしと遊ぼう」 六甲幼稚園 明石海峡大橋公園でむしとり 講師
 - 20230912 「身近な生き物に触れよう」 育英幼稚園 講師 ゼミ生1名参加
 - 20230912 「身近な生き物に触れよう」 ときわ幼稚園 講師 ゼミ生2名参加
 - 20240227 「ネイチャークラフト」 北六甲幼稚園 講師 ゼミ生2名参加

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	脇本 聡美	所属学科	こども教育	職名	准教授
クラス担任	4年生 B クラス	クラブ顧問	美術部		
委嘱委員・職務	教務委員、国際交流副センター長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○英語コミュニケーションⅠ	基盤(M)	1	前期	必修	演習	対面	88
○英語コミュニケーションⅡ（保・幼教育コース）	基盤(E)	1	後期	選択	演習	対面	50
○英語コミュニケーションⅡ（義務教育コース）	基盤(E)	1	後期	選択	演習	対面	20
国際理解	基盤	1	前期	選択	講義	対面	60
○小学校英語	E	2	前期	選択	講義	対面	12
○教科指導法（外国語）	E	3	前期	選択	講義	対面	19
卒業研究Ⅰ	E	3	前期	必修	演習	対面	78
卒業研究Ⅱ	E	3	後期	必修	演習	対面	78
卒業研究Ⅲ	E	4	前期	必修	演習	対面	92
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修	演習	対面	92
○保育・教育課題研究Ⅰ	E	2	後期	選択	演習	対面	31
保育・教育課題研究Ⅱ	E	3	前期	選択	演習	対面	33
保育・教育課題研究Ⅲ	E	3	後期	選択	演習	対面	31

教科指導法特論Ⅱ	E	4	前期	選択	講義	対面	27
教科指導法特論Ⅲ	E	4	後期	選択	講義	対面	27
○コミュニケーション イングリッシュ	O	3	前期	選択	演習	対面	12

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 英語検定試験受検者への個別試験対策（ライティング添削、面接指導を含む）
- ・ 付属幼稚園でのキッズプログラムのアシスタント指導
- ・ 令和5年度ネパール交換研修派遣学生の英語発表指導
- ・ 学生による国際交流イベント助言

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

基盤教育の「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」及び「コミュニケーションイングリッシュ」では、英語をコミュニケーションのためのツールの一つと捉え、英語を使いながら習得していくという概念に基づき、それを実践することをティーチャー・ビリーフとしている。

専門科目では、義務教育の教員を養成するために、教科の知識や教授法を習得とともに、現場での実践力やコミュニケーション力を養うことを目指す。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」及び「コミュニケーションイングリッシュ」では、英語を使って伝えたいことを発信する活動として、一人ずつにパワポを用いた英語発表を行わせている。英語原稿作成では、一人ずつに個人指導を行っており、必修授業であってもテラーメイドの教育を心掛けている。また、英語によるメッセージを理解する活動のために、オーセンティック教材を使用している。各自がICT教材により授業外学習で理解できたことを、授業では教員が作成したガイドをもとに、グループで共有し、理解を深めていくグループワークも行っている。
- ・ 専門科目の「小学校英語」では、初等英語教育で活用できる英語の歌、絵本、英語俳句などの教材に触れ、活動を体験した上で、グループワークにより外国語活動を計画し、指導案を作成し、模擬授業を行っている。また、外国語教育の目的の一つでもある、様々な文化を受容する柔軟な考え方や姿勢の育成のために、青年海外協力隊として海外派遣の経験を持つゲストスピーカーによる多文化共生をテーマとする講義の時間を設定した。「教科指導法（外国語）」では、グループでの教材研究や授業計画を行った上で、模擬授業を行う活動を設けた。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 語学演習系の前年度の学生による授業評価では、教材の和訳がほしいという意見が見られた。オーセンティック教材をホリスティックに理解すること、教材から必要な情報を得ることが授業のねらいであることを学生に理解してもらうために、初回のオリエンテーションで丁寧に説明するよう心掛けた。
- ・ 学生自身の学習時間が短めであったため、教材を視聴してることが前提となる活動を取り入れた。

「英語コミュニケーションⅠ」においては学習時間が長くなった。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・基盤教育科目の語学授業では、今年度も英語発表が高評価であった。今後も伝えたいことをわかりやすく英語で伝える活動を続けていきたい。
- ・「小学校英語」「教科指導法（外国語）」の授業は概ね高評価であった。教え込むことより、活動を通して、教育現場で活用できる新しい知識を増やし、それを使っていけるような授業を今後も目指したい。

6. 今年度の成果

- ・基盤教育科目の語学授業では、学生の学習時間が伸びた科目もあった。
- ・語学授業においても、専門科目であっても、学生のパフォーマンスに対して必ず一人一人にフィードバックをしている。授業評価ではそれが学びや励みになったというコメントが複数見られた。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・基盤教育科目の語学授業では、発表などのパフォーマンスでは、教科に苦手意識のある学生でもしっかり取り組むことで高評価を得られるが、筆記テストにおいては難しい様子も見られる。授業外でも学習に取り組むモチベーションを高める工夫を検討したい。

8. 社会的活動等

実用英語検定面接委員

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料
- ・ テスト問題
- ・ 学生とのメール
- ・ キッズプログラムの教材
- ・ 国際交流センター議事録

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	近藤みづき	所属学科	こども教育学科	職名	准教授
クラス担任	2年主担任	クラブ顧問	テニス部・ダンス部		
委嘱委員・職務	学生委員会（副委員長）、FAST 委員長、保護者のためのオープンキャンパス委員、				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○健康スポーツ科学Ⅰ	基盤	1	前期	選択	講義	遠隔	380
○健康スポーツ科学Ⅱ	基盤	1	前期	選択	演習	対面	180
○健康スポーツ科学Ⅲ	基盤	1	後期	選択	実技	対面	190
まなぶるⅠ	基盤	1	前期	必修	演習	対面	405
まなぶるⅡ	基盤	1	後期	必修	演習	対面	408
基礎研究演習Ⅱ	E	2	通年	必修	演習	対面	77
保育実践演習	E	4	後期	選択	演習	対面	64
卒業研究Ⅰ	E	3	前期	必修	演習	対面	4
卒業研究Ⅱ	E	3	後期	必修	演習	対面	7
卒業研究Ⅲ	E	4	前期	必修	演習	対面	4
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修	演習	対面	7
○子どもと身体表現	E	2	後期	選択	演習	対面	77
○体育	E	1	前期	選択	演習	対面	69
○小学校体育	E	3	後期	選択	演習	対面	7

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 教員採用試験対策としてマット運動、球技の指導
- ・ 新入生オリエンテーションプログラム「トキワシンポジウム」の発表指導
- ・ 新入生オリエンテーション「レクリエーション」実践指導
- ・

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目では、運動指導ができる保育士や教員を養成するために、運動に関する知識・技能はもとより、保育・教育現場でこどもの内在的運動感覚を見抜くことができる学生を養成する。

基盤教育科目では、自分自身の健康の基礎となる運動と健康に関する知識、さらには運動実践力をもつ学生を養成する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 体育では、様々な運動を単に運動実践するだけでなく、その動きの構造や含まれる運動感覚等を説

明した。また、グループワークや発表を取り入れ、学生同士で意見を共有できる時間を設定した。

- ・ 小学校体育では、スポテクといったアプリを使い学生自身が自主的に学習できるようにした。
- ・ 健康スポーツ科学Ⅱでは、運動することによって起こる身体の変化を視覚的に把握できるように歩数計等を使って測定した。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 前年度学生による授業評価では、身体表現の作品作りの時間が少ないという意見が見られた。そのため、今年度は1コマ増やし創作の環境づくりに努めた。
- ・ 遠隔授業では、一人一人のレポートのフィードバックを行った。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 実技系の授業は全般的に学生自身の学習時間が短めであった。授業内容と課題の在り方について引き続き考えて生きたい。
- ・ 「子どもと身体表現」の科目では、グループ活動を多く取り入れたが、グループの決め方が良くなかったという意見がみられた。学生のモチベーションにもかかわると考えられるので、次年度は様々な方法を検討したい。

6. 今年度の成果

- ・ より丁寧の説明し、分からないところはないかを聞きながら授業した結果、「健康スポーツ科学Ⅲ」では、学生の学習時間以外の評価が0.1～0.2ポイント向上した。
- ・ 教員採用試験対策として実技試験直前指導をした。その結果兵庫県に3名合格した。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 遠隔授業では「聞き取りにくい動画があった」という意見から、遠隔でも分かりやすい授業を心掛けた。また、フィードバック方法を検討しさらに授業させたい。
- ・ 実技系授業においては、ネット型種目が多かったのでバランスの良い種目を検討する。

8. 社会的活動等

- ・ 高大連携として出張授業（東灘高校・福崎高校）
- ・ 附属ときわ幼稚園のキッズクラブ指導、親子体操指導
- ・ KITの親子体操指導
- ・ 第37回日本スポーツ運動学会大会実行委員
- ・ 日本スポーツ運動学会理事

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	松尾寛子	所属学科	こども教育学科	職名	准教授
クラス担任	4年	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	こども教育学科臨地実習委員会（委員長）、こども教育学科就職委員会（委員）、入試委員会（委員）、入試委員会合否判定部員（委員）、子育て総合支援施設K I T連携部（委員）				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の種類	科目の形態	授業 形態	受講者数
○乳児保育 I	E	2	前期	選択	講義	対面	82
○乳児保育 II	E	2	後期	選択	演習	対面	76
○障害児の理解と支援 II	E	2	後期	選択	演習	対面	77
○保育実習 I (保育所)	E	3	前期	選択	実習	対面	60
保育実習指導 I	E	3	前期	選択	演習	対面	
○保育実習 II	E	4	前期	選択	実習	対面	
○保育実習指導 II	E	4	前期	選択	演習	対面	46
保育教育実践演習 I	E	1	通年	必修	演習	対面	
基礎研究演習 II	E	2	通年	必修	演習	対面	
卒業研究 I	E	3	前期	必修	演習	対面	
卒業研究 II	E	3	後期	必修	演習	対面	
卒業研究 III	E	4	前期	必修	演習	対面	
卒業研究 IV	E	4	後期	必修	演習	対面	
○保育教育課題研究 II	E	3	前期	選択	演習	対面	33
保育教育課題研究 III	E	3	後期	選択	演習	対面	31
○保育実践演習	E	4	後期	選択	演習	対面	64

(2) 準正課、正課外の教育活動

・ 3年生のゼミ生を中心として、学外の公立保育所、幼保連携型認定こども園、玩具博物館、児童施設等の見学を6か所実施した。

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・就職してからも使える知識や技術を持ちあわせた保育者養成

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・授業内では保育現場で用いられる教材等の作成を行わせた。研究日を利用して実施している保育指導や巡回指導で得た保育の現場での話を行うことにより、現在の保育現場の様子をリアルに語るができる。それにより学生は保育現場のイメージを膨らませることができるようになると考え授業内容を工夫している。
- ・指導案等の保育現場や実習等で作成する書類については、ICT化が進んでいることを踏まえ、入力後他の学生も閲覧することができるように、manabaでの提出を行っている。
- ・対象とする子どもや利用者をイメージしやすいように、授業の中で視聴覚教材も併用している。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・学外での取り組みにおいては、保育現場や保育関連施設等の見学を実施し、実際の保育者から保育を学んだり、保育に役立つ知識を享受してもらったりすることができた。
- ・今年度もmanabaを活用して出席管理、提出物管理を実施した。学生の手書きへの負担軽減や提出物管理に関する軽減もでき効率的であった。
- ・授業内容については、ゼミの学生を中心として園見学等の活動を大幅に増やして実施した。卒業研究においては、研究内容としては実践を振り返る機会とし、実習経験等を振り返る機会としながら指導を行った。学生には提出目標などを提示し、ゼミの時間だけではなく、それ以外にも来学しているタイミングでも指導を行った。提出はメールで行い、添削もメールで行うなど、ゼミの中では、学生と論文の詳細について口頭で指導を行うことができ、学生自身の時間の有効活用も考え実施することができた。

5. 今年度の学生による授業評価より

前期は講義形式の授業で、学生の学びもまだ薄く、授業内容も理解が難しかったように思われる。評価も全体的に低いものもあった。一人一人を大切に授業を心掛け、顔と名前を一致させるように、授業前後でも実習や就職に関連する話をしたところ、後期には学生も成長がみられるようになったのも合わせ、授業の進行もスムーズにできるようになったため、評価も前期に比べ大幅な改善が見られた。授業が分かりやすかったというコメントも見られたが、「学生への偏見がある」とのコメントもあった。

公平であったかという項目については、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」が35名、「どちらでもない」が6名、「どちらかと言えばそう思わない」が1名という結果のため、一人の学生にとっては公平ではないととらえられる言動があったと思われる。

おおむね学科平均程度の評価であった。

6. 今年度の成果

- ・今年度はゼミでの施設見学を多く実施したため、学生にとっては有益なものとなったと思われる、

学生は自分で見学を依頼することもしているが、どの施設を見学したらよいのかという迷いもあるように思われる。教員主導で見学を実施することにより、見学の作法も身につけ、いい施設を見学することができるのではないかとということが分かった。ただ、ゼミ以外の授業で全員の学生を対象として見学を実施することは難しいため、今年度までと同様に、学生には就職や実習等でお世話になっている保育施設等の斡旋を積極的に行っていきたいと思う。

- ・研究活動については、科研費申請を行った。研究日に実施している巡回指導等に関わる子どもや保育者等の保育実践からヒントを得て、「頭を撫でる」行為と肯定的言語コミュニケーションがもたらす影響についての検証というテーマが見つかった。次年度も継続して研究活動を推進していきたいと思っている。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

昨年度の「今後の課題」として以下の4点を挙げていた。

- ・引き続き manaba の活用方法の充実を図る。出席管理も含めて。
- ・ゼミ生を中心として、5か所程度の保育所や認定こども園の場でゼミ活動できるようにする。
- ・入試業務の臨機応変遂行。
- ・社会的活動を行い、科研の申請を含め研究を進める。
- ・manaba の活用については、出席管理を行うようにした。次年度も引き続き出席管理も manaba で実施したい。小テストや簡単なアンケートなどを実施した際には、manaba や Google フォームなどを利用して行い、環境にやさしくかつ学生の負担が軽減するような方法を模索したい。
- ・ゼミ活動としての見学は実施できた。次年度も継続して行い、学生の学外での学びも保証したい。
- ・入試業務の臨機応変遂行については、今年度はかなり充実して行うことができた。社会的活動について、融通が利く業務に限り受けていることが理由である。次年度も入試業務の臨機応変対応ができるように、社会的活動とのバランスを考えながら行いたい。
- ・社会的活動から研究テーマに結びついているため、引き続き社会的活動も実施し、研究を遂行していきたいと考える。

8. 社会的活動等

次年度は、今年度同様、巡回相談、保育指導を実施する予定である。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・シラバス
- ・学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	柳原 利佳子	所属学科	こども教育	職名	講師
クラス担任	1年		クラブ顧問		
委嘱委員・職務	教務委員・就職委員・臨地実習委員・自己点検・評価委員など、保育者養成コース				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○カウンセリングの技法	E	2	前期	選択	演習	対面	35
○教育心理学	E	3	前期	必修	講義	対面	94
○保育の心理学	E	3	前期	選択	講義	対面	60
卒業研究Ⅰ	E	3	前期	必修	演習	対面	1
卒業研究Ⅲ	E	4	前期	必修	演習	対面	3
○教育心理学	E	1	後期	必修	講義	対面	68
○子どもの理解と援助	E	2	後期	選択	演習	対面	76
子どもと絵本Ⅱ	E	3	後期	自由	講義	対面	50
教職実践演習（幼稚園・小学校）	E	4	後期	選択	演習	対面	85
卒業研究Ⅲ	E	3	後期	必修	演習	対面	1
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修	演習	対面	3
保育・教育実践演習Ⅰ	E	1	通年	必修	演習	対面	69
○教育心理学	N	1	後期	自由	講義	対面	6
子どもの心理学	O	2	後期	選択	講義	対面	59
○生涯発達論	O	3	後期	選択	講義	対面	2

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ ピアヘルパー資格試験対策講座の実施
- ・ 市民救命士講習の実施

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

免許資格取得を目的として入学した多くの学生にとっては、大学での授業が卒後の進路選択のための手段となりがちである。高校時代までの授業科目以外の多様な学びの中から、スキルを身につけることも必要であるが、それ以外に自ら考え、学ぶ楽しさと喜びを見出し、次世代の子どもたちに伝えていけるような保育者を養成したい。そのためには、学生自身が基盤教育、専門教育を通して得た経験から、自分がどのような保育者になりたいか、どんな保育をしたいかというイメージを構築できるよう育成する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・講義科目では、特に教員採用試験を意識して、小テストを適宜実施し、理論や研究の紹介を中心として知識の定着を目指すために、小テストを適宜実施した。
- ・講義科目では特に昨年度までは respon を用いて、授業時間中に互いの意見を匿名で一覧にしてスクリーン投影して共有を図っていたが、今年度から respon がなくなったために、その代替方法が見つからずに、manaba のアンケート機能を用いて意見収集したものを、次回の授業で見やすい形に整えて紹介するなど工夫を行った。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・以前の学生の授業評価の意見を取り入れ、カウンセリングの技法では演習の時間と回数を多くして学生の体験を増やすようにした。
- ・講義科目では小テストの成績が芳しくないものに対する救済措置を行っているが、授業内でそのアピールの頻度をあげて、学生自身の復習ノートの提出を促す機会を増やした。
- ・今年度は3年毎の応急手当普及員の更新時期であり、再講習免除要件は満たしていたが、新学期の講習実施に備えて再講習を受講した。

5. 今年度の学生による授業評価より

・前期の教育心理学では、小テストなどで実力を出すのが難しい学生を意識して、授業内での学生の発言に対する積極的な平常点加点を考えて、指名する頻度を増やしてみたのだが、答えた学生に対する私の応答に問題があったことが複数指摘されていた。自身の発言を振り返り、方法等を考えていきたい。

・保育の心理学では授業形態も講義であり、教育心理学と同学年の同時期開講でもあるため受講者の半数以上が重複しているので比較しやすいのだが、同様の授業の進め方をしたつもりでも、全質問項目を通して否定的回答をしている人数が教育心理学よりも少ないため、教員養成コースの学生から否定的意見を持たれている可能性があると思われる。

・カリキュラムが並行しているため、後期にも教育心理学を開講しているが、配布資料や小テストに対して好意的な意見がみられた。

・カウンセリングの技法では演習の様子を巡視しているのだが、話をしている様子が見られなかったために声をかけていたつもりだったが、学生の意見によると、それが不快に感じたこともあったようなので今後は注意したい。

・子どもの理解と援助では、3限のクラスは4限の授業があるために、授業後のアンケート（ミニレポート）提出の時間に余裕がない、という声がみられたので、次年度からは注意したい。

6. 今年度の成果

・カウンセリングの技法では演習の時間と回数を多くしたことで、昨年の授業評価が低かったこともあるが、昨年よりもカテゴリー I 以外で 0.6～1.0 ポイント平均値が上昇した。

・カウンセリングの技法の授業に加えて対策講座を行い、ピアヘルパー試験受験者が全員合格した。

・後期から急遽担当することとなったリトミックの事務的業務について、担当の古木先生と連絡を密

に取り、本学の事務担当教員の業務と科目担当教員の業務の内容を明確にして共有し、学生への教材販売から資格申請、資格証の授与までが円滑に行われるように業務整理を行った。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・前期教育心理学では、学生からの意見で授業中に指名して答えた学生に対する応答に問題があったことが指摘されていた。これまではあまりこのような指摘を受けたことがなかったこともあり、後期教育心理学ではその意見が心に残り、指名を躊躇してしまうことがあった。次年度はあまり躊躇しすぎることなく、自分の返す発言を意識して授業を進めていきたい。
- ・カウンセリングの技法については、昨年度の時間割では教員養成コースの学生しか履修できなかった。今年度の時間割では教育の思想と歴史と同時間に開講していたため、どちらか1科目しか履修できない状態であった。これらのこともあり、ピアヘルパー資格受験者が少なかったことが気になっていた。来年度は2年生科目が新カリキュラムとなり、時間割に余裕ができ、希望者は全員履修できるように開講時間帯を変更した。ピアヘルパー資格取得への意識向上に繋がることを期待したい。
- ・respon に代わる manaba のアンケート機能を十分に活用しきれずに授業を進めていた。manaba を使わなければ、manaba のポートフォリオに自分の意見が蓄積されないという短所はあるのだが、Googlefoam を用いて respon に変わる形でリアルタイムに意見投影することを、授業で積極的に取り入れてみたい。

8. 社会的活動等

- ・武庫川女子大学へ出講

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・シラバス
- ・学生による授業評価
- ・授業における配布資料、小テスト問題
- ・ピアヘルパー認定試験結果一覧表
- ・リトミック指導資格認定指定校ガイドブック

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	田中達也	所属学科	こども教育学科	職名	講師
クラス担任		クラブ顧問			
委嘱委員・職務	SD 委員会・委員 危機管理（災害）委員会・委員 教職支援センター・委員 こども教育学科 臨地実習委員会・委員 子育て総合支援施設 KIT 連携部・委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
保育・教育課題研究Ⅱ	E	3	前期	選択	演習	対面	33
情報基礎	E	1	前期	選択	演習	対面と一部遠隔	68
教科指導法特論Ⅱ	E	4	前期	選択	講義	対面	27
○生徒・進路指導論	E	4	前期	選択	講義	対面	25
まなぶる▶ときわびとⅠ	基盤	1	前期	必修	演習	対面と一部遠隔	405
情報メディア演習	基盤 N	1	後期	選択	演習	対面と一部遠隔	99
情報メディア演習	基盤 E	1	後期	選択	演習	対面と一部遠隔	63
○物理学概論	E	1	後期	選択	講義	対面	19
化学概論	E	1	後期	選択	講義	対面	27
まなぶる▶ときわびとⅡ	基盤	1	後期	必修	演習	対面と一部遠隔	408
大学道場 mini ゼミ B	基盤	1	後期	選択	演習	対面	4+10
教科指導法特論Ⅲ	E	4	後期	選択	講義	対面	27
保育・教育課題研究Ⅲ	E	3	後期	選択	演習	対面	31
卒業研究Ⅰ	E	3	前期	必修	演習	対面	78
卒業研究Ⅱ	E	3	後期	必修	演習	対面	78
卒業研究Ⅲ	E	4	前期	必修	演習	対面	92
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修	演習	対面	93

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ R科「基礎物理学」90分×15回（1回生を対象に物理学の基礎的事項について講義を行った）
- ・ 教員採用試験対策としての面接指導及び、教科学習指導（教職支援センター）
- ・ 学生自主学習組織の企画・運営（STEP Project）
- ・ 学生相談への対応（例：授業内容、人間関係、進路等）

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

ときわ教育目標に示された「知性と感性を備えた優れた専門職業人の育成」を目指す教育者として、自身の教育の理念を次のように考えている。

➤ 教育への信念

教育とは「発達への助成的介入」であり、教師とは、学生の学びへの足場かけをかける支援者であると考えている。具体的には、本学学生の学びのニーズを的確に捉え、指導を個別化するとともに、個々の学生の学びの状況に応じた発展的な学習の展開（学びの個性化）を具現化していくことが重要となる。そのため、私は、ときわ教育目標や各種ポリシーに基づいた教育を実践し、自らも学び続けることで、自身の展開する教育の質の向上に努めていく。さらには、自身の得た知見を、本学の教育の質的向上の知見として還元していくことで、「知性と感性を備えた優れた専門職業人の育成」を全学的に進めていきたい。

➤ 育てたい学生像と教育のあり方

「ときわコンピテンシー」の4つの要素である知性、感性、専門性、市民性をもった学生を育成するために、以下の3つの点に重点を置いた教育実践を行う。

- ・ 学生の興味や関心に応じた多様な学びの機会を提供する
- ・ 学生の自主性や主体性を尊重し、自分の考えや感情を表現できるように支援する
- ・ 学生の協働性や社会性を育み、他者と共に学び、問題を解決できるように指導する

これらの教育を通して、学生が自分の目標に向かって努力し、社会に貢献できる人材になることを育てたい学生像としている。

具体的には、専門科目では義務教育の教員を養成するために、教育学や教育方法の知識・技能の習得とともに、教育現場で対応できる実践力と教師としての倫理観をもった学生を養成することを目指す。特に、演習科目では、チーム学校の一員として、自身の果たすべき役割をも考え、実践できるコミュニケーション力と実行力を、アーギュメントの手法を導入した実践を展開する中で育成していく。また、中学校教員養成物理学担当として、物理学を通して、学生たちに自然現象や科学技術の仕組みや意義を理解し、探究心や創造力を養っていく。そのために、物理学の基礎的な知識や法則を体系的に学ばせるとともに、実験や観察を通して、物理学の応用や発展を体感させていく。さらに、物理学の教育方法や教材の開発や選択のスキルを身につけさせるとともに、教育現場での物理学の指導に必要なコミュニケーション力や倫理観を育成する。

基盤科目では、大学の学修、研究の基盤となる論理的思考力や表現力を育成するとともに、学生自身のキャリア形成を促進する学びの位置づけやフィードバックを行うことで、専門職業人としての意識を高めていく。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 全ての授業において、協働学習を導入し、学生主体の対話的で深い学びの実現に取り組んだ。具体

的には、教科指導法や保育・教育課題研究では、知識構成型ジグソー法を導入や、ワールドカフェ形式による課題解決方法の発表、生徒指導や情報基礎、情報メディア演習では、グループでの事例検討や成果物の作成、プレゼン発表準備等を行い、学生同士が納得解を創造するプロセスに多くの時間を設定した。

- ・ 情報基礎、情報メディア演習では、オンデマンド形式での動画配信や、Teams を活用したオンライン講義を実施した。また、教科指導法では、TOKIWA's ラーニングを活用した授業を行うとともに、教員採用試験に向けた自主学习を実施させた。
- ・ STEP Project では、E 科 2・3 回生、N 科 3 回生を対象に、LINE を活用した教員採用試験情報提供や、教員採用試験問題の出題、学生の教員採用試験への意欲向上を目指した励ましの言葉の送付等を行った。なお、この LINE 支援においては、学生が自主的に組織したグループに教員が参与する形であり、学生の主体性が発揮、伸長される仕組みとなっている。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 前年度は非常勤講師として、「生徒・進路指導論」の授業を実施した。その中で、学生が事前・事後学修に取り組む時間が短かったため、授業実施時に話題になっていた教育時事を生徒指導や進路指導の話題に取り込むことで、日常における教育時事への関心を高め、本授業への学修意欲の向上と事前・事後学修への取り組み時間の確保を目指した。
- ・ 全ての授業において、個別のフィードバックを実施し、学生の学びの価値づけ、及び、双方向のコミュニケーションの実現に努めた。
- ・ 理科教育における指導力の向上を目指し、日本理科教育学会、日本科学教育学会、教科教育学会に参加し、最新の教育動向の把握や教育手法について学んだ。そこで得た知見を、自身の授業に反映するとともに、STEP Project メンバーに共有し、実践に導入した。
- ・ 2024 年 3 月、神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程前期課程を修了し、「小学校専修免許」を取得する。これにより、より専門的な知識を習得し、自身の実施する授業の質的向上及び、学生への適切な論文指導が実現可能となる。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 自身が科目責任者である「生徒・進路指導論」「物理学概論」では、全ての項目において、概ね高評価を得ることができた。しかし、事前学修、事後学修を含む学生自身の得点は、他項目と比べて低く、次年度は、事前学修や事後学修への意識の向上と、授業内容への意欲の喚起を行っていく必要がある。

科目名	学生自身	授業内容	授業方法	学習成果	総合評価
○生徒・進路指導論	4.0	4.9	4.9	4.9	5.0
○物理学概論	4.1	4.8	4.9	4.7	4.8

- ・ 情報に関する科目においては、授業時間中の ICT 活用スキルの指導と事後学修を中心とした ICT 活用スキルアップが中心の授業展開であった。しかしながら、対面授業時の欠席者が多く、このため、学生自身の評価項目が高いとは言えない状況であった（情報基礎 3.9、情報メディア演習 4.0）。

本授業は、基盤教育でもあるため、授業の中心を担っている複数教員と連携し、ICT 機器の特徴を活用した遠隔授業のさらなる導入や学習内容やその提示方法についても協議していく必要がある。

6. 今年度の成果

- ・ 2023 年度神戸常盤大学・神戸常盤大学短期大学部テーマ別研究において、研究が採択された。採択された「教員志望大学生対象の理科教育アーギュメント指導力育成プログラムの開発：アーギュメント自己評価能力に着目して」はこども教育学科義務教育コース 1 年生を対象に実施した。学生からは、科学的な論証の重要性への気付きや、アーギュメント指導の有効性に関するコメントが寄せられた（根拠資料：物理学概論第 15 回レポート）なお、本発表は所属する日本科学教育学会年会において発表を行った。
- ・ 来年度開講予定の「防災教育実践」における理論的背景の構築や教育実践に関わり、以下の研究を推進した。
 - 所属する防災教育学会から依頼を受け、ぼうさい国体シンポジウム「未来の防災教育を考える」においてパネリストを行った。
 - 日本学術振興会 科学研究費助成事業 研究活動スタート支援において、「変革を起こすコンピテンシーを育成する防災教育の開発：探究型アーギュメントへの着目」が採択された。
 - 所属する日本科学教育学会第 2 回研究会において「現職教員の防災教育指導力の向上を目指した避難訓練ゲーミフィケーションプログラムの開発」研究発表を行い、ベストプレゼンテーション賞を受賞した。
 - 日本科学教育学会発刊「科学教育研究」第 47 巻、第 4 号に「児童主体の行動選択と動画活用型事後学習を含む新たな避難訓練プログラムの開発」が掲載された。
- ・ 第 11 回 神戸常盤学術フォーラムにおいて、「チームビルディングを軸としたこども教育学科リエゾン・モデルの構築」のシンポジウムを行った。本発表は、今年度から取り組む STEP Project を含むリエゾン・モデルの概要と学生主体の学びの展開とその支援に関する発表であった。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 「物理学概論」では、学生自身の学びをメタ認知するために、事後学修に授業での学びを振り返るためのレポートを課した。レポートの提出率も高く、創意工夫のあるレポートが提出されたが、摘出までの「期日の短さ」や「学びの振り返り」の必要性についての意見があった（2 件）。今年度も学習効果の向上を目指していることや個人のフィードバックを行うために 5 日間の期日としていることについては説明を行ったが、2 名の学生には伝わっていなかった。次年度は、ガイダンスにおいて、丁寧な説明を行うとともに、適度なタイミングで複数回の説明を実施する。また、レポートに関して個別対応が必要な場合は、随時相談できる体制を整える。
- ・ STEP Project では、教員からの情報提供や学生の学習意識の向上を目指した支援を行った。しかし、全てにおいて効果的な支援を、特に、個の特性に応じた支援を提供できていない部分もあった。そのため、次年度は、全体への支援に加え、個の特性に応じた支援（声掛けの言葉、タイミング等）を適切に実施し、学生との信頼関係の向上を目指していく。
- ・ 大学 3 回生を対象とした教員採用試験を実施する自治体が増えている。そのため、今年度、3 回生後期から実施した STEP Project を、新 3 回生前期から本格始動とする。また、新 2 回生においても、後期から STEP Project を実施する。実施においては、これまで以上に教職支援センターと連携し、センターの利活用の促進と、学生の学習環境・体制の充実にに向けた取り組みを Team として促進していく。

8. 社会的活動等

- ・ 兵庫県宍粟市小学校理科研究会「夏季実験実技講習会」 講師
- ・ 神戸市立井吹の丘小学校「防災教育職員研修」 講師
- ・ 神戸市立神の谷小学校「総合的な学習の時間（防災教育）」 指導助言
- ・ 兵庫県教育委員会「兵庫県学校防災アドバイザー」を務める
- ・ 相生市立双葉小学校「防災教育職員研修」講師（1回）・「防災教育授業実践」指導助言（2回）
- ・ 神戸市立ふたば学舎 地域公開講座「防災講座」 講師
- ・ 兵庫県教育委員会主催「令和5年度防災教育推進指導員養成講座〔上級編〕」 講師
- ・ 北海道教育委員会主催「令和5年度被災地域の学校支援に関する研修会」 講師

- ・ 「1.17 防災未来賞ぼうさい甲子園」運営委員

- ・ 個性伸長教育研究会「キックオフミーティング」講演

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布，配信資料等
- ・ 就職実績の資料
- ・ 田中達也・山口悦司（2023）「アーギュメント自己評価能力の向上を支援するための教授方略の開発と評価」『理科教育学研究』第64巻，第1号，3-12.
- ・ 田中達也（2023）「教員志望大学生のアーギュメント指導力の向上を目指した教師教育プログラムの構想：アーギュメント自己評価能力に着目して」『日本科学教育学会年会論文集』第47号，547-548.
- ・ 田中達也・内海紗恵・大西鮎美・寺田勉（2023）「児童主体の行動選択と動画活用型事後学習を含む新たな避難訓練プログラムの開発」『科学教育研究』第47巻，第4号，352-365.
- ・ 田中達也・大西鮎美・寺田勉（2023）「現職教員の防災教育指導力の向上を目指した避難訓練ゲーミフィケーションプログラムの開発」『日本科学教育学会研究会研究報告』第38巻，第2号，233-236.

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	大城 亜水	所属学科	こども教育学科	職名	講師
クラス担任	1年ABクラス	クラブ顧問	軽音楽部、モルック部		
委嘱委員・職務	就職委員・副委員長、臨地実習委員会・委員、子育て総合施設 KIT 連携部委員会・委員、地域交流センター地域貢献事業部委員会・委員、教職支援センター委員会・委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
まなぶる▶ときわびと I	基盤	1	前期	必修	演習	対面 遠隔	405
まなぶる▶ときわびと II	基盤	1	後期	必修	演習	対面	408
インターンシップ B	E	4	通年	選択	実習	対面	0
保育実習指導Ⅲ	E	4	前期	選択 必修	演習	対面	18
保育実践演習	E	4	後期	選択 必修	演習	対面	64
保育・教育実践演習 I	E	1	前期	必修	演習	対面	69
保育教育課題研究 I	E	2	後期	選択	演習	対面 遠隔	31
保育教育課題研究 II	E	3	前期	選択	演習	対面 遠隔	33
保育教育課題研究Ⅲ	E	3	後期	選択	演習	対面 遠隔	33
卒業研究 I	E	3	前期	必修	演習	対面	78
卒業研究 II	E	3	後期	必修	演習	対面	78
卒業研究Ⅲ	E	4	前期	必修	演習	対面	93
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修	演習	対面	93
○地域との協働 A	基盤	1	通年	選択	演習	対面	29
○子ども家庭支援論	E	3	後期	選択 必修	講義	対面	62
○子育て支援	E	4	前期	選択 必修	演習	対面	81
○情報メディア演習	基盤 R科	1	後期	必修	演習	対面 遠隔	85
情報基礎	基盤	1	前期	必修	演習	対面 遠隔	69
海外研修	E	3~4	後期	選択必修	演習	対面	0
家族と社会(看護通信)							

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 就職活動支援および進路相談、履歴書や論文等の添削指導
- ・ 公立保育士・幼稚園教諭および公務員試験の一般教養の学習支援
- ・ 「まなぶる▶ときわびと」の授業コンテンツの作成

2. **教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）**
 - ・ 専門科目では、保育者（保育士・施設職員）と幼稚園教諭の養成のために、子どもや保護者への支援方法や子育て支援に関する知識の習得に加えて、現場での実践力と職業倫理を兼ね備えた学生の養成を目指す。特に演習では、子ども理解だけでなく、子どもの保護者や家庭環境を考慮した保育観や援助観を持つ学生を育成したい。
 - ・ 基盤科目では、対人援助職に必要なコミュニケーション力や社会保障に関するリテラシーを持つ学生を育成することを目指す。

3. **教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）**
 - ・ 子ども家庭支援論では、法律や制度を多く取り扱うため、身近な事例を使って受講生がより実感できるように工夫した。
 - ・ 「子育て支援」は「子ども家庭支援論」を応用した科目であり、学生へのフィードバックを積極的に取り入れるよう心がけた。さらに、この科目は演習形式のため、アクティブ・ラーニングを重視し、実践的な授業内容に焦点を当てた。
 - ・ 基盤科目「まなぶる▶ときわびと」では、前期（まなぶる▶ときわびとⅠ）と後期（まなぶる▶ときわびとⅡ）の両方で、チームビルディングを中心に据え、論理的な考え方やコミュニケーション能力の育成に取り組んだ。

4. **今年度における教育方法改善の取り組み**
 - ・ 専門科目では、毎回の授業の初めに、前回の内容を振り返る時間を確保し、受講生の学習成果の定着を図った。
 - ・ 基盤科目では、受講者が自ら課題を見つけ、実行し、PDCA サイクルを回すことで、より実践的な学びを促す取り組みを行った。

5. **今年度の学生による授業評価より**
 - ・ 情報系の科目では、概して高い評価を得ることができた。「数理データサイエンス」や「AI」、「ICT」といった難解なテーマでも、受講者の理解に合わせた進行を心がけた結果、多くの学生から「授業内容がわかりやすかった」という声が寄せられた。また、「生徒のペースに合わせて授業を進めてくれて、気が楽だった。楽しかった」などという感想もみられた。
 - ・ 専門科目では、受講者から「グループワークが多くみんなでひとつの問題についてしっかりと考えることができるのが、自分の考えもできるし他の人の考えも知ることができるので理解が深まりやすかった」とのコメントもあり、概ね高評価をとることができた。

6. **今年度の成果**
 - ・ 公立幼保採用試験対策で、10カ月にわたり4年生を指導した。その結果、9名中7名の合格者を出すことができた。
 - ・ また、上記に関連して、昨年秋からスタートしたプロジェクトの成果を本学の学術フォーラムで発表することができた。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 専門科目では、開講時期が実習と重なるため、「子ども家庭支援論」は特に開講日が不規則である。今年度はすべて対面で行ったが、そのために出席率が回によって大きく変動した。この点を考慮し、今後は授業内容との調和を図りながら、遠隔授業と対面授業をうまく組み合わせて改善していきたい。
- ・ 先述した教育理念の一つである、保護者対応ができる学生を育むためには、学内だけでなく、学外の関連施設での学修が不可欠である。そのため、「子育て支援」の科目のなかで、子育て総合支援施設「KIT」での実習を検討していく。
- ・ 社会保障リテラシーの普及については、次年度に「保育・教育実践演習Ⅰ」のなかで取り入れていきたい。

8. 社会的活動等

- ・ 少子化対策—少子化の動向とワーク・ライフ・バランスなどの政策的課題／大城亜水（神戸常盤大学）／大阪労働大学講座（令和5年度）／2023年12月
- ・ 少子化対策の生誕と挑戦—1990年～2000年代—／大城亜水（神戸常盤大学）／大阪労働大学講座（令和5年度）シンポジウム／2024年1月

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ manaba のレポート・小テスト課題内容

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	京極 重智	所属学科	こども教育学科	職名	講師
クラス担任	2年生（義務教育コース）	クラブ顧問	ソフトテニス部（休部中）		
委嘱委員・職務	入試委員会・委員、教職支援センター・委員、ときわ教育推進機構・委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
特別活動の指導法	E	2	前期	選択	講義	対面	13

教育の思想と歴史	E	2	前期	選択	講義	対面	64
道徳教育の理論と実践	E	3	後期	選択	講義	対面	19
道徳教育と特別活動論	N	2	後期	選択	講義	対面	9
まなぶる>ときわびと I	基盤	1	前期	必修	講義	対面	405
まなぶる>ときわびと II	基盤	1	後期	必修	講義	対面	408
保育・教育課題研究 I	E	2	後期	選択	講義	対面	
保育・教育課題研究 II	E	3	前期	選択	講義	対面	33
保育・教育課題研究 III	E	3	後期	選択	講義	対面	
教科指導法特論 I	E	3	後期	選択	講義	対面	19
教科指導法特論 II	E	4	前期	選択	講義	対面	27
教科指導法特論 III	E	4	後期	選択	講義	対面	27
卒業研究 I	E	3	前期	必修	演習	対面	78
卒業研究 II	E	3	後期	必修	演習	対面	78
卒業研究 III	E	4	前期	必修	演習	対面	92
卒業研究 IV	E	4	後期	必修	演習	対面	93
教職実践演習	E	4	後期	必修	講義	対面	85
地域との協働 B	基盤	2	通年	選択	講義	対面	15

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・キッズクラブ
- ・教員採用試験対策としての面接指導及び、教科指導（教職支援センター）
- ・学生自主学習組織の企画・運営（STEP Project）
- ・学生相談への対応（例：授業内容、人間関係、進路など）

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

教育は「自律（学生の主体的学び）」と「他律（学生の主体的学びを促す教員のかかわり）」の絡み合いのもとでなされるものであり（＝教育への信念、教育のあり方）、その教育のもとで、知性と感性を備えた市民性を有する専門職業人（＝育てたい学生像）を育みたいと考えている。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

2で述べた教育の理念を実現するためには、正課、準正課、正課外のそれぞれの形式にあった方法

をとる必要がある。正課では、単に教員の一方の教授だけでなく、教員・学生間の双方向的なやりとりが必要であるし、準正課・正課外では、経験のなかの学びとそれを定着させるための振り返りが必須である。またそれらをスムーズに実現する方法として ICT 機器の活用があげられる。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

担当講義の数や種類が多岐にわたるため、概略のみまとめる。

昨年度、教育に関して、教員採用試験への合格と教師として働くことに直結する授業内容に改善する、という目標を立てた。これにもとづき、今年度は、教員採用試験に直結する知識や、アクティブ・ラーニングなどを取り入れた、学生主体の学びを多く取り入れた。

5. 今年度の学生による授業評価より

担当講義の数や種類が多岐にわたるため、概略のみまとめる。

学生からの授業評価やコメントはおおむね良好なものであったといえる。ただ、コメント返しやり方には工夫の余地があるため、次年度の課題の一つとしたい。

6. 今年度の成果

担当講義の数や種類が多岐にわたるため、概略のみまとめる。

こちらも例年と同様の成果であったが、大きく変わった点として、STEP Project を導入したため、教員採用試験に向けた学生主体の学びが前年度よりも大きく進むようになった。それが結果として結びつくのかどうかは次年度以降をまって評価したい。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

担当講義の数や種類が多岐にわたるため、概略のみまとめる。

担当授業の数の多さと多様さによりそれぞれの授業の解像度がぼやけていたため、次年度以降は、授業の目標、そのための方法および内容をシンプルかつ分かりやすくコンパクトになるよう改善したい。

8. 社会的活動等

- ・特記事項なし

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・シラバス
- ・学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	深川 幹	所属学科	こども教育学科	職名	講師
クラス担任	1年	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	入試委員会 委員、入試委員会 合否判定部会 委員、学生委員会 委員、教職支援センター 委員、子育て総合支援施設 KIT 連携部 委員、神戸常盤地域交流センター ボランティア事業部 委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
保育・教育実践演習 I	E	1	通年	必修	演習	対面	69
情報基礎	基盤	1	前期	選択	演習	対面	69
保育・教育課題研究 II	E	3	前期	選択	演習	対面	33
まなぶるときわびと I	基盤	1	前期	必修	演習	対面	405
いのちと共生	基盤	1	後期	選択	講義	遠隔	417
まなぶるときわびと II	基盤	1	後期	必修	演習	対面	408
大学道場 miniゼミ B	基盤	1	後期	選択	演習	対面	78
情報メディア演習	基盤	1	後期	選択	演習	対面	68
保育・教育課題研究 I	E	2	後期	選択	演習	対面	31
化学概論	E	1	後期	選択	講義	対面	19
卒業研究 I	E	3	前期	必修	演習	対面	78
卒業研究 II	E	3	後期	必修	演習	対面	78
卒業研究 III	E	4	前期	必修	演習	対面	93
卒業研究 IV	E	4	後期	必修	演習	対面	93

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 教員採用試験対策としての教科指導
- ・ 公立保育士採用試験対策としての教科・面接指導
- ・ 就職対策としての面接指導
- ・ STEP プロジェクトにおける学生の学習集団形成への援助
- ・ 神戸常盤女子高等学校 2年生家庭科コースでの生物基礎授業

- ・ 学生相談
- ・ 保護者面談

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

私は、学生時代を通して学生自身が興味関心の幅を広げ、多くの選択肢を持って社会に出られることが重要だと考える。そのために、学校における教育活動では個々の学生の学びに向かう姿勢を引き出し、実践するための技能を身に着ける援助が必要である。ときわ教育目標に示される通り、学生一人一人に対して個別最適な学びを提供し、学生一人ひとりが目指す社会的・職業的自己実現に向けて十分かつ適切な支援を行う。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 「ときわの森」のフィールドを活用した自然体験、野外活動を通して、保育者・教員を目指す学生の自然環境意識を高める活動を行った（保育・教育実践演習Ⅰ、大学道場 miniゼミ B など）
- ・ 情報機器を用いた遠隔での活動やグループ討議、協働学習などを通してICTスキルの向上を目指した（情報基礎、情報メディア演習など）
- ・ 知識の伝授に終始せず、グループディスカッションや成果発表などを取り入れた（保育教育課題研究ⅠⅡなど）

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 今年度入職のため、前年度との比較検討はできないが、上記3.に記載した方法を用いて授業を工夫し、また学生からのフィードバックの機会を随時設けることでより良い実践が行えるよう取り組んだ。

5. 今年度の学生による授業評価より

ほとんどの科目では概ね高い評価を受けることができたが、今年度は単独で受け持つ講義がなかったため、私個人へのフィードバックとしての解釈は難しい。共通する反省点として、全体的に学生自身の振り返り項目、特に事前事後の取り組み状況についてはほかの項目と比較して低いポイントであるため、講義時間だけでなく学生自身が自ら学ぶ姿勢を育成する必要性を感じている。

6. 今年度の成果

- ・ 2023年度神戸常盤大学・神戸常盤大学短期大学部テーマ別研究において、研究課題名「神戸常盤大学構内の中・大型哺乳類相の解明」の研究代表者として採択された。
- ・ 2023年度神戸常盤大学・神戸常盤大学短期大学部テーマ別研究において、研究課題名「こども教育学科学生の自然への感性を育てる教育方法の開発」の共同研究者として採択された。
- ・ 第11回神戸常盤学術フォーラムにおいて、「チームビルディングを軸としたこども教育学科リエゾン・モデルの構築」のシンポジウムを行った。
- ・ STEP project を通して、教員・公立保育者を目指す学生の自主学習組織の形成を支援した。今年度は3回生の11月～1月までをコア活動期間として、主に保育者志望の5名を中心に活動に関わった。
- ・ 主に公立保育者志望学生の採用試験対策として、4回生の指導を行った。今年度は志望者9名中7名が公立、2名が私立で合格し、進路を決定した。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

今年度より、STEP project を通して教員・公立保育者を目指す学生の自主学習組織の形成を支援している。今年度は3回生からの働きかけであったが、来年度以降2回生、1回生への働きかけを強化し、さらにそれぞれの学生への支援を進めていきたい。

8. 社会的活動等

- ・ 奈良学園高等学校スーパーサイエンスハイスクール活動指導助言
- ・ 奈良文化高等学校 夏休み解剖教室 講師
- ・ 矢田の丘里山支援チーム代表
- ・ 全国中高生環境活動フォーラム ファシリテーター
- ・ 兵庫県私立小学校連合会 理科教育部会 講演会登壇
- ・ けいはんな科学体験フェスティバル 講師
- ・ けいはんな科学共育デザインラボ主催 科学体験教室 講師（独立行政法人 国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」助成）

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	吉田幸恵	所属学科	口腔保健学科	職名	教授
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	口腔保健学科長、運営委員会委員、学園一体化推進協議会委員、学長会議委員、口腔保健研究センター委員、入試委員会合否判定部会委員、入試問題作成部会小論文出題責任者、口腔保健学科臨地実習委員会委員、歯科診療所委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
全身の健康と口腔科学	○	1	後期	必修	講義	対面	67
○歯科衛生士論Ⅰ	○	1	前期	必修	講義	対面	67
早期臨地実習	○	1	前期	必修	実習	対面	67
健康スポーツ科学Ⅰ	MRONE	1	前期	選択	講義	遠隔	380
○栄養指導	○	2	前期	必修	講義	対面	66
子どもの食と栄養	○	2	後期	選択	講義	対面	70
歯科医療と法律・制度	○	3	後期	必修	講義	対面	79
○歯科衛生過程演習	○	3	後期	必修	演習	対面	82
地域口腔保健支援実習Ⅰ	○	3	前期	必修	実習	対面	81
地域口腔保健支援実習Ⅱ	○	3	通年	必修	実習	対面	78
口腔保健衛生学実習Ⅱ	○	3	前期	必修	実習	対面	81
口腔保健特論Ⅱ	○	3	後期	選択	講義	対面	81
○子どもの歯と健康	E	3	後期	選択	講義	対面	55

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 特になし

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

歯科衛生士の資格取得を目指すことはもとより、学士として最低限のコミュニケーションスキルや問題解決能力、自己管理能力などを身につける教育を目指します。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 毎時間、学習の目標を示し、到達の程度を可視化できるよう模索している。
- ・ 学び始めの科目を担当しているので、細かい小さな質問にも回答し、学習上の自己管理能力の向上を支援している。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 視聴覚教材に加えて、体験学習を実施したところ、学びが深まったと評価された。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・「歯科衛生士論1」では、毎時間、質問の機会を設け、全てに回答したので、理解が深まったとの意見が多く見られた。質問をしていない学生にも確認や反復の学習となり学習効果があったと考える。
- ・「子どもの歯と健康」では、体験学習を加えたことにより、参加型の授業で楽しかったとか、自分の口の中を実際に見ながら学べてよかったとの意見が多数見られた。
- ・「歯科衛生過程演習」では、受講者数に比べて教室が狭く学習環境が悪かったとの意見があったため、次年度は教務課と調整を図りたい。
- ・全体的に授業時間外の学習時間が少ないので、次年度以降、何らかの方法を考えたい。

6. 今年度の成果

短期大学の最後の学年となり、すべての教員が教育に尽力した結果、過年度の学生が多数いたが、全員を卒業、修了させる事が出来た。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・事前学習教材を作成するなどして、授業時間外の学習時間を増やす工夫を講じたい。
- ・問題解決能力向上のために、授業中に課題解決学習を取り入れるなど新しい試みを加えたい。

8. 社会的活動等

- ・「日本歯科衛生学会」において学会長を務める。
第18回日本歯科衛生学会学術大会において特別講演の座長を務めた。
- ・「日本健康体力栄養学会」において副会長を務める。
- ・「日本口腔ケア学会」において評議員を務める。
- ・「日本栄養・食糧学会近畿支部」において参与を務める。
- ・「神戸市歯科口腔保健推進懇話会」において委員を務める。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布資料

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	江崎ひろみ	所属学科	口腔保健学科	職名	教授
クラス担任	1年B	クラブ顧問			
委嘱委員・職務	紀要委員会・委員 ハラスメント防止対策委員会・委員（相談員を兼ねる） 口腔保健学科 臨地実習委員会・副委員長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○学びの基礎	○	1	前期	必修	講義	対面	67
歯科衛生士論Ⅰ	○	1	前期	必修	講義	対面	67
歯科診療補助論	○	1	前期	必修	講義	対面	67
大学道場 miniゼミ A	基盤	1	前期	選択	講義	対面	7
大学道場 miniゼミ B	基盤	1	後期	選択	講義	対面	6
○対人援助論	R	1	後期	必修	講義	対面	87
○歯科衛生士論Ⅱ	○	2	前期	必修	講義	対面	66
○医療面接	○	2	後期	必修	講義	対面	65
○子どもの食と栄養	○	2	後期	必修	講義	対面	70
○対人援助技術演習 M2	M	2	前期	選択必修	講義	対面	68
○対人援助技術演習 M3	M	3	後期	選択必修	講義	対面	94
早期臨地実習	○	1	前期	必修	実習	対面	67
基礎臨地実習	○	2	後期	必修	実習	対面	66
口腔保健衛生学実習Ⅱ	○	3	前期	必修	実習	対面	80

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 就職支援履歴書エントリーシート添削指導
- ・ 学生生活相談面談指導、保護者面談

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

医療専門職としての知識・技術の習得とともに、臨床現場で対応できる実践力と人の命を守る医療倫理観をもった学生を養成する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 成人期の学生には、普段気づきにくい、あるいは気づかない高齢者や幼児の特性に目を向け、具体的な検査・診療場面における安全への配慮、安楽への配慮を考慮してもらった。
- ・ 対面授業・演習では、ペアワーク、グループワークでの意見交換、小さな疑似体験のなかで気づきを引き出す。
- ・ 実践的な技術となるよう検査室・診療室など狭小空間での車いす操作、難聴・視野狭窄患者体験を組み合わせて行なった。体験する中で、対象（患者とその家族）特性の理解を深め、普段気づきにくい危険予測力を醸成するような授業の仕掛けづくりをおこなった。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 授業時に複数回の小テストを実施して知識の定着度の把握に努めた。
- ・ 毎授業後、出席票をもちいて学生コメントを収集し、次の授業冒頭で学生からの質問や疑問、気づきをパワポスライドで共有した。双方向のやりとりにくわえ、他学生の意見や気づきの発見に繋がり、思考の深まりがあったとの学生コメントが多くあった。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 対面授業・演習では、ペアワーク、グループワークでの意見交換を行い、他者から「自分にとって新しい考え方・発想を得る」ことが出来た学生も多かったようである。
- ・ 单元ごとに小テストを行なうことで、繰り返し学習と知識の定着が出来たといった意見が多かった。
- ・ 生活体験に即した知識は気づきが多く、興味深く学ぶ学生が多くあった。しかし概論、理論といった抽象度の高い学習内容は、言語的理解度が低い学生にとっては難しかったようである。

6. 今年度の成果

定期試験 平均 7～8割

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

授業外学修としては 30 分未満・30 分から 1 時間が大半を占めており、課題量としてはやや少ないと考えるが、振り返りレポート、終講テストで医療専門職としての自身の考えが論述できるようにしていく。

8. 社会的活動等

- ・ 神戸常盤大学公開講座「口から始めようフレイル予防&脳活」講演
- ・ 神戸市灘区歯科医師会研修会「在宅療養・介護現場での食支援～食べたい思いに答える小さな工夫とその根拠～」講演
- ・ 第 30 回日本健康体力栄養学会大会 シンポジスト「高齢者の「食べる」を支える一多職種が協働した口腔コグニサイズ健口教室の実践一」講演
- ・ 第 31 回日本健康体力栄養学会大会 座長
- ・ 日本健康体力栄養学会 理事
- ・ 公益社団法人日本歯科衛生士会 令和 5 年度認定歯科衛生士セミナー「生活習慣病予防（特定保健指導－食生活改善指導担当者研修）コース」講師
- ・ 日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士
- ・ 日本認知症予防学会 認知症予防専門士

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料
- ・ Manaba 授業コンテンツ、テスト問題

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	福田昌代	所属学科	口腔保健学科	職名	教授
クラス担任	3年A	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	運営委員会委員　ときわ教育推進機構委員　教務委員会委員長 国家試験対策委員会委員長　就職委員会副委員長 臨地実習委員会委員　FAST等企画運営ユニット委員 口腔保健研究センター委員　保護者のためのオープンキャンパス委員 神戸常盤大学歯科診療所（はあみる）委員 神戸常盤大学歯科診療所（はあみる）医薬品安全管理責任者				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○大学道場 miniゼミA	基盤	1	前期	選択	演習	対面	139
○大学道場 miniゼミB	基盤	1	後期	選択	演習	対面	100
○口腔健康支援総論	○	1	前期	必修	講義	対面	67
○口腔健康支援各論	○	1	後期	必修	講義	対面	68
口腔衛生管理演習	○	2	前期	必修	演習	対面	66
ライフステージ別 口腔健康支援演習	○	2	後期	必修	演習	対面	65
早期臨地実習	○	1	前期	必修	実習	対面	67
基礎臨地実習	○	2	後期	必修	実習	対面	66
○歯科保健指導演習Ⅲ	○	3	後期	必修	演習	対面	3
○歯科保健指導演習Ⅳ	○	3	前期	必修	演習	対面	78
歯科衛生過程演習	○	3	後期	必修	演習	対面	82
○地域口腔保健支援実習Ⅱ	○	3	通年	必修	実習	対面	78
○口腔保健特論Ⅱ	○	3	後期	選択	講義	対面	81

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策として、特別補講の実施
- ・ 就職委員として、ガイダンスの実施、履歴書の添削、模擬面接指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

歯科衛生士として社会で活躍できる人材を育成する。そのため、1年生から口腔保健に関する基礎的な知識や技術を修得し、歯科衛生士になるという自覚と責任を授業、演習、実習を通じて身につけるよう工夫した方法で教育を行う。また患者さんとのコミュニケーションの基礎となる対人コミュニケーションの方法を修得できるようにグループワーク等を行うことで、他者との関わり方を学ぶ。最終学年では国家試験合格に向けての学修方法を伝え、全員が歯科衛生士の資格取得できるように指導する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 1年次の科目では、基礎的な知識の修得を目的とするため、講義資料として冊子を配布し、予習・復習がしやすい方法での授業を実施している。
- ・ コミュニケーションの練習と他者の意見を聞く力を養うため、授業内でグループワークの機会を設定している。
- ・ 国家試験対策として、模擬試験結果のポートフォリオを作成し学生とやり取りすることで、成績向上につなげた。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 1年生の授業では、授業評価でもコメントでも良い評価であったことから、授業に使用する冊子をバージョンアップして使用した。
- ・ 使用教室のプロジェクターが古く、途中までスライドが見にくかったが、後期の途中から新しいプロジェクターに代わり見やすくなった。
- ・ 短期大学部口腔保健学科閉科に向けて、過年度学生に対して補講等を行い、学習の支援を行った。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 1年生の授業では、例年通りの高評価が得られたので、引き続きこの方法を継続したい。後期の授業は15回のため範囲が広くなることから、途中で小テストを実施することでまとめとなることから、定期的に取り入れたい。
- ・ 1, 2年生の授業評価では、学生自身の学習評価が3点台であるが、3年生になり国家試験を見据えた科目では、学生自身の学習評価も4点台の後半となり、予習や復習に力を入れるようになる。できるだけ低学年から自身で学ぶ習慣に繋がるようにできれば良いと考えている。

6. 今年度の成果

- ・ 1年生の授業では、授業スライドならびに冊子のバージョンアップを行ったこともあり、前期の口腔健康支援総論では1.1点、後期の口腔健康支援各論では、1.5点成績が向上した。
- ・ 国家試験対策では、直前の校内模擬試験で、受験対象者全員が合格点に達することができるところまで学習支援を行うことができた。
- ・ 就職支援では、履歴書の添削や面接対策を行い、公務員に合格することができた。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 2年次科目であるライフステージ別口腔健康支援演習では、授業評価が低かった。これは、内容がライフステージ多岐にわたり、学生にとってはかなり難しく感じたようである。次年度にはもう少し内容を検討し、学生が理解しやすい内容に変更するように科目責任者と検討する予定である。
- ・ 国家試験対策では、受験者全員が合格点に達するレベルであったにもかかわらず、当日のミスで不合格となる学生がいた。日頃からマークシートの解答の仕方や試験の時間配分について、精神的な面のフォローなど今まで以上に考えておく必要がある。
- ・ 4年制に移行し、3年目にあたるため、3年生後期から国家試験対策をスタートさせる必要があると考えており、その方法について検討する。

8. 社会的活動等

- ・令和5年4月11日 加古川元気会にて「オーラルフレイル対策」の講演
- ・令和5年9月25日 神戸市文化センター主催 第34期さわやか大学にて「健口づくりで健康長寿ーオーラルフレイルの予防と対策」の講演

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業資料、スライド
- ・ 定期試験問題
- ・ 国家試験対策ポートフォリオ
- ・ 就職実績
- ・ 講演依頼文、スライド

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	森谷徳文	所属学科	口腔保健学科	職名	教授
クラス担任	3B	クラブ顧問			
委嘱委員・職務	学生委員会委員 就職委員会委員 臨地実習委員会委員 教育研究推進センター委員 口腔保健研究センター委員 神戸常盤大学歯科診療所副所長（学内責任者）				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○病理学	○	2	前期	必修	講義	対面	66
○薬理学	○	2	前期	必修	講義	対面	66
○口腔外科学・歯科麻酔学	○	2	前期	必修	講義	対面	66
○生化学・栄養学	○	1	後期	必修	講義	対面	74
○歯科理工学	○	1	後期	必修	講義	対面	68
医療英語 IIAB	○	2	後期	必修	演習	対面	66
○歯科理工学演習	○	2	後期	必修	演習	対面	69
機能再建系歯科診療補助演習	○	2	後期	必修	演習	対面	66

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 最低限、国家試験に合格するレベルの知識を習得する。
- ・ 卒後、歯科衛生士としての活躍を継続できる。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）
 - ・ 講義前の予習として、動画配信
 - ・ 講義の予習・復習として、講義スライドをPDFで配布
 - ・ 講義の復習として、manaba上での小テストの実施
4. 今年度における教育方法改善の取り組み
 - ・ 講義前の予習として、動画配信
 - ・ 講義の予習・復習として、講義スライドをPDFで配布
 - ・ 講義の復習として、manaba上での小テストの実施
5. 今年度の学生による授業評価より
 - ・ 前年度、全般的に学生自身の学習時間が短めであった。授業内容と課題の在り方について考えていきたい
6. 今年度の成果
 - ・ 前年度、講義中の声が聞き取りづらいとの意見が散見されたが、今年度はその意見が僅かとなった。
7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策
 - ・ 学生自身の学習時間を長くするために、次年度は小テストの方法をより分かりやすくする。
8. 社会的活動等
 - ・ 企業の歯科検診
 - ・ 企業のホームページへ、コラムの提供
 - ・ 歯科診療所において地域歯科治療
9. 根拠資料（資料名のみ）
 - ・ シラバス
 - ・ 学生による授業評価
 - ・ 授業における配布、配信資料
 - ・ テスト問題

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	山城 圭介	所属学科	口腔保健学科	職名	教授
クラス担任	1年Aクラス		クラブ顧問	なし	
委嘱委員・職務	入試委員会委員 口腔保健研究センター副センター長 臨地実習委員会副委員長 ときわ教育推進機構副機構長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○口腔衛生学	O	1	前期	必修	講義	対面	67
早期臨地実習	O	1	前期	必修	実習	対面	67
健康科学総論	N	1	前期	必修	講義	対面	98
人体のふしぎ	MNEOR	1	前期	選択	講義	対面	121
○微生物学・免疫学	O	1	後期	必修	講義	対面	67
○公衆衛生学	O	2	前期	必修	講義	対面	66
○歯科保存学	O	2	前期	必修	講義	対面	66
○歯科補綴学	O	2	前期	必修	講義	対面	66
基礎臨地実習	O	2	後期	必修	実習	対面	66
機能再建系歯科診療補助演習	O	2	後期	必修	演習	対面	66
○医療英語 II	O	2	後期	必修	演習	対面	66
○歯科医療と法律・制度	O	3	後期	必修	講義	対面	79
検体採取安全管理演習	M	3	後期	必修	演習	対面	82
○海外研修	O	3	後期	選択	演習	対面	12
口腔保健特論 I	O	3	後期	選択	講義	対面	83

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・1年生クラス主担任として、学生面談、保護者面談を行った。
- ・国家試験対策として、学生の個別指導を行った。
- ・新入生歯科検診を通して、定期検診の重要性、歯科治療の必要性について説明、治療の必要のある学生に対しては学内歯科診療所の受診を促した。

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門基礎科目では、医療従事者として修得すべき基礎知識（感染管理、公衆衛生、法律など）を有する学生を育成する。また英語教育を通して、国際的な視野をもつ学生を育成する。専門科目では、修得した基礎知識を用いて、実際の医療現場にて責任のある行動を取れる学生を育成する。学内歯科診療所においては、臨地実習を行う学生に対して、患者への対応、診療補助、感染管理などの教育を行い、実践力のある学生を育成する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

講義科目においては、講義で使用したスライド資料を PDF としてオンライン上で公開し、授業の復習や、定期試験対策で使用できるようにする。また講義後に manaba を用いた小テストを実施し、授業の理解度を確認する。演習においては、授業前に manaba を用いた小テストの実施、予習用の説明動画を公開し、実際の手順などを事前にわかるように工夫している。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

昨年度の授業評価において、「講義の速度が早く、理解が難しい」との意見が見られたため、今年度の授業においては、少し速度を遅め、学生が理解できるよう取り組む。また配布資料を作成し、学生

が授業の内容を理解しやすいよう工夫する。

5. 今年度の学生による授業評価より

わかりやすいスライドだった、アニメなどを適宜使用していることで楽しく授業を受けることができたなどの肯定的な意見があった。これらは今後も継続する。配布資料の穴埋めが難しかったとの意見があったため、これについては理解しやすいよう改善する。

6. 今年度の成果

講義科目、演習科目において小テストを実施したことにより、学生の理解度の把握ができた。臨床系の講義については、臨地実習前でもあるため学生の理解度は低かったように思える。器材を実際に使用してみるなど、授業に工夫を行う必要があると思われる。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

前年同様、学生が利用できる講義資料、予習・復習動画などをオンライン上に公開する。知識の定着が必要は基礎科目において重要な内容に関しては、繰り返し説明することを心がける。

8. 社会的活動等

- ・ 神戸常盤大学歯科診療所において、歯科医師として臨床業務を行っている。また、ときわ幼稚園、神戸常盤女子高校、本学（新入生対象）、企一般業などで歯科健診を行っている。これらを通して地域住民の健康増進に寄与している。
- ・ 歯周病学会などに参加し、最新の知識や技術の発表及び情報収集を行っている。
- ・ 病院歯科介護研究会の理事として大会運営を行い、歯科衛生士の社会的地位向上に寄与している。
- ・ 兵庫県歯科衛生士会主催の「令和6年度卒後研修必修プログラム」において講義を行い、歯科衛生士の研究の重要性について啓蒙を行っている。
- ・ 長田区子どものむし歯予防検討会に参加し、長田区、歯科医師会、他の歯科衛生士要請校とともに子供へのフッ素塗布の実施などを行っている。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業時の配布資料および動画
- ・ 学会抄録
- ・ 会議議事録

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	上原弘美	所属学科	口腔保健学科	職名	准教授
クラス担任	3年生Bクラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	入試委員会委員長およびアドミッションオフィサー 入試委員会合否判定部会委員長 入試問題作成部会副委員長 運営委員会委員 就職委員会委員 臨地実習委員会委員 歯科診療所委員 歯科診療所医療安全管理責任者				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○歯科診療補助論	○	1	前	必修	講義	対面	67
○歯科診療の補助演習	○	1	後	必修	演習	対面	67
○医療安全	○	2	後	必修	講義	対面	66
○歯科臨床検査総論	○	2	後	必修	講義	対面	66
○臨床検査学	○	3	前	必修	講義	対面	7
○歯科診療補助演習Ⅲ	○	3	後	必修	演習	対面	3
○オーラルリハビリテーション演習	○	3	後	必修	演習	対面	3
早期臨地実習	○	1	前	必修	実習	対面	67
○診療補助実習Ⅱ	○	3	前	必修	実習	対面	80
地域口腔保健支援実習Ⅱ	○	3	後	必修	実習	対面	78
口腔保健特論Ⅱ	○	3	後	必修	講義	対面	81
大学道場 miniゼミA	基盤	1	前	必修	演習	対面	8
大学道場 miniゼミB	基盤	1	後	必修	演習	対面	9
いのちと共生	基盤	1	前	選択必修	講義	遠隔	417
放射線治療技術学Ⅰ	R	3	前	必修	講義	対面	74
I PW論	R	3	後	必修	講義	対面	68

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 就職相談ならびに履歴書添削指導、模擬面接指導
- ・ オープンキャンパス・母校訪問等入試全般にかかわる学生への指導
- ・ リカレント生への学習支援

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 医療職としての自覚と責務を持ち、チーム医療の一員として活躍できる、実践力を持った歯科衛生士の育成
- ・ 国家資格取得後においても、継続学習野必要性を生涯自己研鑽できる力
- ・ 物事を考える力、自分の意見を持ちそれをまとめる力、自身の意見を他者に伝える力を持った歯科衛生士を育てたい

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活

用等の工夫点について)

- ・ 医療職としての自覚を育むために、「命を守る責務」について、臨床の事例を交えながら繰り返し講義した。
 - ・ 自身で考え、意見を持ち、他者へ伝える力を育むために、グループワークを取り入れ、他者の意見を聞く機会、自分の考えをまとめ他者にわかりやすく伝える機会を授業に取り入れた。
4. 今年度における教育方法改善の取り組み
- ・ 前期の臨地実習での学習成果をレポートにまとめ、後期にはグループワークののち、プレゼンテーションを行うことで、個々人の学習を深めるとともに、臨床現場での最新の知識を学生間で共有することができた。
 - ・ 授業評価では、「学生への質問や意見への対応が十分になされていた」の項目が高くはないので、毎回の授業では、適宜学生へ、質問がないか？と投げかけるように心がけた。
5. 今年度の学生による授業評価より
- ・ 大学道場 miniゼミでは、他学科の学生にとっても口腔への興味を持てるよう、学生からの質問に答える形で授業を進めた。また、一人1課題を調べ、パワーポイントにて発表してもらった。学生からは、少人数であったため、緊張せず発表でき、良い経験になったとのコメントが見られた。
6. 今年度の成果
- ・ 今年度より担当することとなった科目「いのちと共生」では、全学に渡る多人数の受講生に対して、いのちの入り口である「口腔」について講義することができた。受講後レポートには、医療者・教育者を目指す学生として、口腔の重要性を認識することができたとの意見が多く見られた。学生自身の健康への意識向上の一助となったのではないかと思う。
7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策
- ・ 後期後半科目（歯科臨床検査総論・医療安全）は、学内の会議と重なり、休講補講にて対応せざるを得なかった。学生への周知は問題なくおこなったが、数回の変更をおこなったことで、学生に迷惑をかけたのではないかと思う。次年度は、あらかじめ会議日程を確認し、早めに学生へ伝達できるようにする。
8. 社会的活動等
- ・ 兵庫県歯科衛生士連盟 会長
 - ・ 日本歯科衛生士連盟 評議員
 - ・ (公社) 日本歯科衛生士会「歯科衛生士の研修指導者・臨床実地指導者講習会」企画運営委員会 委員
 - ・ 阪神シニアカレッジ健康学科1年生・3年生 講師
 - ・ 非常勤講師
 - 兵庫県立総合衛生学院 看護学科定時制
 - 兵庫県立総合衛生学院 歯科衛生学科
 - 神戸市医師会看護専門学校

- ・高大連携授業 兵庫県立福崎高校

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	澤田 美佐緒	所属学科	口腔保健学科	職名	講師
クラス担任	2年Bクラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	自己点検・評価委員会委員 臨地実習委員会委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○口腔保健衛生額実習Ⅱ	○	3	前期	必修	実習	対面	80
○歯科診療補助演習Ⅱ	○	3	前期	必修	演習	対面	3
早期臨地実習	○	1	前期	必修	実習	対面	67
地域口腔保健支援実習Ⅰ	○	3	前期	必修	実習	対面	80
地域口腔保健支援実習Ⅱ	○	3	通年	必修	実習	対面	80
歯科診療の補助演習	○	1	後期	必修	演習	対面	67
○機能再建系歯科診療補助演習	○	2	後期	必修	演習	対面	66
○オーラルリハビリテーション	○	3	後期	必修	講義	対面	4
オーラルリハビリテーション演習	○	3	後期	必修	演習	対面	3
歯科診療補助演習Ⅲ	○	3	後期	必修	演習	対面	3
基礎臨地実習	○	2	後期	必修	実習	対面	66
口腔保健特論Ⅱ	○	3	後期	選択	講義	対面	80

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 就職に関する支援、個別指導
- ・ 実習や学習に関する相談、支援
- ・ リカレント教育プログラム（口腔機能管理コース）講義・演習

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

歯科診療補助系の科目では、1年次では医療人としての身だしなみの整え方から基本的な歯科診療に対する知識や技術を中心に授業を進め、感染予防に配慮した歯科衛生士を養成する。2年次では、各診療内容に応じた器具機材の取り扱いに対する知識や技術を深めるとともに、患者への配慮ができる能力

をみにつけさせたい。また、臨地実習科目では、障がい者や要介護高齢者を対象とした実習の場面で、対象の口腔衛生状態の向上だけでなく、食支援も含めた口腔健康管理を実践できる人材を育成したい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 1年次には、2年生との合同実習で、先輩から身だしなみの整え方や演習室の使い方を学ぶことで、医療人としての意識を深める機会を設けた。歯科診療用機器に触れる機会を多くして、知識だけでなく、実際の使ってみることで、理解を深める工夫をした。
- ・ 2年次の授業では、一部事前学習としてwebで授業内容の説明を配信することで、前期講義科目の復習をしてから学内の演習に臨むことで、理解を進める工夫をした。また、授業毎に知識確認小テストを実施して、学生自身が理解の程度を図れるようにした。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 授業後のレポートの返却をできるだけ早く行い、また返却時に理解不足が考えられる部分には、説明を加えた。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 「歯科診療の補助演習」授業中の机間巡視による説明がわかりやすかったとの意見があった。次年度も引き続き、授業中の学生の様子を確認しながら、対応していきたい。
- ・ 「機能再建系歯科診療補助演習」予習の動画については、毎回実施してほしいという意見とそれを見ただけではできないという意見があった。次年度も事前の動画配信を実施した上で、学生の理解状況を確認しながら授業の際の説明を加えていきたい。

6. 今年度の成果

- ・ 「歯科診療の補助演習」では、今年度も昨年と同様の授業評価を得ており、学生が理解できる内容の演習を実施できたと考える。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 「機能再建系歯科診療補助」は、4年制になって初めて開講する科目である。8回の演習で多くの項目を学ぶため、実施する順番を含めて内容の見直しを行い、学生が理解しやすい状況を作りたい。

8. 社会的活動等

- ・ 高大連携授業（明石南高等学校）
- ・ 子育て支援施設（モトロク、ノエスタ）における乳幼児親子対象の口腔保健指導
- ・ 花屋敷栄光園 職員研修会講師（高齢者施設）
- ・ 太成学院大学歯科衛生専門学校 特別講義講師
- ・ 神戸常盤大学歯科診療所における歯科衛生士業務

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ Web 配信授業動画

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	宮澤 絢子	所属学科	口腔保健学科	職名	講師
クラス担任	3年Bクラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	教務委員会委員、国際交流センター委員、国家試験対策委員会委員、就職委員会委員、臨地実習委員会委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○医療英語 I	○	2	前期	必修	授業	対面	66
○口腔衛生管理演習	○	2	前期	必修	演習	対面	66
○ライフステージ別 口腔健康支援演習	○	2	後期	必修	演習	対面	65
○基礎臨地実習	○	2	後期	必修	臨地実習	対面	66
歯科保健指導演習Ⅳ	○	3	前期	必修	演習	対面	78
地域口腔保健支援実習Ⅰ	○	3	前期	必修	臨地実習	対面	80
地域口腔保健支援実習Ⅱ	○	3	後期	必修	臨地実習	対面	78
海外研修	○	3	前期	選択	臨地	対面	12
口腔保健特論Ⅱ	○	3	後期	選択	講義	対面	81
早期臨地実習	○	1	前期	必修	臨地実習	対面	67

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策として成績不振の学生に対する特別補講の実施
- ・ 就職活動の履歴書の添削指導、模擬面接
- ・ ネパール研修派遣学生（M科）のプレゼンテーション指導
- ・ 歯科衛生学術フォーラムでのプレゼンテーション資料作成および発表の指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

いのちに対する温かく豊かな感性と高い倫理観を持ち、口腔の健康を通して、人々の健康で豊かな生活実現を支援できる確かな医療技術と学識を兼ね備え、地域社会に加え国際的にも活躍できる専門職業人を育成する

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	室崎 友輔	所属学科	口腔保健学科	職名	講師
クラス担任	1年Aクラス	クラブ顧問			
委嘱委員・職務	広報委員会委員 地域交流センター地域貢献事業部委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○災害とまちづくり	基盤	1	前期	選択	講義	対面	80
○コミュニティデザイン	基盤	1	後期	選択	演習	対面	24
○プロジェクトデザイン	基盤	2	通年	選択	演習	対面	24
まなぶる▶ときわびとⅠ	基盤	1	前期	必修	演習	対面	405
まなぶる▶ときわびとⅡ	基盤	1	後期	必修	演習	対面	405
○情報基礎	O	1	前期	必修	演習	対面	67
○情報メディア演習	O	1	後期	必修	演習	対面	67
○情報基礎	N	1	前期	必修	演習	対面	98
学びの基礎	O	1	前期	必修	講義	対面	67
○社会福祉概論	O	2	後期	選択	講義	対面	64
○ボランティア論	O	2	後期	選択	講義	対面	32
○プレゼンテーション技法 AB	O	3	前期	必修	演習	対面	78
災害援助と救急医療	O	3	前期	必修	講義	対面	78
災害時の歯科衛生士の働き	O	3	後期	必修	講義	対面	78
○施設運営・防災と危機管理	E	3	前期	選択	講義	対面	45

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ オーラルヘルアッププロジェクト（学生との定期的なミーティング、学内での啓発イベントの実施、学外での啓発活動、他大学での授業実施、学生の発表引率など）
- ・ 1年生担任として学生との面談（5～6月）

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

基盤科目では、社会との接点を持ち関心を持つこと、自ら調べ考える能力を育てること、コミュニケーション力とプレゼンテーション力を養うこと、アイデアを生み出し共創する力を身につけることを目指し、社会に出たときに求められる素養を持った学生を育成する。

専門科目では、社会とのつながりや社会の中で求められる役割を意識し、自ら考えて行動できる力を育み、社会で貢献できる人材を育成する。また、現代社会で求められる能力（ICTスキル、課題解決力）を育み、社会の中で実践的に活躍できる人材を育成する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 基盤科目（社会との接点を持ち関心を持つこと）では、社会で活躍する講師をゲストとして招聘したり、また学外授業として防災教育イベントへ出展するなどした。
- ・ 基盤科目（自ら調べ考える能力を育てること、コミュニケーション力とプレゼンテーション力を養うこと、アイデアを生み出し共創する力を身につけること）では、リサーチを通じて課題を見つけ出し、グループワーク（KJ法など）を通じてアイデアを共創し、プレゼンテーションをするという流れの授業を行った。リサーチの方法、アイデアの出し方、プレゼンのコツについて、実践的な脳梁句が身につくよう指導を行った。
- ・ 専門科目（社会とのつながりや社会の中で求められる役割を意識し、自ら考えて行動できる力を育む）では、実際にボランティアの体験をさせるなど、社会での役割について体験を通じて学べる機会をつくった。
- ・ 専門科目（現代社会で求められる能力を育む）では、Teams を活用したグループワークやメンティメーターを用いたインタラクティブな授業を通じて、ICT 技術の必要性について身を持って学ぶ機会を積極的に作った。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 前年度の学生による授業評価では、ICT 活用をした授業内容の評価が高かったため、前年度に増して、学生との意見交換や学生同士のグループワークなどで ICT（メンティメーター、Teams、グーグルマップ共有など）を積極的に活用し、よりインタラクティブな授業となるよう努めた。
- ・ 実用的な情報リテラシーと ICT スキルを初年次から身につけられるよう、「学びの基礎」「情報基礎」「情報メディア演習」を通じて、Teams を活用して一貫した教育を行った。
- ・ 学生のプレゼンテーションにあたっては、教員からのフィードバックをしっかりと行うだけでなく、学生からのフィードバックができるよう、Teams やメンティメーターを通じた評価とコメントを行った。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 全般的に学生自身の学習時間が短めであった。事前学習の内容を検討する必要がある。
- ・ どの授業でも ICT を活用した授業内容については高評価であった。今後は最新のアプリケーションなども試し、活用していきたい。
- ・ 「社会福祉概論」では、講義で一辺倒に知識を教える授業となったため、学生の評価が全体的に低かった。授業中にテストをするなどして、知識の定着を図るとともに学生のやる気を起こさせる内容にブラッシュアップしたい。
- ・ 学外に出て行う授業内容はどれも高評価であった。社会の中で学べる内容をより充実させていきたい。

6. 今年度の成果

- ・ 「学びの基礎」「情報基礎」「情報メディア演習」を通じて、一貫した情報リテラシーを身につけるように努めたため、学生との連絡や面談予約など、グーグルなどのサービスを利用したコミュニケーションが図れるようになった。
- ・ 「学びの基礎」の授業内容を一新し、Teams 図を用いたグループワーク中心の授業内容としたが、学生からの授業評価が高く、充実した授業内容で実施できた。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- 「情報基礎」「情報メディア演習」については、学生の知識・技術差が大きく、中には授業についていけないという学生もいた。Teams を通じて授業時間外でも質問ができるような仕組みを取り入れたい。
- 「プロジェクトデザイン」では、社会・地域との連携をより図るために、長田区と連携して地蔵盆をテーマとした授業を実施する。社会での体験を通じて学ぶ機会をより創出したい。
- 「社会福祉概論」では、国試（特に保育士）にむけて知識の定着を図るよう、毎回小テストをするなどして、反復して知識を身に付けられるようにする。定期試験もレポートから筆記試験に変更し、授業内での知識の取得を目指す。

8. 社会的活動等

- 防災教育、地域防災に関する講座・研修会の講師として出講（平均して月3回程度）
- 兵庫県防災士会理事長として委員会（神戸市・兵庫県）などへの出席（年4回程度）
- JICA の専門家派遣で、ペルーの地域防災活動支援として2回渡航（8月、2月に3週間ずつ）

9. 根拠資料（資料名のみ）

- シラバス
- 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	伴仲 謙欣	所属学科	口腔保健学科	職名	助教
クラス担任	1年Bクラス		クラブ顧問	なし	
委嘱委員・職務	研究倫理委員会委員 情報インフラ整備ユニット委員 利益相反マネジメント委員会委員（学術推進課） 遺伝子組換え実験安全委員会委員（学術推進課）SD委員会委員（学術推進課） 教育研究推進センター委員（学術推進課）ときわ教育推進機構委員（学術推進課） 国際交流センター委員（学術推進課） ライフサイエンス研究センター委員（学術推進課）				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○安全学	基盤	1	前期	選択	講義	対面	57
○教育社会学	N	1	前期	自由	講義	対面	6
地域との協働 A	基盤	1	通年	選択	演習	対面	29
教育と人間	基盤	1	前期	選択	講義	対面	70

国際理解	基盤	1	前期	選択	講義	対面	60
まなぶる>ときわびと I	基盤	1	前期	必修	演習	対面	405
学びの基礎	O	1	前期	必修	講義	対面	67
まなぶる>ときわびと II	基盤	1	後期	必修	演習	対面	408
○現代社会学	基盤	1	後期	選択	講義	対面	48

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 全学入学前教育「1ststep プログラム」ファシリテーターを担当
- ・ 兵庫県受託事業で大学生が若年世代に口腔保健の重要性を伝える活動「オーラルヘルスアッププロジェクト」を担当

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 大学での学び（学修）は、学生の主体性が基盤となることから、主体性の涵養を教育理念の基礎とする。
- ・ 基盤教育科目においては、その設立理念に則り、以下を念頭に教育を実践する。①自らの内に閉じこもらず「外」に目をやり触れることにより、人間の幅を広げる②大学での学びの「型」を修得し、自己を高める基礎的な力を身につける③ まだないものを自らの「手」で新たに創り、未来を切り開き進んでいく力強さを身につける④ともに学び支え合う「友」を持ち、相乗効果で互いを高め合うことのできる環境をつくる。
- ・ 教職課程においては、社会の現状や変化が学校教育に及ぼす影響を積極的に理解するとともに、学校安全に関する知識や技能をもった養護教諭育成を目指す。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 各担当科目においては、できるだけ学生の主体性を重視するために、与えられた課題に個人やチームで取り組むアクティブラーニング手法を採用している。
- ・ society5.0 や DX に象徴される社会的要請や、コロナ禍における危機対応の経験から、教育方法としてのICT活用（LMS や BYOD）や遠隔教育の実践を積極的に進めている。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ コロナ禍による混乱から脱し、遠隔教育に代表される当時の知見も踏まえた学生主体の授業方法を昨年度から実施していたため、今年度は、その継続を行った。その結果として、今年度の授業評価に特段の課題が見られなかったため、次年度以降も当面この方法を継続予定である。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 「安全学」は学外講師による完全オムニバス授業で実施するが、他の科目に比べて授業評価が低かった。これは、講師陣による講義内容の質の違いや、日程調整が困難なことから補講日授業が多いなどいくつかの要因が考えられる。また、オムニバス形式の性格上、各ゲストスピーカーの話題を最終的に学生がどのようにまとめて理解し、腑に落とせるかという最終的なまとめ方、収束の方法が課題である。上記の点は、劇的な改善が難しいことから、継続的な対応を施す必要がある。

6. 今年度の成果

- ・授業評価において、担当したほとんどの科目が平均以上であったことから、現在のところは教育方法の妥当性が示されていると考える。
- ・「まなぶる▶ときわびと」や「国際理解」をはじめ、少人数～大人数でのチームティーチングを実施する機会が多いことから、教員チームによる情報管理や共有等についての仕組みをクラウド等を活用して構築し、継続的に運用し続けている。このことは、当該授業の円滑な運営や、将来的な担当者変更等にも対応できるサステナビリティに寄与していると考ええる。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・学生主体の授業方法においては、マンパワー的な限界から、学生に対するフィードバックが、ときに十分取れないことが課題である。この点については、年度ごとの授業の履修生の数にも大きく影響されるため不確定要素が大きいと、とにかくは、自分の業務量や処理力全体の見直しと生産性の向上という、授業内容や授業方法以外の改善が必要と考える。

8. 社会的活動等

- ・上述のオーラルヘルスアッププロジェクトが最終年度を迎えるため、活動する学生数を増やした上で、集大成としての成果を上げていきたい。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス（必須）
- ・ 学生による授業評価（必須）
- ・ manaba、Google Workspace、office365

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	氏橋貴子	所属学科	口腔保健学科	職名	助教
クラス担任	3年生 A クラス	クラブ顧問			
委嘱委員・職務	個人情報保護委員会委員 国家試験委員会委員 就職委員会委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
歯科理工学演習	○	1	後期	必修	演習	対面	68
機能再建系 歯科診療演習	○	2	後期	必修	演習	対面	66
基礎臨地実習	○	2	後期	必修	実習	対面	66
歯科診療補助実習Ⅱ	○	3	前期	必修	実習	対面	77

災害時の歯科衛生士の働き	○	3	後期	必修	演習	対面	77
口腔保健特論Ⅱ	○	3	後期	選択	講義	対面	82

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策
- ・ 就職活動時の履歴書添削指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

医療現場において、正確な知識に基づいた行動力のある学生を養成する。また、チーム医療では多職種との連携が不可欠であると考え、コミュニケーション能力や伝達する力をもった学生を養成する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 演習科目では教本に記載されている歯科に関連する器具器材について、実際に手に取って学生自らが試行・検証する時間を設定した。また、班ごとに協力して演習に必要な器具器材の準備をするなど、自発的に行動する機会を設定した。演習後レポートは統一した形式を設定せず、学生自身が振り返り学習を行い、その内容をチェックする形式にした。
- ・ 実習科目では臨地実習で生じた事項を実習施設ごとに教員に報告する時間を設けた。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 演習科目

今年度2年次の基礎臨地実習では、実習日誌記載の際、歯科材料の名称を曖昧に覚えている学生が多く、小テストや定期試験においての選択肢による出題形式は、学生の学修到達度の把握に限界があると感じた。そのため、今年度1年次の歯科理工学演習では小テストと定期試験において、選択肢ではなく筆記による回答を増やし、演習時間外においても口頭での反復学習を試みた。

今年度は前年度と同様の歯科材料の復習小テストに加え、演習の最終日にこれまでに学修した内容を治療の施術順序に沿って並び替え、多角的視点から知識の確認と整理を行った。その際、1年次の科目であることを考慮し、学習進度に応じた治療内容、専門用語を用いた。

5. 今年度の学生による授業評価より

「歯科理工学演習」の科目では技術の習得度に個人差があったため、希望者を対象に授業時間外で実習室を開放し、自主練習の時間を設けた。その結果、「授業時間外に練習の時間があったのが良かった。」などの意見が見られた。しかしながら、実習時間内で練習する時間が短かったことも反省として挙げられる。

演習ではプリントを配布し、可能な限り、実際の医療現場で使用されている器具器材に触れながら演習を進めていたため、「実技をしながら授業だったのでとても覚えやすくて良かった。」「プリントが分かりやすく説明も分かりやすかった。」などの意見があった。しかしながら、歯科材料の種類が多く、煩雑になった面もあった。次年度は演習前に事前学習を提示するなど、演習をより円滑にする工夫が必要であるとする。

6. 今年度の成果

「歯科理工学演習」の科目では小テストと定期試験で筆記による回答としたため、昨年度と比較して概ね正確に名称を覚えることに繋がった。

国家試験対策として半年にわたり3年生を指導した。その結果、77名の合格者を出すことができた。

就職活動時に履歴書、エントリーシートの添削、模擬面接を行った。その結果、歯科診療所以外にも行政や企業の内定者を出すことに繋がった。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

「歯科理工学演習」では、実習時間内で練習する時間が短かったことが反省として挙げられるため、次年度は、今年度よりも練習時間を延長し、学生が直接教員の指導を受ける時間を確保する。また、歯科材料の種類が多く、煩雑になった面もあったため、次年度は事前学習をmanabaで提示するなど、教育方法に工夫が必要だと考える。

8. 社会的活動等

乳幼児とその保護者に対し歯科相談を実施した。

モトロク (5/19、1/12)、ノエスタ (6/2)、KIT (9/15)

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 定期試験、小テスト
- ・ 配布資料

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	浅枝 麻夢可	所属学科	口腔保健学科	職名	助教
クラス担任	1年生Bクラス担任	クラブ顧問			
委嘱委員・職務	入試委員会委員 合否判定部会委員 臨地実習委員会委員 すこラボ（健康生活研究所）委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
早期臨地実習	○	1	前期	必修	実習	対面	67
歯科衛生士論Ⅱ	○	2	前期	必修	講義	対面	66
口腔衛生管理演習	○	2	前期	必修	演習	対面	66
基礎臨地実習	○	2	後期	必修	実習	対面	66
ライフステージ別	○	2	後期	必修	演習	対面	65

口腔健康支援演習							
歯科保健指導演習Ⅳ	○	3	前期	必修	演習	対面	78
海外研修	○	3	前期	選択	演習	対面	12
口腔保健特論Ⅱ	○	3	後期	選択	講義	対面	81
地域口腔保健支援実習Ⅱ	○	3	通年	必修	実習	対面	78
子どもの歯と健康	E	3	後期	選択	講義	対面	55
まなぶる▶ときわびとⅠ	基盤	1	前期	必須	演習	対面	405
まなぶる▶ときわびとⅡ	基盤	1	後期	必須	演習	対面	408

(2)準正課、正課外の教育活動

特になし

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

自分自身で考えて行動し、積極的に学び、課題を解決する能力を持った学生を養成したい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ ライフステージ別口腔健康支援演習では、歯科衛生アセスメントや計画案の作成に時間を費やすため、事例の提示と簡単な説明のみを行い、作成していく中で出てきた質問に答える形式の授業を行った。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 歯科衛生士論Ⅱでは、授業後にアンケートを行い、次回の授業で良い感想の紹介や質問への回答を行い、双方向のやり取りに努めた。

5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 歯科衛生士論Ⅱでは、穴埋めの授業資料について、概ね高評価だった。

6. 今年度の成果

- ・ 歯科保健指導演習Ⅳでは、媒体作成に必要な物品の準備を行ったが、「不十分だった」という意見があった。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 歯科衛生過程の演習において、「解答がほしかった」という意見があった。一例の提示を検討する。

8. 社会的活動等

- ・ 子育て支援施設「KIT」「ときわんモトロク」「ときわんノエスタ」にて歯ッピー相談会（乳幼児対象）
- ・ 神戸常盤大学附属ときわ幼稚園にて口腔機能評価
- ・ 日本健康体力栄養学会「健康体力栄養アドバイザー」資格審査委員会委員

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業資料（PowerPoint 穴埋め資料、歯科衛生過程フォーム）

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	金川 治美	所属学科	看護学科通信制課程	職名	教授
クラス担任	なし		クラブ顧問	なし	
委嘱委員・職務	課程長 臨地実習委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
看護対人関係論	CCN	1・2	通年	必須	テキスト学習	通信	6
成人看護学概論	CCN	1	前期	必須	遠隔	遠隔	1
成人援助論	CCN	1・2	通年	必須	テキスト学習	通信	45
成人看護学演習	CCN	1・2	通年	必須	テキスト学習	通信	209
成人看護学実習	CCN	2	通年	必須	対面	対面	122

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門分野Ⅰの科目では、どの領域においても基本となる対人関係の結び方について、客観的に評価できる知識と技術を育成する。

専門分野Ⅱの科目では、看護師の思考プロセスを理解し、これまでの自身の看護実践場面を振り返り、その意味を考えることで、看護の役割と実践能力を育成する。また、今後の学習姿勢の継続も目指す。

知識の定着のみならず、実践力の育成を理念とする。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ テキスト科目では添削指導なので、レポート内容から理解又は学習が不足しているポイントを抽出し、段階を踏んで学習を加えられるようにコメントを設定した。
- ・ 実習科目に関しては、視野をひろげる目的で1教材（見学した実践場面）をグループでアセスメントしていく形をとっている。また、授業の初めにルーブリック評価表に自己評価できる表を配布し、授業が進む都度自分で振り返り到達できているかを確認するようにした。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ テキスト学習では、学生の力に応じて添削内容の難易度を変え、具体的にどこが不足しているのかがわかり、修正の意欲が持てるように工夫した。
- ・ 実習科目では上記3の内容を実施したうえで、各グループに稼働又は疑問を投げかけ討議する時間

を設けた。また、議論の内容を他のグループメンバーに説明することで内容の整理と理解を促し、必ず教員から、それに対する講評を行った。

5. 今年度の学生による授業評価より

該当せず

6. 今年度の成果

該当せず

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

該当せず

8. 社会的活動等

- 令和5年度 厚生労働省科学特別研究授業「看護師養成所2年課程（通信制）の入学要件見直しに係る調査研究」において、コアメンバーとして Good Practice 作成にかかわった。看護師養成所2年課程（通信制）の入学要件見直しに係る調査研究において、コアメンバーとして Good Practice 作成にかかわった。教員FD用の研修動画の作成にかかわった。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- シラバス
- 授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	丸岡洋子	所属学科	看護学科通信制課程	職名	准教授
クラス担任			クラブ顧問		
委嘱委員・職務	危機管理委員 CCN-臨地実習委員会委員・通信教育委員会委員・教務委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
看護学概論	CCN	1・2年	通年	必須	テキスト学習	通信	9
看護過程演習	CCN	1・2年	通年	必須	テキスト学習	通信	161
基礎看護学演習	CCN	1・2年	通年	必須	テキスト学習	通信	54
基礎看護学実習	CCN	1年	後期	必須	見字実習 実習カレッジ	通信	76

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

准看護師としての学習や勤務経験を通して培った知識、技術、態度を基盤に、看護実践に至る思考過程を辿れる能力を身に付けることが重要である。このことを通して、目的、根拠、個別性をふまえた看護実践の意味を理解し、看護の役割を言語化できるよう導く。准看護師としての自己を評価し、更に質の高い看護実践に向けて自己の課題を明確にし、自己研鑽に取り組む姿勢へと動機づけることが重要であると考え。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 対象理解から看護実践に至る思考過程を、テキスト学習の設題を順序だてること、実習スクリーニングの面接授業ではワークシートを用いて意識化させ、それを用いての演示を通して評価の過程までたどれるように導いた。さらに、そこから看護の役割とはなにかを考え、准看護師としての自己を評価し、今後の自己の看護実践への課題を言語化し、共有する場を充実させるようにした。
- ・ テキスト科目の学習目標を達成するために工夫している点について、課程内FDで共有した。担当科目における工夫と、科目間のつながり、テキスト科目と実習科目のつながりについて、情報交換、意見交換を行い共有した。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 机上学習では、看護の対象を映像化してとらえることができないことが、看護実践に至る思考過程を辿ることを困難にしている要因の一つである。レポート添削コメントを通して全体像を映像化し、対象理解から看護の展開を考えられるように導く。添削コメントでは伝わらないことは、CCNの質問応答や電話を通して指導を行い、また、国家試験対策や面接授業等、直接指導できる機会を活用していく。

5. 今年度の学生による授業評価より

6. 今年度の成果

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

8. 社会的活動等

- ・ 兵庫県看護連盟 北播地区支部役員

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 授業における配布資料

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	山岡 紀子	所属学科	看護学科通信制課程	職名	准教授
クラス担任	-		クラブ顧問	-	
委嘱委員・職務	国家試験対策委員会 CCN 委員長、臨地実習委員、研究倫理委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○小児援助論	CCN	1・2年	通年	必修	テキスト学習	通信	31
○小児看護学演習	CCN	1・2年	通年	必修	見学実習・実習スクーリング	通信	159

(2)準正課、正課外の教育活動

- ①国家試験対策委員会活動：国試オリエンテーション、模試（対面@神戸・東京&自宅受験）、講座（対面@神戸・東京&WEB）、電話相談、既卒者への指導、等。
- ②チューター活動：担当学生の学修進捗確認や学習相談を、スクーリングや学習会等の行事時、メールや電話にて実施。

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

健康課題を有する子どもとその家族について正しく理解し、対象児と家族に必要な援助を全方位的に考察したうえで、優先順位をつけながら適切な方法で実践できる力を養成する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ①レポート作成の要点を提示した講義や指導の実施
- ②学生の生活（仕事や家庭の事情等）を考慮した具体的な学習計画の提案
 (ア)小児看護・医療の現場の実際や小児や家族を取り巻く社会の現状、法律・制度の最新事情の例示

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

小児看護学関連単位が未修得の学生への支援の強化（レポート作成のためのヒントの作成・配布等）

5. 今年度の学生による授業評価より

該当なし

6. 今年度の成果

該当なし

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

該当なし

8. 社会的活動等

神戸市総合児童センターこべっこランド「極低出生体重児（1,500g 未満）と保護者のための子育て教室 YOYO クラブ」

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 授業における配布・配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	小坂 素子	所属学科	看護学科通信制課程	職名	講師
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	通信教育委員、ハラスメント防止対策委員（副委員長）、個人情報保護委員、国家試験対策委員（通信 副委員長）、臨地実習委員（通信）				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
母性援助論	CCN	1,2年	通年	必須	テキスト学習	通信	45
母性看護学演習	CCN	1,2年	通年	必須	テキスト学習	通信	234
母性看護学実習	CCN	2年	通信	必須	見学実習・実習スクーリング	通信	122

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策での学習方法の支援
- ・ テacherでの学習支援

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

学生は、妊娠褥婦、新生児の看護が母性看護だと認識していたり、母性看護は苦手だと思っているため本来の母性看護について理解を深めたい。

女性や女性を取り囲む周囲の人や家族の健康・保持・増進のための母性看護の役割について理解を促し、実践できる学生を育成する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活

用等の工夫点について)

- ・ 援助論はテキストで母性看護での基本的な内容を学習し理解が出来るように指導を行う。演習では更に援助論での知識を基に紙上事例での看護の根拠と判断が出来るように指導を行う。そうして母性看護学実習での看護が理解できるように繋げている。
- ・ 実習前に実習目標を明らかにしたり、事前学習を指導することで、実習での学習意識が強化されて実習での看護の理解が深まる関りを行った。
- ・ 対面授業では、実習で多様な対象者や家族への看護を学習したことを通して、実習記録を基にミニグループワークから全体のグループワークに拡大して話し合い、多角的に母性看護を理解する時間と設けた。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 学生は准看護教育で7年以上前に学んだ母子看護学（産科及び小児科の領域を含む）や実習場所での体験、就労場所が母性に関係がないなどから、母性看護学に対して半数以上が苦手と答えている。その為、対面授業での一つには、母性看護の対象は女性のライフサイクルと女性の周囲の人や家族であること、すなわち、学生の職場の対象者や医療関係者、学生や学生の家族も含まれることを説明し理解を得るようにした。
- ・ 二つ目には、講義内容が現実と遊離しないように臨床での体験談や社会状況を交えた講義の構成を行うことでイメージ化を図り、理解が出来るようにした。
- ・ 母性看護学が苦手な学生はレポートに取り組むことがなかなかできない。その為、まず、取り組みようとする気持ちになるように学内での学習会や学生が来校した機会を活用した。その機会では、教員主導ではなく学生間でどのようにして学習やレポートをしているかを話し合ったり、学生が進んでない状況を表出することで他の学生に理解してもらい解決策が見つかったりしてやる気が出ていた。
- ・ 提出したレポートの添削では、具体的に何を学習したら良いかを明示した。更に分かり易くアセスメントに必要な内容を取り入れて、事例の看護が考えられるようにした。中には理解できないことに関して電話での問い合わせがあった。その場合は、学習の必要な箇所をテキストで調べ声を出して読んでもらい、その中の何が必要なのか学生に考えてもらうことも行った。
今回の国家試験の母性看護学では、母性看護学概論、援助論・演習レポート、実習、実習のスクーリングで学習したこと出題されており満点だったという学生もいた。

5. 今年度の学生による授業評価より

(通信では無し)

6. 今年度の成果

(通信では無し)

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

(通信では無し)

8. 社会的活動等

- ・ 長田区のとときわクニヅカで助産師出張隊の活動（卒乳・断乳講座）2回
- ・ 健康フェスタ（みんなの子育て広場 子育てをしている家族との交流）

- ・西宮市助産師会での活動
 - ①西宮市医療連盟健康市民講座（女性相談）
 - ②西宮市養育支援ネット連絡会議
 - ③幼稚園・小学校・中学校の性教育の企画

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	松原 渉	所属学科	看護学科通信制課程	職名	講師
クラス担任			クラブ顧問		
委嘱委員・職務	紀要委員会、SD 委員会 看護学科通信制課程 臨地実習委員会				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○精神援助論	CCN	1.2年	通年	必須	テキスト学習	通信	46
○精神看護学演習	CCN	1.2年	通年	必須	見学実習、実習スクーリング	通信	140

(2) 準正課、正課外の教育活動

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・多様なニーズに対応できる、看護に対する高度な専門知識と技術、豊かな感性と幅広い人間性を養成する。看護の対象である人々の主体性や価値観を尊重し、人々が最良の状態で生活し、自己実現を図るための的確な看護判断と基礎的能力を備えた看護師の育成に向かい、生涯、学び続け発展し成長できる能力を養うことを理念とする。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・実習スクリーニングでは、学生個人が主体的に見学実習で情報収集した一人の患者の具体的な内容を使って個人ワークで関連図作成を行い、疾患が生活に及ぼしている影響などの全体像の理解を深める時間を設定した。
- ・実習スクリーニングではセルフケア不足にある患者の看護援助や長期入院患者への社会復帰に向け

での基本的な支援のあり方やコミュニケーション能力を養う目的で、DVD を活用した。DVD が流しっぱなしにならないように、問題提起し学生同士で話し合う場も設定し視覚化によりの確な看護判断と基礎的能力を備えた看護師のイメージにつながるようにした。理由は、学生個々の理解能力の個人差が激しいことや精神に障害をもつ人への看護過程の展開では、目に見えない精神の問題が根底にあることから共有して理解することが難しい面があるからである。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 学科内FD のテーマで「テキスト学習の指導のねらい（学習目標）と目標を達成するためにレポート設題で工夫した点は何か」について話し合う中で、学生がレポートの設題に向かって導き出せるような工夫を具体的に共有したが、その中での学生指導の工夫の学びをテキスト学習の指導で活かした。
- ・ 実習スクーリングの配布資料は精選した。

5. 今年度の学生による授業評価より

6. 今年度の成果

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

8. 社会的活動等

兵庫県看護協会神戸西部支部教育委員会の委員として 6 年間、ほぼ毎回、欠かさず出席し、委員として年 2 回の教育委員会主催の研修会の企画・運営等に参与する。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	西森有理子	所属学科	看護学科 通信制課程	職名	講師
クラス担任			クラブ顧問		
委嘱委員・職務	臨地実習委員会・副委員長 通信制課程教務委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
在宅援助論	CCN	1・2年	通年	必修	テキスト学習	対面	185

在宅看護論演習							
在宅看護論実習 スクーリング	CCN	1・2年	通年	必修	見学実習 スクーリング	対面	123

(2)準正課、正課外の教育活動

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

通信制課程で学ぶ学生は准看護師としての経験を最低でも7年はもっている。その経験を基にしながら、様々な価値観を尊重した在宅看護のあり方を理解できる学生を育成したい。また、准看護師教育課程では学ばなかった新たな科目である「在宅看護論」を学ぶことによって、地域で療養している人々とその家族を理解し、住み慣れた地域でその人らしく生活が送れるよう支援する在宅看護の機能と役割を理解できるよう育成したい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

テキスト学習

在宅援助論の科目では、在宅での日常生活援助についてのレポート設題に取り組むことによって、在宅でのアセスメントの視点を学び、在宅療養生活を支える具体的援助について学ぶ。テキスト

トを参考に学習することでレポートを完成できるように設題している。

在宅看護論演習では、在宅療養でよくみられる疾患である「脳梗塞後遺症」「頸椎損傷」「脳性小児麻痺」などの事例に取り組み、在宅看護の視点でのアセスメントを行うこと。在宅療養を支える家族の課題、多職種連携の支援について理解できるよう添削指導に努めた。

学習支援の学習会開催では、資料を作成し、レポート設題に沿ってテキストの活用方法を説明し、また、演習事例では各疾患についての説明も加えながら、レポートへの取り組みが進むように支援を行なった。

実習スクーリング

学習の到達目標は以下の3点である

- 1) 在宅で療養する対象者の健康上の問題（疾病や障害、日常生活の障害、心理面）を理解できる。
- 2) 訪問看護の実践場面を通じて、療養者および家族の価値観を尊重したサポートについて理解できる。
- 3) 在宅療養者を支えるシステムを理解し、多職種の役割と連携、社会資源の活用について知り、在宅看護の役割が理解できる

講義内容は以下の3点を中心に実施した。特にグループワークに重点をおいた。

- ① 在宅での終末期看護について、DVD「家で家族を看取る」を視聴し、自分自身の考えをまとめ、グループでの意見交換を行い、在宅での終末期看護について深めた。
- ② 地域包括ケアシステムについて
実習目標 3) の達成を補完するために、学生が体験することが少ない「サービス担当者会議」「地域ケア会議」について復習を行い、地域包括ケアに関連した国家試験問題を解説した。
- ③ 国家試験対策として、「訪問看護ステーション」に関する過去問題を解き、解説を行なった。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

実習スクーリングでは、昨年度までコロナ禍の影響もあり、個人ワークを中心に事例検討・発表を行ってきたが、今年度は従来のように対面でのグループワークを実施した。個別スクーリングの学生1名を除き、122名が対面でのグループワークを体験できた。

グループ編成は1グループ4～5名とし、学生の年齢、就労している施設、実習した訪問看護ステーションの規模なども考慮して編成した。

個人のまとめた援助場面は1つであっても、グループで討議することで、4事例、5事例と検討でき、全体発表での討議を加えるとスクーリングで10事例以上を学ぶことになり、在宅看護についての学びが広がったと考える。同行訪問での看護場면을考察することを重点に置きながらも、介護を担う家族の思いや社会資源の活用、多職種連携の実際、連携での工夫など実際について具体的なイメージができ、グループワーク、発表を通じて在宅看護での訪問看護師の機能と役割について理解を深めることにつながったと考える。

5. 今年度の学生による授業評価より

6. 今年度の成果

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

8. 社会的活動等

- ・ひとり親支援「ゆったりホーム」ボランティア
- ・ユニセフ マンスリーサポート

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・シラバス
- ・授業における配布資料

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	川邊 玲子	所属学科	看護学科通信制課程	職名	講師
クラス担任	なし		クラブ顧問	なし	
委嘱委員・職務	臨地実習委員会 副委員長 広報委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○老年援助論	CCN	1.2年	通年	必須	テキスト学習	通信	42
○老年看護学 演習	CCN	1.2年	通年	必須	テキスト学習	通信	229

○老年看護学実習	CCN	1.2年	通年	必須	見学実習スクーリング	対面	122
----------	-----	------	----	----	------------	----	-----

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 担当学生 17 名 (tutor) における個別指導
特に学修進捗が遅い学生に対して、電話やメールで現状報告や悩みなどを聴取し、個々の生活様式（勤務形態、家族構成等）や環境（職場の理解度や協力体制等）に寄り添った指導を行った。レポート執筆に関する質問等も積極的にできるよう促した。学修が順調な学生においては、褒めと労いによってモチベーションの維持向上に努めた。孤独を感じやすい通信制課程の学生は、教員のメッセージによって「元気が出た」「頑張る意欲がわいた」などの声が聞かれることが多く、電話やメッセージ等、送ることを躊躇している学生にとっても、効果的な関わりであったと考える。

 - 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）
 - ・ 老年看護学領域では、超高齢社会の日本における高齢者の看護の重要性を理解し、尊厳と敬意の念を持ち、また化学的根拠に基づく看護を臨床で展開できる学生の養成をする。

 - 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）
 - ・ 見学実習後 3 日間の対面授業において、老年看護学概論の振り返りとして、老年期にある高齢者の発達課題である「英知の獲得」の理解を深めた。加齢変化が身体面、心理面、社会面にどのように影響を及ぼし、またそれを関連づけた援助計画の実施が行われていた臨床での根拠について、グループワークを行った。自分以外の情報や意見、視点を知ることができ、学びが深まったという所感が多数あった。
 - ・ 尊厳や権利を守る一方で、安全の重視が優先されることが多くあることの現状から、個々の勤務先での経験や実習先での体験を踏まえたディスカッションにより考察を深めた。
 - ・ グループダイナミクスによる個人や集団のパフォーマンスが得られた。
 - ・ 化学的根拠に基づいた看護展開においては、既存の臨床経験と新たな学びから「つながる」ことを実感できるように、レポートで指導し、対面ではそれをさらに深められるよう指導を行った。

 - 4. 今年度における教育方法改善の取り組み
 - ・ グループ内でリーダーとして司会役を決め、ワークを円滑に進められるように構成した。
 - ・ 協働や連携は、臨床看護においても重要であるため、グループ内での協働、連携によって討議することで再認識できるように構成した。

 - 5. 今年度の学生による授業評価より
 - 6. 今年度の成果
 - 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策
- } 評価対象の授業なし
-
8. 社会的活動等
 - ・ 大阪ライフサポート協会正会員 奈良県救急安心センター #7119 研修・指導担当

- ・インド マハラシュトラ州 ナグプールの大学との国際交流

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	中野 順子	所属学科	看護学科通信制課程	職名	教授
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	通信教育委員、国際交流センター委員、自己点検評価委員、図書委員 臨地実習委員会（通信）委員長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
看護管理	CCN	1,2年	通年	必須	テキスト学習	通信	140
看護マネジメント演習	CCN	1,2年	通年	必須	テキスト学習	通信	59
看護マネジメント実習	CCN	2年	通信	必須	見学実習・実習 スクーリング	通信	124

(2)準正課、正課外の教育活動

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

担当している科目は、准看護師としてこれまで立場上経験の無い、看護管理と看護マネジメント学習であるため、学習内容は管理者だけのものではなく、自分達にも必要な知識である事として、身近に考えることが出来ればと考えている。対象のケアや看護サービスの提供には欠かせない知識であり、良い看護の提供者となる人材を育成したいと考えている。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ レポート学習において、紙上患者で倫理援助、医療安全、リーダーシップメンバーシップの考え方管理者の対応など、看護マネジメントの多くの要素を含んだ内容構成にし、細やかにコメントすることで必要な知識と考え方や対応を具体的に示す取り組みをしている。
- ・ 対面授業では、出来るだけ異なる施設で実習したメンバーで構成し、個々の実習施設での取り組み、特徴等の情報から話合わせ、全体への討議につなげ学びの共有を図った。

- ・ ルーブリック評価表の項目を、学習内容と捉え、実習や対面授業の自己採点をさせ、面接において学生と教員双方の学びの共有を図る資料とした。
 - ・ 医療安全では医療事故の分析方法の実際を、機材を使って実施し、視覚的に表すことの重要性を体験させ、考え方を指導した。
4. **今年度における教育方法改善の取り組み**
- ・ レポートのコメントでは、授業がなく、経験も無い科目であることを強調し、提出のコメントのやり取りで知識を得てほしいという狙いを、個々に紙面で表現するよう努めた。
 - ・ 対面授業では各グループの発表を、出来るだけ全グループが視覚的に共有できるよう、提示を工夫し、総評することで、モチベーションの維持につなげた。
5. **今年度の学生による授業評価より**
(通信では無し)
6. **今年度の成果**
(通信では無し)
7. **今年度の課題と次年度に向けた改善策**
(通信では無し)
8. **社会的活動等**
特になし
9. **根拠資料 (資料名のみ)**
- ・ シラバス
 - ・ 学生による授業評価